
バカとテストと勤労少年

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと勤労少年

【Nコード】

N3785S

【作者名】

まあ

【あらすじ】

バカとテストと召喚獣の二次創作です。

2年前に事故で両親を亡くした少年『結城和真』。

その日から彼は人と一定の距離をとり生きています。そんな彼の心に歩み寄る女性ひとは現れるんでしょうか？

自サイト『悠久に舞う桜』にもリンクしています。

予習問題（前書き）

どうも、毎度おなじみのまあです。

書きかけのものをそのままに何本書くんだよ？

と言うツツコミは気にしない方向で行きましよう。

先日、活動報告に書いた部分はもう少し後での更新になります。

予習問題

2年前両親が事故で死んだ。

それまでは当り前の幸せ（もの）が壊れた時、不思議と涙は出なかった。

どうしてかは今でもわからない。

ただ、冷たく暗い病院の霊安室で2人の遺体を前に自分は1人なんだと思い知らされていた。

とうさんやかあさんの親戚は2人の死を悲しみ、1人になった俺を哀れんで泣いていた。

だけど、俺に手を伸ばす人は1人としていなかった。

当然だ。不景気な現代に親戚だからと言っても可哀想だからとは言え無駄な食いぶちを増やすような事をするようなモノ好きなんているわけではない。

推薦も決まっていた私立高校も両親が亡くなったと言う理由で推薦を取り消した。

学費を払えるかわからない生徒を推薦枠になんかもつたいないって事なんだと思う。

それまで、友達だと思っていた奴らもただ、俺を可哀想な人間としか見なくなつた。

そんなものを見て、たぶん、俺は絶望していたんだと思う。

1人だけここに残されたと言う現実……

でも、たった1人だけ手を伸ばしてくれた人がいた。

急いで駆け付けて来てくれたのだろう。いつもカッコよくビシッと決めたスーツが乱れ、途中で転んだのか膝をすりむきながら、

「和くん、大丈夫？」

その場にいた誰よりも両親の死を悲しみ、涙を目に溢れさせながら俺を抱きしめ、俺の事を気遣ってくれた。

その時、それまで抑えていたものが一気に溢れ出した。

オリキャラデータ

ユウキカズマ

結城和真

所属 2 - C

性別 男

備考

中学3年の冬に両親を事故で亡くし、就職をしようと考えていたが従姉の『高橋洋子』の薦めで学費の安く洋子が勤務している文月学園に進学する事になる。現在は両親の残した家に洋子と2人暮らし、学年主任の洋子を補佐するために家事全般は1人でこなし、学園を終えるとバイト三昧と言う勤労少年。成績はそれなりだが、自分の置かれている立場を考えているため、他の生徒達より、学生と言うものを冷めた目で見ている事も多い。自称『シスコン（従姉）』

第1問

「……姉さん、いつまで寝てるの？ 今日から新学期だから、朝からいろいろ準備があるって言ってた？」

「……うーん？ う、うそ、もうこんな時間ですか？」

『結城和真』は朝食の準備を終えると従姉であり、現在、自分の保護者代わりである『高橋洋子』の部屋をノックすると和真の声で洋子はようやく目を覚ましたようで慌てている声が聞こえ、

「……姉さん、俺は下にいるからね。慌ててケガとかしないでよ」

「わ、わかりました。それに私はそこまで鈍くはありません！」

和真はため息を吐くと部屋から聞こえる洋子の声を聞きながら、階段を下りて居間に戻る。

「おはよう。姉さん」

「和くん、おはようございます」

朝のやり取りから数十分後、洋子は先ほどの慌てた様子とはまるで違い、仕事先である文月学園に行くスーツに着替えて居間に下りてくると和真と洋子は朝の挨拶を交わし、

「姉さん、学年主任になって忙しいのはわかるけど、休める時はきちんと休みなよ。体を壊したら元も子もないんだからね」

「和くんと言われなくてもわかっています。それに姉さんは和くんに心配されるほど弱くないです」

和真は洋子の分のみそ汁を盛り、洋子が昨日の夜も遅くまで仕事をしていて事を注意すると洋子は苦笑いを浮かべながら無理はしていないと言い、

「そうなら、良いんだけどさ」

和真は洋子の表情にくすりと笑う。

「それで、和くん、今日から2年生になるわけですけど新しいクラスで、上手くやってくださいよ。和くんは、学費とか気にしなくて良いんですから、バイトばかりではなくもう少し他の事にも目を向けるべきだと姉さんは思うんです。別にバイト自体をダメと言っているわけではありませんよ。早くから社会のルールに触れて自分を磨くと考えればそれは良い事なのかも知れませんが和くんは今高校生なんですから、もう少し他にも比重を置いてください。まったく、和くんはやればAクラスにもなれるくらいの成績なんですから」

「ああ。姉さん、それは耳にタコだよ。俺はそんなに勉強が好きってわけじゃないし、就職希望なんだから、これで良いんだよ。それに何かの間違いでAクラスに入ったら、姉さんだって担任としてやりにくかっただろ」

「確かにそうかも知れませんが、姉さんはおじさんとおばさんから和くんを預かったんですから言う権利はあると思います」

洋子は和真に心配されているのが悔しいようで少し不満げに和真に言うが和真はいつもやっているやり取りのようで年の離れた従妹で

ある洋子の様子に苦笑いを浮かべながらも自分はあまり成績を重要視していないと言うと洋子はため息を吐き、

「ん？ 姉さん、そろそろ、時間じゃない？」

「そうですね。この話は帰ってきてからにします」

「はいはい。俺は今日もバイトがあるからその後ね」

和真はこれ以上は洋子の小言には付き合えないと判断したようで洋子に時間だと言うと洋子はテーブルから立ち上がり、少し急いで玄関に向かおうとするが和真に話はまだ終わっていないと言って居間を出て行き、和真はそんな洋子の様子を見て優しげな笑みを浮かべる。

第1問（後書き）

どうも、作者です。

まずは何から言うべきでしょうか？

ひとまずは他をほったらかしてるのに新作と言う謝罪？

謝罪は無駄ですね。基本的にやりたいことをやる自分勝手な人間なので。（爆笑）

一先ず、勤労少年の和真君です。

他とは違ってここに出してみようかな？とかも思いますが彼もクルな子ですから、たぶん、相手をしてくれない。

Cクラスと言う設定的にも薄い状況で好き勝手やろうかな？（悪笑）

第2問

(……忘れものって、時間通りに出た意味無いじゃないか。登校前に洗濯したかったんだけどな)

和真は家で登校時間までの時間があるため、ゆつくりと家事をしようと思っていたのだが、洋子から『重要な書類を忘れたから持ってきてほしい』と言う電話があり、普段登校する時間より早く文月学園に向かい歩いていると、

「おはよう。結城、どうした？　ずいぶん早いじゃないか？」

「おはようございます。西村先生」

校門の前で生活指導をしている『西村宗一』教諭に声をかけられ、和真は頭を下げ、

「姉さ……高橋先生が家に書類を忘れて届けにきました」

「そうか。しかし、書類を忘れるなんて高橋先生にしては珍しい事だな」

「まあ、学年主任になって仕事も増えているみたいで昨日も夜遅くまで何かやっていたみたいですから」

苦笑いを浮かべながら早く登校した理由を話すと西村教諭は驚いたような表情をするが和真は洋子が昨日の夜も遅くまで仕事をしていた事を話し、洋子を責めないでほしいと頭を下げる。

「別に責めるような事はせん。高橋先生にかかる負担も多い事は俺も知っているからな。俺も手伝えれば良いんだが、結城も知っている通り、ウチには『バカ』がいるからな。俺はそれに対応しないといけないからな」

「……俺達の学年もFクラスは大変なんでしょうね。言い方は悪いですけど、バカを集めるから絶対に問題が起きますよ」

「……そうだろうな。特に今年のクラスは吉井と坂本の問題児の2枚看板がFクラスにいるからな。担任の福原先生も大変そうだ」

「えーと、確か、ふみつきがくえんのはじ観察処分者と悪鬼羅刹」

西村教諭は和真に洋子の手助けができない事を申し訳なさそうに謝ると和真は洋子からFクラスの酷さは聞かされていたようのため息を吐くと西村教諭は必ず問題を起こすであろう問題児の『吉井明久』と『坂本雄二』の名前を出してため息を吐き、和真は直接、2人と関わった事がないようにで苦笑いを浮かべるが、

「すみません。これ、届けないといけないんで、これで失礼します」

「ん？ 待て。結城、お前にもこれを渡さないといけないんだ。立ち話をしていますっかり忘れてしまった。わるかったな」

洋子に書類を渡すために早く登校してきた事を思い出し西村教諭に頭を下げると西村教諭は慌てて和真を呼び止めて封筒を渡すが、

「俺、姉さんからクラスを聞いてるんで必要ないですよ」

「そうなんだが、一応はルールだからな。お前はCクラスだから間」

「違えないで行くんだぞ」

「はい。西村先生も生徒に封筒を渡すのにずっと立ってないといけないそうですから風邪に気を付けてくださいね」

和真はすでに洋子からすでに自分がどのクラスに振り分けられているか知っているため、封筒を渡される意味がわからずに首を傾げると西村教諭は苦笑いを浮かべてルールだと言うと和真はその封筒を受け取り校舎のなかに入って行き、

「……あのバカどもも結城くらい状況を理解してくれると助かるんだがな」

自分の事を気遣って言った和真の背中を見送り、西村教諭はため息を吐く。

第2問（後書き）

どうも、作者です。

和真「作者さん、この話ってこれで良いの？ 原作メンバーと関われる気がしないんだけど」

まあ、最初は仕方ないですよ。Cクラスだし、かかわってくるとしたらF対Bが始まった辺りですね。まあ、Fクラス以外とは人間関係を見せて行こうと思ってます。

一先ずは、洋子先生の従弟として職員室に潜入です。

和真「遠藤先生とか竹内先生とか姉さんとかうちの教師陣も美人ぞろいだよね」

中には例外もいますから、気をつけてくださいね。

和真「……船越先生ね」

第3問

「失礼します。2年Cクラス、結城です」

和真は職員室のドアをノックした後、所属クラスと名前を名乗り職員室に入るが、

（あれ？ 姉さんがいないな？ トイレかな？）

洋子の机を見るが彼女はそこにはいなく、首を傾げると、

「おはようございます。結城君」

「福原先生、おはようございます」

先ほど西村教諭との話に出ていた2年Fクラスの担任である『福原慎』教諭が和真に挨拶をし、和真は頭を下げる。

「高橋先生なら、5分くらい前に学園長室に呼ばれましたよ」

「そうなんですか？ 困ったな。西村先生と話をしなければ会えたか」

「急ぎの用件ですか？」

福原教諭は和真が洋子を探していると思ったようで洋子が学園長室に言った事を教えてくれるが、流石に1生徒の和真が学園長室に乗り込むわけにはいかないため、ため息を吐くと福原教諭は和真に洋子の用件は急ぎかと聞くと、

「えーと、高橋先生が家に忘れた書類とお弁当を持ってきたんですけど、書類は重要なものと言っていたので」

「それなら、私が学園長室まで届けましょうか？」

「お願いできますか？」

「はい」

「よろしく願います」

和真は職員室を訪れた理由を隠す事なく答え、福原教諭は洋子に頼まれた書類を預かってくれると言い、和真は福原教諭に頭を下げる。

「いえいえ、気にしないでください……それと、できれば早く退散したほうがあなたのためですよ」

「……そうですね。ここは危険そうです」

福原教諭は笑顔でこれくらいの事は当然だと言うと和真に向けられている婚期を逃し単位を盾に男子生徒に迫っていると言う噂のある『船越』教諭から逃げるように耳打ちをすると和真は苦笑いを浮かべて頷き、

「後、これ、昨日、バイト先で作ったクッキーなんですけど、先生方でお茶受けにでもしてください」

「わかりました。いつもありがとうございます」

和真は福原教諭に書類とバイト先で作ったあまりものをクッキーを手渡し、洋子の弁当を彼女の机に置くと職員室を出て行き、

『ふ、船越先生！？ 落ち着いてください！？ 結城君は高橋先生の弟さんです！！』

『今時、あんな良い子はいないんです。未来のある若人に手を出そうとしないでください！！』

『……そんな話は聞いてられないのよ。私だって、私だって、結婚をしたいのよ！！』

『誰か西村先生を呼んで来てくれ！！ そうでもしないと止まらない！！』

職員室の中からは和真を狙う船越先生を力づくで押さえつける教師達の声が響き渡り、

(……早く、逃げよう。ここは危険だ)

和真は全力で職員室から離れて行く。

「あれ？ 結城君、ずいぶん早くない？」

「ん？ 中林か？ ……ジャージか。つまんないな。ここはサービスカットだろ」

和真は職員室から逃げるように自分の教室に向かっているとソフトテニス部に所属している去年のクラスメートの『中林宏美』が声をかけてくるが和真は宏美の姿を見てため息を吐き、

「……あつてすぐの挨拶がそれ？」

「仕方ないだろ。俺は健全な男だからな。中林のスコート姿やその時に見える生足は見たいぞ」

宏美は和真の様子にため息を吐くが、和真は男なら当然だと言い切る。

第3問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、船越女史に目を付けられる。

和真「……職員室に行くと聞いた時から絶対にやられるとは思ってたけど。俺は熟女趣味はないからね」

洋子との関係もあるため、和真は教師陣には当たり障りないという成績は中の中だけど模範的な生徒と言った感じです。

和真「教師陣に敵を作る理由ってないだろ。それに俺の態度が悪いと姉さんに迷惑がかかるからね」

そうですね。そして、職員室を脱出したところで宏美と出会う。現在、考えているヒロイン候補は『小山友香』、『中林宏美』の2人。『高橋洋子』先生はいろいろとまずいかな？と感じがありますし、和真にとっても洋子にとってもお互いは家族なんだと思います。

和真「まあね。俺は姉さんが大切だけど、これは恋愛感情じゃないと思うな。どちらかと言えば、俺は高校卒業したら就職する予定だから、早いところ良い人を見つけてほしいと思ってる」

だそうです。

第4問

「……結城君、あなた、もう少し言葉を選べないの」

「口に出さないと犯罪に走ったり、クール面して、女に興味示さないって顔してるよりはずっと健全だと思うけどね。それで、中林は朝練か？ 朝からご苦労なこった」

宏美は和真の言葉にため息を吐くが和真は宏美が朝から部活に取り組んでいるのが信じられないようで苦笑いを浮かべながら言うと、

「良いでしょ。私は身体を動かすのが好きなんだから、そう言う結城君はこんな時間から何をしてるの？ 遅刻はした事ないけど、いつもはもう少し遅いわよね？」

「ああ。姉さんの忘れものを届けに職員室に行ってきた帰りだ」

「高橋先生が忘れもの？ 珍しい事もあるのね」

宏美は運動部にも入っていない和真が早い時間から学園にきている理由を聞き、和真は洋子の忘れものを持ってきたと言うと宏美は学園では知的で落ち着いたイメージの洋子が忘れものをした事が信じられないようで驚いたような表情をするが、

「姉さんだって人間だからな。忘れものくらいするさ……さてと、これ以上、話し込んで中林の邪魔をしてもなんだから、教室でも寝てるかな」

「あっ！？ そう言えば、結城君はどのクラス？」

「ああ。言ってなかったな。Cクラス、相変わらず、可もなく不可もなくだ」

「Cクラス？」

和真は忘れものくらい誰でもすると言い、教室に戻ろうとすると宏美は和真を引き留めて彼の所属するクラスを聞き、和真は自分のクラスをCだと言うと宏美は怪訝そうな表情をする。

「どうかしたか？」

「結城君ならAは無理でもBくらいには行けたんじゃない？」

「……お前も俺を過大評価するのかよ」

「お前も？」

「……姉さんにも言われたよ。真面目にやればAには行けたってな」

和真は宏美の表情に何かあったのかと思い、宏美に聞くと宏美は和真ならもつと上のクラスになれたと言い、和真は今朝、洋子にも同じような事を言われたせいかなため息を吐くと、

「俺はそこまで優秀じゃないしな。だいたい、就職希望なんだ。成績をあげるお勉強をするよりはもつと他に役に立つ資格ものを勉強するよ」

「そう言うところ。無駄に冷めてるわよね」

「仕方ないだろ。成績が良かったってそんなもんは何の役に立たない事は経験済みなんでね。それなら、先もわからずに無意味なお勉強をするよりは自分の手に残る資格^{もの}を取った方が効率も良いだろ」

「まあ、私も部活ばかりやってるから、結城君の事は言えないか」

自分は勉強するなら自分で必要なものを探すと言い、そんな和真の様子に宏美はため息を吐くが直ぐに部活ばかりしている自分は和真の事を責められないと笑う。

「ん？ そうだ。中林は何クラスになったんだ？ 部活ばかりしてたしFか？」

「そんなわけないでしょ！！ 失礼ない事を言わないでよ。私はEクラス。しかも代表よ」

和真は宏美の所属クラスを聞くと彼女はEクラスの代表になったと言うと、

「……いや、Eクラスの代表じゃ、そんな強気に出れないだろ」

「うつ！？」

和真は宏美の言葉に苦笑いを浮かべると宏美はバツが悪そうな表情をするが、

「まあ、頑張れ。お前は頭に血が昇りやすいけど、人をまとめる代表の資質はあると思うよ。1人で突っ走らずにクラスの奴らの話も聞けよ」

「わ、わかってるわよ」

和真は宏美の様子にくすりと笑い、彼女を激励すると宏美は和真の顔を直視できないようにで和真から視線を逸らし、

「じゃあな。代表様」

「……ええ」

和真は宏美の様子など気にする事なく教室に向かって歩いて行く。

第4問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

今回は宏美との会話でした。前回、和真のヒロインは宏美か友香と言う話をしましたが、どっちにしよう？

和真「盛り上がってるけど、今のところは恋愛する気はないんだけど」

和真がそんなことを言ってもそうならないのが二次創作のお約束ですからね。

両方とも頭に血が昇りやすいタイプですし、冷静な和真が手綱を握れるのか引きずられていくのかも見所ですかね？

和真「……いや、だから、俺の話も聞いてくれ」

2人がいやなら『船越先生』に？

和真「待ってくれ!？」

冗談です。友香はあづまさんがやってるし、宏美の方が新鮮かな？とか思いながらも少し書いていきましよう。

ヒロインはそのうちアンケートでもしましよう。

和真「……やめろ。これは船越先生の流れになる」

大丈夫ですよ。項目には入れませんから。（悪笑）

第5問

（……Cクラスでこれなら、BやAは凄いな。席は後ろだな。こう言う時は自分の名字に感謝だな）

和真はCクラスの教室に着いて設備を見ると1年時に使っていた教室よりはかなり良い設備であり、自分の席に腰を下ろすと、

（寝よ）

欠伸をしてから机に突っ伏して眠りに付く。

『おい。起きろよ。自己紹介、お前の番だぞ』

「ん？ あ、さんきゅ」

和真が寝ているとすでに登校時間も過ぎ、HRが始まり、和真を起こす声が聞こえ和真は欠伸をすると、

「結城和真です。得意教科も不得意教科も特にはないです。特技は家事全般。後は……」

「和、何か面白い事やれ」

「そうだ。何かボケろ」

「……うるせえぞ。トオル、ヘーた。俺はお前らと違って笑いに生きてないんだよ」

簡単な自己紹介をした時、去年のクラスメートである『黒崎トオル』と『遠山平太』が和真に何か面白い事をしろと言うが和真はため息を吐き、

「他はAクラス担任の高橋先生は従姉になりますが、頭の出来は悪いので期待しないでください」

試召戦争はあまりやる気がないと暗に言っていると席に座る。

「カズ、今年も同じクラスだね」

「ああ、今年もよろしくな。山下」

和真は同じクラスに知り合いがいないかと周りを見ようとすると隣から『山下清美』が和真の手を突き、和真は挨拶をし、

「他に野口も同じクラスよ」

「……一心もいるのかよ。代りばえしないな」

清美は他にも『野口一心』と言う友人がいると言つと一心は和真と清美に手を振っており、和真はため息を吐く。

「そうかも、ここに居ないのって宏美だけ？ まったく、部活ばかりしてるから」

「中林なら、Eクラスの代表だぞ」

「Eまで落ちてるの？ まったく、だから、あれほど勉強しろって言っただのに」

清美は宏美がどのクラスにいるかと首を傾げると和真は宏美がEクラスの代表だと言うと清美はため息を吐き、

「まあ、カズがいるなら、Aは無理でもBの設備は取れるよね。いつ、仕掛ける気？」

「……俺は仕掛ける気はないって、俺は就職希望なの。これくらいの設備で十分」

「やる気ないね。そんな事を言っていると洋子先生が悲しむよ」

和真が居れば試召戦争を勝ちに行くことも可能だと言うが和真はやる気もなく、清美は苦笑いを浮かべながら洋子が悲しむと言うが、

「姉さんは姉さん、俺は俺、過大評価はいりません」

和真はため息を吐き、自分にはそこまでの頭はないと言いきった時、

「私が代表の『小山友香』よ」

「……あれがこのクラスの代表か？ 気が強そうだな」

教壇の上にこのクラスの代表である『小山友香』が立ち、自己紹介とともにクラスの方針を話し始めるが、和真は興味がないため欠伸をすると、

「小山さんが代表か？ あの人って頭に血が昇りやすいって話よね」

「代表の器ではなさそうだな」

清美は友香の事を聞いた事があるようで和真を突きながら言つと和真は興味無さそうに言い、

「それも噂なんだけど、あの『根本恭二』と付き合ってるって話よ」

「根本？ ああ、あの小者。可愛いのに男の趣味は最悪か。持ったいねえ」

清美は友香の彼氏が『根本恭二』だと話すと和真は恭二にあまり良い印象がないようで友香を哀れむような視線を送る。

第5問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

今回はクラスメートとの会話？ 一応、Cクラスで友香以外の名前のある人間の友人として使わせて貰いました。

和真「適当だな」

仕方ないですよ。明久達Fクラスが中心の話なんですから他のクラスにスポットライトが当たるのなんて稀です。

和真「まあ、あまり無茶はするなよ」

そうですね。和真はCクラスですが洋子や博美、清美が言うようにAクラスになれる資質はありましたが本人が高校の勉強を必要としていないため、成績は普通です。

和真「得意教科くらいは決めてないのか？」

そうですね。Cクラスだから可もなく、不可もなくで良いかな？でも主人公だから『最強の槍』はいるかな？ とも思いますが家庭科は深秋がいるから他の教科にしたいんですけど実用的で考えると、英語はそれなりに良いのかな？ あとは洋子の得意教科の物理？

和真「得意教科にするならその3教科だな。まあ、腕輪とかもそのうち考えるんだろ？」

そうですね。主人公だし、腕輪の1つくらいは考えます。まだ、召喚獣の武器も決まっていんですけどね。

第6問

「……ん？ 清水、お前はDクラスか？」

「げっ！？ 結城」

和真はトイレに行った帰りに廊下でバイト先の『ラ・ペデイス』と店長の1人娘の『清水美春』を見つけると美春は和真の顔を見るなり威嚇し、

「……睨むなよ。俺はお前に睨まれる筋合いはない」

「あなたは美春の敵です。あの男の手先が！！」

「あの男って、お前の実の父親だろうが」

和真はため息を吐きながら威嚇すると言うが美春は威嚇を止める気はなく、和真を怒鳴りつけ、和真は美春の様子に肩を落とす。

「美春はあんな男を父親なんて認めない」

「いや、誰がどう見たってお前と店長は血の繋がった親娘だろ。まさに今、俺はそれを実感している」

美春は和真を威嚇したまま、父親との繋がりを否定するが和真はそれを聞いてため息を吐くと、

「悪いな。そろそろ。俺は戻るぞ。人にわざわざケン力を売るような事をするなよ」

「結城に言われる筋合いはありませんわ!!」

和真はこれ以上、美春に関わるのが面倒だと思ったように教室に入って行く。

「FクラスがDクラスに宣戦布告をしたってよ」

「おいおい。初日から仕掛けるかよ」

「……人の席を囲むな」

和真が教室に入り、自分の席に座ろうとすると和真の席は一心、トオル、平太、清美が囲んでおり、和真はため息を吐くが、

「しかし、FクラスはEクラスを無視したか……中林、怒ってるだろうな」

「確かに、宏美なら青筋立ててるかもね」

一心はEクラスの代表になった宏美が怒っていると言うと和真の周りに集まった清美、トオル、平太の3人はその様子が目に浮かんだように苦笑いを浮かべる。

「まあ、大丈夫だろ。代表になったんだから、それくらいは考えて行動するだろ。しかし、FとDの試召戦争か？それで清水はいつも以上に殺気だったわけか？」

「清水さん？　って、清水美春さん？　……カズに女の影？」

「おいおい。どこからお前は女と繋がってるんだ？」

和真は宏美より美春の方が心配だと言うと清美は和真をからかうように言うと一緒にその言葉にのっかかるが、

「バイト先の店長の娘だ。だいたい、あんな意味のわからないのは遠慮する」

「意味？ 清水さん、良い娘よ」

「……」

和真は絶対にあり得ないと言うと清美は和真の持っている美春の印象と違う印象を持っているように首をかしげ、和真は清美の反応が信じられないように眉間にしわが寄る。

「何？ その反応？」

「いや、意味が分かんないだろ。あいつ、俺を見るなり威嚇してくるんだぞ。嫌われるほどまともに話した記憶もないのに」

清美は和真の反応に何かあったかと聞くと和真は美春の行動はわけがわからないと言うが、

「奥さん、聞いてよ。あそこのご主人、おもてになるみたいよ」

「そりゃそうよ。恋愛に興味無いつて顔しながらも、無自覚でもてオーラを出していますもの」

「これだからって、鈍感は困るのよね」

一心、トオル、平太の3人は和真を鈍いと言い始め、

「いや、意味がわからないし、だいたい、お前ら、それ、酷くイラつくんだが」

和真は3人の様子に肩を落として大きなため息を吐く。

第6問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

なんか、書いてたら美春フラグが立ってました。改めて、自分が美春好きだと言う事を思い知らされます。

和真「……何で、あの意味のわからないのが好きなんだ？」

美春、かわいいと思いますよ。好きなものに一直線でそこまでまっすぐに行けるのはうらやましいと言つのもあると思いますけどね。

和真「そうかな？」

ええ。さてと美春ヒロイン候補への昇格はあるのかしばらく書いてから考えます。

和真「いや、だから、俺は」

船越？

和真「清水の方が良いです!!」

第7問

「それで、F対Dはどっちが勝つと思う？」

「普通に考えてDだろ」

「そうだな。振り分け試験の直後だし、点数差は変わらないだろ」

「そうだよな」

清美は4人の姿に苦笑いを浮かべると話を試召戦争に戻し、FクラスとDクラス、どちらが勝つかと聞くと一心、トオル、平太は当然、Dクラスが勝つと言うが和真だけは何か引つかかる事があるようで何も言わずにおり、

「カズはFが勝つと思ってるの？」

「……そうだな。Fが何となく勝ちそうな気がするんだよな」

清美は和真の様子に聞くと和真は苦笑いを浮かべると、

「何でだ？ 普通に考えたら、Dの勝利は揺るがないだろ」

「普通はな。今朝、西村先生と話したんだけど、Fクラスには^{ふみつき}観察^{がくえんのはし}処分者と悪鬼羅刹^{もとしんどう}がいるって話だからな」

「吉井に？ 坂本？ それこそ、Dクラスが勝つんじゃないか？ 吉井なんて役立たずだろ？」

「確かにな。学園初の観察処分者。バカの代名詞だぞ」

一心は和真に何が引つかかっているんだと聞くと和真は明久と雄二の2人が気になると言うがトオルと平太は和真の考えは杞憂だと言うが、

「だけどな。ただのバカなら、西村先生があんなに苦労しないと思うんだよな」

「ただのバカじゃなく大バカだから苦労してるんだろ」

和真は苦笑いを浮かべながら頭を掻くと一心は何も起きないと言う。

「カズ、何がそんなに引つかかっているのよ。言ってみなさいよ」

「そうだな……さっきも言った通りなんだけど、ただ、設備が最悪だからって言うなら、最初は1つ上のEを狙うと思うんだ。だけど、FはDを狙ってきた」

「Eの設備じゃ、対して設備も良くなかったからだろ」

清美は和真に今度は引つかかっている場所を聞くと和真は対戦相手がおかしいと言うが和真以外は何もおかしくないと言う。

「いや、それなら良いんだけど、勝てる見込みが有ってDに仕掛けられているなら、相当の厄介だぞ。仮にも悪鬼羅刹もっしやんせつだしな。勝てる見込みが有る可能性は十分にある。戦況をひっくり返す切り札がいるとかな」

「それが吉井だって事か？」

「それも1つの要因だと思うけどな。それ以上に強力な駒がいる気がする……」

和真の言葉に平太は明久が重要な駒だと言つと和真は頷きながらも他にも強力な駒がいそうだと言つと、

「それと、初日から仕掛けてくるって事は少なからず、既にFクラスの代表はFクラスの戦力を理解している可能性もあるんだよな。仮にそうだとしたら、代表の資質としてはCクラス（うち）の代表よりは確実に上だ。Cクラス（うち）の代表様はクラスメート（ひと）の上に立ったのがご満悦みたいだから、上にはまだ2クラスもいるのに自分が代表だってな」

「カズ、あんた、相変わらず、きついわね」

「人を見下す奴が嫌いなんだよ」

和真は教室の中心で高圧的な態度をとっている友香を見て吐き捨てるように言い、清美は和真の態度に苦笑いを浮かべる。

「そのわりには吉井の事は学校の恥扱いだけだな」

「まあな。人を見下す奴も嫌いだけだな。だらける奴はもつと嫌いだ。中林みたいに部活を頑張つてEなら良いが、何もしないでFなんて最悪だろ。何もしなくても世の中を生きていけると思ってるんだからな」

トオルは和真の態度になれているのかため息を吐きながら言つと和真は少しだけ冷静になったようのため息を吐き、

「それなら、カズならどう動くのかな？　そこまで言って何もしいのは無しよね。FクラスがDクラスに勝ったら私達も狙われる可能性もあるわけだし」

「そこまで、考えてるんだ。反しての1つや2つあるんだろ」

「仮にあつたとしても代表様は聞き入れないよ。それに俺は就職希望、試召戦争に興味なし」

清美はFクラスに仕掛けられた時に和真を頼りにすると言うが和真はやる気はない。

第7問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真の戦力分析でしょうか？

和真「Fクラスを警戒しすぎじゃないかな？」

まあ、Cクラスだとやることないですしね。（苦笑）

和真「俺って今はFクラスのメンバーを知らないんだよね？」

鉄人から聞いて明久と雄二がいる事を知ってるだけですな。雄二が代表だと言う事は知りません。

和真「まあ、良いけど、と言うか相変わらず、原作キャラと絡んでないけど」

明久とはそのうちからませようと思ってます。明久が捕まらないため、教師陣の手伝いをしているところに鉄人が明久を連れてくるとかね。

ただ、友人やFクラスと試召戦争をする時に知り合うとかじゃない方向で考えてます。

和真「確かに、俺は姉さんの手伝いしてる可能性もあるからね」

そういう事です。

アンケート

先日から言っている『和真のヒロイン』を決めるアンケートです。

候補は『中林宏美』、『小山友香』、『清水美春』を考えています。
『高橋洋子』は今のところ家族としてしか考えていませんし、『船越教諭』はいくら票が入っても却下とさせていただきます。ネタには使つかも知れませんがさすがに和真が不憫ですから。

と言う事でアンケートの項目は

- 1 . 中林宏美
- 2 . 小山友香
- 3 . 清水美春
- 4 . その他（名前）

でお願いします。何となくでも理由があるとうれしいです。

期限はひとまず第25問あたり？

期限は延びる可能性はあります。

最後にしつこく言いますが『船越教諭』は却下です。ネタふりではありませんのでよろしくお願いします。

第8問

（Fクラスが勝利したか？ 悪鬼羅刹あくしやせつは伊達じゃなかったか？ それにまさかあの姫路瑞希がFクラスにいらるとなんてな）

放課後になり、和真は教室の掃除を行っている。Fクラス対Dクラスの試召戦争の結果が出たようで教室にはクラスメート達がその話題で盛り上がり始めるが、

「和、帰るのか？ お前の予想通りなんだ。何か言えよ」

「予想って言ったって、姫路がいるなんて知らなかったんだから、何も言う事はないよ。それに今日はバイトなんだ。遅れると迷惑がかかるだろ」

「そうなの？ じゃあ、明日ね。カズ」

「ああ。お前らもいつまでも遊んでないで帰れよ」

和真は興味がないため、掃除用具を片付けると教室に残っていたトオルと清美に挨拶をして教室を出て行く。

「……睨むな」

「……」

「……DクラスがFクラスに負けたのは俺には関係ないんだ。睨む必要がないだろ」

和真はバイト先の『ラ・ペデイス』へ行こうとすると校門で美春に見つかり、彼女は相変わらず、敵意の視線で和真を睨みつけており、和真は彼女の様子に肩を落としてため息を吐くが美春は和真を睨みつける事を止める事はなく、

(……先に行こう)

和真は美春の相手をする理由はないと考え先を急ごうとすると、

「待ちなさい。あなたは美春の怒りを治めるために死んでもらいます」

「……いや、意味が全くわからないからな」

美春は和真を引き止め、和真は意味がわからないとため息を吐くが、

「問答無用です。美春のために死になさい!!」

「おい!? いきなり何をするんだよ!？」

美春は懷からナイフとフォークを取り出すと和真に向かい投げつけ、和真はその凶器を慌てながらも全てカバンで叩き落とす。

「往生際が悪いですわよ。美春のために死になさい!!」

「断る!! 俺にはお前のために死んでやるような義理はない!!」

美春は和真が大人しく自分の攻撃を喰らわないのが腹立たしいように更なる攻撃を繰り出し、和真に死ねと言うが和真は美春のストレス発散に付き合うほど仲がいいとは思っているため、美春の言葉を

却下するが、

「あなたがバイトしているお店は誰の家ですか？　うちで働いてい
ると言う事はあなたは美春の下僕……下僕なんて言葉ももつたいな
いですわ。あなたは美春にとって家畜以下の人間ですわ！！　だか
らこそ、美春の手で八つ裂きにされても文句1つ言えないはずです
わ！！」

「そんなわけあるか！！」

美春は和真には自分に八つ裂きにされるのは当然だと叫び、和真は
そんな理不尽な言葉に声をあげると、

「だいたい、そんな風に周りも見ずに突っ込んだからお前らは負け
たんだ。誰もがFは下だとか思ってたんだろ。少なくとも人を舐め
ている人間は足元をすくわれるってわかったんだろ。それなのに俺
に当たるなよ」

和真はこれ以上、美春に付き合う理由はないため、下位クラスに負
けたのは人を見下しているからだと言い切り、先を歩きます。

「待ちなさい！！」

「……」

美春は和真の言葉に腹を立てているようで和真を呼ぶが、和真は美
春の相手をする気もなくなったようで振り向く事なく先を進んで行
く。

第8問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

美春にからまれる和真。

和真「……何の恨みがあるんだよ」

まあ、和真に騒ぎを届けて欲しいと言う声もありますしね。やっぱり、美春との絡みは押さえておかないといかないですからね。（苦笑）

和真「……俺は平和に生きたいんだけど」

無理ですね。

アンケート

1位 宏美 4票

2位 洋子 2票

3位 美春、葵 1票

となっています。

和真「中林がトップみたいだね」

そうですね。宏美がヒロインってないから見たいと言う意見が多いです。

第9問

「すまないな。結城、吉井のバカが、観察処分者の仕事を忘れて帰ってしまつてな」

「気にしないでください。今日はバイトも休みなんでタイムサービスマで時間もありますしね」

Fクラス対Dクラスの試召戦争の翌日の放課後に西村教諭に仕事を頼まれ、和真は西村教諭と隣に並び、プリントの入った段ボールを運んでいると、

「まったく、あのバカどものお前くらい教師に協力的だと俺達も助かるんだがな」

「いや、俺はまた違いますよ。高橋先生がいるから、先生達と関わる事が多いからですから、学生の本音で言えば先生達には関わり合いたくないですよ。呼び出しとかやつてもいないのに悪い事を考えちゃいますし」

西村教諭は何か問題が起きているのか大きなため息を吐きながら和真を誉めるが和真は苦笑いを浮かべながらあまり呼び出しは嬉しくないと言った時、

「和くん、西村先生の手伝いですか？ 忙しいですか？」

「ん？ 高橋先生、結城に何かようですか？ 急用なら、結城はお返しします」

「……高橋先生、学園内でその呼び方は止めてください」

洋子が和真と西村教諭を見つけて2人の元に駆け寄ってくると西村教諭は休養なのかと聞き返す隣で和真は洋子に学園内での分別は付けて欲しいとため息を吐く。

「ちょっと、出てしまっただけです。結城くん、西村先生、急用と言うわけではないんですが、ちょっと一緒に来てほしいんですが」

「それなら、これを職員室に運んでからでも良いですか？」

「はい。お願いします」

「……俺の意見は聞かないんですね」

洋子は和真の言葉に1つ咳をすると教師用の言葉使いになり、洋子と西村教諭は和真のこの後の予定を和真に確認する事なく決め始め、和真はため息を吐くと、

「急用じゃないなら、家に帰ってからじゃダメなんですか？ そろそろ、タイムサービスの時間なんだけど」

「はい。できれば、今日中に話しておきたい事なので」

和真は家に帰ってからにして欲しいと言うが洋子にも彼女の都合があるようでこの後が良いと言う。

「そうか。それなら、結城、早めに済ませるか？」

「そうですね。早いところ済ませましょう……と、言うか、観察処

分者って、こう言うのに関しては楽なんでしょうね。召喚獣は力が強いみたいだから、こんな重い物も簡単に運べるんでしょうから、俺は西村先生や召喚獣じゃないんであまりスピードは上がりませんよ」

西村教諭は和真に手伝わせている仕事を早く終わらせようと先に進むが和真は西村教諭には付いて行けないと言うと、

「結城くん、ちょうど良かったです。観察処分者になりませんか？」

「高橋先生、いきなり何を言い出すんですか！？ 結城は確かに学校の授業に関しては学習意欲に欠けますが、それ以上に資格試験や就職に関しての勉強は他人より行っているはずですよ。それは姉である高橋先生が1番わかつている事でしょう！！」

洋子は突然、和真に観察処分者になるように言い、和真はいきなり事で持っていた段ボールを落とし、西村教諭は洋子の言葉に和真は観察処分者にされる理由はないと言う。

第9問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、割と鉄人のお気に入りかも知れません。

和真「結構、仕事手伝っている事もあるしね。まあ、ゴールポストとかは動かせないけど、手で持てる荷物運びくらいは手伝うよ」

そして、洋子からの観察処分者になれと言う話に驚きの声を上げる鉄人に何があつたかわからない和真。

洋子は何が言いたいんでしょうか？（苦笑）

アンケート

1位 中林宏美5票

2位 高橋洋子2票

3位 清水美春、小暮葵1票

5位 小山友香0票

宏美が票を伸ばしてます。

第10問

「……高橋先生、確かに俺は授業にあまり興味はないけど、そこま
で落とされるような事をした覚えはないですよ」

「結城君も西村先生も何を言ってるんですか？ 私は結城君の努力
は認めていますよ」

和真は落ち着こうとしたようで1度、大きく深呼吸をした後、洋子
に向かい観察処分者になれと言われる事はしていないと言うと洋子
は2人の反応の意味がわからないように首を傾げると、

「それなら、どうして、結城が観察処分者なんかにならなければい
けないんですか！！ しっかりと説明をお願いします」

「……西村先生、説明と言いますが、その話があるので私は結城君
に来てほしいと言ったんですが」

「それなら、その話を俺も聞かせて貰います。問題ないですね」

「それは問題ありませんが、それなら、早く、西村先生の仕事を終
わらせましょう」

西村教諭は洋子に説明を求めると洋子は未だに西村教諭がここまで
言っている意味がわからないように首を傾げたまま、和真が落とし
た段ボールを持ち上げようとするが、

「……高橋先生、持ちあがらないんですから無理はしないでくださ
い」

「すみません。お願いします」

洋子では段ボールは持ちあがらず、和真は動揺しながらも段ボールを持ち上げる。

「結城、急ぐぞ」

「はい」

「待ってください」

和真と西村教諭は詳しい話を早く聞きたいようで先を急ぎ、その後を洋子が慌てて付いて行き、職員室に段ボールを運び終え、

「それで、高橋先生、詳しい話を教えていただけますか？」

「……西村先生、高橋先生、長くなるなら職員室はちょっと」

西村教諭は洋子に和真に観察処分者になれと言った事に詳しい話を聞かせると言うが和真は職員室内から感じるおかしい気配に職員室を出るように言うと、

「はい。ここでは詳しい話はできませんので、付いてきてください」

「……他の先生に聞かれるのは不味い話なんですか？」

洋子は場所を移動すると言うと2人についてくるように言い、和真と西村教諭は洋子の後に付いて職員室を出て行く。

『ですから、船越先生、落ち着いてください!?!』

『放して!! 吉井くんが彼の近所の男性を紹介してくれたけど私だって若くて家事の万能なお嬢さんが欲しいのよ!!!』

「……結城、お前、いろいろと気を付けるんだぞ」

「……そう思うなら、職員室に呼び付けなくてください」

「ああ。なるべく、お前に頼みたい事がある場合は生徒指導室に呼ぼう」

職員室からは教師達が船越教諭を抑えつけている声が聞こえ、西村教諭は和真の身の危険を案じたようで和真に言い、和真は肩を落として職員室になるべく近づきたくないと言うと西村教諭は頷くと、

「それで、高橋先生、どこに行くつもりですか？ 他の先生達にも聞かれたくないような事なんですか？」

「いえ、そう言うわけではないのですが、この話は私だけではなく学園長先生からの提案ですので学園長先生から詳しい話を聞いた方が良いと思いますから」

「……学園長がですか？」

和真は洋子がどこに自分を連れて行くのか気になったようで洋子に向かい聞くと和真を観察処分者にすると言う話は文月学園の学園長である『藤堂力ヲル』から出た話だと言う。

「学園長が？」

「はい。学園長、結城和真君を連れてきました」

「そうかい。入ってきたな」

西村教諭はカヲルからの話と言う事で首を傾げると3人は学園長室の前に着いており、洋子は学園長室のドアを叩くと、中から返事が返ってくる、

「『失礼します』」

「よく来たね。あんたが結城かい？ …… 西村先生、あんたは呼んだ覚えはないんだけどね」

3人が学園長室に入ると中にはこの学園の最高権力者であるカヲルが高圧的な態度で和真を見るが隣に西村教諭がいるのを見て首を傾げる。

第10問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真にとって職員室は危険な場所。（爆笑）

和真「爆笑じゃないからね。姉さんに用事があっても職員室に行けなくなるだろ。いい加減にしてくれよ」

いや、和真には騒ぎを届けないといけないので。

和真「……だから、騒ぎなんていらないからね」

何を言ってるんですか？ 騒ぎがなければバカテスではありません。

和真「かもしれないけど」

まあ、納得のいかない和真は置いておきましょう。和真への観察処分者要請は次回に続きます。妖怪ばあ長は何をいうんでしょうか？

和真「アンケートは変わらないから省略です」

第11問

「高橋先生から結城を観察処分者にすると言う話を聞きまして」

「なんだい？ あんた、きちんと説明してないのかい？」

「学園長から説明の方が納得をしていただけだと思います」

西村教諭はカヲルに向かい和真を観察処分者にすると言う事の説明を求めるとカヲルはため息を吐きながら洋子に説明をしてないのかと聞くと洋子は頷き、

「それじゃあ、説明させて貰おうかね。えーと、結城和真だね？」

「はい。それで」

「落ち着きなよ。別に取って食おうってわけじゃないさね」

「……」

カヲルは和真の名前を呼ぶと和真は流石に学園長からの話と言う事で緊張した面持ちで返事をする。カヲルは緊張しなくて良いと言うが、

「何で、下がるんだい？」

「いえ、ちょっといろいろとあつて悪寒が」

「まあ、良いさね」

その言葉で和真は船越教諭の事を思い出したように顔を引きつらせ、カラルは意味がわからないためかため息を吐くと真面目な表情になり、

「まずは観察処分者と言う話だけだね。詳しくはあんたの召喚獣を教師仕様の召喚獣にしたいと思ってね」

「……はい？」

カラルは和真の召喚獣を教師と同じ扱いにしたいと言い、和真は意味がわからず首を傾げる。

「……学園長、それはどう言う事ですか？」

「簡単な事さね。元々、教師の召喚獣は観察処分者と同様に物体への干渉ができた。そのため、以前は雑用は各自、自分の召喚獣で行っていた。しかし、初めて観察処分者に任命された吉井明久バカの影響でそれは観察処分者せいとの仕事と言う空気が学園全体に広がってしまったからね。それにその吉井明久バカは仕事を忘れて家に帰る事も多々あると言うじゃないかい。そうなると手が足りないって言葉も多く出てね。それなら、生徒で手伝ってくれる人間を探そうと思ってね。それで高橋先生に良い人選はいないかと聞いたらあんたの名前が出たわけだよ。他の先生達の話でも良く手伝いをしてくれると評判も良いしね。おかしい事はしないと思ってね」

「はあ」

西村教諭はカラルに詳しい説明を求めると初の観察処分者を出した事で教師が雑用をしにくくなったため、白刃の矢が和真に立ったと

言っが和真はいまいち納得がいかないのでため息を吐くと、

「確かに、俺は西村先生の仕事を手伝っているんで召喚獣を作業に使えるのはありがたいんですが、生徒が召喚獣を使って作業をしていると俺の肩書って」

「まあ、肩書は観察処分者になるね」

「……お断りします」

和真はそれを受けた時の自分の肩書が気になったようにカヲルに聞くとカヲルは肩書は『観察処分者』と言い切ったため、和真は笑顔で断ると、

「どうしてだい？」

「すみません。俺は就職希望なんですよ。うちで『観察処分者』とか言われたら就職先探すのに悪い印象しか与えないじゃないですか！！」

カヲルは眉間にしわを寄せて聞き返すが和真は就職希望なのに観察処分者のような不名誉な肩書はいらないと言い切る。

「なぜだい？ 便利だよ」

「便利とか言う問題じゃありません」

「うるさいよ。あたしの決定は文月学園（こい）じゃ、絶対だよ。従いな」

和真は納得がいかないため、受けないと言うとカヲルは権力で抑え

つけようとするため、

「……落ち着け、結城。学園長、その言い方はあまりに乱暴です。せめて、代わりの肩書を用意してください」

「それこそ、無駄じゃないか？」

「教師の雑用を押し付けるんです。それくらいは結城の意思も尊重するべきです」

「……作業を手伝わされるのは確定なんですな」

西村教諭は和真をカラルの間に割って入り、カラルに向かい和真の意見も取り入れると言う。

第12問

「……仕方ないね。まあ、直ぐに肩書は思いつかないから、今はそのままって事で頼むよ」

「……わかりました」

カヲルは西村教諭の言葉で面倒そうに何か肩書きを考えると云うと和真は断ると洋子の印象も悪くなると思っっているため頷くが、

「後、すいません。その任を受ける代わりにもう1つ、お願いします」

「何だい？ これ以上、あたしに何をさせようって言うんだい？」

カヲルに向かいもう1つ頼みたい事があると言うとカヲルは眉間にしわを寄せて聞き、

「……船越先生の仕事だけは吉井に回してください」

「……どう言う事さね？」

和真は船越教諭に近づくと危険と判断しているため、船越教諭の手伝いはしたくないと言うとカヲルは意味がわからずに首を傾げる。

「……いろいろと危険なんです」

「よくわからないけどね。まあ、基本的にあんたに仕事を頼む時の教師は高橋先生に頼んである。そうだね。せつかくだ。西村先生、

あんたもやりな」

「わかりました。私は元々、結城に良く仕事を手伝って貰っていたので一向に構いません」

和真は先ほどの職員室の件もあるため、真剣な表情をして言うところも何かあるとは察したようで和真に仕事を頼む時は洋子か西村教諭が担当してくれると言う。

「……わかりました」

「何だい？ 納得がいかなさそうな顔だね」

「そりゃ、いきなり、呼び出されてですからね」

和真は担当者を聞き、安心したようではあるが改めて自分が面倒な仕事を任されたと思い肩を落とすとカヲルは和真の様子に聞き返し、和真はため息を吐くと、

「それで、教師仕様と同じ性能になると言いますが、俺は何か特別な事をしないといけないんでしょうか？」

「そうさね。システムの書き換えはあたしがやるから特にやる事はないんだけどね」

「そうですか」

「ただ……」

カヲルに何か特別な事をしないといけないと聞くとカヲルは初めは

何もないと言い、和真は安心して頷いた時、カヲルは何かあるのかニヤリと笑う。

「……すいません。さっきの言葉、取り消させて貰っても良いですか？」

「今更、何を言うんだい？ 当然、却下だよ」

「……」

和真はカヲルの様子に頷いた事を後悔し始めたようので撤回を要求するが当然、直ぐに却下され、和真は眉間にしわを寄せると、

「別に観察処分者とは違うからね。フィードバックがあるわけじゃないよ。ただ、教師仕様は特別だからね。ある程度の点数がないと機能しないようになってるんだよ」

「……それって、俺に点数をあげろって事ですか？」

「まあ、簡単に言えばそう言う事さね」

カヲルは和真に成績をあげるように言い、

「……聞いて良いですか。どれくらいまで上げる必要があるんですか？」

「一先ずは総合点数で2500点くらいで機能するね」

「……」

和真はカヲルにどれくらい成績を上げれば良いかと聞くとその点数は今の和真には手が届きそうもなく、和真はしばらく呆気に取られた後、

「ばばあ、いい加減にしろよ！！ 俺の今の成績を知っているのか！！ 1000点も上がるわけねえだろ！！」

「か、和くん、落ち着いて！？ 目の前にいるのは学園長先生だから」

「結城、落ち着け」

ついにブチ切れてカヲルの机を叩くと、普段、見る事のない和真の様子に洋子と西村教諭は慌てて和真を止める。

第12問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、妖怪の態度についてブチぎれる。

和真「さすがにあれば仕方ないよな？　そうだよな？　姉さんの印象、悪くならないよな？」

さあ？　わかりません。まあ、原作の明久や雄二の態度を見てれば特に問題もないでしょう。

和真「そうだと良いんだけど」

さあ、教師仕様に対応させるために成績を上げるように言われた和真はどうするんでしょうか？

和真「……1000点も無理だぞ」

確かにね。まあ、和真の今の点数は1600点くらいと考えてます。Cクラスの上位組と言うか友香の次と考えてますね。友香フラグも立てないといけないし

和真「1000点は無理だろ」

アンケートは変わらないため、省略します。

第13問

「……落ち着いたか？」

「……ええ、なかなか、良いのを喰らいましたから」

西村教諭の拳が和真の頭に振り下ろされ、和真は頭を押さえながら返事をする、

「しかし、1000点あげるの難しいのかい……」

「……普通に考えていただけると無理と言うのがわかんと思うんですけど」

「まあ、普通に考えるとね。だけど、あんたならできるんじゃないのかい？」

「……いや、何を根拠にそんな事を言うんですか？」

カヲルは和真を見てニヤリと笑うが和真は眉間にしわを寄せてため息を吐く。

「ん。今回の件で、あんたの中学時代の成績を調べさせて貰ったよ。ずいぶんと成績を落としてるじゃないか。基礎はできているはずだしね。ここまで戻せば、1000点くらい簡単だろ」

「……姉さん」

カヲルは和真の今までの経歴を調べているようで簡単にできると言

うと和真はすでに素を隠す事なくカヲルに自分の中学校の成績を教えたとあるう洋子を睨みつけるが、

「和くんならできますよ。西村先生もそう思いますよね？」

「そうですね。結城の理解力は悪くはないですから、少し真面目に取り組めば成績をあげる事は不可能ではないと思います」

「……」

洋子は和真になら1000点上げる事は難しくないと思っているように西村教諭に同意を求めると西村教諭は頷き、和真はどうして自分の事をここまで過大評価しているのかわからないように眉間にしわを寄せると、

「ここまで言われて何もしないのは男としてどうなんだい？」

「……そうですね。だからと言っても1000点も点数をあげるって言うのは現実味がなさ過ぎてどうしたら良いかわかりません」

カヲルは和真が困っているのが面白いのか楽しそうに笑うと和真は現実味のない点数にため息を吐く。

「まあ、確かにそうだな」

「ええ、俺の成績は良くも悪くも可もなく不可もなくですからね」

「その分、伸ばしようはあるんじゃないかい。一先ずは回復試験を受けて貰うよ。その時間は取れないから1日、授業が終わった後に1教科ずつだよ。1夜付けでも良いから勉強してきな」

西村教諭は和真にどのように勉強させたらいいか考え始めたようで眉間にしわを寄せ、和真は苦笑いを浮かべるが力フルは具体的な事は言わずに和真にどんな手を使っても良いから成績を上げて来いと言、

「大丈夫ですよ。一先ず、今日、家に帰ったら姉さんが和くんの勉強を見ますから」

「……いや、だとしても簡単に成績は上がらないから」

洋子は和真に勉強を見ると言つと和真はそれでも直ぐに成績が上がるわけではないと言うが、

「大丈夫。姉さんと一緒に頑張ろう。和くん」

「……わかったよ。やれるだけやるよ」

「はい。よろしく願います。和くん」

洋子は和真ならできると信じているようでまっすぐと和真を見て言つと和真は大きなため息を吐くと洋子は和真が頷いた事に嬉しそうに笑つと、

「なるほど、教師陣の噂では聞いてたけど、本当にシスコンみたいだね。これは良いね」

「……学園長、おかしい事を考えないで頂けますか？ ただでさえ、結城には大変な仕事を押し付けているんですから」

「なんだい？　西村先生、あたしを疑っているのかい？」

「……学園長の笑い方は何かを企んでいるようにしか見えません」

カールは和真と洋子の様子に何かを企んだように笑い、西村教諭はこれから和真に降りかかるであろう厄介事にため息を吐く。

第14問

「和、観察処分者になったって本当か？」

「おい。何をしでかしたんだよ」

和真は休み時間になり今日の回復試験のために物理の教科書と睨めっこをしている和真にトオルと平太が声をかけてくる。

「……なんで、もう噂になってるんだよ」

「うそ、カズ、あれって、本当なの？」

「……半分、本当かな？」

清美は噂自体は聞いていたようだが和真が観察処分者になるわけがないと思っていたようで驚きの声を上げると和真はため息を吐くと、

「半分？　ってどう言う事だ？」

「……ああ、話せば長くなるんだけどな」

一心が話しに食いついてきて和真はため息を吐きながら、昨日、学園長室に呼ばれて自分が教師仕様の召喚獣を使えるようになるという話をする。

「……なるほど、シスコンってところを付け込まれたわけだな」

「……まったく、その通りで反論できない」

一心が苦笑いを浮かべながら和真がシスコンのせいでそんな面倒な事を押し付けられたんだと言うと和真は自分がシスコンだと認めているため、肩を落としてため息を吐くと、

「それで、カズは朝から物理の教科書をにらめっこしてるわけね」

「ああ。今日は放課後に物理の回復試験を受けないといけないんだよ。1教科ごとに3週間で1通り受けてから、2500点を超えるまで点数の上がりそうな教科を重点的に回復試験を受ける……やってられるか？」

「た、大変だな」

清美は和真が朝から珍しく教科書を読んでいる事に納得がいったと頷き、和真はすでに限界がきているようで乱暴に頭をかくと平太は苦笑いを浮かべ、

「でも、和が観察処分者級に召喚獣の扱い方が上手くなるってのは俺達にとってはプラスだよな。この間の試召戦争の話じゃ、吉井は召喚獣の扱い方がめちゃくちゃ上手いつて話だろ。点数が高くて同じように召喚獣の扱いが上手いなら、Aクラスだって目じゃないぞ」

「……何度も言わせるな。俺は試召戦争に興味はない。点数が高くなったら、それでこんな生活とはおさらばだ。わざわざ点数を下げるわけがないだろ」

「……本当にやる気ないわね」

一心が和真が召喚獣の扱いに慣れればAクラスも目じゃないと言う

が和真は相変わらず、試召戦争に興味は見せないため、清美はため息を吐くが、

「そりゃ、そうだろ。お前ら、仮に上手くやってAクラスに勝てたって、たかだか3カ月だろ。それにもし俺達が勝てたとして小者が直ぐにしかけてくる」

「小者って根本くん？ 代表と付き合ってるんでしょ？ それなら、そんな事しないでしょ」

「言ってるだろ。小者はどこまで行っても小者だ。変にプライドも高いだろうからな。自分ではAクラスに勝てないだろうけどな。仮に俺達がAと戦えばその時を狙ってくるよ」

「そんな事するか？」

和真はCクラスにAクラスと戦うまでの能力は言い切り、それ以外にBクラスの根本恭二が邪魔だと言うと清美と平太は首を傾げる。

「……するな。プライドだけの高い小者^{もっしんどっ}つてのはみんなそんな感じだ。うちの代表も一緒、そのうち、悪鬼羅刹に良いように使われるだけだな」

「お前にかかれば代表も三下扱いだよ」

「別に三下扱いしてる気はないよ」

和真の目には恭二も友香も同じようにしか映っていないようにうでため息を吐くとトオルはため息を吐くと和真は興味無さそうに言う、

「そう言えば知ってる。私、小山さんの総合成績を聞いたんだけど、和真と1点差で代表だって」

「そうなのか？ 和真、お前、頑張れよ。お前が後2点取ってればクラスはもつとまとまっただろ」

「いや、俺は人をまとめる才能はないから」

清美は和真と友香の総合点数を調べたようで和真の点数の事を言う
とトオルは和真に振り分け試験の時にもう少しやれよと言うが和真
は自分にはそこまでの才能はないと言い切り、教科書を睨みつける。

第15問

「ありがとうございます。西村先生」

「なに、点数をあげるのは俺はこれくらいしか協力できないからな」

和真は西村教諭に呼び出されて生徒指導室に行くと西村教諭は和真の総合点数を上げるために各教科の要点をまとめたプリントを印刷してくれており、和真は西村教諭に頭を下げると、

「それで、どうだ。行けそうなのか？」

「正直、わかりませんよ。物理は昨日、家に帰ってから高橋先生に叩き込まれたんでそれなりに取れるとは思いますが、後は英語はたぶん、真面目にやれば振り分け試験よりは取れると思いますけど……他はわかりません」

西村教諭は和真の勉強の進捗状況を聞き、和真は無理があるため息を吐く。

「まあ、無理をしない程度に頑張れ。俺はお前なら直ぐに点数が上がると思っているからな」

「……そんな過大評価はいりません」

西村教諭は和真ならやれると言うが和真は自分の評価を余程、低くしているようであり、

「結城、お前はもう少し、自分を評価したらどうだ？」

西村教諭は和真にもう少し自信を持てと言った時、

「失礼します」

「……遅いぞ。吉井」

生徒指導室に『吉井明久』が入ってくる。

（……吉井明久か？ 観察処分者の仕事か……こいつのせいで、俺の仕事が増えてるんだよな）

「ねえ。君は何をしたの？ 鉄人は体罰何か気にしないから」

「……吉井、おかしい勘違いをするな。結城はお前達バカと違って問題など起こさん」

和真は今の自分の状況の原因の1つである明久を見て少しだけイライラしてしまったようだ。明久は自分が和真に迷惑をかけているなと思っていないため、和真を西村教諭に怒られていると思い勝手に仲間意識を持って話しかけるが西村教諭は明久の言葉を一蹴し、

「吉井、今日の放課後、観察処分者の仕事があるからな。間違っても昨日のように帰るんじゃないぞ。後は昨日、お前が勝手に帰ったせいで、結城に迷惑をかけたんだ。謝罪でもしておけ」

「そうなの？ 昨日は」

「……悪いな。話しかけるな。不愉快だ」

明久に礼を言うように言い、明久は和真に謝ろうとするが和真は明久を見て機嫌が悪くなってきたようで眉間にしわを寄せると、

「……西村先生、ありがとうございます。俺はこれで失礼します」

「ん？ ああ、すまないな。結城、頑張るんだぞ」

「はい」

西村教諭に頭を下げて生徒指導室を出て行く。

「ちよつと、待ってよ！！ 昨日の事は謝るよ。だけど、そんな態度を取る必要がある？」

「……話しかけるなって言ってるだろ。観察処分者^{がくえんのはじ}」

「何だよ。その言い方！！」

明久は和真の態度に自分が昨日、和真に迷惑をかけた事を悪いとは思っているようで謝ろうとするが和真は明久と話す気はないと言うと明久は和真の態度が気に入らないようで和真を怒鳴りつけるが、

「……言われる事をしてるだろ。お前のせいで俺がどれだけ西村先生の手伝いをしてると思ってる。それにお前はバカを好きだけやってれば良いが、そのせいで泥をかぶってる人間がいるんだ。俺はその1人なんだよ。それも知らないで良くそんな口が叩けるな」

和真は明久の胸倉をつかみ言うと明久は意味がわからないようで戸惑ったような表情をすると、

「悪いな。俺はお前がFクラスとかより、人の迷惑を考える事もしないお前が気に入らない。話しかけるな」

「……」

和真は明久にそう吐き捨てると呆然と立ち尽くす明久を置いて自分の教室に戻って行く。

第16問

（……らしくないな。これじゃあ、清水と変わらない）

和真は明久と別れた後、自分が明久に吐き捨てた言葉が自分らしくないと理解しているようだが割り切れない部分は多いようで眉間にしわを寄せながら教室に向かって歩いてみると、

「結城君」

「……中林か？ チャンジだ。俺は体操服ならブルマの方が良い」

「……あなたはどうしてもいつもそうなの？ だいたい、うちの体操服は指定でしょ」

宏美が和真を見かけて声をかけ、和真は宏美の声に振り返ると宏美は次の授業は体育のようで体操服姿であり、和真は宏美の足をジッと見た後に冗談交じりで返事をするが、和真の言葉に宏美はジト目で和真を見てため息を吐く。

「それで、何かようか？ 俺は忙しいんだ」

「忙しい？ いつもやる気のない結城君が？ 何かあったの？」

和真は宏美がため息を吐く様子など気にする事なく、忙しいから用があるなら早く話せと言うと宏美は和真が忙しいと言うのが信じられないようで首を傾げると、

「……何だ？ その反応は？ 俺にだっていろいろとやる事がある

んだぞ」

「結城君が学校でやる事なんて資格試験ないしょくが寝るだけでしょ。別にたいした用事じゃないでしょ」

「資格試験なかしよくは十分にやる事だろ。まあ、今回は内職でも学校の勉強だけだな」

和真は首を傾げる宏美を見てため息を吐くが宏美は和真の用事などたいした事ではないと言うが和真は教室に戻るとまた物理の教科書と睨めっこになるためか肩を落とす。

「学校の勉強？ 何？ Cクラス、Bクラスに試召戦争でも仕掛けるの？ Fクラスにあてられた？」

「……仮に試召戦争だとしても俺が勉強する理由にはならないよ」

「確かにね。清美や野口君達から聞いたけど、そうそうに試召戦争不参加を表明したって話よね」

宏美は和真が勉強をすると聞いてCクラスが試召戦争を仕掛けると思ったようだが和真は首を振ると清美達から和真の試召戦争へのやる気の無さをすでに聞いているようで宏美はため息を吐くと、

「それなら、何があったの？」

「ん？ ああ……いや、俺の話は長くなるから、そっちの用件を先に話してくれ。休み時間は限られているからな」

宏美は和真に何かあったかと聞くが、和真は少し考えると今、自分

が置かれている状況は直ぐに説明が付くものではないため、宏美に用件を先に言えと言う。

「そう？ 長くなるならそうするわ。あのさ……『ラ・ペデイス』の期間限定の新作のクレープ、凄く美味しいって聞いたんだけど、美味しいの？」

「新作クレープか？ 美味しいぞ。俺は試作品を食わせて貰っただけだけどな。それがどうかしたか？」

「やっぱり、噂は本当なんだ。どうしよう。今月、ピンチだしなあ……期間限定」

宏美は和真のバイト先の期間限定メニューが気になるようだが今月は苦しいようであり、

「……なぜ、期待するような目で俺を見る？」

「別に奢れとは言っていないわよ。確か、バイトでも社員割り引きがあるって言ってたよね。結城君と一緒になら、結城君が支払いすれば安く食べれるかな？ と思って」

和真は嫌な予感しかしないようで1歩下がると宏美は奢れとは言わないと言いながらも和真の腕をつかみ、

「……わかった。今度の日曜日で良いか。バイトは午後からだから、午前中なら付き合っよ」

「ありがとう。それじゃあ、日曜日ね。約束よ」

和真はため息を吐くと宏美は笑顔で礼を言つと自分の廊下を走つて行く。

第16問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

反省和真に宏美が遭遇。そして、デートの流れですが……

和真「デート？ 違うだろ」

和真もたぶん、宏美も自覚してないでしょう。（苦笑）
宏美がアンケートのトップなのでひとまずは宏美イベントを増やしておこうかな？ って感じですよ。

アンケートは省略します。変わらないからです。

後、アンケートの締切ですが第1巻部終了（清涼祭前）までに変更します。相変わらず、歩みが遅いのでこのままだと何もフラグを立てないまま終了しそうですからです。

第17問

「……だから、俺の席を囲むな。邪魔だ」

「和、聞けよ。今度はFクラスはBクラスに仕掛けるんだってよ」

「……見りゃわかるよ。うちの代表様はご立腹みたいだからな」

和真が教室に戻るといつものメンバーが和真の席を囲っており、FクラスがBクラスに宣戦布告をしたと聞き、和真はDクラスを倒したFクラスがCクラスを無視してBクラスに宣戦布告をした事が気に入らないようでピリピリとした様子の友香を見てため息を吐くと、

「カズ、今度はどうなると思う?」

「……知らないよ。それより、うちの代表様は小者と付き合ってるんだろ。巻き込まれなければ良いけどな」

「巻き込まれる? どう言う事だ?」

清美は和真にFクラスとBクラスの試召戦争の予想を聞くと和真は自分の席に座り、これ以上、変な事に巻き込まれたくないとため息を吐くが、その言葉はトオルの興味を引く、

「……考えればわかるだろ。小者で他人を見下してる。やるとしたらくだらない手段、それも自分の手が汚れないように手ゴマ、もしくはうちのクラスにやれって言うてな」

「……それは面白くないな」

「……そう考えると代表には悪いけどFクラスに勝ってほしいわね」
和真は物理の教科書を開きながら、吐き捨てるように言うとトオルも恭二の話を聞いているためか眉間にしわを寄せると清美はため息を吐く。

「俺はウチの代表様がどう動くかは知らないけどな。少なくともBクラスと協定を組むとか言い出した場合はウチのクラスを売るぞ。当然だろ。汚い手で何かしたら高橋先生に迷惑がかかるからな」

「まあ、らしいな。そんな上からの協定なら俺も願い下げだな。それに試召戦争をやるって言うてるのにBと協定結んだって俺達に得はないからな」

「だな。和と違って俺達の頭じゃ、Aには敵わないだろうからな。それでもBクラスの施設なら取れるだろ」

「そうね。私達は分くらいわきまえないと」

和真はBクラスが汚い手段を使ってきた場合は自分の思う通りに動くと言つと和真を囲んでいる4人は苦笑いを浮かべて頷き、

「と、言う事でウチの代表様が使えない時には下克上は任せるぞ」

「……だから、俺を巻き込むな」

「カズを巻き込む？ 違うでしょ。今回、巻き込まれているのは私達、カズの言葉には人をその気にさせる力があるのよ」

トオルは和真の背中を叩き、和真はため息を吐くと清美は自分達は和真に巻き込まれていると笑うと、

「……ないよ。そんなものは俺は自分1人で精一杯だから……何より、俺はこれをどうにかする事しか考えられないんだからな」

「……まあ、頑張れ」

和真はそんな事を言うより、邪魔をしないでくれと言うと一心は和真の肩に手を置き、

「応援だけじゃなく、邪魔をするな。時間がないんだよ」

「そうね。でも、そう言われると邪魔したくない？」

「山下の言い分もわかるな」

「……へーた、わかるな」

和真は解散しろと言うが清美はイタズラな笑みを浮かべると平太は清美の意見に賛成だと頷き、和真は大きく肩を落とす。

第18問

「和くん、少し手伝って欲しい仕事があるんですけど」

「カズ、洋子先生からの呼び出しだよ」

FクラスとBクラスの試召戦争が始まり、自習が始まりしばらくすると洋子が手伝って欲しい仕事があると言ってCクラスの教室を訪れる。

「……高橋先生、学園では結城と言ってください」

「そ、そうですね。すいません。どうしてもなれなくて、気をつけます」

「……気をつけるってもう2年目なんだから」

和真はため息を吐きながら洋子に言っていると洋子は少し慌てた様子で気をつけると言っと、

「前から思ってたんですけど、和はシスコンですけど、高橋先生はブラコンですよね？」

「……一心、いきなりわけのわからない事を言うな」

「いや、一心の言う事もわかるな」

そろそろと一心、トオル、平太が集まってくる。

「そ、そんな事はないと思うんですけど」

「……高橋先生、それで手伝って欲しい仕事ってなんですか？」

「は、はい。えーとですね。教材室から旧校舎の空き教室に教材を運んでもらいたいんです。それで、結構な量があるので」

洋子も少し一心が言った事に自覚があるようで慌てながら言うと和真は洋子に仕事の内容を聞くと洋子は和真に頼みたい仕事を話し、

「それなら、私達も手伝いましょうか？」

「そうだな。和は勉強しないといけないからな。早めに片づけようぜ」

一心、トオル、平太、清美は和真を手伝うと言うと、

「すみません。お願いできますか？」

「良いのか？」

「それくらいはな。ほら、さっさと始めようぜ」

和真は一心達の提案に首を傾げるとトオルは和真の肩を叩き、教材を取りに行こうと言う。

「そうだな。行こう。姉さ……」

「カズも洋子先生と変わらないじゃない」

和真は教材のところまで洋子に案内してくれと言つが和真も気を抜くと洋子の事を『姉さん』と呼んでしまうようで清美は和真を見て苦笑いを浮かべると、

「……言つな」

和真はため息を吐く。

「……これは多いな」

「すみません。お願いできますか？ 本当なら吉井くんに頼む予定だったのですが、試召戦争になってしまいました」

「……また、あの観^{バカ}察処分者のせいだよ」

「和、あんまり言つな。お前の価値を下げるぞ」

トオルは洋子に案内された教材室の教材を見て苦笑いを浮かべると和真は苦々しく言つと一心は和真の肩を叩き、

「……そうだな。悪い。気をつける」

「そうしろ。あんまり、感情的になつて、吉井をバカにしているとウチの代表や根本と変わらなくなるからな」

和真は落ち着こうと大きく深呼吸をすると一心は笑顔を見せ、

「それじゃあ、早いところ、終わらせようぜ。和の自習時間も減らすわけにはいかないしな。せっかく、大出を振って回復試験の勉強ができるんだ。和の強化は俺達にとってもプラスになる事だからな」

「そうね。それじゃあ、洋子先生、私達はこれ運びますから洋子先生はお仕事に戻ってください」

「そうですね。総合教科を承認出来るのは高橋先生だけだからいいとこまるだろうし」

平太は早く終わらせて和真の自習時間にしようと言つと和真達は教材を持って教材室を出て行く。

第18問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

話が進みません。

和真「確かにね」

和真もやる気ないし、

和真「必要ないしね」

まったく、ここまでやる気のない主人公になるとは思いませんでしたよ。

和真「悪かったね」

まあ、完全に和真派が出来上がっている流れなんですけど、Bクラスとの協定に和真はどう動くんでしょうか？

番宣

リトルバスターズ！の二次小説を投稿しました。

『あの日の約束』と言う作品です。

神北小毬の幼なじみが主人公な作品です。リトルバスターズ！もやったよ。って人たちは見てくれると嬉しいです。

第19問

「……あれ？」

「和、どうかしたのか？」

「……いや、あいつらって、Bクラスだったよな？」

和真達は旧校舎の空き教室に教材を運ぶ途中にFクラスの教室にBクラスの生徒5名が入って行くのが目に映る。

「何で、Bクラスが？ 決着つくの？」

「いや、決着がつかならそこで試召戦争はやってないだろ」

清美はBクラスの生徒がFクラスの教室にいるFクラス代表である『坂本雄二』の首を獲りに行ったかと思うが周りではまだ試召戦争が行われており、

「……何かきな臭いな？」

「やっぱり、そう思うよな？ 見に行くか？」

「……そうだな」

和真と一心は何となく何かを感じたようでFクラスの教室を覗きに行くかと言つと、

「危なくない？」

「まあ、危なかったら逃げれば良いし、ウチには最強のシスコンがいる脅しには屈しない」

「……悪かったな。なんなら、俺1人で行って来るから」

清美は自分1人だけ女子のため苦笑いを浮かべるがトオルはどうにかなる言いながら和真をシスコンと言い、和真は不機嫌そうな表情をすると1人でFクラスの教室を覗きに行くといい、歩きだす。

「……ちっちゃいな」

「そうだな……山下、へーた、試召戦争のところで全員に聞こえるようにBクラスがFクラスの設備を破壊してるって言って来てくれ」

和真達がFクラスの教室を覗くとBクラスの生徒がFクラスの教室の設備を壊したり、Fクラス生徒の私物の鞆を漁っている姿が見え、和真はため息を吐くと平太と清美に教師を呼んでくるように言つと、

「了解」

「3人で大丈夫？」

「別に取り押さえる気もないから……証拠写真と状況が状況だから携帯は没収されないだろ」

平太は頷き、清美は首を傾げるが和真は気にする事なく、携帯電話で証拠写真を撮って行き、

「熱くなってるから、気づきもしないんだな」

「……小者の手のものは所詮、小者」

一心とトオルは和真が写真を撮っている事にも気付かないBクラスの生徒達の様子にため息を吐く。

「……結城、どう言う事だ？」

「俺に聞かないで、直接、聞いてください」

平太と清美は途中で西村教諭に会ったようで西村教諭を連れてきて、和真に状況を聞くと和真はため息を吐きながら、Fクラスの教室の中のBクラスの生徒達を指差し、

「それも、そうだな。お前ら、動くな！！　ここで何をしている！！」

『げっ！？　に、西村先生』

『な、何で！？』

西村教諭はFクラスの教室の中にいるBクラス生徒を怒鳴りつけると突然のできごとに驚きの声を上げるが、

「詳しい話は生徒指導室で聞かせて貰う。結城、野口、遠山、黒崎、山下、よく知らせてくれた」

「当然の事をしたまです」

「はい」

西村教諭はBクラスの生徒5名を担ぎあげると一心と清美は頷き、

「西村先生、緊急事態だったんで見逃してくださいね。証拠写真も撮っておきました」

「……そうだな。仕方ない」

和真は自分が携帯電話で撮った写真を見せると西村教諭は頷き、

「お前ら、どうしてこんな事をしたか全て洗いざらい話して貰うぞ。その後は当然、補習だ」

『い、いやだあああ！！！！？？？』

西村教諭はBクラスの生徒を抱えて歩き出すと、

「……とりあえずは教材を運ぶか？」

「そうだな。さてと、和真、どうするつもりだ？」

「あ？ 一先ずは小者しだいかな？ おかしな事をしてきたらその時はその時、あまりやりたくないけど……小山には名前だけの代表になって貰うしかないだろうな」

西村教諭の背中を見送った後、トオルはCクラスの代表である『小山友香』の彼氏の手先を潰したため、和真達はBクラスを敵に回した事で自分達の立場が変わってきた事のため息を吐く。

第20問

「それじゃあ、行ってくるかな？」

「和、頑張れよ」

帰りのHRが終わり、和真が席を立とうとした時、

「失礼する。友香、悪いな。Cクラスの生徒をまとめてくれ」

「恭二、わかってるわ。みんな試召戦争の事で話があるわ。席に戻って」

Bクラス代表の『根本恭二』がBクラスの生徒数名を引きつれて教室に入ってくると友香は帰宅を始めようとしていた生徒達を呼び止める。

「カズ、どうするつもり？」

「どうするつもりも興味なし、俺には関係ない」

清美は立ち上がっていた和真に声をかけるが和真は興味無いと言うと教室を出て行こうとすると、

『おい。聞こえなかった？』

「……あんたらが何をしようかなんて知らないし、興味もない。こっちは用事があるんで失礼するよ」

Bクラスの生徒は高圧的な態度で和真の肩をつかみ、和真は興味無さそうにその生徒の手を払い、

「だいたい。Fクラスの設備を壊せとか言う小者で卑怯な奴が代表のクラスが入ってきたんだ。ろくでもない事だろ。そんなのとはつちり喰らう気はないね。俺は就職希望なんで試召戦争でも何でも勝手にやってくれ」

「ずいぶんと舐めた事を言うな。だいたい、俺がそんな指示を出したなんて事実はないぜ。そう言う嘘を言われると迷惑なんだ」

Bクラスの指示を聞く気はないと言うと恭二は自分はそんな指示を出した事はないと平気な面をして言う。

「そうか？ 俺だって、お前みたいな小者に興味はないから、勝手にやってくれよ……ただ、それが真実なら、クラスもまとめられない代表様がFクラスに勝てるかどうかわからないけどな」

『おい。Cクラスが上位クラスに逆らうんじゃないやねえよ！！』

和真は恭二に興味などないと言うと恭二は自分が連れてきた生徒に目配せをし、Bクラスの生徒の1人が和真の首をつかむが、

「殴りたければ殴れば良いだろ。俺はそれを西村先生に報告するだけだからな。こっちは手を出していない。口論のきっかけはそっちが人の腕を無理やりつかんだから、ここにいる全員が目撃者で証人が悪いのはそっちだろ。代表様がこんなところに連れて歩いてくるんだ。親衛隊と言われるクラスの成績上位者がここで退場しても良いならな」

和真は脅しに屈する気はないため、放せと言うと和真の首をつかんでいる生徒に言う「恭二は苦々しい表情をして生徒に目配せをする」と和真の首をつかんでいた生徒は和真から手を放し、

「……根本、1つ、教えておいてやるよ。実力もないのに変なプライド持っても邪魔だぞ。プライドなんてものは何の役にもたたないからな」

「忠告、ありがたく受け取っておくよ」

和真は恭二に向かいアドバイスだと言うが恭二は和真を見下しているため、和真程度に言われる筋合いはないと言う表情をして言う。

「そうか……後、代表様。そっちの彼氏と事前に打ち合わせをするなら、放課後、時間をくれくらいは言っておけよ。悪いけど、ちよっと点数が高いいだけで、信頼も得てない代表に従うお人好しなのはなかなかいないぞ。現に今のやり取りで俺以外にも帰りたい奴は出てくるからな」

「……」

和真は友香に向かいクラスをまとめたいなら考えろと言うと友香は和真が気に入らないようで和真を睨みつけるが、

「じゃあな。俺は行くぞ」

「和、待て。俺も行く。悪いね。代表、俺も今日は忙しいんだ」

「私も」

和真は気にする事なく教室を出て行き、和真の後ろに一心、トオル、平太、清美は続いて行くと教室の中は微妙な空気が広がり、数名の生徒が教室から和真達を追いかけるように出てくる。

第21問

「山下、お前は出てきたら不味くないか？」

「そうだな。女はめんどくさいだろ」

和真は自分達と一緒に教室を出てきた清美に面倒な事にならないか
と言うと平太も和真と同意見のようで頷くが、

「気にしない。だいたい、小山さんの態度は限度を超えてるでしょ。
私以外にも同じ考えの娘は多いよ。半々くらい、もしくはこっちが
優勢」

「まあな。うちのクラス分けは完全に成績ごと。言ってしまえば、
実力的にはほとんど変わらないんだ。それを代表だと言われたって
な」

清美は自分以外にも友香の態度に腹を立てていると言うと和真は成
績自体は大差がないと言うと、

「確かに成績ごとだから仕方ないと言われたってそれででかい態度
されたら面白くないよな」

「Aクラス代表の『霧島翔子』みたいに頭1つでているわけでもな
い。言いたくないが根本みたいに汚い手を使ってでも人をまとめあ
げる才覚もない。Dクラスの『平賀源二』や中林のように先頭で周
りを引っ張る力もない。Dクラス戦で上位クラスを出し抜いた悪鬼
羅刹んどくほどの戦略眼もない。はつきりと言わせて貰えば代表の資質で
考えるとウチの代表様は代表の資質は最低だよ」

一心は和真の言葉に頷き、和真は冷静に各クラスの代表の資質を見定めているようで自分達のクラスの代表である友香に最低評価をつける。

「ずいぶんとバツサリと切るよな」

「事実だろ。進級して1週間足らずだけだな。さっきのだって事前に言っておけば帰る人間も減っただろ。他人の話も聞かないにしても、やり方ってあるだろ」

トオルは和真の友香に対する評価に苦笑いを浮かべるが和真は気にする事なく、

「それじゃあ、俺は西村先生のところに行くからな」

「ああ。頑張れよ。目指せ、腕輪持ち」

「いや。無理だから」

生徒指導室で回復試験を受けてくると言うと平太は和真を激励し、和真がため息をついた時、

「吉井、アンタの返り血がこびりついて洗うの大変だったじゃない」

「それって、吉井が悪いのか？」

「……」

目の前にFクラスの生徒達が話している姿が目映る。

「……和」

「わかってるよ。俺は冷静だよ」

一心は和真の目に明久が映った事で和真の中に何か良くないものが出てきていると思ったようで和真の肩をつかむと和真は深呼吸して自分は冷静だと言うと、

「この後にBクラスがFクラスの代表を討ち獲れなければウチのクラスの代表様はFクラスの策略にはまってAクラスに試召戦争を仕掛ける事になる」

「Aクラスと試召戦争？ どう言う事？ 明日まで試召戦争は中断でしょ」

和真はこの後に起きる事にある程度の予想は付いているようにため息を吐くと清美は首を傾げる。

「たぶん、CクラスがB対Fの決着が付いたら漁夫の利を狙ってくると言う噂が出ているはずだ。Fクラスが動いたのはウチのクラスに同盟を求めにくるってところだ……そして、根本はそれを使って休戦協定違反を訴えてくる」

「おいおい。自分が協定を提案しといてそこから罠かよ」

「仕方ないだろ。小者なんだから……悪いな。そろそろ行かないと西村先生を待たせるから行くぞ」

「ああ」

和真は恭二がCクラスの教室で雄二に仕掛けると言うトオルは恭二の汚さのため息を吐くと和真は眉間にしわをよせた後、表情を戻して生徒指導室に行くと言い、生徒指導室に向かって歩き出す。

第22問

「和、どうだった？」

「何？ 点数下がったとかは無しにしてよ」

物理の回復試験を受けた翌日、HR前に和真は生徒指導室により、西村教諭から回復試験の返却があり、教室のドアを開けると和真を見つけたトオルと清美が和真に声をかけると、

「……これ、何だと思う？」

和真は自分が取った点数が信じられないようで顔を引きつらせながら437点と書かれた解答用紙を2人の前に出す。

「……冗談で腕輪持ちになれとは言ったが本当に取れるのかよ」

「……1夜付けでそんな点数を取られたらこの学園の生徒と言うか学生のほとんどが勉強止めるわよ」

「……俺もそう思う」

トオルと清美も見せられた現実に関を引きつらせると和真も2人の言葉に賛成なようで大きく頷くと、

「……昨日、西村先生がくれたプリントや一昨日の夜に高橋先生から教わったところがほとんど出た」

「それって、2人が手心を加えてくれたって事？」

「……いや、基本的にあの2人がテストに関してそんな事はしないと思うな。教え方が的確なんだと思う」

和真は顔を引きつらせたまま、西村教諭から渡されたプリントと洋子に教えて貰った時のノートを机に広げるとそこには和真の字でびっしりと2人から教わった事が記されており、

「……和、お前を俺は甘く見ていたよ。やればできる子だったんだね」

「……うん。洋子先生の和真を見る目はブラコンなだけじゃなかったよ」

トオルと清美は和真の頑張りを誉めたいようで2人で和真の頭を撫でまわし、

「止める!？」

和真は2人から逃げようとするが、

「照れなくて良いんだよ……それとも洋子先生に撫でて貰いたい？シスコンだし」

「そんなわけあるか!？」

清美は和真を生温かい目で見て言い、和真は声を上げる。

「朝から、何、騒いでるんだ?」

「和、どうだった？」

一心と平太が登校してきて和真達の様子を見て声をかけてくると、

「聞いてくれよ。一心、へーた。和の野郎、バカなふりをしてやがったんだ」

「ん？ バカなふり？ ヤマでも当たって300点台でも取ったか？」

「これ、これ」

トオルは芝居がかった口調で和真が自分達をバカにしていると言うと平太が和真が大部点数を上げたと思って苦笑いを浮かべた時、清美は和真の机の上にある答案用紙を指さし、

「「何じゃこりゃ!？」」

「……そうなるよな。俺だって、生徒指導室で初めてその解答用紙を見た時に同じ事を言ったよ」

一心と平太は異常に上がった成績に驚きの声を上げ、和真はため息を吐く。

「そう言えば、この点数を見て鉄人は何も言わなかったのか？」

「……西村先生は『頑張ったな。よくやった』って言ってくれたよ」

トオルは一心と平太の驚きように満足したように笑うと和真に西村教諭の反応が気になったようで和真に聞くと和真は西村教諭なりの

最高の誉め言葉だと理解しているようで苦笑いを浮かべると、

「一先ずは物理で点数を稼いだんだ。後、700点……無理だろ」

「どうにかなるだろ。これだけ、取れる頭があるんだ」

他の回復試験に向けて気合を入れようとするが、その壁は高すぎるようであため息を吐くが、一心は和真の肩を叩き、

「カズ、今日は何？」

「現代文……あんまり、得意じゃないんだよな。高橋先生も理系だから、教えて貰ってもあんまりよくわからなかった」

清美は今日の和真が受ける回復試験の事を聞くと和真は苦手教科なのかため息を吐くため、

「まあ、お前も理系の人間なんだろ。現代文なら、山下はそれなりに取れているだろ。和に教えてやったらどうだ？」

「そうだけど……これを見せつけられるとね」

平太は苦笑いを浮かべながら清美に和真のバックアップをするように言々と清美はイタズラな笑みを浮かべながら和真の解答用紙を指差す。

第22問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、まさかの物理400点オーバー！。

和真「やりすぎだろ」

最初から和真は物理を主力にしようと思ってました。洋子先生の担当教科ですしね。瑞希は確かあまり得意じゃなかったからと言うのもありますけど、

後は平均的に上げるかほかに2、3教科特化させるかは考え中。

和真「腕輪の能力はどうするんだ？」

今、考えているのは2つ。

攻撃完全無効化と手加減

和真「試召戦争向きじゃなさそうだな」

そうですね。攻撃完全無効化はそのままです。一定時間、相手の攻撃を受けません。

和真「手加減は？」

名前は他の物を考えていますが、範囲攻撃で対峙した召喚獣の点数を一桁にしますが和真の召喚獣ではとどめは刺せなくなる。部隊長として動かすなら有効な能力ですが和真1人で無双つてのはやめたんですからね。腕輪の能力には規制をかけたいと思ってます。

和真「まあ、腕輪〃チートって感じだからね」

はい。あまり好きじゃないんです。個人的には人を書きたいので。

（苦笑）

アンケートはあの後、投票がないため、宏美が1位のままです。

第23問

「手が穢れるのがすごく嫌だけど、薄汚いあなた達に相応しい教室に送ってあげるわ。覚悟しておきなさい。近いうちに始末してあげるわー!」

(……ずいぶんと挑発的だな。まあ、進級したばかりで勝てるわけもないのに挑発に乗るようなバカはいないだろ)

朝のHRが終わり、1時間目の授業が始まるまでの休み時間に2-A所属の『木下優子』はそう言ってCクラスの生徒全員を挑発して教室を出て行くが和真は今日の回復試験の方が重要なようで西村教諭から渡されたプリントと睨みつけていると、

「Fクラスなんて相手にしてられないわ!! Aクラス戦の準備を始めるわよ!!」

「……和、これって不味くないか？」

クラス代表の友香はAクラスとの試験召喚戦争を始めると叫び、多くのクラスメート達は同意の声をあげ始めると一心は和真の肩を叩き、和真に何かした方が良くんじゃないかと言う。

「……うちの代表は隣のクラスの小者と付き合っていると聞いて男の趣味は悪いとは思ってたが、ここまで単純バカだとは思わなかった」

「そう言う事を言わない。確かに私も根本くんはないと思うけど……主にあの髪形」

和真はため息を吐いて友香を小バカにすると清美は苦笑いを浮かべると、

「和、これを止めるよ。このままだと、せっかくあげた点数、がつり下げられるぞ。だいたい、回復試験も俺達は受けてないんだ。Aクラスに勝てるわけないぜ」

「……だよな」

トオルは今の状況じゃAクラスに勝てるわけがないと言うと和真も同意見のため肩を落として頷き、

「山下、これ、貰うぞ」

「何？ 私と間接キスでもしたいの？」

「そうじゃなくてな。それに間接は別に嬉しくないよ……当たらないように」

和真は清美の飲みかけの飲むヨーグルトを手にとると清美は和真をからかうように言うが和真はため息を吐いて友香に当たらないように投げつける。

「ちょっと、誰よ！？ こんな事をするのは！！」

「……ナイスコントロール。俺、美少女の顔が白濁の液体で汚れる。良い絵だ」

「それについては賛成だけど良いのか？ 代表がお怒りだぞ」

飲むヨーグルトは綺麗な曲線を描いて友香が演説を始めていた教卓に当たって飲むヨーグルトがはじけ、友香の顔には飲むヨーグルトがかかり、彼女の怒りはこんなくだらない事を行った犯人を探す事に向かいだし、和真は笑いをかみ殺していると和真の様子に平太はため息を吐くと、

「そこ、これはあなたがやったの！！　どう言っつもりよ！！　また、私のやる事を邪魔するつもり？」

友香は笑っている和真を見つけて怒りをあらわにしながら和真の前まで来て、和真を怒鳴りつける。

「どう言っつもり？　その言葉、そっくり返すよ。安い挑発に乗った代表様」

「ちょっと、あなた、私をバカにしてるの？」

「勝ち目もないのに感情に任せてAクラスと試召戦争を始めるなんて十分にバカにされる状況だろ。それと代表になったなら、せめてクラスメートの名前くらい一致させておけよ」

和真は友香を挑発するように笑うと友香は怒りに任せて和真の胸倉をつかむが和真は友香の手をつかみ、自分の胸倉から彼女の手を外すと、

「うっ！？」

「へえ、少しは冷静になったか？」

友香は和真の怒りでAクラスとの事を冷静に考えられるようになった

たのか、自分が怒りに任せて無謀な事をしていたと気づき、和真はイタズラな笑みを浮かべ、

「少し冷静になって考えろ。今の状況でAクラスに勝てると思う奴は何人いる？ 勝てないと思う奴は手を挙げてくれ」

「俺は勝てるとは思えない」

「私も」

クラスメート達に向かいAクラスに勝てると思っている人間がいるかと聞くとトオルと清美は手をあげ、続くように一心と平太が手をあげると冷静になればそのくらいの分別が点く人間は多いようで続くように手を上げ出す。

「代表様はどこに勝てる見込みを見つけたんだ？ 俺の名前も出てこないって事はまだクラスメート全員の名前も顔も一致してないんだろ。Cクラス平均何人当てればAクラス1人に勝てるか？ 1教科でもAクラスと対等に戦える人間がいるのか？ それくらいは考え付いているんだろ？」

「……」

「……ぶっちゃけ。俺は就職組だからな。内申は自分のテストと生活態度で決まるからな。設備なんてどうでもいいから、勝手に試召戦争を始めても良いが、俺は補習を受ける気もないからな。やるなら、やりたい奴で勝手にやってくれ」

友香に向かい勝てると思った理由を言えと言うが友香は何も答えず、和真は呆れたようなため息を吐くと自分は不参加を決め込むと言い、

友香を追い払うように手を振る。

第24問

「な、何よ！！ 私は代表なのよ！！ 私の指示に従いなさいよ！！」

「断るよ。だいたい、代表だと言うなら資質を見せて欲しいね」

友香は和真の態度が気に入らなかったようで感情を爆発させて和真に自分の指示に従えと怒鳴りつけるが和真は友香の話など聞く気もないように自分の席に座り、

「それと昨日も言ったけどな。代表だつて言うなら、代表らしい事をしろよ。お前は何をしたいんだ？ はつきり言わせて貰うけど回復試験も受けてないんだ。点数はクラス分けの時のまま、たぶん、単体の教科で100点近い差があるぞ。それを超えられるような作戦をお前に立てられるのか？ はつきり、言わせて貰うぞ。根本はFクラスの代表と比べて明らかに格下だ。あいつが仮にFクラスに勝てたとしても俺はあいつが立てる計画や作戦では動かない。ここにいる奴らはどうだ？ 結局、昨日、斬り捨てた奴らは根本の指示だと西村教諭に白状したがあいつはしらを切ったぞ。そんな奴の指示で動きたい奴は何人いる？」

和真は友香に作戦を立てる能力はないと言い切ると西村教諭から昨日のFクラスの設備破壊の状況も聞いているようで恭二は人に罪を着せる事を何とも思わないと言い、クラスメートに意見を求めるとクラスメートからは恭二に従う事はできないと言う。

「代表様、お前は どうするんだ？ ここで選べよ。クラスメートから信頼されて もいないお前が選ぶのは2つ。クラスの代表として根

本とは試召戦争で協力しないと言う事、それでも根本と組んで代表としての威厳を失墜させる事」

「……」

和真は友香に2択を迫ると、

「俺達の中でお前は確かに成績は良いのかも知れない。だけど、お前はクラスのために動いたか？ 昨日は根本のために動いただろ。仮にお前が試召戦争であいつとの関係を割り切れないなら、俺達Cクラスは何を目指すんだ？ 俺はさっきも言ったが就職組だクラス設備になんか興味もないよ。だけど、お前が代表として割り切っていないなら、彼氏の牛耳っているクラスに試召戦争を仕掛ける事はないだろ。さっきの言った通り、Aクラスとの差は簡単には埋まらない。なら、クラス設備を目指している奴らは何を目標に動けば良いんだ？ この中で本気で勉強してもAクラスに届かないと思っている奴は正直に手を挙げてくれ」

「……悪い。俺は届かないと思ってる」

「俺もだ。それに勉強ばかりしてたくないからな」

和真の質問にトオルと一心はAクラスには勝てないと手をあげるとクラスメートの多くが2人に続くように手を上げ、

「なら、Bクラスになら、どうだ？」

和真はBクラスになら勝てるかと言うとクラスメート達はBクラスになら何とか勝てると考えているものも多いようで手は下がって行く。

「代表様、あんたは1週間近くも代表の立場にいて、クラスが進む道を示したか？　ただ、自分が代表だと言う事に満足して何もやっていないだろ。クラスをまとめる事も、クラスの戦力を分析する事もFとDの試召戦争を考えてなぜ、あの結果になったかを考える事も。確かに点数が高いとは言ったって成績ごとでクラスを分けているって事はここにいる奴らの成績は大差ないはずだ。それなら、代表に必要なのはなんだ？　人をまとめる能力だろ。それにも気付かない奴が偉そうに文句を言うな。少なくとも俺は沈む事が決まっている泥船の手伝いをする気はない」

「な、何よ。それ？」

和真ははっきりと友香の指示に従わないと言うと友香は和真の意見に多くのクラスメート達が賛同している様子にどうしたら良いかわからないようであり、

「それなら、私はどうしたら良いのよ！！　あなたの言う事もわかるわよ。熱くなりすぎだつて言うのも！！　でも、私達はAクラスにバカにされたのよ！！　確かにAクラスに比べたら私達は勉強している比重だつて少ないかも知れないわよ！！　でも、それで戦わずにしつぽを振れつて言うの！！　いやよ。私は負けたく無いわ！！」

「……カズ、ごめん。私もちょっと代表の気持ちもわかるかな」

友香は優子にバカにされたのが悔しかったと叫ぶと清美は苦笑いを浮かべながら、和真に何かできないかと聞く。

第25問

「……いや、だから、俺は」

「ここまで騒ぎをでかくして何もしないはあり得ないぞ。和」

和真は友香の本音に面倒だと言いたげにため息を吐くが一心は和真の肩を叩くとクラスメート達は和真の次の言葉を待っており、

「……はあ。まずは状況の確認。なぜ、Aクラスの木下があんな事を言っただか」

「そこか？」

「ああ。もしかしたら、Aクラスにうちのクラスの生徒が何かやった可能性もあるだろ」

「……なあ。和、俺、1つ重要かも知れない事を思い出した」

和真は状況を確認しようと言うと平太は何か思い出したようで和真に声をかける。

「何だ？」

「どのクラスにいるかわからないんだけど、木下優子には秀吉って言う双子の弟がいたよな？ 確か演劇部だったはず」

平太は優子には弟の『木下秀吉』がいる事を思い出すと、

「……なるほどな」

「カズ、何かあったのか？」

「たぶん、これはFクラスから報復だ」

和真は秀吉の存在にある答えに行きついたようであらため息を吐く。

「何かわかったの？ えーと」

「クラス代表ならクラスメートの名前を合致させてくれ。結城和真だ」

友香は和真の様子に首を傾げると和真はもう1度、ため息を吐くと、

「さっきの木下の挑発はFクラスの謀略の1つだ。大方、根本に協力したCクラスへの報復。無謀にAクラスに挑んで設備を落とされるようになってな。代表の性格も見透かされてるぞ」

「それって、どう言う事だ？」

先ほどの挑発はFクラスの謀略だと言うと一心は和真の言葉の意味がわからないようであら首をかしげ、

「よく考える。本当にAクラスが試召戦争を仕掛けたいなら、ここで宣戦布告をして行くはずだろ。それなのに木下は宣戦布告を先延ばしにした」

「……まるで私達から試召戦争を仕掛けるように？」

「そう言う事だ。この試召戦争は無意味だ」

和真はため息を吐くと友香も和真の説明で和真と同じ意見に行きついたように悔しそうな表情をすると和真は話をここで追わらせようとするが、

「それじゃあ、私達の相手はFクラスね」

「……いや、何で好戦的なんだ？」

友香はFクラス相手に試召戦争を仕掛けようと言い始め、和真は肩を落としてため息を吐く。

「そうでしょ？」

「……いや、FクラスはCクラスがBクラスと同盟を組んで自分達を嵌めたからだろ。それで仕掛けるのは違うだろ」

「なら、結城君、この怒りはどこにぶつければ良いのよ？」

「いや、知らないよ」

友香は自分達の怒りの矛先をどこに向けたら良いかと和真に聞くと和真はため息を吐くがクラスメート達は怒りの矛先を探しているようにあり、

「和、何かないのか？」

「なくもないけどな。ここから先はFクラスしだいだからな」

トオルは真っ直ぐと和真を見て作戦はないかと聞くと和真は次の手はFクラスしだいだと言い、

「それじゃあ、そのFクラスしだいって言う作戦を教えて」

友香は大部熱くなっているようで勢いよく和真の首をつかみ顔を近づけながら言うと、

「……代表様、近いから」

「う、ごめん!？」

和真は友香の顔が目の前に来た事で友香から視線を逸らすと友香は慌てて和真から距離をとり、

「……また、和の毒牙にかかった人間が増えた」

「天然の良い男はこれだから」

平太は2人の様子にため息を吐くと清美は和真をからかうように言う。

第26問

「違うわよ!？」

「……からかうな」

友香は平太と清美の言葉を全力で否定し、和真はため息を吐くと、

「さつきも言っただけど、これは報復なんだ。気づいたのにつてやったら、それこそ、相手の思っつぽ。これだけは絶対に言える事、理解できるか？」

「ええ」

和真にまずはFクラスの仕掛けた罠にのってはいけないと言うと友香はまだ、納得はいかないようだが頷き、

「仮に報復として試召戦争を起こすなら、俺達がやる事はFとBクラスの勝者……違うな。決着がつきしだいBクラスの設備を手に行っているクラスに試召戦争を仕掛けるのが有効な手段だよ」

「待てよ。Bクラスの設備を持っているクラスってどう言う事だ？勝者がじゃないのか？」

和真はFクラスとBクラスの試召戦争の勝敗が決まりしだい試召戦争をBクラスの設備を持っているクラスに仕掛けると言う一心は和真の言いたい事がわからないようで首を傾げる。

「FクラスはDクラスに勝った時に何をした？ 設備交換はしたか

？ この目的って誰かわかるか？」

「してないわ……それが今回も起きるって言うの？ それなら、Fクラスは何のために試召戦争をしてるって言うのよ？」

和真はFクラスがDクラスに勝った時に設備交換をしなかった事が気になっているようでクラスメート達に設備交換がなかった理由を聞くと誰もFクラスの考えている事が理解できないようであり、友香はFクラスの真意がわからないと首を振ると、

「……今朝、用事があって、生徒指導室に行ってきたんだけど、Bクラスの生徒から室外機が壊れたから修理してくれって言う申請が出てるって聞いたんだけど、誰が何の目的で壊したと思う？」

「ちょっと待てよ。それがFクラスの作戦だって言うのか？」

和真は西村教諭からBクラスの室外機が壊された事が引つかかると言っとトオルは聞かされた事実を声を上げ、

「……カズ、西村先生の手伝い。頑張つてね」

「……ああ」

清美は西村教諭が和真に修理を手伝うように言われたと思ったように和真の肩を叩くと和真はため息を吐き、

「少なからず、これはFクラスとBクラスの試召戦争に関わっているはずだ。タイミングも良すぎるからな。FクラスがBクラスの設備で試召戦争を止めるなら、相手はFクラス。FクラスがAクラスを狙っているなら、Bクラスに勝ったとしても設備交換はしないで

何か交換条件を出すはずだろ」

「待て。それじゃあ……」

和真は暗に試召戦争の相手はBクラスだと言い、クラスメート達の視線は友香に集まる。

「ここで最初の話に戻る。代表様はどうするんだ？ 彼氏に氣を使うか？ クラスの意思に答えるか？」

「……考える時間はないわよね？」

「そうだな。今回の報復は代表様がBクラスの代表とFクラスを嵌めたから、原因はBクラスにもあるんだ。仮にBクラスとは戦えないと言うなら、はつきりと言わせて貰うが、ウチのクラスでの代表つてのは飾りになる。誰も代表様の言葉は聞かなくなるよ。室外機の修理は今日の放課後からだから、たぶん、今日中に決着がつくだろうから」

和真は友香にCクラスの進む道を決めろと言うと、

「……悪いんだけど1時間だけ、答えを出すのを待って貰って良いかしら」

「好きにすれば良いだろ。元々、俺は試召戦争をする気はないしな」

友香は少し考えたいと言うと和真は勝手にしろと言い、西村教諭がくれた回復試験用のプリントに向かう。

第27問

「……カズ、大丈夫？」

「……無理」

FクラスとBクラスの試召戦争が続いているため、自習時間のなか和真に現代文を教えていた清美が和真の様子に苦笑いを浮かべると和真は現代文は向かないようで魂が抜けかけており、

「和、お前、文系ダメなのか？」

「……現代文や古文は必要性を感じないから、やる気が」

「いや、普通に生活する上で物理の方が必要性ないだろ」

トオルは和真に文系がダメのかのと聞くと和真はやる気がでないと言い、平太は和真の言葉に苦笑いを浮かべると、

「そこは、ほら、和だから」

「まあ、カズだからね」

一心は和真だから物理はできると言い、清美は一心の言葉の意味が理解できるようで苦笑いを浮かべ、トオルと平太は納得したようで大きく頷き、

「……悪かったな」

和真は4人が何を考えているかわかるようで不機嫌そうな表情をする。

「英語ならある程度、できるんだけどな」

「そうなの？」

「役に立つだろ」

「……まあ、そうだろうけどな」

和真は文系なら英語の方が役に立つからやる気が出ると言っていると一心はため息を吐き、

「いや、日本人だし、現代文は必要だろ？」

「今の時代、パソコンや携帯がある。字など書かなくても生きていける。だいたい、作者の考えなんて知るか。読む人間はそんなところまで考えねえよ」

「……学生の本分から全否定だな。おい」

トオルは現代文はそれなりに使うと言うが和真は余程、現代文が嫌いなようで乱暴に頭をかき、平太は和真の様子に苦笑いを浮かべた時、

「あなた達、少し静かにできないの？」

「ん？ 代表様、何かようか？」

「……結城君、その代表様って止めてくれない？」

友香は先ほどのＣクラスの進む道を決めたのか和真達に声をかけると和真は友香を見て何の用かと聞き、友香は和真が自分の事を『代表様』と言うのがバカにされていると感じているようで眉間にしわを寄せる。

「別に良いだろ。代表様は代表様なんだし」

「小山さん、私達に声をかけてきたって事は決まったの？」

「……ええ」

和真は友香の言葉を気にする事なく、現代文のプリントを見て眉間にしわを寄せていると清美は友香に答えは出たのかと聞くと友香は納得がいかなさそうだが頷き、

「それじゃあ、俺達のところより、前で話した方がよくないか？」

「そう言うわけにもいかないでしょ。少なくとも、今の状況を作り出したのは結城君なんだから、最初に話をするのが筋でしょ」

「そんなの勝手にしろよ」

トオルはここでなく、教壇に立って宣言した方が良いと言うが友香は和真に話をしてから次の行動に移すのが正当な順序だと言うが、和真は興味がないのか、自分の事で手一杯なのか、友香を追い払うように手を振り、

「結城君、私の話を聞く気はあるの？」

「いや、ずっと言ってるけど、俺は試召戦争に興味無いから、聞く気はない。だから、決意表明なら、教壇の前で勝手にやってくれ」

「そう。勝手にやってくれて言ったわね。それなら、勝手にやらせて貰おうかしら」

友香は和真の態度に額に青筋を浮かべるが和真は友香の答えはあまり興味がないと言うと友香は和真の態度に少し腹を立てているのかくすりと笑うと、

「みんな、話を聞いて、さっきの答えだけど、私なりに考えさせて貰ったわ」

教壇に移動するとクラスメート達に注目するように声をかける。

第28問

「結果から言わせて貰うわ。私はCクラスの代表としてBクラスと戦うわ」

「代表、彼氏の事は良いの？」

友香は教壇でBクラスとの試召戦争に踏み切ると言っていると清美は友香に恭二との事は良いのかと聞くと、

「ええ。それで文句を言うようなら、私から振ってやるわ」

「だ、代表、男前だな」

「そこ、おかしい事を言わない」

友香は恭二の態度で自分から振ってやると言い、一心が友香の言葉に苦笑いを浮かべると友香は一心を睨みつけ、

「……イエス。ボス」

「弱いな。一心」

友香の眼力に一心は静かになり、トオルは苦笑いを浮かべる。

「それで、私なりに考えさせて貰ったんだけど、私は自分で言うのも悔しいんだけど頭に血が昇りやすいのよ。だから、感情に任せて動いてしまう事が多い……」

「……何か嫌な予感がするんだけど」

友香は1度、深呼吸をした後、自分の性格の事を話し始め、和真はその言葉に何か感じたように顔を引きつらせると、

「それで男子と女子で1人ずつ、私を補佐してくれる人を置きたいと思うのよ」

「頑張れよ。和」

友香は自分の補佐を置きたいと言うと平太は友香の考えが理解出来たように和真の肩を叩き、

「男子は結城君、女子は山下さんに頼もうと思うんだけどお願いできるかしら」

「私？ カズはわかるけど、私は人をまとめる力はないよ」

友香は補佐を和真と清美に頼みたいと言うが清美は首を傾げる。

「ええ。山下さんは言いたい事ははっきりと言えるし、結城君の扱いにも慣れてるしね」

「確かに、山下は和の扱いにはなれてる」

友香は清美を選んだ理由を話すとトオルは頷き、

「……その前になぜ、俺を巻き込む？俺は試召戦争をやる気は」

「何？ 私にだけはクラス代表だからと言う理由で選択を押し付け

て自分は逃げる気？」

和真は自分を巻き込むなと言うと友香は和真を挑発するように笑い、

「……和、諦めろ」

「……」

一心は和真の肩を叩く。

「決まったわね。それじゃあ、結城君、私達は次はどうしたら良いのかしら？」

「いや、その前に俺が補佐って立場で良いのか？ 他にやりたいってヤツがいるかも知れないだろ」

友香は和真に次にCクラスが起こす行動の説明をして欲しいと言うが、和真は納得していないためクラスメートに確認をしてくれと言うと、

「結城君と山下さんが補佐で問題があると思う人は手を挙げて」

「……和、良かったな。満場一致だぞ」

「……嬉しくないよ」

友香はクラスメートに和真と清美を補佐として認めるかと質問をするとクラスメート達から反対意見は出る事なく、一心は和真の肩を叩き、和真はため息を吐く。

「それじゃあ、改めて、結城君、お願いできるかしら」

「……代表、楽しそうだな」

「初めて、カズを言い負かしたからね」

友香はくすりと笑うとトオルと清美は友香の様子に苦笑いを浮かべ、

「……やれば良いんだろ。その代わり、文句を言っなよ」

「文句？ おかしな事だったら、止めさせて貰っわよ」

和真は諦めたようであめ息を吐くが友香は和真に向かい挑発的に言い、

「……何か、不穏な空気だな？」

「と言うか、あの2人は相性が悪い気がする」

「カズはクールに見えてキレやすいからね」

和真と友香の様子にトオル、平太、一心、清美は苦笑いを浮かべる。

第29問

「カズ、代表、遊んでないで始めよう」

「そうね。結城君、始めて」

「……ああ」

清美は不穏な空気を漂わせている和真と友香に声をかけると2人は一先ず、矛を収め、

「……このクラスの支配者に山下が座った」

「確かに」

「そこ、おかしい事を言わない」

清美が場を収めたのを見て、一心と平太が言っていると清美はため息を吐き、

「それじゃあ、カズ、代表。後は任せるよ。私は戦術とか戦略ってわからないからね」

「ええ。私もそれは結城君に任せるつもりだから」

「……いきなり丸投げかよ」

清美は和真と宏美に丸投げすると友香も清美の言葉に同意し、和真は肩を落としてため息を吐く。

「……それじゃあ、始めるか。その前に誰かAクラスと当たりをつけられる人間っているか？」

「Aクラスと？」

和真はクラスメート達にAクラスに知り合いはいないかと聞くと友香は意味がわからないように首を傾げ、

「一応、今朝、ここにきた方が弟の方が確認していた方が何かあった時に次の行動に移りやすいからな。木下さんが噂通りの人なら今朝にここにきたのは弟だろうから、念のためだけだな」

『……』

和真は念のために確認しておきたいと言うが誰もAクラスに知り合いはいないようであり、

「……仕方ない。工藤を頼るか」

「……カズ、あんたに知り合いがいるんじゃない」

和真はため息を吐きながら頭をかくと清美はため息を吐く。

「えーと、一応、代表はいた方が良いとは思っただけ……」

「何？」

「……木下さんにケンカ売るなよ。話がややこしくなるから」

「……」

和真は友香を連れて行った方が良いとは思いはするが友香が優子と揉めないか心配なようで苦笑いを浮かべると友香は和真を睨みつけるが、

「……それじゃあ、私と代表とカズで行ってこようか」

「……任せたぞ。山下」

清美は見えていられなくなったようで和真と友香の間に割って入るとトオルは苦笑いを浮かべ、

「それじゃあ、ちょっと行ってくるか。話はそれから」

「ええ」

和真はAクラスに行くと言うと友香は和真を睨みつけたまま和真の後を追いつ、清美はため息を吐きながら2人の後を追いかけて行く。

「……えーと、工藤」

「あれ？ 結城君、どうかしたの？」

和真は試召戦争が始まっているため、自分達と同じように自習になっているAクラスの教室を覗くと目的の生徒である『工藤愛子』を見つけて声をかけると愛子は和真を見つけて駆け寄ってくると、

「カズ、やっぱり、あんた無自覚でしょ？」

「何、わけのわからない事を言ってるんだ？」

清美は和真の知り合いが女子生徒だった事にため息を吐くが和真は意味がわからないために首をかしげるが、

「何々？ デートのお誘い？」

「違う。ちょっと相談に乗って貰いたい事と確認したい事があってな」

愛子は和真をからかうようにデートの誘いと言い、和真は直ぐに愛子の言葉を否定し、

「ぶー、つまんない」

愛子は口ではつまらないと言うが和真以外の友香や清美の反応を見たいようですくすくと笑っており、

「工藤、話を進めて良いか？」

「うん。それで、結城君がボクを訪ねてくるって事はバイト先の新作クレープを奢ってくれるとか？」

「……いや、そうじゃなくて」

和真は愛子に話を聞いて欲しいと言うと愛子は和真にクレープを奢ってくれるのかと言うが和真は話が進まない事にため息を吐き、

「……カズが工藤さんに頼みたくなかった理由がわかったわ」

「……そうね」

和真と愛子の様子に友香と清美は苦笑いを浮かべる。

第29問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、動くと言いか立場的に清美政権。（爆笑）

和真「完全にキャラが立ってきてるよな」

そうですね。トオル、一心、平太は完全に3バカ的位置にはまっていますね。

和真「このクラスはどうなる事やら」

さあ？

アンケート

ヒロイン決定アンケートの現在の状況？

1位 宏美5票

2位 洋子3票

3位 美春、友香、葵1票

……なぜ、洋子先生に入る？

和真「わからないって」

基本的に美人女教師と男子生徒は萌える展開ですが、ここではアウ

トです。

そういうのは妄想で、反論は認めません。文句がある方はよりマニアックな性癖を暴露してください。

和真「……違うから」

第30問

「それで……どっちが結城君の彼女？」

「違う。えーと、こっちがうちのクラスの代表様」

「Cクラス代表小山友香よ」

「それで、こっちが」

「山下清美です。よろしく、工藤さん」

愛子は和真をからかうように友香と清美の事を聞くと和真はため息を吐きながら、友香と清美を紹介すると2人は愛子に向かい頭を下げ、

「工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

「……工藤、その自己紹介はどうにかならないのか？」

愛子は2人に向かい自己紹介をすると和真は愛子の自己紹介に頭を押さえる。

「良いじゃない。それとも結城君はボクの特技は見たくないの？」

「……見たくないって答えるのは嘘になるけどな。俺達は用事があったんだから、話を進めさせてくれ」

愛子はイタズラな笑みを浮かべながら、スカートのすそを少し上げると和真はすでに愛子の相手をする事に疲れ始めているようであるため息を吐くと、

「んー、そうだね。Cクラスの代表の小山さんが来るって事は試召戦争の宣戦布告？」

「いや、そうならないように確認にきたんだよ」

「確認？」

愛子は友香がいる事でCクラスとAクラスの試召戦争になると思ったように少し眼光を鋭くすると和真は苦笑いを浮かべ、和真の様子に愛子は首を傾げ、

「ああ。今朝の事なんだけど、ウチのクラスにAクラスの木下さんが来てな。ウチのクラスをバカにして帰って行った」

「優子が？ それはないよ。HRが終わった後だと優子はボクと一緒にいたから、Cクラスには行ってないよ」

和真は簡単に優子がCクラスに来て挑発して行ったと言うが愛子はその時間は優子と一緒にいたように直ぐに優子はCクラスを挑発している事はないと答える。

「ああ。俺もそう思う。それで、Fクラスにいる木下さんの弟の作業だと思っただけど」

「それで、確認にきたわけだね。優子、ちょっと来て」

「愛子？　どうかした？」

和真は秀吉の仕業かどうか確認したいと言うと愛子は頷き、教室にいる優子に声をかけると優子は愛子が自分を呼んでいる理由がわからないようで首を傾げながら和真達の元に歩いてくると、

「えーと、愛子、この方達は？」

「……」

「……代表様、変な敵意を見せるな。えーと、木下さんだね……」

優子は和真達に見覚えがないようで首を傾げ、友香は優子に敵意の視線を向けようとするが和真は友香をいさめた後、改めて、Ｃクラスの今朝の出来事を優子に説明し、

「……そう」

「それで、一応、確認をしにね。Ｆクラスに確認に行ってもしらはつくれられると思ったし、木下さんには迷惑だろうと思ったんだけど、俺達もいろいろとはつきりさせたいからね。流石にあれだけの事を言われるとＡクラスに試召戦争を仕掛けると言う人間も出てきてるから」

優子は和真の説明に眉間にしわを寄せ、和真は優子がイラついている事に気づいているようで困ったように笑いながら言う。

「あたしはＣクラスには行ってないわ。信じてくれると助かるんだけど」

「ああ。その言葉が貰えれば俺は良いんだよ。不快な思いをさせてしまつてごめん」

「ええ。こちらこそ、ウチの弟が迷惑をかけたようでごめんなさい。帰ったら、きつく言っておくわ」

優子はこめかみに青筋を浮かべながら、Ｃクラスに言ったのは自分ではないと言うと和真は優子に不快な思いをさせた事を謝り、優子も秀吉がＣクラスにした事を謝り、

「いや、まあ、試召戦争での事だから、仕方ないよ。わざわざ、時間を割いてくれてありがとう」

「気にしないでよ。このお礼は結城君がバイト先でボクと優子に奢ってくれるんだから」

和真は試召戦争での事だから、優子が秀吉に何かをする事ではないと言い、愛子と優子に改めてお礼を言つと愛子はどうしても和真に奢らせたいようで笑顔で言つと、

「……あまり、無茶な注文は止めてくれよ」

「それくらいの常識はあるよ」

和真はため息を吐くと愛子は笑顔のまま頷く。

第31問

「と言う事でAクラスとの試召戦争は回避した」

和真、友香、清美は教室に戻ると優子からCクラスを挑発したのは自分ではないと言う言質を取った事を話すとクラスメート達は安堵のため息を漏らす。

「それで、結城君、私達が次に起こす行動は？」

「……少し落ち着けよ。取りあえず、現状で補給試験を受けた場合に振り分け試験より、点数が取れる自信がある奴は何人いる？」

「いや、テストは水物だからわからん」

友香は和真に次の行動を示せと言うと和真はため息を吐きながら、クラスメート達に補給試験を受けた時の自信を聞くとトオルはどうなるかわからないと答え、多くのクラスメート達は頷くと、

「和、そんな事を聞いてどうするんだ？」

「いや、今はFクラスとBクラスの試召戦争中だから自習時間だろ。その間に俺達は自習をしていても点数は変わらない。このまま振り分け試験のまま戦うか、どこかで補給試験を受けて試召戦争に臨むかってところだ」

一心は和真の質問の意味がわからなく手をあげると和真は今の点数で戦えるか疑問のようである。

『ちょっと待てよ。ただかFクラス相手だろ。補給試験をする意味なんてないだろ?』

「まだ、Fクラスと戦うとは決まっていなかった。俺達が戦うのはFクラスとBクラスの試召戦争が終わった時にBクラスの設備を持っているクラスと戦うって言うているんだ。Bクラスが居座っている場合は俺達より点数が高いはずだろ。回復試験をしている途中だとしても戦争に使った教科以外は俺達より上だ」

「……確かにそうね」

クラスメートの1人はFクラスに報復したため、F相手に必要などないと言うが和真はその言葉を斬り捨てるとBクラスと勝負する事を考えるように言う。和真の単純にBクラスの方が地力が上だと言うと友香は頷き、

「後はFクラスと戦うにしても」

「……姫路瑞希の存在か?」

「ああ。噂じゃ、腕輪を持っているらしい」

和真はFクラスと戦う場合にも注意しないといけない人間がいると言おうとすると平太は瑞希の名前を出し、和真は瑞希が腕輪を持っていると言うと教室はざわざわとし始める。

「後は、これは噂でしかないんだけどな。Fクラスには『寡黙な性職者』がいるらしい」

「ム、ムツツリーニだと!? まさか、本当に存在していたのか!

？」

和真はFクラスには『寡黙なる性職者』と呼ばれている生徒がいる
と言うとトオルはその名前に何かあるのか驚きの声を上げ、

『だ、代表、Fクラスとは戦うのは避けるべきだ。いや、俺はFクラスとの同盟を望む！！』

『そうだ。俺達の幸せのためにFクラスとは同盟するべきだ！！』

「……」

「な、何？ 結城君、そのムツツリー二つて何なの？」

男子生徒達はFクラスと同盟するように言い始め、和真は頭が痛く
なってきたようで頭を押さえ、友香は男子生徒の盛り上がりになが
あつたのかと和真に聞くと、

「……学内に盗撮カメラや盗聴器を設置して、盗撮した写真を売り
さばいている問題児。噂じゃ、保険体育の成績は担当教師に並ぶと
言う」

「カズ、あんた、写真とか買ってないよね？」

「ないよ」

和真は自分の知っている情報を話すと清美はジト目で和真を疑うが
和真はため息を吐いて否定する。

第31問（後書き）

どうも、作者です。

感想の話です。今まで、感想の返信は更新時に行っていたのですが感想を読んだときに変更させていただきました。ご了承ください。

第32問

「これだから、良い男は」

「和、お前、それでも男か!!」

和真の写真を買っていないと言う一言にトオルと一心は和真を敵と判断し、

『そうだ。それでいて、洋子先生と同棲だと、許せん!!』

『そうだ。俺達は写真でしか眺める事しかできない。洋子せ!?!』

男子生徒が和真と洋子と一緒に暮らしている事を非難し始め、1人の男子生徒が洋子の写真と言った瞬間、教室に大きな音が響き、

「カ、カズ?」

「結城君」

その音は和真の右腕が黒板を勢いよく叩いた音であり、友香と清美が何があつたかわからずに和真の名前を呼ぶと、

「……お前ら、人の姉さんをなんだと思ってるんだ?」

「ま、不味い。和がブチ切れるぞ。誰だよ。洋子先生の写真の事を話した奴」

和真の額にはくつきりと青筋が浮かんでおり、平太は和真が何にこ

立腹なのか理解したようで顔を引きつらせる。

『な、何だよ』

「……お前らが持っている姉さんの写真を俺の前に持ってこい」

「カズ、写真、集めてどうするつもり？」

男子生徒達は和真の様子に気落とされたようで声を震わせながら聞くと和真は洋子の写真を回収すると言い始め、清美は和真が集めた写真をどうするか予想は付いているようだが和真に聞くと、

「燃やす」

『ふ、ふざけるな。お前に何の権利があつて！？』

和真は一言だけ燃やすと言うが本気なようで目は笑っておらず、男子生徒の1人は洋子のファンなのかそんな事はさせないと言おうとするが、

「……止めておけ。こうなつた和は手が付けられん。死にたくなかつたら素直に従え」

「……最強のシスコンだからな」

トオルと一心は男子生徒の肩を叩き、平太と清美が頷く姿に教壇にいる和真の元に数名の男子生徒が泣く泣く洋子の写真を持って行き、

「あ、あの。山下さん、結城君はどうしたの？」

「……見ての通り、カズはシスコンだから、洋子先生に近づく男には敵意の視線を向けるもう行きすぎたくらいにね」

「山下、おかしい事を言うな。俺は姉さんに相応しい男性^{ひと}が見極める義務があるんだ」

友香は和真の変化に顔を引きつらせて聞くと清美は苦笑いを浮かべて和真はシスコンだと言うと和真は表情を変える事なく、当然の事だと言い切り、

「今更だけど、小舅だな」

「ホントよ。まあ、当面のカズの敵は現国の寺井先生だけだね」

「嘘！？ 寺井先生って、高橋先生の事が好きなの？」

一心は和真の言葉にため息を吐くと清美は苦笑いを浮かべながら、洋子に密かに憧れていると言う噂の現代文の担当教師である寺井教諭の名前をあげると友香は驚きの声を上げる。

「まあ、洋子先生もカズと一緒に鈍いから、気づいてないだろうけどね。しかし、本当に姉弟そろって鈍いって言うのはあるんだね」

「……と言うか、従姉弟よね。それにあの姿を見て、結城君を好きって言う人いるの？」

「うーん。難しいところかな？ でも、恋愛感情あるなしかは微妙なんだけど、カズの周りには女の影が多い」

清美は友香の驚きの声に苦笑いを浮かべたまま、和真と洋子は鈍い

と言うと友香は和真の変わりようにため息を吐くと清美は和真の周辺には女の子が多いと言うと、

「山下、おかしい事を言うな」

「はいはい。それより、カズ、続き」

「ああ」

和真は洋子の写真を集め終えた事で冷静になったようで平常時に戻り。清美は和真の言葉に空返事をする和真に説明に戻るよう言い、和真は頷く。

第33問

「補給試験をしないと悪いけど、各人、自分の振り分け試験の各教科の点数を記入して提出して欲しい。それでどの教科で戦うかを考えるから、それで何人かまとめるのを手伝って欲しい」

「それって必要あるの？」

和真はクラスメート全員にテストの点数を教えて欲しいと言うと友香は首を傾げるが、

「今朝、話しただろ。今朝はAクラス1人なら俺達は何人で当たらないといけないかと言う話をしたがBクラス相手でも一緒だ。上位クラスなんだ。1対1じゃ、分が悪いだろ。後はさっきの土屋の話じゃないが、ウチのクラスには1教科でもAクラスと対等に戦える人間はいないかが知りたい」

「なるほど、カズの物理みたいなものね」

和真はBクラスと戦う上で有利な状況に落ち込むために各人の得意教科、不得意教科を知っておきたい事だと言うと清美は和真が昨日の回復試験で桁外れの点数をからかうように言うと、

「結城君って物理が得意なの？」

「得意と言つか……これ？」

友香は和真が物理を得意と聞いて感心したように聞くと一心が和真の机を漁り、西村教諭から返却された物理の答案をクラスメートに

見せる。

「な、何よ。これ!？」

「……一心、余計な事をするな」

友香が和真の物理の点数に驚きの声をあげると友香の言葉を皮切りにクラスメート達から驚きの声上がり始め、和真は一心の行動にため息を吐くが、

「俺達の点数は知れ渡るのにお前の点数が知れないのは卑怯だろ?」

「それもそうだな」

一心は苦笑いを浮かべながら和真の点数もクラスメート達には知る権利があると言うとトオルは頷くと、

「ちょ、ちよつと、結城君、何で、あなた、物理がこんな点数なのにCクラスにいるのよ!？」

「待て、代表様、これにはいろいろとわけがあるんだ。とりあえずは落ち着いてくれ」

友香はCクラスで400点オーバーは見られないと思っていたようで和真に勢いよくつかみかかると和真はため息を吐いて友香に落ち着くように言う。

「代表、簡単な理由よ。だってカズだから」

「山下さん、だってってそんな理由で400点なんて、取れるわけがないでしょ!!」

清美は友香の慌てように苦笑いを浮かべるが友香は清美の落ち着きようが理解できないようであるが、

「代表、よく考える。洋子先生の担当教科はなんだ？」

「高橋先生の担当教科？ 物理よ。それがどうしたの？ …… 結城君、そんな理由なの？」

平太は苦笑いを浮かべながら洋子の担当教科は何か聞くと友香は少し考えた後、何かが繋がったようで和真を見てため息を吐くと、

「最強のシスコンだからな」

「……わけのわからない事を言うな」

トオルは和真をシスコンだと言い切り、和真はその言葉にため息を吐き、

「俺がこの点数を取ったのは高橋先生と西村先生を通じて学園長先生から学園の手伝いをするためにAクラス並みの点数を取って欲しいと頼まれたからだ。そのために現在は授業後に1教科ずつ回復試験を受けさせられてるからだ。本来なら単体教科は120〜150点くらいだよ。物理は今回はヤマが当たっただけだ。今日は現代文なんだけど」

「120点、取れるか微妙よね？」

「……言っな」

今の和真が置かれている状況を話すと清美は先ほどから和真の勉強を見ているためか苦笑いを浮かべ、和真も現代文は点数が下がりそうだとわかっているように肩を落とす。

第33問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

今回は『バカとテストと勤勉少年』で投稿キャラを募集したいと思います。

理由としてはCクラスだと主要キャラがないから現在レギュラー化しているトオル、一心、平太、清美と和真と友香だけですから、書くのになんか面白みがないかな？と思いました。ぶっちゃけ、気紛れです。

それで投稿キャラを募集しようと思ってます。

募集人数は2人。できれば男女1人ずつにしたいと思っています。

募集事項

名前

性別

所属クラス：Cクラス。

得意教科：1教科or2教科（200～300点）

苦手教科：得意教科の数と合わせてください。（1教科200点だとしたら苦手教科は1教科で50点くらい、1教科300点だとしたら苦手教科は3教科で50点くらいと平均的に）

総合得点

1451～1586点（話の中でありましたが和真は友香とわずかな点数差で代表ではありません。総合得点を決める時は下の和真の

点数より低く設定させていただきます)

総合得点や得意、苦手教科はスタート時です。話が進むにつれて成長すると考えて総合得点だけでも良いです。その時は得意教科は伸ばしたい教科とを考えて教科のみの記入でも構いません。Cクラスなので得意教科を特化型にしなければ全教科平均的と考えさせていただきます。

備考(性格等)

召喚獣装備(武器、防具簡単なもので良いです)

禁止事項

本当はAクラスの成績。

原作キャラの兄弟。

観察処分者。

例

名前 ユウキカズマ 結城和真

性別 男

所属クラス：C

得意教科：英語、家庭科(140→160点)、成長後：物理(437点)、英語(289点)、家庭科(345点)

苦手教科：現代文、古文(100→120点)

総合得点：1587点、成長後：2678点

備考：中学3年の冬に両親を事故で亡くし、就職をしようと考えていたが従姉の『高橋洋子』の薦めで学費の安く洋子が勤務している文月学園に進学する事になる。現在は両親の残した家に洋子と2人暮らし、学年主任の洋子を補佐するために家事全般は1人でこなし、学園を終えるとバイト三昧と言う勤労少年。成績はそれなりだが、自分の置かれている立場を考えているため、他の生徒達より、学生と言つものを冷めた目で見ている事も多い。自称『シスコン(従姉)

▯

召喚獣装備

武器：大剣

防具：白いプレートアーマー

割と面倒な募集事項ですが、興味が湧いたら投稿してみてください。
募集期間は面白そうなキャラクターを選んだ時点で終了させていただきます。

もし、投稿キャラ同士で恋愛イベントが起きても怒らないでください。

投稿キャラは感想板、作者のメッセージボックス、活動報告に願います。

また、投稿キャラは和真達と一緒に成長させて行く予定です。その過程で投稿者さんに作者から連絡させていただく事もあるかも知れません。

第34問

「へえ、結城君って文系苦手なの？」

「苦手ってよりは必要性を感じない。言葉なんて伝われば良い」

友香は所々に見える和真の弱点に楽しそうに笑うと和真は文系を勉強する意味がわからないとため息を吐くと、

「そう言えば、和って実用的な教科の方が点数良いよな。英語はできるよな」

「ああ、英語は使うからな。単語の意味がわかれば話せるし、後は家庭科」

「……男の子なの？」

一心は相変わらず、現代文などやってられるかと言っている和真を見て苦笑いを浮かべると和真は英語と家庭科はそれなりにできると言うが友香は男の和真が家庭科ができると聞いて眉間にしわを寄せるが、

「代表、カズは料理も掃除も完璧よ。喫茶店でバイトもしてるってのもあるけど、家の家事もしてるし、もはや、そのレベルは『主夫』よ」

「……誉められてはいないよな？」

「でしょうね」

清美は和真の家事能力を認めていると言うがその言葉に和真はため息を吐き、友香は苦笑いを浮かべる。

「まあ、とりあえずはさつき言った通り、悪いんだけど振り分け試験の点数を教えてくれ。それで何とか試召戦争に勝てる算段を付ける。たぶん、相手はBクラスになると思うから、今回、Fクラスは数学や物理と言った理数系で仕掛けているみたいだしな。理数系が得意な人間を中心に攻めると考えていて欲しい」

「理数系なら和がいるから、余裕だな」

和真は先ほど洋子の手伝いで廊下でFクラスとBクラスの試召戦争を覗いたため、点数が削れているはずの教科を中心に攻めようと言うとトオルは和真が居れば余裕だと言うと、

「いや、俺は試召戦争で点数を減らす気はないから」

「……結城君、ここまでクラスを煽っておいてそう言う事を言うの？」

和真は作戦を立てても試召戦争に参加するつもりはないと言い切り、友香は和真の態度にため息を吐くが、

「だから、ちゃんと道筋を立てただろ。そこから先は知らない。それに俺は最初に試召戦争に参加しないって言っただろ。せつかくあげた点数をどうして削らないといけないんだ。400点だぞ。250点も稼いだんだ。俺は次にこの点数を取れる自信はない」

「ここまで言い切ると清々しいな」

「そうだな。俺達から見れば最強の矛だけど、和真から見たら誰にも奪われたくない宝物だからな」

和真は物理の点数にしがみつきたいと言い、和真の様子に一心と平太は苦笑いを浮かべる。

「はいはい。とりあえずは物理と数学中心に攻めるって考えてその2教科が得意な人間は今の自習時間に苦手な人間に教えてあげて、ここから1夜付けでも良いから試召戦争が開始された時点で2教科が得意な人間がカズの指揮で戦う。その間に苦手な人間はその2教科で回復試験を行う事。教科を2教科に絞る事で効率的にBクラスを攻める事」

「……やっぱり、山下がこのクラスの支配者だろ」

清美は自習時間中にやれる事をやろうと言うとトオルは清美の様子に苦笑いを浮かべ、

「トオル、おかしい事を言わない。カズも遊んでないで、物理が苦手な人間に教える。今はカズ以上に物理をできる人間はいないんだからね。現代文の勉強に時間を割くより、こっちの方が物理の点数を守れるでしょ」

「ああ」

「それじゃあ、今、山下さんが言った通りにまとまって自習をして」

清美はトオルの言葉にため息を吐くと和真に効率が良い方を選べと言い、和真が頷くと友香は2人の様子に苦笑いを浮かべながらクラ

スマートに指示を出す。

第34問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

相変わらず、やる気のない主人公です。

和真「しがみつくだろ。完全なまぐれだぞ。それを削って回復試験を受けていつもの点数になったらどうするつもりだ？」

まあ、確かにそうかも知れませんが。（苦笑）

投稿キャラの話

多くの投稿をいただきありがとうございます。現在は選考中でしょうか？

和真「何を基準に選ぶつもりだ？」

そうですね。今更言うのもなんですけど、キャラクターの背景が見えるのは選びやすいですね。今いるメンバーと友人とかクラスがCですし、Fクラスにどういう感情があるかとかもあるとキャラクターがつかみやすいです。

和真「まあ、後は男女1ずつを選ぶから、1人ずつより、1人に絞って書いてくれた方が選びやすいな」

そうですね。2人採用はしたくないので投稿キャラ2人の関係とか

もうくつつけてくれと言われるのは俺が書かなくてもよくねえ？
とか思いますから、恋愛系に持つて行くなら別の投稿者さんのキャラをくつつけた方が楽しい。

和真「まあ、そうだろうな」

作者の考えはこんな感じです。

メールボックスに連絡をくれれば個人的にこうした方がいいキャラになりませんか？って話もしますがダメだしにもなるかも知れませんが、んから傷ついても良い人だけそつとメールをください。

和真「傷つけること前提かい」

まあ、他の作品を読んでいただければわかると思いますが作者、ドS何で。

後はたぶん、出るのはBクラスとの試召戦争が終わった後、清涼祭からだと思いますが『これ』ってキャラが出てきたら即採用かも知れませんが。

和真「投稿はまだまだ、募集しています」

後は活動報告にバカとテストと召喚獣二次創作の原案を書きました。
今回の主人公はDクラスの女の子です。

第35問

「……決まったみたいね」

「ああ、相手はやっぱりBクラスか」

FクラスとBクラスの試召戦争が終結し、BクラスはFクラスからの条件を飲んで設備を守ったと噂が休み時間に流れ始めるなか、

「……カズ、生きてる？」

「和は本当に現代文ダメみたいだな」

和真は西村教諭に自習の時間だしせっかくだからこの時間に回復試験を受けるように言われて現代文の試験を受けてきたのだけどやらできなかったように魂が抜けかけており、清美と一心は白くなっている和真を指で突き反応があるか確認するが、

「……山下さん、結城君は大丈夫なの？」

「さあ？」

和真に反応はなく、友香は頭を押さえてため息を吐きながら清美に聞くと清美は苦笑いを浮かべながらも、

「山下、一心、突いてやるなよ」

清美と一心は和真を突くのを止めずにいるためトオルはため息を吐く。

「それで、結城君がこの状態だと次はどうしたら良いのかしら？」

「うーん。一先ずはFクラスがBクラスにどんな条件を出したかだよね」

友香は和真の様子にため息を吐きながら、次をどうするかと言い清美が苦笑いを浮かべた時、

「……はい」

和真の携帯電話がなり、和真は白くなった状態ではあるが電話に出ると、

「やつほー、結城君、結城君の予想通り、Bクラスの代表の根本くんがAクラスに試召戦争の準備ができてるって言いに来たよ」

「……そうか。なあ、工藤、どうして笑いをこらえてるんだ？」

電話の相手は愛子であり、愛子は和真に頼まれていたようでBクラス代表の『根本恭二』がAクラスに来たと言うが彼女は必死に笑いかみ殺してあり、和真は愛子に笑いかみ殺している理由を聞き、

「えーとね。今からメールを送るからそれで確認して」

「ああ……ぶほっ!？」

愛子は楽しそうに和真にメールを出すと言い、電話を切ると直ぐに愛子から写真が添付されているメールが送られてきてメールを確認した和真は添付されてきた写真があまりに笑劇的だったようで見

瞬間に吹き出し、

「和、何が送られてき……なんだ、これ！？ き、きたねえ」

「こ、これは」

和真の反応に一心、トオル、平太は和真の携帯電話を覗き込むと和真と同様に笑い始める。

「何があつたの？ ……代表は見ない方が良いかな」

「何？ そんな事を言われると見たくなるわよ……」

清美は4人の反応に和真の携帯電話を覗くと携帯電話の画面には恭二の女装写真が映っており、清美は笑いをこらえながらも友香に見ない方が良いと言うがその言葉は友香の興味を引き、友香も和真の携帯電話を覗き込むと彼氏の女装姿に友香は固まり、

「えーと、今度は代表が白くなつたぞ」

「まあ、こんなものを見せられればな」

平太は友香をかわいそうな人を見る目で言うと平太は仕方ないため息を吐き、

「さてと、それじゃあ、Bクラスは試召戦争の準備ができているらしいから、明日の朝から試召戦争に付き合って貰いますか？」

「そつだな。宣戦布告の使者はどうするんだ？」

「まあ、俺が行くんだろっな」

和真は愛子から教えて貰った情報を有効に使いたいようでBクラスへ宣戦布告をしに行くと立ち上がると、

「……結城君、私も行くわ」

「だ、代表様？　だ、誰か他にも付いてきてくれ」

「和、頑張れよ」

「いつてらっしゃい」

友香は笑顔で和真と一緒にBクラスに行くと言うがその目は笑っておらず、和真は背中に冷たい汗が伝い始め、友香と2人でBクラスに行くのは危険だと判断して助けを求めるがクラスメート達は良い笑顔で和真と友香を見送り、

「う、裏切り者！！??」

「……結城君、行くわよ」

友香は和真を引きずってBクラスの教室に歩いて行き、和真の声が廊下に響く。

第36問

「……失礼するわ」

「……お邪魔します」

友香に引きずられたまま、和真がBクラスの教室の前に着くと友香は勢いよく教室のドアを開け、和真は今の状況にため息を吐きながら友香の後ろからBクラスの教室に入ると、

「ゆ、友香!？」

「……」

恭二は女装させられたままFクラスの『土屋康太』に写真を撮られており、友香はその姿に眉間にしわを寄せ、額にはびくびくと青筋が浮かんでいる。

「あ、あのな。代表、落ち着けよ」

「……落ち着く? 結城君は何を言っているのかしら」

和真は目の前に映る光景に顔を引きつらせながらも友香に近づくのは恐ろしいのか友香から手が届かない距離を取り、友香に声をかけるが友香の声には周りを怯ませる怒気が含まれており、

「結城君、私達がここに来た理由」

「い。イエッサー、ボス!？」

友香は和真にBクラスに宣戦布告をするように言つと和真は友香の勢いに敬礼し、

「Cクラスの結城和真と代表の……」

「小山友香よ」

「CクラスはBクラスに試召戦争を仕掛ける。開戦は明日の朝からだ」

和真はBクラスに試召戦争の宣戦布告をするとBクラスはざわつき始め、

「ゆ、友香、いきなり何を言うんだ？」

恭二は慌てて友香に声をかけるが、

「恭二、あなたがそんな趣味を持っているなんて知らなかったわ」

「ま、待ってくれ。友香！？ こ、これは俺の趣味なんかじゃない……！」

友香は笑顔で恭二の服装の事を言つと恭二は誤解だと叫ぶ。

「恭二、私は女装趣味の変態と付き合っていられないわ。別れましよう……結城君、帰るわよ」

「お、おう」

しかし、友香は恭二の言葉など聞きいれるつもりはなく、直ぐに振り返ると和真に教室に帰ると言い歩きだし、和真は今の友香には逆らう事はできないようで直ぐに頷くと彼女の後を追いかけて行くと、

「ゆ、友香、待ってくれ！！　こ、これは誤解なんだ！！」

後ろからは恭二の声が響くが友香が振り返る事はなく、友香のお怒りの様子にBクラスの生徒達も下位クラスの宣戦布告の使者に制裁を加えるような事は出来ずに立ちつくしている。

「……根本、日頃の行いが帰ってきたんだな」

「結城君、その名前、私の前で出さないでくれる？」

和真は流石に恭二が哀れに思えてきたようで小さく声を漏らす。その言葉に友香の顔はさらに不機嫌になるが、

「だとしても良いのか？　あれはFクラスがさせた事だろ。あんな形で別れても」

「良いのよ。それに結城君が言ってた通り、恭二は卑怯だし、クラスメートを駒としか扱わなかったんだよ。だから、クラスメート達も恭二が生き恥をさらすような事になっても誰も助けに入らなかった……恭二と居れば、私もそうなりかねないから、うちのクラスは代表である私が暴走してもちゃんと止めてくれる人もいたしね」

「……まあ、俺の場合は面倒な試召戦争をしなくなっただけなんだけどな」

和真はそれでも友香に別れなくても良いんじゃないかと言うと友香

は恭二が女装をしていた事以外にも別れたと思った要因はなると言つと自分が代表と言つ立場と思ひ知らせてくれたのは和真だと笑顔を見せると、和真は友香の笑顔に少しだけ照れたようであつた彼女から視線を逸らすと指で自分の首筋を掻き、

「それじゃあ、宣戦布告は終わったつて言つて解散しようぜ。俺はこれから……」

「ボクと優子とデートだからね。」

バイトもあるため友香にクラスに戻つて解散しようと言おうとする
と愛子が自分の腕を和真の腕にからめて和真に声をかける。

第36問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

根本、振られる。

和真「さすがに酷くないか？」

まあ、友香にも友香で考える事があつたと言う事で……それより、和真はモテますね。

和真「いや、意味がわからないからな。工藤は俺をからかって遊んでるだけだし」

アンケートも投票がない状態に進んでいます。投稿キャラ募集をとにもヒロイン決定アンケートも引き続き募集していますのでよろしくお願いします。

和真「そう言えば投稿キャラって使いたいのは出てきてるのか？」

そうですね。女の子の方は今の状態ならこの子かな？　と言うキャラがいますが名前の発表は控えます。『もう発表しろや』って声があれば名前出して使っちゃうかも知れません。男の子はまだ決まっていなです。

和真「そうか」

番宣？

活動報告にバカとテストと召喚獣二次創作の原案を書きました。 ㊦

僕と私の共同生活？』と言う題名です。

今回の主人公は明久の従妹の女の子です。父親の海外赴任により、明久とともに暮らすように言われた女の子は明久に襲われてしまうのか？

和真「……煽るな」

第37問

「……工藤、ひつつくな」

「えー、その反応はないんじゃない？」

和真は愛子の行動にため息を吐くが愛子は不満そうに口を尖らせると和真の腕に抱きついて腕に力を込め、

「他に反応はないのかな？」

「……」

愛子は和真を挑発するように言うのと和真は自分の腕に当たる愛子の胸の感触に集中しようとするが、

「……愛子、止めなさい」

「結城君も鼻の下を伸ばさない」

友香と優子がため息を吐きながら、愛子を和真の腕から引き離し、

「……」

「……結城君、残念そうな顔をしない」

和真はもったいない事をしたと言うのが表情に出て、友香はもう一度、ため息を吐くと、

「カズ、代表、戻ってきたなら遊んでないで早く状況を説明してよ……修羅場？」

清美は廊下から聞こえる和真と友香の声が聞こえたため、廊下に顔を出すと和真の周りに3人の女生徒がいるのを見て首をかしげた後、

「カズが修羅……」

「……違うからな」

教室に戻って和真を落としいれるような発言をしようとするのを和真は清美の首をつかんでため息を吐くと、

「工藤、木下さん、ちょっと待っててくれるか？ 試召戦争が明日の朝からだって伝えてクラスを解散させるから」

「ええ」

和真は愛子と優子に謝り、友香と教室に入っていく。

「和、代表、山下はどうしたんだ？」

「みんな、聞いてよ。さっき廊下で……」

「山下さん、話が進まないから黙っててくれるかしら」

一心は和真に首を捕まれて教室に戻ってきた清美の様子に首を傾げると清美は廊下で和真を囲んで女の戦いが繰り広げられようとしていたと話を誇張して言おうとするが友香は清美を笑顔で静止すると、

「……代表、目が笑ってないな」

「……ああ」

トオルと平太が友香の様子に顔を引きつらせ、クラスメート達は同意見のようで頷き、

「結城君、Bクラスでの事を話して」

「ああ」

友香は和真に試召戦争の開始時間を話すように言うが、

「……良いか。よく聞け、代表様がクズを振った」

和真にとっては試召戦争の開始時間より、友香が恭二を振った事の方が重要のようで友香が恭二と別れたと言う。

「な、何だと!?!」

『代表、フリーだと!?! 今がチャンスか? 傷心中ならどうにかなるか?』

男子生徒達は友香がフリーになったという事実歓喜の声を上げ始め、

「代表様、人気あつたんだな。まあ、確かに可愛いからな」

「まあ、多少、性格はきついが、気の強い女の子が好きなのはいるからな」

「……結城君、他に言う事はないのかしら？」

和真は歓喜の声を上げているクラスメートの様子を見て頷くと一心は和真の言葉に同意するが友香は額に青筋を浮かべて和真の肩をつかむと、

「いや、やっぱり全員が知ってた方が戦いやすいだろ」

「確実に試召戦争に巻き込まれた腹いせね」

「だろうな」

和真は笑顔で事実を知っていた方がクラスメート達はBクラスと戦いやすいと言うが清美とトオルは和真が友香に仕返しをしているようにしか見えないと言い、

「と言う事で、我らが代表様は現在フリーだ。試召戦争は明日の朝から、良いところを見せて好印象を与えるんだ！！」

和真は友香を餌として男子生徒達の前にぶら下げてみると男子生徒のやる気はうなぎ上りに上がって行き、

「……あれだよな。和ってやる時には手段とか選ばないよな」

「……まあ、戦略を考える人間としては良いんじゃない」

「よ、良くないわよ!？」

トオルと清美は盛り上がっている男子生徒の様子に苦笑いを浮かべ

ると友香はこの状況に付いて行けないように顔を引きつらせると、

「それじゃあ、各自解散、明日はよろしくな。そうだな。せっかくだから、これも使うか？」

和真は気にする事無く教室を出て行こうとするが何か考え付いたようにCクラス以外の自分の他の学年を含めた知り合いに根本の女装写真を送信し、

「お、鬼だな」

「そうか？ あいつのせいで姉さんや西村先生はBクラスの生徒でFクラスの教室に設備破壊に入った生徒の停学にするとか仕事が増えてるんだ。制裁は必要だ」

「……違ったわ。シスコンね」

「……それでひとまとめにして良いのかしら」

トオルは和真の行動に顔を引きつらせるが和真は全て恭二が悪いと言いつき、友香と清美は顔を引きつらせながら和真の背中を見送る。

第37問（後書き）

どうも、作者です。

和真「今日はなんだ？」

えーと、アンケートに投票があつたから途中経過の報告です。

1位 宏美 5票

2位 洋子、愛子 3票

4位 友香、葵 2票

6位 美春、優子 1票

となります。

和真「何で、工藤が追い上げてるんだ？」

愛子のファンって結構いると思うんですよ。普通に可愛いですし、今回はFクラスとつながりも薄いから康太との関わりも薄くなるでしょうしね。

和真「そんなものか？」

たぶん、アンケートは試召戦争編（第1巻部）が終わるまで受け付けています。投票お願いしますけど……さすがに話を作るのは無理そうだな。と思った場合は次点のヒロインで話を書かせていただきます。

和真「ご了承ください」

第38問

「お待たせ」

「遅いよ」

「別にそこまで待ってないわよ。それにあたしはどっちかと言うと奢って貰う立場じゃない気がするし」

和真が廊下に出て愛子と優子に声をかけると愛子は待ちくたびれたと言いたげに言うが優子は元々、秀吉がCクラスに来た事が原因のため、奢って貰うのは悪いと言うが、

「まあ、木下さんも気にしないで良いよ。それにかわいい女の子と知り合いになれるなら喜んでクレープくらい奢らせていただきます」

「そうそう。優子も気にしない。それに結城君の事だから、他にも考えがありそうだしね」

和真は優子の様子に冗談交じりでそれくらいは何ともないと言うと愛子は和真が何かを企んでいると言った時、

「結城」

「はい。西村先生、どうかしましたか？」

西村教諭が和真を呼ぶ。

「ああ、Bクラスの室外機の件なんだが……工藤に木下？」

「えーと、西村先生、ぼくと優子は席を外した方が良いですか？」

西村教諭は破損しているＢクラスの室外機の話をしよとするが愛子と優子がいる事に首を傾げ、愛子は西村教諭に自分達は聞かない方が良い話かと聞くと、

「いや、別にそう言うわけではない。結城、回復試験の時に話した続きなんだが」

「えーと、今日は高橋先生と西村先生がＢクラスの停学者の件で忙しくなったから室外機の修理と言うか故障個所の確認は明日の放課後になるって話ですよね？」

西村教諭は愛子と優子が居てもかまわないと言うと和真に話の内容を確認し、和真は何かあったのかと思いながら現代文の回復試験が終わった時に西村教諭から言われた事を思い出しながら言うが何か嫌な予感がしているようで顔を引きつらせる。

「……すまん。業者が明日の午前中にしかこれないんだ。それで明日の朝にいつもより早く登校してきてくれ」

「……了解しました」

西村教諭は申し訳なさそうに和真に頭を下げると和真は文句を西村教諭に言うわけにもいかなかったため、肩を落としながら頷き、

「すまん。破損個所が外部からではなく、中の配線にも言っているように。俺では何もできなかったんだ」

「……良いですよ。何かあった時のための資格ですから、できる限りの事はします」

西村教諭はもう1度、和真に謝ると和真は力なく笑うと、

「それじゃあ、俺は帰ります」

「ああ、すまないな」

「西村先生、さようなら」

和真、愛子、優子の3人は西村教諭に頭を下げ歩き出す。

「結城君、西村先生の話だけど……」

「優子、気にしちゃダメだよ。結城君は巻き込まれ体質だから」

「……その一言でまとめないでくれ。これでもかなり大変なんだから」

優子が校門を出たあたりで先ほど西村教諭が和真にしていた話が気になるようで和真に聞こうとすると愛子は優子が気にする事じゃないと言っが和真は肩を落として言っつと、

「えーと、結城君って何をしてるの？」

「……木下さん、質問が大雑把過ぎるけど、えーと、木下さんって、俺と高橋先生が従姉弟だって事は知ってる？」

優子は和真の様子に苦笑いを浮かべながら改めて、和真が何をして

いるのかと聞き、和真はどこから話し始めるのが1番説明しやすいかと考えて自分と洋子の関係を知っているかと聞く。

第38問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

とりあえず、Fクラスのせいで和真は明日の朝は早くから登校です。

和真「……何で、俺が」

まあ、和真が瑞希のラブレターが盗まれるイベントを潰したから壁に穴が空いてないんでまだ楽だと思ってください。

和真「だけど、朝早くからくると……船越先生が出てこないか？」

……ナニヲイツテルンデスカ。ソナナワケナイジャナイデスカ。

和真「おい！？ 何で片言なんだ！！」

さてとアンケートですが、

1位	宏美、愛子	5票
3位	友香	4票
4位	洋子、優子	3票
6位	美春、葵	2票

愛子と友香の追い上げ中です。さて、どうなるんでしょうか？

第39問

「そうなの？」

「ああ、それで今は高橋先生と一緒に暮らしてるんだけど、仕事が忙しいせいか家でも仕事をしてさ。家での仕事で手伝える事なんてないだろ。そんな時に学校で書類をひっくり返してる高橋先生がいて、書類を拾って生徒指導室の西村先生まで運んだら、今度は西村先生から職員室に書類を届けてくれと言われて……気が付いたら、何かある度に呼び出される」

優子は初めて和真と洋子が従兄妹だと知ったようで驚いたような表情をすると和真は少しだけ後悔しているのか何でここまで学園の手伝いに駆り出されるようになったのか後悔しているようなため息を吐くと、

「な、なんか観察処分者みたいね」

「……それは言わないでくれるかい。吉井明久^{ほんもの}を殺したくなるから」

「ええ、わかったわ」

優子は教師の雑用を手伝っている和真の事を聞いて『観察処分者みたい』と言うと和真の目つきは鋭くなり、優子は和真の変わりように驚いたようで顔を引きつらせるが、

「ぼくと知り合ったのは水泳部の顧問の先生に結城君が捕まってプールのシャワーの水漏れを直してた時だよ」

「……そんなことまでしてるの？」

愛子は空気を読まずに和真と知り合った時の話をすると優子は和真の仕事内容に苦笑いを浮かべる。

「ああ、まあ、元々、手先は器用だし、Aクラスの2人に言う事じやないと思うんだけど個人的な考えで学校の勉強は必要ないと思っているから、何かあった時に使える資格を取ろうと思ってそっちの勉強をしているうちにね。資格試験を受けに行くと実技とか凄い人がいるし、コツを聞いたりもしてる」

「……あたし達とは違う勉強の仕方ね」

和真は少し冷静になったようで苦笑いを浮かべて言う。優子は感心しているようではあるがそれ以外にも何か考える事があるようで頷き、

「まあ、後は……資格試験を受けるのって結構、金額がかかるんだよ。それで基本的に放課後はバイト三昧で……働いてるところを工藤に見つけた」

「だって、新作が出るのにお小遣いはピンチ、そこに人の良さそうな結城君が働いてるんだよ。まずは交渉してみる余地はあるですよ」

和真は自分がバイトしている理由には洋子に学費を返そうと思っている事もあるがそれを話して両親が亡くなっていると知られて『かわいそうな人』を見るような視線は受けたくないため、その部分を伏せてバイトをしている理由を話すと愛子は和真にたかきっかけになった時の事を話し、

「……愛子、少しは遠慮したら」

「……木下さん、もっと言ってやってくれ」

優子は愛子に捕まった時の事を思い浮かべたようであめ息を吐いて愛子に遠慮するように言っていると和真は優子を応援すると、

「優子、気にしないでいいんだよ。結城君はこう言ってるけど、ほか以外にもソフトテニス部の中林さんとかにも捕まってるから」

「……それこそ、遠慮してあげなさいよ」

愛子は和真が宏美にも捕まっているから気にする必要はないと言うのが優子は学園では教師達に捕まり、それ以外にも宏美や愛子に捕まっている和真が哀れに思えてきたようであめ息を吐く。

第39問（後書き）

どうも、作者です。

アンケート

1位	愛子	6票
2位	友香	5票
3位	宏美、優子	4票
5位	洋子	3票
6位	美春、葵	2票
7位	清美	1票

愛子がトップに躍り出ましたが、愛子かあ。
（苦笑）
そして、宏美から清美への乗り換えが1人。

第40問

「それじゃあ、俺は着替えてくるから」

「うん」

和真達は和真のバイト先であり、清水美春の父親が経営している喫茶店『ラ・ペデイス』に着くと和真は他のバイトスタッフに愛子と優子を任せると着替えるために奥に入って行く。

「……結構、大きなお店ね」

「あれ？ 優子ってここにきた事ないの？ 結構、美味しいって有名だよ」

「そうなんだ……お、美味しそう」

優子はこの喫茶店にきた事がなかったようで喫茶店の内部をきよろきよろと見回していると愛子は優子の様子に苦笑いを浮かべると優子はテーブルに置いてあるメニューを開き、写真付きで見えるケーキやクレープを見て小さな声でつぶやくと、

「優子、美味しそうじゃないよ。どれも美味しいんだよ。季節限定の新作も結構出るし、だから、どうにかしないとおこづかいが足りなくなっちゃうんだよ」

「……それでも結城君にたかるのは違うでしょ」

愛子は和真にたかる理由は正当だと言うが優子は愛子の言い分は間

違っているため息を吐くが、

「優子、そうは言ってもね。食べれば、結城君にたかりなくなるが気持ちわかるよ」

「……工藤、頼むから木下さんまで、おかしな道に引き込まないでくれ」

愛子は優子も和真にたかりなくなると言った時、着替え終えた和真が2人の元に戻ってきてため息を吐く。

「あ、お帰り」

「……ウェイター服？」

愛子は和真の主張を無視すると優子は和真の姿に何かあるのか拳を強く握り締め、

「木下さん、どうかした？」

「な、何もないわよ!？」

和真は優子の様子に首を傾げると優子は慌てて首を振り、

「それで、何にする？」

「あれ？ 座るのバイトは？」

和真は空いている愛子の隣に座り、愛子は和真の行動に首を傾げるが、

「ああ、まだ混むまで時間があるしな。店長も混むまではゆっくり
していて良いって、それにAクラスの2人に聞いておいて欲しい事
もあるからね」

「そうなの？」

和真は苦笑いを浮かべて愛子と優子に話したい事があると言い、優
子は首を傾げる。

「いや、俺達CクラスがBクラスに試召戦争を仕掛ける事になった
だろ。たぶん、FクラスはBクラスとFクラスを天秤に掛けさせて
Fクラスとの試召戦争を選ばせる計画だったと思うから、それを俺
達が潰したから、それに乗る必要はないって事を教えておこうと思
ってね。後はもしかしたら、何か他の手を使って同じように条件を
持つてくる可能性もある」

「Fクラスがそんな事を考えていたって言うの？」

和真はこの次にFクラスが何かしてくる可能性があると言うと優子
は最低学力のクラスであるFクラスがそんな事を考えていると言う
事が信じられないようで眉間にしわを寄せるが、

「充分に考えられる事だよ。そうじゃなきゃ、FクラスとDクラス
の同盟もCクラスへの挑発もBクラスをAクラスに行かせる事もな
かったからね」

「確かにそうかも」

和真はFクラスには成績とは違う頭の使い方ができる人間がいると

言い、愛子はFクラスが仕掛けてきた事に苦笑いを浮かべると、

「それで、まだ代表様には話をしてないんだけど、1学期の間、CクラスとAクラスの正式な同盟を提案させて欲しい」

「同盟？ 今更？ それも今学期だけ？」

和真は優子と愛子に同盟を持ちかけ、優子は首を傾げる。

「ああ、基本的に現時点で俺達CクラスはAクラスには勝てないと思うっている」

「そんな事をはっきりと言っちゃうんだ」

和真はCクラスではAクラスに勝つ事はできないと言うと愛子は苦笑いを浮かべるが、

「まあね。うちには姫路さんのようにAクラスとともに戦える人間もどれか1つでもAクラスに届く人間もいない。木下さんや工藤の相手だとうちのクラスは3人で戦わないといけないし、策によってAクラスと戦えるのってFクラスだけなんだよ」

「……結城君は戦う方法を考え付きそうだけど」

和真はFクラスを評価はしているようで自分達にはない武器をFクラスは持っていると言うと優子は和真が自分達をはめる事を考えているのではないかと視線を鋭くする。

「俺は試召戦争はする気無いよ。就職希望だし、自分の点数を下げような事はしたくない」

「……相変わらず、やる気ないね」

和真は優子の視線に苦笑いを浮かべると愛子は和真の様子にため息を吐き、

「俺達がBクラスに勝てばFクラスは俺達を策に巻き込んでくる可能性もあるからね。CクラスがAクラスを狙っているとか偽情報を流したりね。同盟は秘密裏に進めてCクラスとAクラスしか知らないように学外でまとめる方が良いだろ」

「……確かにね。でも、結城君があたし達にそこまで協力する意図が見えないんだけど」

和真は同盟は他のクラスにはれない方が良くと言うと優子は和真の考えに納得する事もあるようで頷き、

「それは簡単だよ。結城くんはシスコンだから、高橋先生がAクラス以外の設備に行かせるわけにはいかないんだよ」

「……そう。一先ずは有益な提案だし、代表に話をしてみるわ」

愛子は和真がシスコンと言い、優子は眉間にしわを寄せたまま頷き、

「まあ、よろしく。それじゃあ、俺はバイトに戻るから」

「うん。そうそう、結城くん、ぼくはこれとこれ。優子は」

「それじゃあ、あたしはこれとこれ」

和真は混んできた店を見てバイトに戻ると言い、愛子と優子は2品ずつメニューを選び、

「……何で2品に増えてるんだ？」

和真はため息を吐くが愛子と優子に同盟をまとめるためと言い切られる。

第40問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

広がる和真のシスコンと言う噂。

和真「……広めるな」

まあ、事実ですしね。そして、和真が勝手に進めるCクラスとAクラスの同盟。

それも全部、洋子のため。（爆笑）

和真「まあ、一応は今学期にしたしな。クラスもAには届かないって認めてるんだ。害はないだろ」

そうかも知れませんが友香が怒りますよ。

和真「その時はその時」

投稿キャラの話。

一先ず、落ち着いたのかな？って感じです。

和真「きまったのか？」

悩みどころです。現在は女子生徒は2人にしぼってますが、このま

ま2人採用にしちゃう？って感じです。

男子生徒は今のままだと当確。

和真「ここからの追い上げキャラがいるかな」

そうですね。

アンケート

1位	愛子、友香	7票
3位	宏美	5票
4位	優子	4票
5位	洋子	3票
6位	美春、葵	2票
7位	清美	1票

友香が追い付きました。

最後に番宣です。

今まで他の作品で特別問題として書いてきた他の小説家さんとのコラボ小説を『繋ぐ絆と境界破壊』と言う題名で投稿しました。第1問に新作として和真を登場させましたのでご覧ください。

和真「よろしくお願いします」

第41問

(……これなら、業者を呼ばなくてもどうにかなるかな?)

和真は授業が始まる前にBクラスの室外機の破損状況を確認していると、

「どうだ? どうにかなりそうか?」

「ええ、適当に配線を切っただけみたいなんで、それを繋げばどうにかなると思いますけど……燃えなくて良かったですね」

西村教諭は和真に室外機の破損状況を聞き、和真は自分の見立てでは自分でも修理はできそうだと言いが、破損状況から最悪の状況にならなくて済んで良かったとため息を吐き、

「……そうだな。確かに最悪の場合はそう言う事も考えられたんだ」

「……室外機を壊して、平然としているバカがいる事が信じられませんか。下手したら大事故ですよ。それで誰か死んだら、責任とれるのかよ。大島先生もそんな状況で協力しないで欲しいですね」

西村教諭は頭を抑えると和真は試召戦争でFクラスが窓から侵入して勝利を収めたと聞いているようで設備を壊してまで勝利をつかもうとしたFクラスも設備を守るためにFクラスと同盟を組んだDクラスにも嫌悪感を抱いているようであり、最後にBクラス代表を倒した教科である保険体育の担当教師である『大島教諭』にも考えて欲しいと言っ。

「……まったく。しかし、やってしまった事はどうしようもないだろ。試召戦争が一段落したら坂本と吉井にはきっちり指導をしてやる」

「そうしてください。二度とこんな事を起こさないように」

「ちょっと待て！？ 結城、どこに行くつもりだ！？」

西村教諭はFクラスの吉井明久と坂本雄二にきっちりと指導すると言つと和真は平然とBクラスの窓から学園に入ろうとし、西村教諭は驚きの声をあげると、

「必要な道具を持ってくるんですよ。まあ、直ぐに直るわけでもないから応急処置くらいはしないといけないでしょ。後、俺はこのまま修理に入るんで、出席確認は誤魔化して置いてください」

「……あのな。そんなわけに行くか」

和真は家から修理道具を持ってきたて授業をさぼって修理すると言つと西村教諭はため息を吐くが、

「どうせ、今日の朝から試召戦争なんですから自習だし良いでしょ」

「……それをサボる理由にするな」

和真は試召戦争をやる気はないようで苦笑いを浮かべ、西村教諭は和真の言葉に頭を押さえてため息を吐く。

「そんな事を言っても俺だってヒマじゃないんですよ。今週は学校終わったら直ぐにバイトなんで今からやらないなら、業者を入れな

いなら来週まで室外機はこのままです」

「……わかった」

和真はそれなら修理は業者を呼んでくれと言うと西村教諭は納得は
いかないようだが頷き、

「それじゃあ、ちょっと着替えてきますよ」

「……着替え？　そこまで本格的にやるのか？」

和真は勝ったと言いたげにくすりと笑い着替えてくると言うとき西村
教諭は和真がずいぶんと本格的にやるつもりだと驚きの表情をする
が、

「いや、工具とか入れないといけないんで制服のままじゃ、いちい
ち脚立を上り下りしないといけないじゃないですか。下手にこのま
まやって制服を破いても嫌ですしね」

「……なるほどな。確かにその通りだな」

和真は着替える意味はあると言うとき西村教諭は納得が言ったようで
頷く。

第41問（後書き）

どうも作者と

和真「主人公です」

和真、試召戦争ボイコット。（爆笑）

和真「点数、減らしたくないからな」

まあ、良いのかな？ と言う感じですが、察しの良い人は和真が何を
するつもりかはわかると思います。（悪笑）

和真「さあ、どうなるんだろうね」

アンケート

1位	友香	8票
2位	愛子	7票
3位	優子	6票
4位	宏美	5票
5位	洋子	3票
6位	美春、葵	2票
7位	清美	1票

友香が単独首位の立ちました。

和真「代表様か？」

まあ、本来、作者が考えていたのが友香と宏美なんでこのままが良

いですね。

愛子も優子も他で書いてるから個人的に同じヒロインで話を書きたくない。

和真「ぶっちゃけるな」

なんか同じものになりそうな気がしてね。（苦笑）

第42問

「……山下さん、結城君はどこに行ったのかしら？」

「さ、さあ？」

友香は朝のHRが終わっても和真が教室に来ないため、こめかみに青筋を浮かべていると清美は友香の様子にどうしたら良いかわからないため、

「ちょ、ちよつと、誰か、カズを見てないの？」

「いや、今日は見てないな。カバンは置いてあるから、来てるとは思っただけど……逃げたか？」

「逃げたんだろうな」

清美は一心、タオル、平太を捕まえて和真の居所を聞くが3人は和真が逃げたと言い、

「あ、あいつは何をしてるのよ!!」

「だ、代表、少しだけ、落ち着こうよ。はい、深呼吸、大きく吸ってゆっくり吐いて」

「……」

友香は怒りをあらわにして叫ぶと清美は友香に落ち着くように言っ
て友香に深呼吸をするように言くと友香は大きく深呼吸をすると、

「良い？ 結城君になんて任せてられないわ！！ こんな状況に巻き込んでおいて逃げるなんて良い。意地でも勝つわよ！！」

「熱くなってるな。代表様」

「……普通なるでしょ」

友香はそれでも和真に対する怒りがおさまらないため、クラスメイト達にげきを飛ばすがトオルは友香の様子に苦笑いを浮かべ、清美は大きく肩を落とす。

「……なあ、山下、今、携帯を見たら、和からメールがきてたんだけど、今、見せると逆効果だと思うか？」

「……どんな内容？」

「……こんな内容」

一心は試召戦争が始まる前に携帯電話の電源を切ろうと思ったように携帯電話を開くと和真からメールがきている事に気づいて清美、トオル、平太に和真からのメールを見せると、

「……あいつは何がやりたいんだろうな」

「……わからないけど、確実に代表がこれを見たら火に油を注ぐよね？」

「……油で済むか？ むしろ、ガソリンだろ。確実にケン力を売ってるぞ」

清美と平太は制服から作業着に着替えて完全に業者の人間な和真と大島教諭の写メが添付されており、友香にだけは見せられないと意見が合致したようで大きく頷き、

「和は根に持つタイプだからな。代表様への仕返しだろ?」

「……と言つか、自分に仕事を押し付けたクラスへ対する嫌がらせじゃないの?」

「あり得るな。って何で、大島先生も一緒なんだ?」

4人は和真の目的が友香を始めとしたクラスメートへの嫌がらせだと言った時、

「そこ、遊んでないで準備、もうすぐ始まるわよ!」

「……イエス、ボス!」

友香から4人に遊んでるヒマはないと言う怒声が響き、4人は慌てて返事をする。

「見返してやるわ。結城君、私をバカにした事を後悔させてあげるわ」

「……カズ、帰ってきてても命あるかな?」

「ど、どうだろうな。ま、まあ、こんなメールを送ってきたんだ。何かあるって信じようぜ。」

友香は和真に対する怒りが背後から溢れ出させながら笑っており、4人は結果はどうであれ試召戦争が終わった時の和真の身の安全を心配していると

「行くわよ!!」

CクラスとBクラスの試召戦争の開始を告げるチャイムが鳴り響き、友香はクラスメート達に指示を出すとクラスメート達は当初の予定通り、数学と物理を中心に召喚フィールドを広げてBクラスの生徒と戦い始める。

第42問（後書き）

アンケート

1位	友香	10票
2位	愛子、優子	7票
4位	宏美	5票
5位	洋子	3票
6位	美春、葵	2票
7位	清美	1票

第43問

「なあ、結城」

「どうかしましたか？」

「どうして、俺がこんな事をしないといけないんだ？ お前は俺に
試召戦争の事を頼みに来たんじゃないのか？」

Cクラス対Bクラスの試召戦争が開始されて10分ほど経った時、
和真は脚立の上で室外機の修理をしており、一心に写メを送った時
に和真の隣に写っていた大島教諭は意味がわからずに首を傾げるが、

「何事にもタイミングってのがあるんですよ。それにこいつを直さ
ないと俺達がBクラスに勝った時に教室の居心地が悪いでしょ」

「勝てるのか？」

「自分達を過大評価して周りを見下している奴らへの対処ならいく
らでも方法は見つかりますよ」

和真はBクラスに負けるつもりもないようで当たり前のように方法
などいくらかもあると言うと、

「こんなものかな？ ちょっと、大島先生、上にあがってきて貰っ
て良いですか？」

「上に？ 2人で脚立に乗るなんて危ないだろ」

「いや、俺は脚立からおりますんで」

和真は室外機の修理にめどが付いたようで大島教諭に上にあがってきて欲しいと言うが大島教諭は2人で脚立に乗るのはバランスが悪いと言うと和真は被っている日差し避け用の帽子を深々と被ると平然とBクラスの窓を開けて、

「すみません。ちょっと室外機の確認を取りたいんで失礼します。後、代表の方、すみませんが立ち会いお願いします」

「ああ……」

業者の人間を装いながらBクラスの教室に入り込み、代表の『根本恭二』を呼ぶと恭二は和真の格好が完全に修理業者に見えるため、警戒する事なく近づいてくる。

「それじゃあ、すみませんね。Cクラス結城和真がBクラス代表根本恭二に保健体育勝負を挑みます。試^{サモン}獣召喚」

「へっ？」

「承認する」

和真は恭二が目の前にくるのを確認すると保健体育で恭二に試召戦争を仕掛けるが恭二だけではなく、Bクラスの教室にいた生徒達が固まるが大島教諭の『承認』と言う言葉に2人の周りには保険体育の召喚フィールドが形成され、和真を2頭身にしたような召喚獣が手には巨大な両手持ちような大剣を手にして真っ白な鎧を装備しており、

「早く召喚してくれ。それとも戦意無しと判断して良いのかな？」

「な、何を言ってるんだ？」

「いや、だから、今は試召戦争中だろ。代表の根本恭二君」

「お、お前は！？ 結城和真！？」

和真は恭二に早く召喚するように言うが恭二は今、何が起きたか理解できていないようであり、和真はくすりと笑うと被っていた帽子を取ってニヤリと笑い、恭二はその時初めて目の前にいる業者の格好をした男が和真だと気づき驚きの声をあげるが、

「だから、さつき名乗っただろ」

「くっ！？」

「で、召喚はなしか？ まあ、今は回復試験の最中だしな。採点前見たいだから保健体育の点数はないか」

和真は恭二の様子など気にする事なく、恭二の今の保険体育の点数がない事を言い当てる。恭二は苦虫を噛み潰すような表情をすると、

「……結城、教育者としてこのやり方はどうかと思うんだが」

「そうかも知れませんがこれが試召戦争のルールですしね。それになんかこの卑怯な小者は自分を策士とか勘違いしているんで思い知らせてやろうと、あれですよ。人間は負けた後に顔をあげれるかどうかでその後の成長が決まってくるんですよ」

「お前は……決着、勝者Cクラス」

大島教諭は召喚フィールドを張ったが試召戦争が起こる事なく決着が付いた事にため息を吐くが和真は気にする事なくはひょうひょうと答えると大島教諭は頭を押さえながら和真がBクラス代表の恭二を倒したと認め、Cクラス対Bクラスの試召戦争は開始15分と言う未だかつてない速さで終結する。

第43問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、奇襲。

和真「自分で言うのもなんだけど卑怯だ」

卑怯、汚いは敗者の戯言です。それは今までの歴史が証明しています。

それに和真が1番にやらないといけないのは省エネですから。

和真「確かに。点数削らないで勝てる方法だし」

和真が作業着を持ってきている事で気づいている人たちはいると思いますけどうなかね？

和真「さあね」

戦術等を考える上で和真はやっぱり1人で動く姿が見えました。

和真「と言うか、代表様を激怒させてる姿」

そうですね。（苦笑）

アンケート

1位 友香 11票

7 位	6 位	5 位	4 位	3 位	2 位
清美	美春、	洋子	宏美	愛子	優子
1 票	葵	3 票	5 票	7 票	8 票
	2 票				

第44問

「えっ！？　どう言う事？」

友香は自ら指揮を執り、代表がそばにいる事でCクラスの戦意は高かったのだが友香達Cクラスの生徒の知らないところで和真が恭二を倒し、召喚フィールドは四散され廊下にも大島教諭の声でCクラスの勝利が宣言され、友香は意味がわからないため呆然と立ち尽くすが、

「……カズだね」

「……和だな。間違いなく」

友香と一緒にいたトオルと清美は和真が何かやった事だけは理解したようである。苦笑いを浮かべると、

「代表様、遊んでないで早く入ってきてくれよ。俺はヒマじゃないんだから戦後処理は任せるぞ」

「ゆ、結城君？　何、その格好？」

和真がBクラスの教室から顔を出して友香に戦後処理をしてくれと言った友香は和真の作業着姿に意味がわからないようではあるがそれより、和真が教室にいなかった事に腹を立てているようでこめかみに青筋をびくびくさせながら和真に聞く。

「見ての通り、作業着だ。そんな事より、戦後処理してくれよ。俺は忙しいんだからな」

「だから、何で、そんなものを着てるのよ！！　そして、何でBクラスから出てくるのよ！！　ちゃんと説明しなさいよ！！」

「だ、代表、一先ず、落ち着いて。カズも代表の怒りに油を注がない。何人か代表を押さえるのを手伝って！！」

和真は友香の質問にただ一言答えると友香は和真の胸倉をつかみ、清美は友香を和真から引き離し、女子生徒数名で友香を押さえつけるが、

「放しなさい！！　あの男には思い知らしてやらないといけないのよ！！　この間から私をバカにして」

友香の怒りは加熱されており、女子生徒達を引きずりながら和真につかみかかりそうであり、

「……一先ず、和、説明をしてくれ。そうしないと代表様がお前に襲い掛かるぞ」

「襲いかかるのか？　それなら、保健室のベットの上が」

一心は和真に一先ず、どのようにして恭二を倒したか、そして、何より、和真がどうして作業服を着ているか教えてくれと言うが和真は一心の言葉に下ネタに走り始め、

「……カズ、こんな状況でおかしな事を言わない。本当に殺されるわよ」

「殺されるなら腹上死希望で」

「結城君！！　あなたは何を言ってるのよ！！」

清美は和真の下ネタにため息を吐くが和真が止まるわけもなく、友香は顔を真っ赤にして和真を怒鳴りつけると、

「はいはい。反省しますよ。説明もしてやりたいけど、その前に俺も少しやる事があるんだ。代表様は戦後処理させといてくれよ」

「やる事？　……また、ろくでもない事？」

和真は他にもやる事があるから少し開けると言っていると清美は和真がまだ何かおかしな事を企んでいるかと思ったようであれもこれも吐く。

「まあ、ろくでもない事は想像に任せるけど……仕返したのは最後までしっかりとやらないといけないだろ」

「……ろくでもない事だな」

「……そうね」

和真は笑顔で『仕返し』と言い切り、トオルと清美は和真の言葉に頭を押さえるが和真のその笑顔になれていないクラスメート達は寒気を感じたようで息を飲むと、

「それじゃあ、ちょっと行ってくるから、代表様、よろしく」

「え、ええ」

和真は改めて友香に戦後処理を任せると言っていると友香も和真の笑顔に

威圧されたようで顔を引きつらせて頷き、

「……あ、あの。結城君って何なの？」

友香は和真の背中を見送った後、顔を引きつらせたまま和真と仲の良い一心、トオル、平太、清美の4人に聞くが、

「カズはカズ」

「シスコンで根に持つタイプ」

「……それもかなり根深く」

「……ケンカは売らない方が幸せだと思っぞ」

4人は友香から視線を逸らす。

第45問

「戦後処理って言ってもね……何かある？」

「うーん。Fクラスにされたみたいに女装させてみるとか？」

友香は和真の奇襲により、討ち取られた恭二を前に戦後処理をどうしようかと首を傾げると清美は楽しそうに笑いながら、恭二に女装させてみようかと言うが、

「止めてよ。そんな気持ち悪いものは見たくないわ」

「……代表、一応、昨日まで付き合ってたんだよな」

友香は恭二の女装など気持ち悪いと言い切るとトオルは流石に恭二が哀れに思えているようで苦笑いを浮かべると、

「ま、待ってくれ。友香、昨日のは間違いなんだ！？ あれはFクラスの奴らに無理やり」

「そのわりにはずいぶんと楽しそうだな」

「カズ、それ何？」

恭二は友香に女装はFクラスにはめられたからで行った時、和真が1冊の本を持って戻ってきて、清美は和真の持っていた本を覗き込む。

「……汚いね」

「汚いけど、楽しそうだろ」

「……そう見えるのがキモいな」

和真の持ってきた本には恭二が女装した姿の写真集であり、清美は流石に気持ち悪いようで口元を手で押さえると和真の周りにＣクラスの生徒が集まりだして写真集を覗くと全員に意見は一致し、

「……恭二、二度と話しかけないで、早く出てっってくれる」

「ま、待ってくれ。友香ああ！！！！？？？」

友香は眉間にしわを寄せて恭二に早く教室から出て行けと言うと恭二は友香に弁明したいようだが、

「いや、出るのはお前らだからな」

「……和、お前、冷たいな」

和真は恭二の叫びに冷静にツッコミをすると一心は苦笑いを浮かべると、

「いや、冷たいも何も負けた奴が言い訳するなんて見苦しいだろ。それに俺の仕事を増やした罰はこんなものじゃ終わらない……な。平賀、清水」

「まあ……僕達にも責任があるわけだしね」

「……ええ」

和真はまだ恭二への罰は終わってないと笑うとDクラス代表の『平賀源二』と『清水美春』の名前を呼ぶと2人は和真に何か抑えられているようで納得いかなさそうに教室に入ってきて、

「Dクラス代表の平賀源二」

「同じく、清水美春ですわ。私達はBクラスへ試召戦争を仕掛けます。開始は今から30分後です」

Cクラスに負けたばかりのBクラスに宣戦布告をする。

「な、何を言ってるんだ!？」

「別に連戦はルール違反じゃないだろ。お前だって、そんな噂を流してFクラスを騙したんだ。他のクラスが漁夫の利を狙ってくるのは当然だろ」

恭二はDクラスからの宣戦布告に驚きの声をあげるが和真は当然の事だと笑い、

「ゴメンね。根本くん、僕達にもいろいろとあってね」

「……不本意ですわ。何で、美春が結城和真の口車なんかに乗せられないといけないのですか」

源二と美春は室外機を壊した件で和真から何かを言われたようでBクラスに宣戦布告をする意味を言つと、

「それじゃあ、よろしくね」

「……」

源二と美春は自分達の教室に戻って行き、

「まあ、頑張れよ。ちなみにDクラスとの勝負がいたら次はEクラスが攻めてくる事になってるから」

「……カズ、あんた、鬼ね」

頭が状況を整理するのを拒絶している恭二の肩を叩き、和真は心底楽しそうに笑い、清美は和真の表情を見てため息を吐くが、

「言っただろ。俺は仕返しは最後まできっちりやるってな」

和真は笑顔で言い切り、教室にいるCクラス、Bクラスの生徒は和真は敵に回さない方が身のためだと理解する。

第45問（後書き）

どうも、作者です。

『繋ぐ絆と境界破壊』に和真を出演させました。
お相手は由里さんの『バカとテストと本屋さん』より『永瀬夏樹』
くんと共演です。

興味が湧いたらご覧ください。

第46問

「……結城君、あなたは何をしてるの？」

「見てわからないか。バカクラスがBクラスを倒すためだけにDクラスに壊させた室外機の修理だ」

Bクラスを追い出した後、和真は窓から脚立の上に戻ろうとすると友香は和真が何をするのか理解できないように眉間にしわを寄せて言々と和真は見ればわかるだろうと言い、修理を再開し、

「カズ、これが作業着なわけ？」

「だから、見ればわかるだろ。わざわざ、下まで工具とかを取りに行けって言うのか？ ただでさえ、面倒な事を押し付けられてるのに時間がかかる事をしてられるか」

清美は和真が作業着を着ている理由を聞くと和真は面倒くさそうに言い、

「……ここから、恭二に仕掛けたわけね？」

「……その格好じゃ油断するだろうな」

友香は和真が室外機を修理している姿に全てが納得したようで顔を引きたせるとトオルは苦笑いを浮かべる。

「それで、カズはこれから何をする気？」

「何を？　ってなんだ？」

「とぼけるな。お前の性格を考えればこれじゃあ、終わらないだろ。『仕返しは最後まで』なんだろう？」

清美はまだ和真が何か企んでいると思っっているようで窓から和真に聞くと和真は首を傾げるが一心は和真の仕返しはこんなところで終わらないと言うと、

「……やるわね。間違はなくFクラスに仕返しを」

「……代表も和の性格わかってきたな」

友香は眉間にしわを寄せて和真がFクラス相手に何かするつもりだと言うと平太はうんうんと頷き、

「……別に何もクラスに迷惑をかける事はするつもりはないよ」

「やるんじゃない」

和真はクラスに迷惑をかける事はしないと言うと友香は肩を落とすため息を吐く。

「やつほー。結城君、勝利おめでとう」

「……開始15分って、どうしたら、こんなに簡単に決着が付くんだよ？　って、結城君、あなたは何をしてるの！？」

「ああ。ありがとう。何を？　って、見ればわかるだろ」

友香がため息を吐いていると愛子と優子がCクラスの勝利のお祝いにきたのか和真に声をかけると和真は窓の外から返事をする、

「それで、バカクラスはなんて言いに来た？ Bクラスを倒したCクラスが勢いに乗ってAクラスに攻め込んでくるとでも言ってきたか？」

「……ええ、まったくその通りよ」

和真はFクラスの考えを見透かしているようで呆れたように言い、優子は和真の言った通りにFクラスが試召戦争の話をしに来たと言う。

「……結城君、何をするつもり？」

「いや、どうせ、バカクラスはAクラスに仕掛けるつもりなんだ。それなら、仕返しはAクラスにやって貰えば良いかな？ とね」

友香は和真と愛子、優子の様子に何をするつもりかと聞くと和真はくすりと笑い、

「それで、どんな条件を出してきたんだ？」

「勝負は5対5の勝負。1、3、5戦目をFクラスが2、4戦目をばく達Aクラスが選択教科を決める。で、5戦目は代表同士の戦いで3勝した方が勝ちって条件だよ」

2人にFクラスが勝負を挑んできた条件を聞くと愛子は苦笑いを浮かべながら、Fクラスとの試召戦争の内容を話し、

「……ずいぶんとむちゃくちゃな。そんな条件飲んでないよな？」

「……それがね。代表が受けちゃったのよ。これでも5対5まで持って行ったのよ」

和真は愛子から聞かされた条件に眉間にしわを寄せるが優子はFクラスに乘せられている事に自覚があるのかため息を吐く。

第47問

「まあ、受けたものは仕方ないか、それにAクラスがどんな条件でもバカクラスに負けるわけにもいかないからな。相手が有利でも受けないといけないってのもあるか」

「確かにそれはあるかも」

和真は直ぐにAクラスの事情もあるかと言うと愛子はAクラスの代表には考えがあるのかものと笑い、

「それで、結城君に意見を聞こうと思ったのよ。戦術とかそう言うのはあたし達より、詳しくそうだしね」

「ああ。協力するよ」

優子はFクラス代表の『坂本雄二』の考えが読めないようで和真に意見を聞きに来たと言うと和真は窓から教室内に戻り、

「えーと、まずは5対5だからFクラスが絶対に出してくる人間」

「……姫路さんね」

「後は土屋康太」

和真はFクラスで出場してくる生徒を考えようと言うと優子はFクラス最強のカードである『姫路瑞希』の名前を出し、和真は他に『土屋康太』と言う生徒の名前を出す。

「土屋康太？ 誰？」

「……和、まさか、その男が」

「ああ、『寡黙なる性職者』だ」

優子は『土屋康太』の名前に心当たりのないようで首を傾げると一心には心当たりがあるようで和真に聞くと和真は頷き、

「ム、ムツツリーニ？」

「ああ。説明は省略するけどな。そいつは保険体育は学年トップだ」

優子は聞き慣れない言葉に首を傾げたまま言つと和真は優子の反応が面白いようでくすくすと笑いながら康太の得意教科を話し、

「それで1勝、姫路さんで教科選択して2勝で最終戦で代表を倒すつもりってわけね……失敗した」

「かもな……でも、バカはAには絶対に勝てない」

優子は和真の話に眉間にしわを寄せると和真は苦笑いを浮かべた後、真面目な表情をすると、

「何、結城君が付いているからとでも言いたいわけ？」

「代表様、少し落ち着いてくれ」

友香は他人を食ってかかる和真が気に入らないようで和真を睨みつけて言うが和真は友香の様子に小さなため息を吐く。

「普通に考えてバカ代表が学年主席に勝てるわけがないだろ。ここまで作戦が上手く行っているから、自分の策を見抜いている人間はいないと思っているはずだ。だから、その油断に付け込む」

「油断？」

和真はAクラスの代表が負けるわけがないと言うと雄二は油断していると笑うと愛子は首を傾げ、

「普通に考えたら、今回の5戦勝負で最終戦は決まっている。お前達がFクラス代表なら2枚の最強カードはどこで切る？」

「普通に考えたら、この条件だと1、3戦目しか考えられないな」

和真はFクラス代表になったつもりで考えてくれと言うとトオルは1、3戦目に使うと言い、周りのメンバーもトオルと同じ意見のようで頷くが、

「だけど、バカ代表は3、4戦目でそのカードを切る」

「ちょっと待って、カズ、どう言う事よ？」

和真は雄二はそんな事はしないとと言うと清美は和真の考えが理解できないように直ぐに和真に聞き返す。

「ここまで上手くきている作戦にバカ代表はすべて自分の手のうちだと思ってるんだよ。最初に1対1を持ちかければ断られるのは当たり前前、3対3、もしくは5対5までなら自分の作戦に気づいている人間はいないってな」

「……それって、あたしが坂本くんに上手くあしらわれたって事？」

和真はこの状況も雄二の想定内だと言うと優子は眉間にしわを寄せ
るが、

「ああ、それでここまで上手く言っていると油断……まあ、演出
てのに凝りたくなるのが人間ってな。2連敗からの3連勝ってな」

「……それはぼく達、だいぶ、舐められてるよね」

和真は落ち着いた口調で雄二の真理を見透かしているようであり、
愛子は少しムツとした口調で言う。

第47問（後書き）

1位	友香	12票
2位	優子	8票
3位	愛子	7票
4位	宏美	5票
5位	洋子	3票
6位	美春、 葵	2票
7位	清美	1票

第48問

「だろうな。でも、だからこそ、対策は立てやすい。まあ、バカクラスに誤算があるとしたら俺達がAじゃなくBクラスに仕掛けた事、俺達をけしかけて少しでも主力の点数を削れていれば儲けものくらいで考えてたろうな」

「……それがCクラスを挑発したわけね」

和真は愛子の反応に気づきながらも話を続けて行くと友香は優子の真似をしてCクラスを挑発しにきた秀吉を思い出したようで眉間にしわを寄せると、

「ああ。で、仕返しの内容だけだな。簡単に言えば姫路を潰す」

「は？ ちょっと待て、和、簡単に言うけど坂本が4戦目にだしてくるって事は勝てる算段があつての事だろ」

和真は頷いた後、瑞希を潰す事が仕返しになると言うがトオルは瑞希を倒すのは難しいと言うが、

「トオル、普通に考えろよ。俺達Cクラスでなら姫路を倒すのは難しいがAクラスだぞ。総合教科で当たらなければ単体教科で姫路と対等もしくはそれ以上に戦える人間はいる。確かに姫路の成績は良いが全教科トップって事はあり得ない。得手不得手は必ずあるからな」

「……確かにそうね。愛子、4戦目で姫路さんの相手ができる？」

「ぼ、ぼく？」

和真は瑞希相手に総合教科で戦うのは愚かだと言い、単体教科で勝負するように言つと優子は少し考えるようなしぐさをした後に愛子に瑞希と戦えるかと聞き、愛子は優子に突然、話をふられた事に驚きの声をあげる。

「工藤さんって、得意教科あるの？」

「う、うん。保健体育は得意だよ。噂のムツツリー二さんと個人的に戦ってみたい。腕輪も持ってるし」

清美は愛子に得意教科は何かと聞くと愛子は苦笑いを浮かべながら保健体育が得意だと言い、

「そりゃ、心強い……が、何かありそうだな？」

「うん。今も言っただけムツツリー二さんと戦ってみたいんだよね」

和真は愛子に任せた方が良くと言おうとするが愛子の様子に違和感を覚えて聞き返すと愛子は康太と戦いたいと苦笑いを浮かべると、

「ちょっと、愛子」

「う、うん。優子の言いたい事もわかるんだけどね」

「……なら、正攻法はダメか？ こっちは邪道なんだけどな」

優子は愛子の反応に考え直して欲しいと言つが愛子にも引けない部分があるようで苦笑いを浮かべたまま答え、和真は愛子の反応に少

しだけ困ったように頭をかく。

「カズ、他にも手はあるのか？」

「Aクラスだから正攻法が1番なんだと思うんだけど、ダメなら邪道だけだな……まあ、女子生徒が出て限定テストで保健体育の実技『体力判定テスト』とかな。Aクラスには文武両道の生徒も多いだろ」

「……ちよつと待ちなさい。そんなものが良いわけがないでしょ」

一心は愛子が勝負に私情を挟みたいのを見て和真に他には手はないかと聞くと和真は流石に卑怯な事がわかつているため苦笑いを浮かべて言う。友香は和真を睨みつけるが、

「一応、召喚戦争のルールとして成績に関係あるテストであれば問題ないはず、保健体育は筆記だけでなく、実技の占める割合もあるんだ。ルールのには問題ない。それに、バカ代表が個人戦にしてきたのは同じように何かに限定してAクラスの代表に勝つ気だから、それなら、Aクラスがやっても問題ないだろ。それで文句をつけてくるなら、最終戦にバカクラスの主張も潰せる。まあ、邪道だし、Aクラスのプライドの関係で使えるかはわからない」

「……確かに結城君の言い分はわかるわ。でも、流石に卑怯よね？」

「ああ。だから、Aクラスなら正攻法で姫路を潰すのがベスト、土屋みたいに単体教科だけでは抜けているとは違って姫路は全体的に点数が良いんだ。去年の教科別の点数で確認取れば単体教科勝負だと勝てるヤツは工藤以外にも出てくるだろ」

「そうね。確認してみるわ。結城君、ありがとう。参考になったわ」

和真は邪道だと理解しているため、決断はAクラスに任せると言う
と優子は和真に礼を言つと、

「愛子、戻るわよ」

「うん。それじゃあ。またね」

「さてと、修理の続きでもするか」

優子と愛子は自分の教室に戻って行き、和真は窓の外に戻って行く。

第49問

「ねえ、結城君」

「何だよ？」

和真が室外機を修理している様子を見て友香が和真に声をかけるが、和真は忙しのため、不機嫌そうに返事をするが、

「AクラスはFクラスに勝てると思う？」

「さあな。Fクラスが勝ったら勝ったで俺達が蹴散らしてから、Bクラスと同じようにDクラスの設備まで突落してやれば良いだけだ」

友香は和真にAクラス対Fクラスの試召戦争の結果が気になるように、和真に聞くと和真からはそっけない言葉が返ってくるだけであり、

「それって冷たくない？ 一応は同盟組んでるのよ」

「冷たくはないよ。俺は考えられる限りの戦術を伝えた。戦争なんだから変な意地を張って負けた場合はそれまでの関係って事だ。それにBクラスとの同盟を簡単に破ったのは誰だ？」

「……そうね」

友香は和真の態度は冷たいと言うが和真はBクラスとの同盟を破棄した事を引き合いに出すと友香は黙ってしまい、

「うん。相変わらず、カズはクールだね」

「まったくだ」

和真と友香の様子に苦笑いを浮かべながら清美とトオルが窓から和真に声をかける。

「別にクールってわけでもないだろ。俺は現実主義者なんだよ……
リアリスト
これで良いな」

「直ったのか？」

和真は2人の反応にため息を吐きながらも修理はしっかりとしていたようであり、室外機は正常に動き始め、

「ああ。これで大丈夫だと思う……汗ばむ女子の制服姿が見えなくなるのは残念だけだな」

「……結城君はもう少し言葉を選べないの？」

和真は動きだした室外機を見ながらも微妙に複雑な表情をすると友香は眉間にしわを寄せながら和真の言葉に不快感をあらわにするが、

「……確かに夏場は汗で透けるからな」

「そう考えると冷房のない設備も悪くないかも知れないな」

「この男どもは」

トオルと一心は和真の言葉に頷き、清美は眉間にしわを寄せると、

「まあ、冗談はこれくらいにしてな。Aクラスが仮に負けたら俺達は同盟者としてAクラスに宣戦布告して和平交渉で設備を交換する。その後、俺達は負けてないわけだから刀を返してFクラスの喉元に喰いつく。姫路、土屋の点数は減ってるはずだしな。それでFクラスはFランクの設備に逆戻り、俺達はAランクの設備、AクラスはBランクの設備になる。恩を売るならこの後にまたAクラスと設備を交換すれば良い。実際は、姫路1人で1度に相手できる人数なんて限られてるからな。土屋も誰かに犠牲になって貰う形になるけど決着がついた瞬間にフィールドを変更、保健体育以外にフィールドを変えてやれば敵じゃない。吉井は倒すを前提にしないで数名で囲んで足止めすれば良いんだ。他に島田は数学が得意らしいがBランク相当なら2人ないし3人で当たれば倒せる。倒せなければ土屋と同じ対応をすれば良い」

「……結城君、あなた、どこまで考えて動いているの？」

和真は簡単にAクラスがFクラスに負けてしまった時の事を話すと友香は和真の口から出て言葉にどう反応して良いのかわからないように顔を引きつらせて言う。

「まあ、Aクラスが負けたらFクラスの設備までしか落とせないかな。Aクラスが勝てば今より1ランク下がるんだ。仕返しとしてはAクラスに勝って貰った方が良いんだよ」

「……和、性格、悪いな」

「いや、俺の場合は当然の権利だからな」

「た、確かにね」

和真はFクラスの設備の事を考えればAクラスに勝って欲しいと言
い平太は和真の様子に苦笑いを浮かべるが和真は室外機を指差して
当然の事だと言うと清美は顔を引きつらせながら頷き、

「それじゃあ、修理が終わったから、西村先生のところに報告して
くるな」

「ええ」

和真は周りの反応など気にする事なく室外機修理の終了を西村教諭
に教えるために教室を出て行く。

第50問

「結城君」

「ん？ 中林、試召戦争はどうなった？」

和真が西村教諭に修理の報告を終えて廊下に出た時、宏美が和真を見つけて駆け寄ってくる。

「勝ったわよ。まあ、Bクラスは連敗で精神的に大部、弱ってたし、卑怯な気もするけどね」

「卑怯も勝てば問題なし、それに卑怯な事をしてでも勝てば良いと思ってたヤツらの集まり何だ。返ってきただけだろ。自業自得」

BクラスはFクラス、Cクラスに続き、Dクラス、Eクラスにも仕掛けられて精神的に弱っていたようで簡単に決着がついたようではあるが宏美は体育会系の事もあるのか卑怯な事をしたかなと苦笑いを浮かべるが和真はBクラスの行いを許せないようではっさりと切り捨てると、

「後はFクラス対Aクラスよね？ 結城君はどうなると思ってるの？」

「どうなるって、バカがAに勝てるわけがないだろ」

宏美は和真の様子に苦笑いを浮かべながら、2学年最初の試召戦争がFクラスとAクラスの試召戦争で一段落つくと思っっているようで和真に聞くが和真はくだらない事を聞かないでくれと言いたげにF

クラスは負けると言う。

「うん。まあ、私もAクラスが負けるわけではないとは思っけど、そうやって頭ごなしに言われると私達もバカにされてる気がするのよね」

「……ああ、悪い。そんなつもりはないよ。中林を含めて少なくともEクラスの連中は部活を頑張ってるだろ。努力もしないような奴らは何もしないで上に挑むのはどうもな……やっぱり、頑張ってる人を見てるせいか。そんな事をされるとな」

宏美は和真に自分達もバカにされている気がすると言うと和真は苦笑いを浮かべて宏美に謝り、

「まあ、でも、Fクラスが上に挑む姿は試召戦争だけじゃなく、他にも何かできそうな気がするから私達は刺激されたけどね」

「まあ、確かに周りを焚きつけるには良いのかも知れないけどな。巻き込まれる身だと面倒な事この上ないぞ」

宏美は挑戦者の姿勢として何かを感じたものもあるのか真剣な表情をすると和真は彼の性格なのか宏美とは対照的に面倒な事は避けたいため息を吐くと、

「そう言いながらも、クラスを勝利に導くあたり、結城君よね」

「何だ？ そのわけのわからない納得の仕方は？」

宏美は和真のため息を吐く様子に苦笑いを浮かべながら頷くと和真は宏美が何に納得しているか理解できないように首を傾げるが、

「まあ、気にしないでよ。あ？　そろそろ、私、教室に戻るね……
そうだ。結城君、この間の約束覚えてるよね？」

「ああ、できれば忘れたいけどな。忘れるとうるさいだろ？」

宏美は和真に先日の約束を覚えているかと聞くと和真は時間を取られる事もあるため、肩を落とす。

「覚えてるなら、良し。それじゃあね」

「ああ」

宏美は和真の言葉に笑顔を見せると設備の上がった自分達の教室に向かって走って行き、和真はそんな宏美の背中を見送るが、

「……あれ？　よく考えたら、中林達も新校舎になったんだから、一緒に戻れば良いんじゃないのか？　……まあ、良いか」

和真は宏美の教室は隣になったんだから、一緒に戻れば良かったと思うが別に追いかける必要もないと思ったように頭をかいた後、教室に戻る。

第51問

「和、おつとめごころうさん」

「ああ」

「カズ、さつき、宏美がきたんだけど」

「聞いてるよ。無事に根本を叩き潰したってな」

和真が教室に戻ると清美はEクラスの勝利を和真に教えようとするが和真は先ほど宏美に会って直接聞いているため知っていると云って席に座ると、

「さてと、やるか」

「今日は何の再試験？」

「集まるな」

本日の回復試験のために自習を始めようとするいつものメンバーに友香を加えて和真の周りに集まりだし、和真は眉間にしわを寄せるが、

「現代文はボロボロだったんだ。俺達に協力できる事もあるかも知れないだろ」

「そうね。結城君はうちのクラスの主力でもあるわけだし、やれる事は協力しないといけないでしょ」

トオルは和真に協力できる部分はないかと思っっているようで声をかけたと言うが本心は冷やかしのようで口元は小さく緩んでいるが友香はクラスの代表として和真の成績アップを重要だと思っっているようである。

「で、今日は何？ 少なくとも現代文見たく成績を下げるのは勘弁よ。教えた人間が悪いとも思われるし」

「……悪かったよ」

清美は昨日、和真に現代文を教えたが結果が伴わなかったようであめ息を吐きながら言うのと和真は納得がいかなさそうに清美に謝り、

「教えてくれるなら保健体育の実技……いや、実戦を代表様か山下に手取り腰取り教えてくれ」

「……結城君、私は冗談で言ってるわけじゃないのよ」

「……わからない。どうして、和真の周りには女の影が多いのが」

和真は冗談めかして下ネタを言うと友香は真面目な話をしているため、眉間にしわを寄せ、清美は和真の人間関係がわからないとため息を吐くと、

「悪かったよ。まあ、今日は家庭科だから、別にそこまで気を張る必要はないからな」

「お。勝機ありか？」

「ああ。振り分け試験の時は順番に解いて言ったが、今回は被服系を捨てて調理系を重点に行こうと思う」

和真は今日は割と得意な家庭科であると言つと一心は和真の様子に今日は楽勝だと思つたようであり和真は笑顔でできないものは捨てると言い切る。

「……そ、それで良いの？」

「まあ、前回のテストでも調理系は答えを書いたのは10割に近い回答率だったからな。それならいつそ制限時間内で解けない問題は捨ててしまおうと誰にだって得意な分野あるだろ。数学は図形は好きだけどグラフが嫌いとかそれと一緒に」

「何と言つか男らしいな」

友香は和真の言葉にこれはダメかも知れないと思つたようだが和真は効率を考えるとその方が良いと言つと平太は苦笑いを浮かべる。

「まあ、後は問題次第。被服系が多ければダメかも知れない」

「だ、ダメかも知れないじゃないでしょ。教科書を出しなさい。そつちも解けるようにするわよ」

和真は最初の問題で調理系が続かなければ点数が下がると言つと友香は慌てて和真の隣に座り、和真に教科書を開くように言つと、

「代表様、被服系できるのか？ 意外だ。実はぬいぐるみを縫うのが趣味とかあるのか？」

「そ、そんな事を言ってるヒマがあつたら早く準備しなさい!!」

和真は友香の様子に少し意外そうな表情をしながらも彼女をからかうように言つと友香は和真の言葉を否定するかのように声を張り上げるが、

「……なるほど、実は少女趣味か。部屋の中はぬいぐるみでいっぱい」と

「カズ、そう言う言い方はダメよ」

「そ、そんな事はないわよ!?!」

友香の反応は明らかに慌てており、

「まあ、気にするな。姉さんの部屋もそんな感じだから」

「……へ?」

和真は洋子の部屋も変わらないと言つとその言葉に教室全体が凍りつく。

第51問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

勝手に洋子先生像を作ってますが第9・5巻を見るとそんなに外れてない気もする不思議。（苦笑）

和真「それで何のためのあとがきだ？」

今日は最終確認にしようと思ひまして、現在募集している和真のヒロイン決定アンケートと投稿キャラ募集を第55問で締めたいと思います。

和真「投稿もなくなってきたしな」

そうですね。キャラ投稿は1人何名までと言う明確なものもないので新たに投稿してくれても構いません。

和真「新しいクラスメートは」常識人でありますように俺の邪魔をしないように」

まあ、無理でしょうね。（爆笑）

和真「おい。爆笑ってなんだよ!？」

第52問

「……洋子先生の部屋ってぬいぐるみだらけなの？」

「ん？ ああ、結構な数があるな」

「い、意外ね」

清美は和真の言葉に顔を引きつらせながら洋子の部屋の状況を確認すると和真は家庭科の教科書を開きながらあまり興味無さそうに言う。友香は顔を引きつらせたまま頷き、

「別に個人の趣味だからな。意外と言われても俺にはどうしようもない」

「……和、そう言えば、前にゲームセンターのUFOキャッチャーを荒らしてたよな？ あの時のぬいぐるみって洋子先生の部屋か？」

「ん？ ああ、姉さんが欲しいって言ったのはやったぞ。後は清水と中林にも男の俺が持っていて仕方ないからな」

和真は洋子の趣味だから自分には何も言う事はないと言うがトオルは和真と一緒にゲームセンター巡りをした事を思い出して和真に聞くと和真はそのためを取っていたわけではないと言うが、

「……流石、シスコンね」

「ええ、結城君のシスコンパワーは侮れないわ」

友香と清美は和真が改めてシスコンだと納得すると、

「それで結城君、被服系なら私はそれなりに点数を取れるし、わかる範囲なら教える事ができるけど」

「ん。そうだな。せっかくだし、教えて貰おうかな。できれば、手取り腰取り」

「……結城君、いい加減にしないと怒るわよ」

友香は改めて和真に勉強を教えようかと聞くと和真は冗談交じりで答え、友香はこめかみに青筋を浮かべる。

「……冗談です。でも、俺の勉強を見るよりは自分の勉強をした方が良くないか？ 今は自習時間なんだし、俺の勉強に付き合うよりは自分の点数を上げた方が効率は良くないか？」

「確かにそうね。でも、元々、試召戦争に参加する気はないと言っていた結城君を巻き込んだのは渡しなわけだし、それくらいはしないといけないでしょ」

「……代表様、男らしいな」

「結城君、やっぱり、私にケンカ売ってる？」

和真は友香の提案はありがたいが効率的に考えた方が良くというと友香は少しだけ照れくさそうに和真から視線を逸らして試召戦争に巻き込んだお詫びと言うと和真は友香の性格を彼なりに誉めたようだが友香にはバカにされているとしか感じなかったようであり、

「……そんな事はないぞ」

「それじゃあ、どうして、目を逸らすのかしら？」

和真は友香の様子に少し怯んだようで友香から視線を逸らすと友香は笑顔だがこめかみに青筋を浮かべたまま和真の肩をつかみ、

「さてと、私達もそろそろ、自分達の自習に戻ろうか？」

「そうだな。山下、俺、現代文、苦手だから教えてくれ」

「そうね。自習時間だし、それなりにまとまってわからないところは教えあった方が効率は良いわね」

一心、トオル、平太、清美の4人は友香の様子に和真を見捨てて新しい自分達の席に移動しはじめ、

「ちょ、お前ら、逃げるな！？」

「結城君、逃げるって言うのはどう言う意味かしら？」

和真は4人に助けを求めるが4人は振り返る事はなく、

「……和、実は俺達もお前の奇襲を一言も聞いてない事に腹を立ててたりするんだ」

「そう言う事だ」

4人は今回の作戦で1人で勝手に動いた和真へのお仕置きだと言う。

第53問

「……」

「あれ？ 結城くんに何があったの？」

放課後になると愛子と優子がCクラスの教室に顔を出す。和真の魂は抜けかけており、愛子は首を傾げると、

「工藤さん、木下さん、どうだったの？ と言っか、負けたらここに来ないか」

「ええ、勝ったわよ」

清美が2人にFクラスとAクラスの試召戦争の結果を聞き、優子は勝利報告をする。

「どんな風に決着がついたの？ 結城君の予想はどこまで合ってたの？」

「……」

友香は和真の予想の精度を確認しようと2人に聞くと優子は魂の抜けかけている和真に視線を向け、

「えーと、10割かな？」

「……そう言っても良いくらいの内容だったわ」

愛子は苦笑いを浮かべながら和真の予想は的中していると言うと優子は和真と言う人物の事が理解できないように眉間にしわを寄せ、

「10割？　って、どう言う事？」

「……Fクラスの代表者の順番に選択教科。それに結果も」

友香は首を傾げると優子は肩を落として言うと、

「それじゃあ、普通に勝ったって事で良いんだよね？　それなら、どうして、木下さんは納得いかなさそうなの？」

「それは……」

「それはね。Cクラスに結城君みたいな人間がいるなら、ぼく達は結城くんを警戒しないといけないわけでしょ。少なくともここまでの学年をひっかきまわしたFクラスの坂本くんは成績とは違った頭の良さを持っているわけだし、それを見破った結城くんにも対等の評価は付くわけでしょ。そして、結城くんがいるCクラスはFクラスより総合得点は高いわけだし、結城くんがやる気になったら、もしかしたらぼく達も不味いかなって」

清美は優子の様子に何かあったのかと聞くと優子は言いたくなさそうな表情をするが愛子は隠す事なく、和真の評価がAクラスでは高くなっていると言い、

「それは私達がAクラスに試召戦争を仕掛ける事を心配してるって事？」

「同盟は継続中だよ」

友香と清美は同盟を続けているから自分達がAクラスに仕掛ける事はないと言っが、

「それでも中にはいるのよ。特に今回のFクラスは奇襲や色々な手段を使ってきたわけだし、Cクラスも結局はBクラス相手に奇襲で勝ったから、同盟もあたし達Aクラスを油断させるためじゃないかって」

「そう言う事なんだよね。実際、ぼくは結城くんがそんな事をするようなタイプじゃないって知ってるし」

「それに関してはあたしも愛子と同じ意見なんだけど」

愛子と優子はクラスの中から出てきたCクラスを危険視する声に困っているようであり、

「でも、結城君がAクラスに仕掛ける事は絶対じゃないわよ。私達も結城君にケンカを売るつもりはないし……結城君にケンカを売るのはクラスをまとめる上で得策じゃないし」

「うん。カズだからね。Aクラスに試召戦争を仕掛けると言ったら、Cクラスの情報をすべてAクラスにリークしそудし」

「……情報リークはないでしょ。結城くんの得にならないし」

友香と清美は未だに魂の戻らない和真に視線を向けて言うと優子は2人の言葉を否定するがCクラスの生徒は今日の和真の様子から間違はなくAクラスとの同盟中に試召戦争を仕掛けた場合は和真が敵に回ると判断しているようでCクラス全員で優子にツッコミを入れ、

「な、何なの？」

優子はCクラス全員からの言葉に意味がわからずに驚きの声をあげる。

第54問

「そんな事があったんだ」

「……笑い事じゃない」

和真は日曜日の午前中に先日、宏美に約束させられた『ラ・ペディス』での新作クレープを前に試召戦争の話をため息交じりで宏美に話していると宏美はいつも和真にからかわれているせいもあるのか和真の困っている姿を見て楽しそうに笑っていると、

「豚野郎、ずいぶんと良い御身分ですわね」

「……清水、何の用だよ。俺のシフトは午後からなんだ。変ないちやもんを付かないでくれ」

美春は店を手伝っているのか、自分が働いているのに宏美と店で話をしている和真が気に入らないようでケンカを売ってくると和真は美春に因縁をつけられる事はしてないと言い、

「清水さん、お邪魔してるわね。新作、凄く美味しいわよ」

「ありがとうございます。中林さん」

「……お前、誰だよ」

宏美は和真と美春の様子にくすりと笑った後、美春に新作クレープの感想を言々と美春は和真と話していた時とは異なる笑顔で返事をし、和真は美春の変わりように肩を落とす。

「中林さん、忠告しておきますわ。この豚野郎だけは止めておいた方が良いでしょう。無害な顔をして」

「清水さん、割と結城君は有害よ。スケベだし、これで結構、鬼畜だし」

「……なあ。中林、どうして、俺は休日の貴重な時間を潰してまでわざわざバカにされないといけないんだ？」

しかし、美春は和真の様子など気にする事なく、宏美に和真は彼氏にするのは止めた方が良くと言うと宏美は美春の言葉に乗っ掛かり、和真はコーヒーを飲みながらそんな事を言われる意味がわからないと言った時、

「……？」

「そうよ。ここの新作クレープが美味しいって女子の間で評判なのよ」

「はい」

Fクラスの『吉井明久』、『姫路瑞希』、『島田美波』の3人が入店してくると、

「……豚野郎、お姉さまとデートですって、許せませんわ。美春の手で八つ裂きにしてやりますわ!!」

「ちょ、ちよつと、清水さん!？」

「……落ち着け。文月の生徒が殺人とか新聞沙汰になると姉さんに迷惑がかかるだろ。だいたい、あれはデートと言っよりは吉井がたかられてるだけだろ」

「そんな事は関係ありませんわ！！ 美春はあの豚野郎を八つ裂きにすると云う使命があるのです。お姉さまに色目を使う豚野郎はすべて美春の敵です。八つ裂きにして凍結、粉碎してやりますわ！！」

美春は明久を見た瞬間に背後から黒い殺意をまき散らし、明久に飛びかかる勢いで駆け出そうとすると和真は左手で美春の首根っこをつかみ止めるが美春の殺意はさらに膨れ上がって行き、

「……結城君、清水さんをどうするの？」

「一先ずは奥に連れて行って更衣室にでも閉じ込めて置く」

宏美は美春の様子に顔を引きつらせるが和真は気にする事なく美春の首根っこをつかんだまま立ち上がった時、

「……ユウキカズマ、キサマ、ワタシノカワイイマイエンジェルヲドウスルツモリダ」

「ゆ、結城君、マスターが暴走したから逃げて！？」

美春の父親であり、この店の店主が美春と似た殺意をまき散らしながら和真に向かってきており、店員が和真に逃げるように言うが、

「……店長も閉じ込めてきます。後、少し早いけどシフトに入りますね。中林、迷惑をかけた。お詫びに今日の分は奢る」

「あ、ありがとう。私こそ、迷惑をかけたみたいでゴメンね」

『え、ええ。人手が足りなくなりそうだから、キッチンの方、お願いします』

和真は今度は右手で店長の首根っこをつかむと宏美に謝り、2人を店の奥まで引きずって行く。

第55問

「カズ、宏美とのデート、楽しかった？」

「……だから、デートじゃないって言ってるだろ」

和真が登校してきたのを見つけて、清美はニヤニヤと笑いながら宏美とのデートの件を聞くと和真はデートと認識していないため、ため息を吐くが、

「なあ、実際、どうなんだよ。お前と中林って」

「中林さん？　って、ソフトテニス部の？　結城君って、中林さんと仲が良いの？」

「……だから、集まるな」

和真と清美の様子にわらわらといつものメンバーが集まり始め、それに便乗するように友香まで集まってきて和真は肩を落とす。

「俺とあいつで進展する事はないだろ。あいつのタイプって知的なクールな男だぞ」

「カズ、あんた、何で、宏美の好みの男のタイプを知ってるの？」

「実はすでに玉砕済みとか？」

和真は宏美の好みのタイプと自分はタイプが違うと言うがその言葉に清美は何か違和感を覚えたようでニヤニヤと笑い、トオルも清美

に続くが、

「面倒くさいから、もうそれで良い」

「これは何もないな。もっと、慌てるとかきよどるとか演技でも良
いからしろよ!!」

「そうだ。面白くないぞ!! そんなんじゃ世界を狙えないぞ」

「……世界なんか狙わないし、だいたい、何で俺が怒られないとい
けないんだ？」

和真はすでにこの話題が面倒になっているようであり、和真の対応
に一心と平太は叫ぶが和真は眉間にしわを寄せて怒られる理由はな
いと言うと、

「……中林さんのタイプって思いつきり、結城君、被ってるわよね
？」

「そうだけど、カズはクールに見えるけどそうでもないところが多
いでしょ。カズも自分を理解してるし、宏美も去年、カズがクール
じゃないってところは見てるからね。それより、だからこそ、危険
なのよ。一緒にバカをやってたはずなのにちよつとした事で印象が
変わるから……」

友香は宏美のタイプは和真と被っていると言うが清美は苦笑いを浮
かべた後、くすりと笑い、

「……最初の印象は最悪でも、男の子は直ぐに成長していくからね。
そう思わない。代表♪」

「や、山下さん、な、何をいきなり言い出すの!？」

「うん。この反応は自覚ありかな？」

「そ、そんなわけないでしょ!!」

清美は友香の耳元で今の和真はどう見えると聞くと友香は慌てて清美から距離をとり、友香の反応に清美はニヤニヤと笑う。

「山下、代表様、騒いでないで自分の席に戻れよ。俺はゆっくりとしたいんだ。お前らもだ」

「和、冷たい」

「冷たくて結構、俺は眠いんだ。だいたい、へーた、気持ち悪い事をするな」

和真は友香と清美の様子を気にかかる事なく、2人を追い払うように手を振ると平太は両手を口元に置き、和真を責めるように言うが和真は平太の様子に眉間にしわを寄せると、

「私は結城君に用があるの。山下さん達とは違うわ」

「代表、和へのデートのお誘いか？ 残念だが和は渡さないぞ」

「……わけのわからない事を言っていないで散れ」

友香は和真に用事があったようだが、トオル達男性陣はすでに悪のりを始めており、和真と友香の間に割り込み和真は意味がわからな

いよつで大きなため息を吐く。

第55問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

アンケート結果発表です。和真のお相手は友香です。

和真「代表様ね」

不満ですか？

和真「だって、代表様は小者と付き合ってたんだぞ。なんか趣味が悪い代表様に出られると考えると微妙？」

それも違うでしょ。後は投稿キャラを今回で締切ます。発表は登場時に。

投稿キャラクター

ホウショウ アラタ

北条 新

性別：男

所属：2 - C

得意教科：数学、物理（130～140点）、成長後：180点程度

苦手教科：古文、英語（80～90点）

総合得点：1480点、成長後：1560点

備考：和真のバイト仲間。和真と同じく『ラ・ペデイス』でバイトをしているため、美春とも顔見知りではあるが和真が美春に絡まれているときは生温かい目で見守っている。（かわり合わないようになっている）

和真が洋子先生や鉄人に捕まってバイトに遅れている間は1人でフロアを回す事も多い。

容姿は細身の長身でぱっと見は貧弱そうだけど筋肉質。（ボクサータイプ？）

性格は特にくせもなく平凡な男の子に見えるが美春に巻き込まれる和真を見捨てるあたり図太い。

召喚獣：二丁拳銃、カウボーイの服

投稿者：リンクさん

アマガサキナツメ

尼崎棗

所属 2 - C

性別 女

得意教科：英語（213点）、世界史（184点）

苦手教科：数学、物理、化学（50～60点）

総合科目：1453点

備考：容姿に目立つものはないが騒ぎが好きな女の子で面白そうだと判断するとすぐに首を突っ込む。新聞部のエースで、康太には劣

るが強い情報網を持つ。カメラテクもたいしたもの였다。たまに土屋康太が唸るほどのものを撮ることもある。

和真や清美と言ったCクラスの主要メンバーとは1年時に同じクラスだったが和真が苦手でありグループに接近してこない。

普段からデジカメと小型録音機を懐にしのばせており、スクープを探している。

実は意外と真面目で涙もろい、人情家でもある。

将来は報道関係を目指しており、とくに外国語を熱心に勉強している。そのため、英語と現代社会に伸び代有り。

召喚獣：レザードアーマー、ロングボウ

投稿者：GAUさん

第56問（前書き）

投稿キャラクターが登場します。

第56問

「違うわよ。家庭科の回復試験はどうだったのよ？ 私は勉強を見
たわけだし、気になるでしょ」

「ああ。あれか……見ない方が良いぞ」

友香は和真の家庭科の補給試験がどうなったのかと聞くと和真は友
香から視線を逸らし、

「これはやっちゃったかな？」

「……和、お前は良い奴だったよ」

「和真、死にフラグだな……ん？ どうかしたか？」

清美は和真の様子に和真の点数が減少したと思ったようで苦笑いを
浮かべると一心は悪のりを始めようとした時、いつもとは違った声
が聞こえその声の主に視線が集まるとそこには同じクラスの『北条
新』が立っており、新は視線が集まる意味がわからないように首を
傾げると、

「新、どうかしたか？」

「ん。これ、店長が昨日の暴走のお詫びだつてさ」

「お詫びとか言う前にあのおかしな暴走を止めて欲しいな。もしく
は清水がシフトにいる時間帯だけでも時給を上げてくれるとか」

「まっただ」

和真は新に何の用だと聞き、新は『ラ・ペデイス』の名前が入った箱を和真に渡すと2人で苦笑いを浮かべる。

「カズ、北条くんと知り合い？」

「ああ。バイト仲間」

「なら、何で、今まで教室で和に話しかけなかったんだよ？」

「それは和真の周りに行くとか厄介事に巻き込まれそうだったから様子見。現に巻き込まれてたし」

「こう言う奴なんだ」

清美は和真と新が話している姿が不思議なようで首を傾げると和真は新は自分と一緒に『ラ・ペデイス』でバイトをしていると言うと平太は2年になってからの新の行動に首を傾げると新は悪気などまったくないようで笑顔でとばかりはゴメンだと言うと和真は肩を落とし、

「それで、用件はこれだけか？」

「ああ。後はたいした事じゃないんだけど……吉井がラブレターを貰ったと言う噂が！？」

「ほ、北条くん、それって本当？」

和真は箱を開けながら箱の中身を確認した後、モンブランを取り出

しながら新に聞くと新は和真の天敵である明久がラブレターを貰ったと言う噂があると言うと新の話に興味が湧いたのか1人の女子生徒が新に飛び付き事実を確かめようとするが、

「棗、北条くんの首が絞まってるよ」

「尼崎、暴れるな。モンブランに埃が舞う」

「……結城君、そこじゃなくて北条君を心配するべきじゃないの？」

和真と清美は女子生徒と知り合いのようであり、女子生徒と呼ぶと友香は和真の言葉にため息を吐くと、

「そ、そうだね。わたしったら、スクープの匂いについ」

女子生徒『尼崎棗』は舌を出して反省の色を見せる。

「……棗、それは良いから手を離しなよ。北条くんの顔が蒼くなってるから」

「どうやら、死にフラグは新のだったようだな」

「和、モンブランを食いながら言うな」

しかし、棗の腕は新の首を絞めたままであり、清美は棗の手を新の手から放す様子を和真はモンブランを頬張りながら人事のように言い、

「しかし、バカ相手にラブレターね。代表様と言い、その女と言い、Aクラス代表の霧島と言い、男の趣味が悪いのがそろってるな」

「結城君、いったいどう言うことかしら？」

和真は友香を見ながら言う「友香の額にはくつきりと青筋が浮かぶが、

「ああ、そうだ。代表様、家庭科のテストなんだけど助かった。代表様のおかげで大部点数を稼げた」

「……そ、そう。それは良かったわね」

「「「なんじゃこりゃ!?!」」」

和真は気にする事なく、家庭科の答案用紙を取り出すと点数は34点と書かれており、友香は予想以上の点数に顔を引きつらせトオル、一心、平太の3人は和真の解答题用紙を見て驚きの声をあげると、

「……カズ、あんたはどうして、無意識に他人のプライドを打ち砕くの？」

「いや、そんなつもりはない。今回は代表様が教えてくれたところが出たからな。元々、家庭科は悪いわけじゃないし、感謝してる。お礼に何か選んでくれ」

「ええ、いただくわ」

清美は和真を見てため息を吐くが和真はそんなつもりはないと言うと友香に箱からケーキを取ってくれと言う。

第56問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

投稿キャラを出させていただきました。

和真「選考理由は？」

そうですね。まずは新君は和真は勤労少年とさせていたでいるのでバイト仲間は欲しいと思っていました。そこを突かれました。性格も話の内容から紛れ込ませやすそうだったからです。

棗さんは和真や他のメンバーとの関係がしっかりしていることです。それに和真を少し苦手に思っているのも面白そうだったからですかね？

和真「尼崎とは去年も同じクラスなんだよな」

はい。その中で和真を苦手だと思っ事がありました。それも考えています。面白くできたらいいなあ。

第57問

「で、北条くん、吉井くんがラブレターを貰ったって言うのは」

「落ち着け、これ以上、首を絞められてたまるか」

棗は和真の補給試験の事より、明久のラブレターの方が気になるように新につかみかかるように聞くと新は棗の手を外させると、

「北条、ここで吉井の話をするのは和の機嫌が悪くならないか？」

「いや、大丈夫だろ。これはこれで吉井が痛めつけられる流れだし、どうせ、どっちに転んだって吉井を殺すためにFクラスは暴動が起きるんだから知らないより、知ってる方が心構えができるだろ」

「……全然、納得できないんだけどな。いつそ、本当に死んじまわないかな？ いや、ダメだ。そうなると報道陣がきて姉さんの仕事が増える」

トオルが明久のラブレターの話のを和真に聞かせるのは危険じゃないかと言うが新はどっちでもあまり変わらないと言うと和真はぶつぶつと黒い殺意をまき散らしており、

「……私は結城君がいつか、高橋先生のために人を殺しそうな気がするわ」

「それに関しては大丈夫よ。人殺しなんかになったら、洋子先生に迷惑がかかるから」

「山下の方が正しそうだな」

友香は和真の様子に顔を引きつらせて言う。清美とトオルは友香の言葉を否定する。

「それより、棗、どうしたのよ。あんたがカズがいるところに突撃してくるなんて、あんた、カズが苦手でしょ」

「……」

「……尼崎さん、どうして隠れるの？」

清美は棗に和真との相性が悪くなかったかと聞くと、棗は明久のラブレター事件で和真の事は二の次になっていたようだ。が少し冷静になったように、清美の後ろに移動し、友香は首を傾げると、

「いやあ、わたし、1年生の時に今見たく、周りが見えなくなつて突撃して結城君を怒らせてから苦手と言うか」

「ああ、そんな事もあつたな」

棗は苦笑いを浮かべながら和真が苦手だと言うと、一心はその時の事を思い出したように、苦笑いを浮かべ、

「結城君を怒らせた？ 高橋先生を怒らせたの？」

「……その思考に行きつくあたり、代表様も和に毒されてるな」

「そうね」

友香は和真が怒る理由に1つしか思いつかなかったようで苦笑いを浮かべると平太は友香も和真に毒されてきていると笑うと清美は頷くが、

「尼崎さんの事情はわかったわ。でも、人の前から隠れるのは失礼よ。結城君の怒る理由なんてだいたい、予想が付くんだからもう大丈夫でしょ」

「……代表様、俺はバカにされてる気しかないんだけど」

友香はため息を吐きながら気をつければどうにかなると言っていると和真はため息を吐き、

「別に特におかしな事をしなければ怒んないよ。俺をなんだと思ってるんだ」

「そうだな。だいたい、女子を怒るよりは今は吉井への殺意で和は動いているからな。安全だ」

和真は棗を怒るような事はしないとすると平太は棗を怒るよりは和真には殺るべき相手がいると冗談交じりで言うが、

「正直、最近はそれが1番、笑えないんだけどな」

「……確かにそうだな」

トオルと一心は和真の行動から冗談で済まなさそうだと苦笑いを浮かべた時、朝のSHR開始の鐘が鳴り、

「わけのわからない事を言っていないで席に戻れ」

「そうね」

和真と友香は全員に自分の席に戻るようにつづ。

第58問

「……始まったな」

「そうね。結城君、抑えてよ」

S H Rが終わると廊下は大騒ぎする声が響き、一心は苦笑いを浮かべると友香は額に青筋が浮かび始めている和真に落ち着くように言うが、

「何を言ってるんだ？ 代表様、俺は落ち着いているよ」

「……シャープ、折れたね」

「……折ったな」

和真は落ち着いた声で言うが和真の持っていたシャープペンシルは中心から真っ二つに折れ、和真の様子にトオルと清美は顔を引きつらせると、

「しかし、ラブレターを貰っただけで暴動ってのはどうなんだ？」

「あれ？ 北条くん、それって勝ち組の発言っぽくない？」

新はFクラスの行動に苦笑いを浮かべるがその言葉は棗の興味を引いたようで棗は目を輝かせながら新に飛びかかるように聞く。

「そう言うわけじゃないけど、俺と和真のバイト先ってそれなりに有名店だからな。他校の男は良く見えるってヤツだ。まあ、俺より

「はあっち」

「……うん。確かにバイトの衣装をきつちりときてるカズは見た目は悪くないしね。何より、洋子先生が関わってこないから理性的な感じするし」

「後はウチの店の名物変態父娘を軽くないすからな」

「……確かに、あの時の和は男でも惚れるかも知れない」

新はバイト先で他校の女子生徒からラブレターを貰った事があると白状しながらも額に青筋を浮かべている和真を指差すと清美は和真のバイト先での姿を思い出したようで苦笑いを浮かべると新は些細な事で人外化を始める清水父娘の暴走も和真がもてる原因だと言うと平太は大きく頷き、

「あれ？ その時って北条くんって何してるの？」

「何って？ 接客、常連客にもなるとあんな暴走でも動じないから」

「……北条くん、図太いって言われた事ない？」

「ん。和真からはよく言われる」

清美は清水父娘が暴走している店の様子を思い出したようでその時の新しい事を聞くと新は普通に働いていると答えると清美は新の性格がわかってきたようで眉間にしわを寄せて言う「新は特に気にする事なく答え、

「……結城君が他校の女子からもてるのはわかったけど、その子達

が今の結城君を見たら幻滅するわね」

「だらうな」

友香は新の事より額に青筋だけでは治まらなくなり、背後から禍々しいくらいの怒りのオーラを吹き出し始めた和真の様子に顔を引きつらせると一心は和真から少し距離を取る。

「……」

「カズ、ちょっと、授業が始まるけど、どこに行くつもり？」

和真はゆっくりと席から立ち上がるとその姿に清美は和真がとうとうブチ切れたと思ったようで顔を引きつらせながら和真の行く先を聞くと、

「ちょっと、ゴミ掃除をしてくる」

「そうか。気をつけるよ」

「ああ」

和真は怒りを通り越したのか爽やかな笑みを浮かべてFクラスをゴミと言いつき、Cクラスの空気が凍りつくような新だけが動じる事なく和真を見送り、

『こ、こいつ、何だ！？』

『ひ、引け！！ 撤退だ！！ 我らは異端者の吉井をグロテスクに殺すまでは死ねないのだ！？』

和真が廊下に出て直ぐに廊下からはFクラスの生徒らしい声が途切れ出し、

「……北条君、止めないのね」

「止めるだけ無駄だからな」

友香は顔を引きつらせて新に和真を止めるように言っが新は無駄な事をするつもりはないと言いたげにため息を吐く。

第59問

「……結城、助かるんだが、授業はどうした？」

「気にしないでください。この分はしっかりと補習でも何でも受けますよ」

「そ、そうか。まあ、お前の普段の態度から考えれば補習もないだろうな」

「そうですね？ それでは西村先生、俺は失礼します」

「あ、ああ。気をつけて行ってくるんだぞ」

和真は背後に真つ黒なものをまといながら捕まえたFクラスの生徒達を生徒指導室に引き渡すと直ぐにまだ騒ぎを起こしているFクラスを捕まえるために生徒指導室を出て行き、流石の西村教諭も和真の様子に和真の背中を見送る事しかできない。

「アンタのせいで『彼女にしたいくない女子ランキング』の3位になつてるんだからあつ！！」

「さらばだつ！！」

『吉井明久』はラブレターをクラスメート達から守るために逃走をしているなか、同じクラスである『島田美波』に見つかり、彼女の様子に生命の危険を感じたようで全力で逃げ出そうとするが、

「ゆ、結城君！？」

「……前に言つたよな。他人の迷惑を考えて動けつて」

明久は美波から逃げ出そうと振り返った瞬間に和真にぶつかり、床に腰を付くと和真の顔を見上げて顔を引きつらせるが和真は気にする事なく明久の胸倉をつかんで無理やり立ちあがらせると、

「あんた、よくやったわ。さあ、アキ、観念しなさい」

「ちょ、ちよつと、結城君、放して！？ このままじゃ、僕は美波に殺されちゃうよ！？」

「……こい」

美波は和真に明久を引き渡すように言うが和真は美波の言葉を聞くきなどなく、明久を引きずって歩きだそうとする。

「ちよつと、アンタ、アキを渡しなさいよ！！　ウチはアキのせいで『彼女にしたくない女子ランキング』の3位になってるんだから、それなのにあき1人だけ幸せをつかむなんて許せないのよ！！」

「……知るか。そんな事で青筋を立てているから、『彼女にしたくない女子ランキング』とかくだらないものの上位になるんだろ。だいたい、他人のラブレターを破り捨てようとするような奴に彼氏なんかできるかよ。話は終わりだ。さっさとこい。クズ」

「ちょ、ちよつと、放してよ！？　ボクは何もしてないよ！？」

美波は和真が自分の話を聞かずに明久を連れて行こうとする姿に和真の腕をつかむが和真は美波の手を払うと彼女の言葉を斬り捨て明

久の首をつかんだまま進んで行くが、

「ちょっと、あんた、ウチにケンカを売ってるわけ？」

「勘違いするな。ケンカを売ってるのはお前だ。俺はお前にこのクスを引き渡せと脅しをかけられる覚えもない」

美波は和真の態度に和真を睨みつけるが和真には言いがかりでしかないため、彼女の言葉に従うわけはなく、

「ちょっと、結城君！？ ぼ、僕は僕の幸せを妬むクスで最低なクラスメートから逃げないといけないんだ！？ そうしないと僕はグロテスクに殺されちゃうんだよ！！」

「知るか。お前が死のうが俺の知った事じゃ……いや、お前みたいなクスでも学内でウチの生徒に殺されると姉さんの迷惑になるな」

明久は和真に引きずられながら自分はこんなところにいると殺されてしまうと叫ぶと和真は最初は明久がどうなるうと知った事でないと言いながらも洋子に迷惑がかかると考え始め、

「そ、そうだよ。学内で殺人とかは不味いから、僕を助けると思って」

「それとこれとは別だ。お前が逃走の途中で外したサッカーネットや倒した古書保管庫の本棚、カッターが突き刺さって廊下の壁、割れた蛍光灯。やる事は他にもあるんだからな」

明久は和真に自分を逃がして欲しいと言うが和真は明久の言葉を聞きいれる事なく明久を引きずって行く。

第60問

「何で僕がこんな事を？」

「何で？ 誰が見たってお前が当事者だろ。お前らがバカな事をやって壊したんだからな」

和真と明久は被害の1番大きい古書保管庫で散乱した本を片付けていると明久は和真から逃げる事を諦めたようだが自分が壊れた学校の備品の修理をさせられているのが納得が行ってないようであり、ため息を吐くと不機嫌そうな表情の和真が良くそんな事を言えるなと言う。

「だからと言って、僕は被害者なのに僕は僕の幸せを守ろうとしただけなのに……結城君、先にラブレター読んでも良いかな？」

「そんなもの、後に決まってるだろ。だいたい、被害者？ 勘違いするなよ。少なくともお前らバカクラス以外から見ればお前も加害者に決まってるだろ。バカ騒ぎをして学園の備品を壊して、それを使う人間から見たらお前もバカクラスも一緒だ。現にお前のせいで俺は本来やらなくても良い。備品の修理をしてるんだからな。くだらない事を言っでないで手を動かせよ」

明久は自分は悪くないと言うが和真はその言葉を斬り捨てると明久に早く作業を続けるように言い、

「でもさ。これだって僕と結城君でやるのはそれこそ違っじゃないか？」

「……本来ならお前らバカクラス全体でやって貰いたいところだ
どな。それをやると被害が拡大するだけだろ。後、片づけが嫌なら
お前も西村先生のところに行ってこいよ。一応はお前は追いかけら
れてる方だったから、補習はなしって事で話が付いてるんだ。お前
の言う幸せを壊したいって奴らの中で殺意を向けられながら補習を
受けたらってなら別だけどな。補習が終わればまた、地獄の追いか
けっこだろうがな」

「……さあ、やろうか。結城君」

明久は散乱した本を見てため息を吐くと和真はそれなら補習室に行
って来いと言うと明久は先ほどから自分の命を狙ってきたFクラス
生徒を撃退している和真がそばにいる方が安心だと思ったように作
業を再開させる。

「ねえ。これなら召喚獣を使ってやろうよ。僕は観察処分者なんだ
から、こう言う時にこそ、使わないと誰かヒマそうな先生を!？」

「……お前、ふざけてるのか？ この学園にヒマな教師がいると思
ってるのか？」

明久は作業を再開してしばらくすると良い事を思いついたと言いた
げに教師を呼んで召喚獣を使おうと言おうとするがその言葉の途中
で和真が明久の胸倉をつかみ、

「な、何でだよ。僕は観察処分者なんだから、それくらい」

「観察処分者の役割を履き違えるなよ。観察処分者はあくまで教師
や学園の雑用をするのが役割だ。学園や教師の都合で仕事を与えら
れるって事だ。この件はお前らがバカ騒ぎをした結果であり、お前

らが責任を持つてやらないといけない事だ。それを自分の都合の良
いようにとらえるなよ！！ ヒマな教師がいる？ お前はどれだけ
教師の仕事を知っている？ 勤務時間を終えた後に教師が家に持ち
帰った仕事を何時までやってるか知ってるのか！！」

明久は和真が怒っている理由がわからないようであり、その態度は
さらに和真の怒りに油を注ぐ事になる。

「だって、それが先生の仕事だろ」

「てめえ」

「結城君、ストップ！！」

明久はそれをやるのが教師の仕事だと言い、その言葉に和真はそれ
でも手をあげる事は抑えていたのだが明久を殴り飛ばそうとした時、
友香が和真の腕をつかみ、

「……古書保管庫の本、大丈夫か？」

「流石にこれはダメになった本もあるんじゃないか？」

「カズ、先生から西村先生から許可貰って手伝いにきたよ」

友香以外にもいつものメンバーに新と棗を追加したCクラスの生徒
達が古書保管庫に入ってくる。

第61問

「和真、少し頭を冷やしてこい。西村先生からこれを預かってるから、購買で飲み物でも買ってきて来い」

「……ああ。悪い」

「代表、人数が多いから、カズに付いて行つて」

「わ、私？ 山下さんの方が良くない？ ……わかったわ」

新は明久の胸倉から和真の手を離させると購買で買い物をしてくるように言つと和真は少し頭が冷えてきたようで古書保管庫を出て行き、清美は和真の様子を見て友香に付いて行つて欲しいと言つと友香は自分よりは清美の方が良いと言つが清美達の表情を見て何かを察したようであり、和真を追いかけて古書保管庫を出て行き、

「……吉井、ずいぶんと勝手な事を言つてくれたよな」

「な、何だよ？ だ、だって、それが先生の仕事だろ」

トオルは和真と明久の話が聞こえていたようであり、去年から和真との付き合いもあるメンバーは明久の言葉にかなり腹を立てているように見え明久は顔を引きつらせながら言い返すと、

「……吉井くん、その言葉、君の家族が先生でも同じ事を言える？ 君の家族が家に帰ってから、毎日、日が変わるまで仕事して、朝も同じように早く起きて学校に行く姿を見てたら、同じ事を言える？」

「そ、それは、言えないかも知れないけど、あ、あのさ。結城君の家族に先生がいるの？」

清美は落ち着いた声で明久の家族に先生がいた時、明久は同じ事を言えるかと聞くと明久は和真が怒った意味を察したようで聞き返す。

「……学年主任の洋子先生だ。まあ、関係で言えば従姉弟だけだな。和は家で洋子先生が夜遅くまで仕事しているのを見て、洋子先生のフォローをしようといういろいろやってるわけだしな。これや西村先生の手伝いもその1つだ。先生達だってお前達バカと一緒に各自の生活があるんだ。それを無視して迷惑をかけてそれを仕事だからか？ ずいぶんと勝手な言い草だな」

「事の発端は吉井くんがラブレターを貰った事なのかも知れないけどさ。吉井くんはクラスのみんなにラブレター見るのを邪魔されて文句を言いたいかも知れないけど、結城くんも一緒だよ。まあ、わたしも吉井くんと一緒に結城くんを怒らせた事のある身としては強く言えないんだけどね」

一心はどこかで明久に言っても無駄だと思っているのか本を片付けながら言い、棗は苦笑いを浮かべると、

「それで棗は反省したでしょ」

「吉井、お前はとうするつもりだ？ また、同じような事をして和を怒らせるなら、俺達はお前達バカクラスを許さない。実際、俺達は何の努力もしてないお前らバカクラスにバカや豚扱いされてはらわた煮えくり返ってる奴らもいるんだからな。この後、試召戦争でFクラスを叩きのめしたって良いんだ。悪いけど、そっちの自慢の

代表様の軍略程度、和は見破る」

「そ、それは困るよ。これ以上、設備が落としたら、姫路さんの体調が……」

清美は棗は反省しているから和真はその後には彼女を責めるような事を言っていないと言うと平太はFクラスがCクラスを罵倒した事を盾にしてFクラスに攻め込んでも良い言い、明久はこれ以上の設備の劣化はクラスメートの『姫路瑞希』の体調に関わると表情を曇らせる。

「吉井くん、わたしは新聞部なんだけどそれなりにFクラスが試召戦争を仕掛けた理由も調べさせて貰ったから、言わせて貰うけどいきなり試召戦争を仕掛けたけど本当にやるべき事はそれだったの？君は姫路さんの体調を気にしたのかも知れないけど他のクラスに姫路さんと同じくらいに身体の弱い生徒がいたらどうするの？」

「ど、どう言う事？」

「ここは教育機関なんだ。設備で体調を崩す生徒が出てくるなら、それを改善するのは当然の要求だろ。死人なんか出たらスポンサー収入で成り立つてる試験校は終わりなんだからな」

「……北条くん、ずいぶんと冷めた言い方ね」

棗は明久のやりたい事には共感する部分はあるが前提が間違っていると言うと明久は首を傾げると新は文月学園の弱みを逆手に取れと言い、清美は苦笑いを浮かべるが、

「はっきりと言えばFクラスが取った行動は考えが短絡的、Aクラ

スの木下や工藤から試召戦争の話は聞いたが姫路が言った『Fクラスが好き。人のために頑張れるFクラスが好き』って言葉、お前、その言葉に顔向けできるのか？ 少なくともお前達がやってる行動は人のためじゃないだろ。ただ、自分達のために動いてる。それは優しいじゃない。甘いだけだ。そんな人間ばかりだから、お前はラブレター貰っただけで命が狙われる。和だって、洋子先生のために動いてるが面倒だと言いながらも泥をかぶるような事をしてるから、自分達で言うのもなんだが自分達に得はないのに俺達みたいにこんな面倒な事を手伝いにくる人間もいる。お前らはお互いに足を引張るだけだろ？」

「トオルが恥ずかしい事を言ってる！？」

「……山下、茶化すな」

トオルは真面目な表情で明久に言うと言清美はトオルをからかい、一心は清美の行動にため息を吐き、

「……そうかも知れないね」

「少し考えを改めなよ。だって、吉井くんは『姫路さんのために』に試召戦争を頑張ったんでしょ。少なくとも誰がくれたかわからないラブレターに浮かれてて良いのかな？」

「な、な、何を言ってるの！？」

「わかりやすいな」

「そうね。姫路さん、可愛いしね。守ってあげたくなるし」

「ちょ、ちょっと！？　お、おかしい勘違いをしないで！？」

明久は和真を助けにきたCクラスメンバーとFクラスの違いに小さく頷くと棗は明久をからかうように言い、その言葉に明久は顔を真っ赤にして慌て出し、そんな明久の慌てように古書保管庫には笑い声が響く。

第62問

「……代表様、悪かった」

「謝るならあんな事は止めてよね。吉井くんを感情に任せて殴ったらFクラスと変わらないでしょ。それに結城君が停学にでもなったら、それこそ、高橋先生に迷惑がかかるわよ」

「……そうだな」

和真の隣に友香が並び、2人で購買へ向かって歩いていると和真は友香が止めてくれなければ明久を殴りつけていた事を自覚しているように友香に謝ると友香は怒っているように少し語尾を強くして言う。と和真も自覚があるため、弁明するような事はしない。

「ねえ。結城君、ちょっと込み入った事を聞いて良いかな？」

「……何だ？」

「いや、まだ、私は結城君と同じクラスになって1週間だし、聞いて良いのかな？ とは思っただけだね。結城君と高橋先生の中に何があったのかな？ って、結城君の高橋先生第一主義って……」

「異常だっって言っただろ？」

「う、うん」

友香は和真の行動が理解できない部分もあるため、和真に洋子との話を聞こうとすると和真は少し困ったように笑い、

「……ちよつとくらいなら遅れても文句は言われないかな？」

「う、うん。たぶん、結城君の頭が冷えるまで戻って行かない方がよさそうだし」

「それもそうだな。なら、屋上にでも行くか？ 廊下で話し込んでたら怒られそうだから」

「そうね」

和真は何故か友香に話す気になったように友香を屋上に誘うと友香は頷き、2人で屋上に向かって歩き出す。

「……天気良いな。何で、こんな中、授業や設備修理をしなきゃいけないんだ？」

「文句を言わない。学生の本分は勉強でしょ」

和真と友香が屋上のドアを開けると空は青く春の日差しには少し強く、和真は目を細めて学校をサボりたいと言うと友香はため息を吐き、

「わかってるよ。さてと、何から話したら良いかな？ って、まあ、あまり話す事もないか」

和真は苦笑いを浮かべると友香に話す内容を少し整理し、

「俺が今、姉さんと一緒に住んでるって事は知ってるよな？」

「ええ。どうしてもは知らないけど」

「2年前、俺の両親が事故で死んだんだ。それから、姉さんは俺の保護者になってる。親戚連中も冷たいもんで誰も食いぶちを増やしたがりなかったからな」

「えっ！？　ちょ、ちょっと待ってよ！？　何で、そんな事をあつさりと話しちゃうのよ？」

「何で？　よくある話だろ？　たまたま、それが俺に起きただけ、それだけだ」

友香に洋子と自分が一緒に住んでいる事を確認した後、自分の両親が事故で死んだと言うと友香は聞かされた事実はどう反応して良いのかわからないように慌てるが和真は対照的に酷く冷静に見える。

「で、でも」

「普通に考えてみる。良い年の娘が結婚もしてないのにおかしなこぶを付けた。収入もない生きる術も知らない無駄な食いぶちを抱え込んだんだぞ。親戚からはおかしな事を言うのも出てきた。それでも姉さんは俺に手を伸ばしてくれたんだ」

「……」

「俺に返せるもの何て何もない。だから、本当は進学しないで就職して生きる術を探そうと思った。姉さんにこれ以上の迷惑はかけられない……かけちゃいけないと思ったから、でも、『姉さんは笑って『家族』なんだからそんな事は気にしないで良い。弟がお姉ちゃんに気を使うのは生意気です。甘えなさい』と言ってくれたんだ。」

その言葉は俺の中でかけがえのないものだから」

「……そうなんだ」

和真は自分が1人になった時、洋子が手を伸ばしてくれた事で自分にとって大切なものだと言うと友香は和真が洋子を大切に思っている事を理解したようで頷き、

「それじゃあ、高橋先生に迷惑をかけないようにしないといけないわね。結城君、高橋先生の事になると周りが見えなくなるから、そのせいで騒ぎになっても困るからね」

「ああ。気を付けるよ……そろそろ、帰らないと不味いな」

「そうね。野口君辺りが面倒だとか言ってるさだし」

友香は和真に少し冷静になるように言うと和真は苦笑いを浮かべて買い物を済ませて古書保管庫に戻ろうと言うと友香は和真の言葉に頷くと、

「それじゃあ、行きますか？」

「ええ……恩人か？ 敵わないかな？」

「ん？ 代表様、何か言ったか？」

「何も？」

和真は購買に向かって歩き始めると友香は和真の話に何か思った事があるのか小さな声で呟く。

第63問

「悪いな。遅れた」

「ただいま」

購買で飲み物を買ってきた和真と友香が古書保管庫のドアを開けると、

「……えーと、何があつたんだ？」

「さ、さあ？」

なぜか明久は床に膝を付いて涙を流しており、その前にはFクラス代表の『坂本雄二』と『姫路瑞希』が立っており、状況について行けない和真と友香は首を傾げる。

「えーと……簡単に言つとね。ラブレターを書いたのは姫路さんで落としちゃったのを拾ってくれた人が気を利かせて吉井くんの靴箱に入れてくれたみたいなんだけど」

「……姫路本人にまだ渡す勇気がなかったわけか？　それで吉井に名乗らずにラブレターを処分したと」

「それで、ラブレターは？」

「あれ」

清美は和真と友香の耳元で今の状況を説明すると和真と友香は全て

を察したようで苦笑いを浮かべてラブレターの結末を聞くと細かく破かれ修復不可能なラブレターだったものが明久の膝を付いた床の前に散らばっており、

「……まあ、何と言ったら良いかわからないが、吉井、作業続けるぞ。遊んでる時間はないんだ。ここを終わらせたらカッターの刺さった壁の修理もあるからな」

「ちょっと、何か優しい言葉をかけてくれるとか無いの!？」

「いや、それ、俺のせいじゃないし」

和真は明久のダメージより、作業を優先すると明久は血涙を流しながら和真に向かい叫ぶが和真の反応は冷たく、

「姫路さんとバカクラス代表、あんた達は邪魔してきたのか？ 手伝う気がないなら消えてくれ。邪魔でしかないから」

「い、いえ、お手伝いさせていただきます。私のせいですし」

和真は雄二と瑞希に邪魔するなら出て行けと言うと瑞希は古書保管庫の整理を手伝うと言うが、

「それじゃあ、俺はクラスに戻るか。せいぜい、頑張れよ」

雄二は自分には関係ないと言って古書保管庫を出て行こうとする。

「待て。雄二、元をたどれば、雄二が僕がラブレターを貰った事をクラスにばらしたからこんな騒ぎになったんじゃないか!! 責任とって手伝えよ!!」

「は？ 知らねえよ。それに良いか。俺は明久、お前の幸せがム力つくんだ」

明久はそんな雄二の態度にラブレターを失った恨みもあるため、雄二に責任を取れと言うが雄二は明久の言葉を鼻で笑って古書保管庫を出て行こうとするが、

「……そうか。この騒ぎの原因はバカクラス代表。お前か？」

「……スイッチ入ったね」

「そうね。姫路さん、危険だから避難しましょうか？」

「え？ え？ 何があったんですか？」

明久と雄二のやり取りは目覚めさせてはいけない和真の『シスコン力』を覚醒させる事になり、和真の背後には禍々しいくらいの漆黒の殺意が浮かび上がり、友香と清美は免疫のない瑞希を両脇から抱えて彼女を後ろに下らせると、

「雄二、かかったな。今の言葉で貴様は終わりだ！！」

「は？ バカ久、お前は何を言ってるんだ！？」

「……バカクラス代表、今から放課後まで西村先生の補習授業か作業を手伝うかを選べ」

明久は口元を緩ませて雄二に向かい言い、雄二は明久の言葉の意味がわからずに明久をバカにした瞬間、和真の右手が雄二の胸倉をつ

かむと雄二の身体は勢いよく壁に押し付けられ、

「それともお前を嫁に渡して嫁に手伝わせるか？　ダメ亭主の責任を取るのは嫁の役目だしな」

「て、手伝わせていただきます」

雄二は和真の様子に今まで生きていて感じた事のない恐怖を感じたように顔を引きつらせながら作業を手伝うと頷き、

「シスコン最凶説」

「……期待はしたけど雄二って、昔、悪鬼羅刹とか言われて恐れられてたんじゃなかったかな？」

「まあ、今更だな。あの状態の和は西村先生とも対等に戦いそうだし」

和真と雄二の姿に明久は顔を引きつらせるがＣクラスの生徒達は今更と言いたげに作業を再開して行く。

第64問

「しかし……」

「どうかしましたか？」

「何々、カズ、今度は姫路さんに魔の手を？」

和真は作業を手伝っている瑞希を見て何か言いたげな表情をすると清美は和真をからかうように笑うが、

「……山下、俺が見境ないみたいに言うな。確かに姫路さんはかわいいけどな。そんなつもりはないよ」

「は、はわわ」

「そう言うなら、もう少し言葉を選んだらどうかしら」

和真は清美の言葉を否定しながらも瑞希にかわいいと言い、瑞希は面と向かって言われる事もあまりないようで顔を真っ赤にすると友香は少し不機嫌そうに和真に言葉を選ぶように言つと、

「それは悪かった。気を付けるよ。代表様」

「あ、あの。それで私に何か御用ですか？」

和真は友香の様子に首を傾げると瑞希は和真に自分に声をかけた理由を聞き返す。

「いや、ラブレターを破くのは姫路さんのものだったから、俺が言うのはおかしいのかも知れないけど、吉井が好きならそのまま読ませるのがベストだったんじゃないのか？」

「カズ、あんた、わかってないわね。乙女心は複雑なのよ」

「そ、そうですよ」

和真は明久へのラブレターで間違いないならそのままにした方が良かったんじゃないかと言うと瑞希と清美は男の和真にはわからないと言いたげに言うが、

「いや、自分が貰ったラブレターを破く女の子に好意って持てるのか？」

「た、確かにそうかもな」

和真は純粹に思った疑問を言うとトオルは苦笑いを浮かべながら頷き、

「あっ！？　そ、それじゃあ、あ、あの」

「それに姫路さんって最後の踏ん切りがつかなくてラブレターを持ち歩いていたんだろ。自分では渡せなさそうだし、むしろ、チャンスだった気がして」

「そう言われると結城君の言う通り、チャンスを潰した気がしなくもないわね」

和真とトオル、2人の男の子の言葉に瑞希は驚きの声を上げると和

真は瑞希の性格が何となく理解出来たようで瑞希は自分のチャンス
を潰した気がすると言うと友香は和真の言葉に頷く。

「で、ですけど、あんな形だと」

「いや……あのさ。聞いて良いかわからないんだけど、姫路さんは
Fクラスが試召戦争を仕掛けた意味って知ってる？」

「は、はい。吉井くんが私の体調を心配してくれて」

瑞希はそれでも事故のような告白は嫌だと言いたげであり、和真は
そんな瑞希の様子に彼女との距離を縮めると瑞希にFクラスが試召
戦争を仕掛けた理由を聞き、瑞希は顔を真っ赤にして頷くと、

「男から言わせて貰えば、吉井には下心がある。姫路さんと仲良
になりたいとかその先かな。ラブレターの内容は知らないけど上手
く行く確率は高かったと思うんだけどな」

「確かに、しかし、学園1、2を争う知的美少女2人がよりもよ
ってバカクラス相手かよ」

「いろいろとやる気が失せる結果だ」

和真はそのままラブレターを明久に読んで貰えば上手く行ったと言
うが瑞希が明久の事が好きだと言う事に納得がいかなさそうにため
息を吐くとトオルは和真の言葉に同意を示し、

「あ、あの。結城君、黒崎君、それって、吉井くんもあの」

「どうかな？ タイミングってのはあると思うからな。少なくとも

今さっきラブレターを破り捨てた相手から告白されて頷けるかはわからない」

「それならこの方法は……」吉井くんが他の女の子からラブレターを貰って浮かれてたのが許せなかったの。吉井くんは私のもの。誰にも渡さない。渡さない。ワタサナイ。ワタサナイ』とか清水さん風に」

「いや、それ、確実に逆効果だろ」

瑞希は明久に告白しても大丈夫だと思ったようだが和真は未だにラブレターを失い打ちひしがれている明久に視線を送った後、今はタイミングが最悪だと言つと棗が楽しそうに美春の人外化を真似して言うが和真は大きく肩を落とす。

第64問（後書き）

どうも、作者です。

番宣です。

オリジナルファンタジーの小説を投稿しました。『性悪魔術師と白銀の歌い手』と

言う作品です。相変わらず、主人公の性格はよくないですがまあが作る新たな世界を楽しんでいただければ幸いです。

興味がある方は作者のページから探してみてください。

第65問

「うむ。よくやってくれた。大変だっただろう」

「ホントだよ」

「……吉井、何度も言わせるな。お前は自業自得なんだからな」

作業をすべて終了させると西村教諭が顔を出し、差し入れの飲み物を持ってきてくれると明久は余程、疲れたようで床に腰をおろして疲れたと言うが和真は明久の態度にため息を吐くと、

「まったく。吉井、お前がどれほど結城達に迷惑をかけていたかも理解できたな」

「うー!? は、はい」

西村教諭はため息を吐きながら明久にペットボトルを手渡しながら、先日、明久に話した事のある和真に礼を言っておけと言った理由がわかったかと聞き、明久は西村教諭の言葉に珍しく素直に頷き、

「あ、あのさ。結城君、この間は適当に謝って終わらせようとしてごめん。僕は何もわかってなかったよ」

「ん? ああ、わかってくれれば良いんだけど……」

「あ、カズが珍しい反応をしている」

明久は和真に向かい頭を下げると和真は明久の行動に少し驚いたよ

うな表情をすると清美は和真をからかうように言う。

「山下、黙ってる……まあ、気にするな。あの時は俺にもいろいろあったし、お前に当たったって部分もあるしな。悪かったよ」

「う、うん」

和真は学園長である『藤堂カヲル』から物理干渉のできる召喚獣にするために総合得点をあげると言われた翌日であったため、自分も冷静になりきれていなかったと自覚もあり、明久に謝ると明久は戸惑ったような表情をすると、

「それに今回の件で吉井だけが原因じゃないって事がよくわかった。と言うか、原因の6から7割は他にあるって気がする」

「……そうだな」

和真は自分からしくない事を言っているため苦笑いを浮かべた後、原因は雄二にあるんじゃないかと雄二に視線を向けると西村教諭は和真の意見に賛成なのか大きく肩を落とすが、

「あ？ 何を言ってるんだ？」

「少なくとも今日の原因はお前だろ」

「は？ 知らねえよ」

雄二は和真に巻き込まれて修理をさせられた事が面白くないようで自分は悪くないと言いたげに言う。

「吉井、言っておく、こいつと縁を切れ。その方が安全な生活が遅れるぞ」

「やっぱり、そう思うかな？ それなら、結城君はどうしたらこのゴリラと縁を切れると思う」

「そうだな。一先ずは嫁に引き渡すか？ 人の邪魔をできないくらい徹底的に」

和真は雄二の態度に反省の色が見えないため、明久に雄二と縁を切った方が良いと言うと明久も何度か思った事があるようで和真に意見を求め、和真は表情を変える事なく、Aクラス代表でもあり、雄二の幼なじみである『霧島翔子』に雄二を任せると言うこと、

「おい。何で、翔子の名前が出てくんだよ！？」

「何で？ って、Aクラスとの試召戦争でそう決まったんだろ。ずいぶんと完敗だったみたいじゃないか。3連勝の勝ちを演出して4戦目で負け決定。とか無様な事をした代表様。それどころか大将戦でも完敗も良いところだったしな。アドバイスする必要もなかったな」

「そうそう、坂本くん、今度、新聞部で試召戦争をきっかけに付き合い始めたカップルを特集しようと思うんだけど、2学年最初の力ツプルとして取材に行くからよろしくね」

雄二は和真を怒鳴りつけるが和真はAクラスの試召戦争で決まった事だろと言うと棗が雄二に更なる追い討ちをかけ、

「止める！？ お前らは俺に何の恨みがある！？」

「いや、普通に考えて俺達はお前らにバカ扱いされてるんだ。恨みも辛みもだいたい溜まつてるぞ」

雄二は自分が不利になっている事に声を上げるが和真は雄二の言葉を斬り捨てる。

「姫路さん、秀吉がお姉さんから雄二の作戦を見破った人がCクラスにいるって言ってたけど、あれって結城君かな？」

「そ、そうじゃないでしょうか。でも、試召戦争で体力テストなんて」

「木下さん、運動神経も良かったしね」

明久は瑞希に雄二が考えた試召戦争の作戦を見破ったのは和真じゃないかと聞くとAクラスは和真のアドバイス通りに瑞希を倒しており、瑞希は力になれなかった事に肩を落とし、

「自分を責めない。それに吉井くん、今は姫路さんをフォローするところよ」

「そうそう。そんなのだから、『嫉妬されて』ラブレターを破かれる事になるんだよ」

明久と瑞希の様子に友香と清美は2人をからかうように言うと、

「な、何を言ってるんですか！？ 友香ちゃんも清美ちゃんも！？」

「何か、姫路さん、小山さんと山下さんと仲良くなったね」

瑞希は慌てて友香と清美に言うが明久は2人の言葉の意味を全く理解しておらず、

「……姫路さん、大変ね」

「そうだね」

友香と清美は明久を見て大きく肩を落とす。

第66問

和真は単体教科の補給試験を続けており、目標であった2500点を超えた日の昼休みに学園長室に呼び出されてカヲルの前に立っている。

「やればできるじゃないか。まったく、できないってのはやりたくないだけじゃないか」

「……そうですね」

カヲルは和真の点数に少しだけ満足そうに笑うがその言葉にはどこかとげがあり、言われた和真は面白くなさそうな表情をするが、

「それじゃあ、今日の放課後は調整に入るから、帰るんじゃないよ」

「てめえ、ばばあ！！ いい加減にしろよ！！ 俺はあくまでも手伝いと言う事でここにいるんだ！！ 俺の予定を勝手に決めんな！！」

「……結城、少しは落ち着け」

「何だい？ 予定があるって言うのかい？」

カヲルは和真の召喚獣の調整をするからと和真の予定を聞く事なく、放課後に作業を行うと言うと和真はカヲルの態度がかなり頭にきているようでカヲルを怒鳴りつけると同行していた西村教諭が和真を抑えつけながら落ち着くように言うとかヲルは和真と西村教諭の様子にそこで初めて和真の予定を聞く気になったようで和真に予定の

内容を話せと言う。

「バイトが入っているんですよ」

「バイト？ 何だい。デートとかじゃないのかい？ 悲しいね」

「ばばあ！！ ぶち殺し！」

「……まったく、少し冷静になれんのか？」

和真は西村教諭に取り押さえられて少し冷静になったようで今日はバイトの予定が入っている事を告げるとカヲルは和真をバ力にするように小さくため息を吐き、その態度が和真の怒りにさらに火を点けるが西村教諭の拳骨が和真の頭に振り下ろされ和真は頭を押さえて床をのたうちまわり、

「学園長、結城の言う事ももつともです。ただでさえ、結城は毎日のように補給試験を行うためにバイトを終えた後も家に帰って遅くまで自習をしていたのです。もう少し、結城の意見も聞くべきだと思います。結城の召喚獣を教師と同じ仕様にするのはあくまでも学園の都合であって、結城本人には得になるような事でもないのですから」

「……そうさね。しかし、西村先生、あたしが言う事じゃ無いかも知れないけど、やり過ぎじゃないかね？」

西村教諭は床をのたうちまわっている和真の事を気にする事なく、カヲルにもう少し和真の意見を聞いて欲しいと言うがカヲルは西村教諭の言葉の割に扱いの悪い和真をかわいそうなものでも見るような視線で見ると、

「結城はこれくらいしても問題ありません。頑丈さで言えば、ウチのクラスのバカどもと大差ありませんので」

「そうかい。それじゃあ、結城和真、バイトの休みの日を教えな。調整はその日の放課後にしてやるさね」

「……それじゃあ、明日の放課後でお願いします」

和真に1撃を加えた西村教諭は和真相手ならこれくらいは問題ないと言い切り、カヲルは苦笑いを浮かべながら和真の予定を聞くと和真はまだ頭が痛むように頭を押さえながら明日の放課後にして欲しいと言い、

「わかったよ。あんたの予定に合わせてやったんだ。時間に遅れるんじゃないよ」

「わかりました。それでは失礼します」

カヲルもそれなりに忙しいようで時間の調節が必要なのか少し考えるような素振りをした後に和真に遅れるなと言うと和真は言いたい事はあるが言っても無駄と判断している部分もあるようで頭を下げて学園長室を出て行く。

第67問

「カズ、お帰り」

「……だから、どうして、俺の席を囲んでるんだ？」

和真が教室に戻ると和真の席はいつものメンバーで囲まれており、和真は頭を抑えるが、

「結城君、どうだったの？」

「……なぜ、吉井と姫路までいるんだ？」

なぜか、和真の席を囲んでいるメンバーには明久と瑞希も紛れ込んでおり、和真は大きなため息を吐くと、

「……このクラスが1番、安全なんだよ」

「和真がFクラスをいろんな意味でぶちのめしだろ。それで吉井が追われる羽目になってるんだと」

「あの後、結城くんが事ある事に坂本くんを霧島さんに引き渡すから、その嫌がらせを吉井くんにしてるんだって」

明久は和真から視線を逸らして言う。と新と棗が原因はこの間の明久のラブレター事件だと言い、

「……いや、俺、関係ないだろ。元々、坂本が勝手に墓穴掘って勝手に墓穴に落ちて勝手に墓穴に生き埋めになっただけだろ。逆恨み

も良いところだ」

「……その通りなのよね。でも」

「……それがFクラスなんだよ」

和真は原因は雄二にあると言うが友香は眉間にしわを寄せると明久は力なく笑う。

「……予想以上のバカクラスだな」

「……うん。何か、ごめん」

和真はFクラスのバカさ加減に大きなため息を吐くと明久は和真から目を逸らして謝り、

「まあ、とりあえずはここに居れば設備が壊れないならそれで良い。楽だから」

「結局はそこに落ち着くのよね」

和真は明久が設備を壊してまで逃げ回る事を選択しなかった事を評価したように席に座って弁当箱を取り出すと和真の様子に清美は苦笑いを浮かべ、

「当然だ。お前らだって、また、あの片付けをしたいのか？」

「いや、遠慮したいけど」

「そうですね」

和真はこの間の設備の修理がかなり大変だったため、また同じ事をしたいかと聞くと友香と瑞希は苦笑いを浮かべる。

「それで、吉井……なぜ、俺の弁当をそんな目で見てるんだ？」

「い、いや、結城君のお弁当、美味しそうだと思って」

「吉井くん、違うよ。カズのお弁当は美味しそうじゃなくて美味しいんだよ」

和真はカヲルとの話し合いで時間をとってしまったため、急いで昼食を食べようとすると明久が自分の弁当を覗いている事に気づき、明久に声をかけると明久は気まずそうに目を逸らし、清美は明久の言葉に和真の料理の腕は確かだと言うと、

「そ、そうなんだ」

「……ホントよ。はつきり言って自信なくすわ」

「確かにね。洋子先生のために作っているから栄養面もカロリー計算も問題なし……結城くん、調理師免許や栄養士の資格も取れるよね」

「シスコンの鏡だな」

明久は物欲しそうに和真の弁当を見て頷き、友香は肩を落とすと棗は和真なら調理師や栄養士の資格も取れそうだと言い、トオルはうんうんと頷きながら和真がシスコンだと言う事を再確認しているようであり、

「……どうして、俺が責められる流れなんだ？」

「えーと、わかりません」

「まあ、こいつらに言っても無駄だな。吉井、お前は何故、そんなに俺の弁当を見つめる。飯食ったんじゃないのかよ？」

「た、食べたよ。ソルトウォーターを」

和真はため息を吐くと瑞希は和真の様子に苦笑いを浮かべると和真はいつもの事だと割り切ったようで弁当の続きを食べようとするが明久の視線が気になるため、明久に食いにくいと言うと明久は昼食を食べたと言うがその内容はおかしく、

「……それは食べたとは言わないだろ」

「結城くん、吉井くんがお昼ご飯を食べられないのは有名な話だよ」

「……」

和真は肩を落として明久の食生活がおかしいと言うと棗は明久の食生活がおかしいのは有名な話だと笑う。

第68問

「は？ 昼飯が食べられない？ ……あまりにバカだから、両親に虐待でも受けてるのか？」

「……確かに、吉井のバカさならそれくらいしても問題なさそうだ」

「……それはスクープの匂いだね」

和真は棗から聞いた話に首を傾げながらも和真は1つの推測をはじめ出し、トオルと棗は和真の意見に頷くと、

「違うからね！？ 虐待なんか受けてないからね！？」

「なら、何で、昼飯も食えないんだよ？」

「そ、それは僕は1人暮らしをしてるんだけど……仕送りが少ないんだよ」

明久は虐待と言う事実はないと声を上げると和真は昼食を食べられないような状況はあまり考えられないようにで純粹な疑問をぶつける
と明久は1人暮らしをしているのだが仕送りが少ないため、昼食に回せないと言うが、

「嘘だな」

「嘘ね」

「な、何で！？ どうして疑うんだよ」

和真と友香は一言で明久の言葉を斬り捨て、明久は驚きの声を上げて疑われる理由がわからないと言う。

「いや、普通に考える。いくら仕送りが少ないと言ったって昼飯は食うだろ。むしろ、抜かすなら朝だろ。それなのに昼飯を抜いてくるなんて何かあるに決まってるだろ」

「そうね。それに本当に仕送りが少ないならご両親に話をするべきでしょ」

しかし、和真と友香は常識的にあり得ないと明久の言葉を斬り捨てると、

「そ、それは……」

「……やっぱり、他に何かあるんじゃない」

「それで、吉井くんがお昼を抜いてる理由は？」

明久は目を泳がせ、友香はため息を吐くと清美は何か面白い事があると思ったようで明久に聞く。

「そ、それは……世の中には僕を誘惑するものが多すぎるんだよ」

「……用は無駄使いして食費に回す金がないと……バカすぎる」

「……呆れてものも言えないわ」

明久は目を泳がせたまま言葉を濁らせると和真は明久が無駄使いを

している気づき、眉間にしわを寄せると友香も同じ意見のようで呆れたように肩を落とすと、

「だ、だって、仕方ないじゃないか！！ 趣味にはお金がかかるんだよ」

「趣味にお金がかかるってのは賛成なんだけどね。私もこれに大部お金をかけてるし」

「……いや、何を趣味にしてるかはわからないけど、まずは何をやるにも身体が資本だろ。飯くらいは食べよ」

明久は自分は悪くないと言いたげに言うとなは愛用のデジカメを手に明久の意見には賛成できると言うが和真はあり得ないと言い、

「仮に趣味に金がかかるって言うなら、他の出費を抑えるべきだろ。今、光熱費ってどれくらいだよ。1人暮らしなら無駄な事をしてるんじゃないのか？」

「そ、それは……」

「吉井くん、カズは主夫だから、節約術は相談した方が良いよ」

和真は明久に無駄な出費を抑える事を進めるが明久の反応は悪く、清美は明久が和真の言う事を信じられないせいだと思ったようで和真に節約術を聞くのは有効な手段だと言うが、

「……ガスはこの間から止められてるから節約はする必要はないよ」

「よ、吉井くん、それってどう言う事ですか？」

明久の言葉は話を聞いていた人間は誰1人も予想しておらず、瑞希は顔を引きつらせて明久に聞き返すが和真達はどう反応して良いかわからないようである。

第69問

「……とりあえず、要点をまとめると仕送りはマンガやゲームに使って食費や公共料金に回す余裕はないと？」

「う、うん」

和真達Cクラスのメンバーは明久の仕送りの使い方を1度では信じられなかったようで3度、確認すると明久はすでにいろいろと申し訳なくなってきたようで身体を小さくして言うと、

「……悪い。あまりの事にどう反応して良いかわからない」

「そうね」

和真は明久の常識から大幅にずれている明久の様子にため息を吐くとCクラスの生徒は大きく頷き、

「吉井、お前、生活を改めろ。そのままだといつか死ぬぞ。生活費まで削ってそれで入院や通院、最悪、死んだら、ゲームもマンガもないだろ」

「だ、だけど」

「いや、そこで悩む理由がわからない。俺はゲームもやらないし、マンガも読まないから!？」

「結城君、君は何を生きがい生きてるんだよ!！」

和真は明久に生活態度を改めるように言うが明久は難色を示し、和真は明久がそこまでゲームやマンガに命をかける理由がわからないと言った時、明久は和真に向かい吠え、

「あ？ 突然なんだ？」

「この年まで生きていてゲームもやらない、マンガも読まない。君は絶対に人生を損している！！ 君も生活を改めるべきだ！！」

和真はいきなりの明久の様子に少し驚いたような表情で聞き返すと明久にも譲れないものがあるようで和真にも生活を改めるべきだと言つとゲームやマンガの素晴らしさを和真に向かい話し始める。

「……これは俺が怒られる流れなのか？」

「……いや、違うと思う」

和真は明久が熱く語っているが意味がわからないようで眉間にしわを寄せると新は苦笑いを浮かべる隣りで、

「姫路さん、チャンスよ。吉井くんは食費にお金を回す余裕がない。ここは胃袋をつかむべきよ。毎日、手作りお弁当攻撃とかしなよ」

「やっぱり、そうでしょうか？」

「山下さん、流石に毎日は無理でしょ。材料費だってバカにならないいし、でも、毎日は無理でもそう言うのは有効な手かもね」

友香と清美は瑞希に手作り弁当で明久を落としに行くようにアドバイスをしており、

「よ、吉井くん」

「何？ 姫路さん？」

瑞希は2人から背中を押されたせいもあるのか勇気を出して明久を呼び、明久が瑞希の方を振り向くと、

「わ、私が吉井くんのお弁当を『毎日』作ってきます」

「へえ、良かったじゃないか。吉井？」

「ひ、姫路さん、そ、そんな悪いよ！！ 僕の事は気にしないで
も良いから！！」

瑞希は明久の弁当を毎日作ってくると言い、和真は明久を見てニヤニヤと笑おうとするがなぜか明久の顔は一気に血の気が引いて行き、全力で瑞希の弁当の提案を遠慮し始め、

「……代表様、山下、吉井のあの反応を見ると姫路の料理は不味い
と思うんだけど」

「……うん。そんな感じがするね」

「な、なんか意外ね。姫路さんって料理とか女の子らしい事って似
合いそうな気がするのに」

和真は明久の様子に瑞希の料理の腕が悪い事を察して友香と清美に話を振ると2人は和真と同じ事を思ったようであり、苦笑いを浮かべ、

「だ、大丈夫だよ。姫路さん、僕の事は気にしなくて良いから！！
それに結城君の言う通りに生活を改めようとも思っているから！
」

「……撤回する。不味いじゃなく生死に関わりそうだ」

明久は瑞希の料理に余程の恐怖があるのか土下座をして生活を改める事を約束し、明久の行動に瑞希以外の人間が彼女の料理の酷さのレベルを察したようで顔を引きつらせる。

第70問

「……どうしよう。一先ずは来週、買う予定だったゲーム代を」

「……ゲーム1つで血涙を流すなよ」

明久は一先ずは自分の命を優先したようであり、なけなしのゲーム代を食費に回すと言うと一心は呆れたようなため息を吐き、

「吉井、節約するなら自炊の方が良いと思うけど料理はできるのか？」

「う、うん。料理は割と得意だよ。昔はよくやってたし、今は時間がないからやってないけど」

「へえ、意外」

和真は流石にこれ以上、明久を責めるのは良心が痛むのか明久の生活改善に協力しようとしており、料理ができるかと聞くと明久は料理は得意と答え、清美は意外そうな表情をすると、

「だって、料理は家の中で1番立場の弱い人間がするものでしょ？」

「……」

明久は首を傾げながら吉井家の方針なのか料理ができるようになった理由を話すが和真を含めた誰1人として明久の言葉の意味がわからずに顔を引きつらせ、

「……吉井がバカなのは吉井家の教育方針にある気がするんだ」

「……結城君、はつきりと言わない」

和真は思った事を口に出すと友香は和真の言葉にため息を吐き、

「え？ な、何で、みんなは僕をそんなかわいそうな人を見るような優しい目で見えるの？」

「吉井くん、君はそんな事を気にしなくて良いんだよ。純粹なままでいればきっと良い事があるよ。そんな君が好きだって言ってくれる女の子が絶対にいるから」

「なるほど、吉井がゲームやマンガに走ったのは1人暮らしになって自由になった反動か」

和真と友香の意見に全員が納得したようで明久を優しい眼で見守るように言つと明久は自分の家族が世間一般からずれている事は理解できていないようであり、首を傾げると棗は明久に優しい言葉をかけ、新は大きなため息を吐く。

「それより、吉井、ゲームを諦めるとして仕送りまで金は足りるのか？ 自炊をするとしても公共料金を払えなければ料理もできないから結局は無駄な出費になるだろ？」

「う……」

「そうね。そうなるとバイトとか？ でも即日払いつて最近はあるの？」

「吉井くん、やっぱり、私が」

「だ、大丈夫だから！？ 姫路さんは心配しなくて良いから！？」

和真は明久に仕送りまで手持ちのお金でどうにかなるかと聞くと明久は困ったような表情をし、友香は明久の生活費をどう稼ぐかを考え始めると瑞希は諦めていなかったように再度、明久のお弁当作りに立候補するが明久は全力で遠慮し、

「即日払いか？ 和真、俺とお前が口添えすれば何とかなるんじゃないか？」

「そうだな。今日は2人ともバイトだし、店長に掛け合ってみるか？」

明久の様子に和真と新は自分達がバイトをしている清水美春の実家でもある『ラ・ペデイス』で明久を短期で雇えないかと言うと、

「あ、あのさ。結城君も北条君もみんなもどうしてもそんなに親身になってくれるの？」

「あ？ どうしてって、普通だろ？」

「ああ。別におかしな事をやってるつもりはないぞ」

明久は和真達が明久の事を真剣に考えてくれている事にどうしたら良いのかわからないようで戸惑ったような表情をするが和真と新は別に特別な事をしているつもりはないと言い、

「そ、そうなのかな？」

「吉井、言つて置くぞ。Ｆクラスと一緒にするなよ。少なくともあいつらは世間一般的な常識から外れてるからな」

「まったくね」

明久は居心地が悪そうに苦笑いを浮かべるがトオルはＦクラスがかしいと言い切ると清美は苦笑いを浮かべ、

「それで、吉井、どうする？ バイトのあてがないなら」

「うん。お願いできるかな」

和真は明久にバイトの件を確認すると明久は頷く。

第71問

「吉井、行く……酷いな」

「今まで知りあいもないから、Fの教室には来なかったけど、これは酷い」

和真と新が明久を迎えにFクラスの教室のドアを開けると2人はFクラスの設備状況を見て顔を引きつらせると、

「結城君、北条君、座って待っててよ。すぐに行くから」

「ん。明久、どこに行くつもりなのじゃ？」

「うん。ちょっとね」

明久は2人に気づき、少し待っていて欲しいと言つと優子にそっくりな男子生徒の制服を着た生徒が明久に声をかけ、明久は少し頬を染め、

「……新、あれは性別『男』で合っているんだよね？」

「和真、知らないのか。この学園は男子と女子、秀吉の3つの性別があるんだぞ」

「……わかった。気にしない事しておく」

和真は明久と話をしている相手が優子の双子の『弟』である『木下秀吉』だと気づいたようで明久の反応に眉間にしわを寄せるが新は

気にする事はなく、和真は自分の理解できない事から目を逸らす。

「ゴメン。待った」

「いや。それじゃあ、行くか？」

明久が帰る準備を終えて和真と新のそばまで駆け寄ると3人は教室を出ようとした時、

「あ！？ あんた、この間の！！ アキをどこに連れて行くつもりよ！！」

「和真、知り合いか？」

「ん？ まったく関係ない」

先日の明久のラブレター事件で明久を追いかけて回していた『島田美波』が和真を見つけて威嚇するように吠えるが和真は美波の相手をする気はなく、教室を出て行き、

「えーと？」

「吉井、行くぞ。約束の時間に遅れる」

「ごめん。美波、僕達急ぐから」

明久は美波の様子に苦笑いを浮かべるが新も和真に続くように教室を出て行き、明久は美波に謝った後、2人を追いかけて教室を出て行こうとすると、

「吉井くん、結城くん、北条くん、待ってください」

「ん？ 姫路？ どうかしたか？」

瑞希が3人の名前を呼び、瑞希の声が聞こえたため、和真は教室を覗き込む。

「あ、あの。私も一緒にしてもよろしいでしょうか？」

「一緒に？ 姫路はバイトする必要があるのか？」

「そ、それは」

瑞希は明久と一緒にいる時間が欲しいのか和真と新に自分もバイトの口利きをして欲しそうであり、新はそんな彼女の様子に少しだけ意地悪をすると瑞希の顔を耳まで赤く染まりはじめ、

「新、からかうな。まあ、吉井の家庭状況は説明してあるから本人のやる気次第って事になってるけど、姫路は数日だとしてもやるなら親に許可を貰えよ」

「はい。絶対に説得します！！」

和真は瑞希が何を考えているのか理解しているようで新をいさめると瑞希に両親は自分で説得するように言い、瑞希は大きく頷くと、

「姫路さん、何か欲しいものがあるの？」

「よ、吉井くん！？ そ、そうなんです。あ、あの。今月、少しお小遣いが厳しくて」

「……鈍いな」

「そうだな」

明久は瑞希がどうしてバイトをやりたいかまったくわかっていないように首を傾げ、瑞希は顔を真っ赤にしたまま慌てて明久にバイトがしたい本当の理由を隠しながら言い訳をしており、和真と新が2人の様子にため息を吐いた時、

「あ、あんた達、どうして、ウチを無視するのよ!!」

「し、島田、いきなり、声を張り上げるでない。驚くであろう」

美波は自分が無視されている事に声を上げ、秀吉は火の付いた美波の様子に美波に落ち着くように言う。

第71問（後書き）

どうも作者です。

今更ですが……これって面白いんですかね？

バカテスって明久がひどい目に遭うのが面白いと思っている中で和真達Cクラスの常識的な行動。

たまに書いててこの方向は合っているのかと思います。

まあ、原作に沿える人間でないのでもうしょうもありませんが。（苦笑）

後はお気に入り登録が400件を超えました登録してくれた皆様ありがとうございます。これからも楽しんでいただけるようにがんばりますので引き続きよろしく願います。

第72問

「ん。吉井、そろそろ行かないと不味いな」

「ホント？」

「……お主達は完全に島田は無視なのじゃのう」

美波の様子を気にする事なく、和真は時間を確認すると明久に急げと言ひ、和真と新は先に出て行こうとする姿に秀吉はため息を吐くと、

「よくわからん人間に因縁をつけられるほどヒマじゃない。それも自分が他人に迷惑をかけているのに自覚もないような迷惑な奴らにはな」

「まっただ」

和真と新は美波だけでなく、秀吉にも話しかけるなと言いたげであり、

「あ、明久、なぜ、ワシはこの2人にこのように冷たくされるのじやろうか？」

「そ、それは」

「吉井、行くぞ。本当に時間がないんだ」

「う、うん。秀吉、明日、説明するから、じゃあね」

秀吉は初見の和真と新にここまで冷たくされる意味がわからないように首を傾げると明久は2人を含めたCクラスの言い分も聞いているため、少し困ったように笑うと和真は時間がないと言い、明久は秀吉に謝ると4人で教室を出て行こうとするが、

「あんた、この間から何なのよ！！　ウチに文句でもあるの！！」

「み、美波ちゃん！？」

美波は先日からの和真の態度に腹を立てているようで和真を怒鳴りつけて彼の胸倉をつかむ。

「……この間も今日も言ったが、何で関係ないお前に俺が命令されないといけない」

「な、何でって、あんたが悪いんだから、当然でしょ！！」

「……話も通じないのか、Fはみんなこんな**バカ**のばっかりかよ。嫌になるな」

和真は美波の態度に呆れたようなため息を吐くが彼女は本当に自分が悪いと思っていないようであり、和真は彼女の言葉を聞いて美波だけではなく、教室に残っているFクラスの生徒全員に聞こえるように言う、

「ゆ、結城君、い、いきなり、何を言い出すのさ」

「何？　当然の事を言ってるだろ」

明久は和真の言葉に騒ぎが拡大すると思ったようで和真を止めようとするが和真は場を収める気はなく、

「他人を責める事しか知らない、人の気持ちを考える事の知らない自分本位のバカ。そんな人間に何で俺が因縁を付けられなきゃいけない？ この間、お前に従う義理はない事は話しただろ。こっちは吉井との間で約束をしているから迎えにきてるんだ。それを関係ないくせに因縁を付けられているんだ。それに『ちよつと、アンタ、アキを渡しなさいよ！！』ウチはアキのせいで彼女にたくない女子ランキングの3位になってるんだから、それなのにアキ1人だけ幸せをつかむなんて許せないのよ！！』だったか？ こんな事を平然と言う、人の気持ちを考えない奴に話す事なんかあると思うか？」

「あ、あんただってウチの気持ちを考えてないでしょ！！ それなら、あんたこそ、ウチに謝りなさいよ！！」

「何度も言わせるな。俺はお前にわけのわからない因縁を付けられて文句を言われてるんだ。そんな人間と仲良くできる人間はよっぽどのバカだ。言って置くぞ。吉井がお前達のくだらない嫉妬で壊した物をこれを壊したのは吉井だけじゃなく、お前らも同罪だ。それも理解してないだろ。それを関係ないのに片付けた人間にお前らはわびの1つでも入れたか？ そんな常識も知らない人間に俺が謝る義理も義務もない」

「まあな。少なくとも吉井と姫路は自分達が迷惑をかけた事は理解して謝ったのに未だに自分は悪くないって言っているバカがいる事が信じられない」

和真は美波には話す事はないと言うと美波は和真もやっている事は変わらないと言うが和真には先に因縁を付けてきたのは美波なのだ

から従うつもりも謝るつもりもなく、新は和真の言葉に頷くと、

「行くぞ。時間もあるのにこんな言葉も通じないバカの相手をして時間に遅れたら、印象が悪くなるのは吉井だ」

「吉井、姫路、行くぞ。時間をかけても無駄だ」

「で、でも、結城君、北条君」

「因縁だけ吹っ掛けて話し合いをする気もないんだ。知らん」

和真と新は明久と瑞希に行くぞと言うと2人は美波の事も心配しているようであり、どうしたら良いかわからないようであるが、和真と新は歩きはじめ、

「ゴメン。美波、時間がないから僕と姫路さんも行くね」

「あ、あの。美波ちゃん、私と吉井くんが2人と話をしてみますから」

明久と瑞希は和真達Cクラスの言い分も聞いているためか美波にも理解して欲しい部分もあるため、美波に声をかけると2人の後を追いかけて行く。

第73問

「あ、あのさ。結城君」

「言っておくぞ。俺はあの煩い女と木下に謝る事はない」

『ラ・ペデイス』に向かう途中で明久は先ほどのFクラスでの様子を言いたい事があるようだが和真は美波と秀吉の事以外なら聞いてやると言つと、

「あ、あの。そんな事を言わないでください。美波ちゃんも木下くんもそれにFクラスの間みなもとても優しくて良い人達なんですから」

「……姫路、悪いがその考えは捨てる。名前も知らない相手を怒鳴り付ける奴も、作戦だとしても人をバカにした後に謝罪にもこないような奴は良い人とは言わない。俺達はFクラスの被害者だと言う事は前に話しただろ？」

「あつ」

「そうだけど……」

瑞希はそれでも美波も秀吉も友達のため、和真や新にもわかって欲しいと言いたげに言うが和真はFクラスの自分勝手な態度に腹を立てているようで瑞希の言葉を否定すると明久と瑞希は和真を含めたCクラスの人間から言われた事が正論だと理解出来るようでバツが悪そうな表情をする。

「F^{バカ}クラスは自分勝手すぎるんだよ。自分本位で他人^{ひと}の事を考えない。その上、努力だつてしないクセに文句だけは人一倍に言^ひつて他人を責める。吉井、お前は俺があいつにからまれるきっかけがあ^とのラブレター事件だとして、俺はあの煩い女に怒鳴られる理由はあるか？」

「そ、それは」

「元々、自分達の勝手な都合で騒ぎを大きくしたわけだろ。俺はその原因としてお前を捕まえて壊した設備の修理をさせた。俺の理由は正当だ。あいつはどうだ？ 本来、お前がラブレターを貰おうがあいつには関係ないだろ。お前のせいで彼女にしてくれない女子ランキングが上がった？ 違うだろ。いくら容姿がよかるうが少なくとも名前も知らない相手を怒鳴りつけるような礼儀知らずを好きになるようなバカはいない。お前が何かしたのかも知れないが元々の原因はあいつにあるんだ。それをお前に押し付けているだけだ。それをわかつとしないで俺を責めるのは筋違いだろ。言っておくぞ。仮に吉井や姫路があいつに俺に謝った方が良いと言ってもあいつは絶対に謝らない。自分が悪いと思ってい^いないんだからな。木下も一緒だ」

和真はFクラスの教室に顔を出した事でFクラスの態度にかなり腹を立てているようであり、自分が美波や秀吉に謝る理由がない事を話すと、

「そ、そんな事はないよ。秀吉はCクラスに行く時に気分が乗らない^いつて言^いつてたし」

「じゃあ、聞いて良いか？ 木下はCクラスから出て行^いつた後はどんな様子だった？ 俺が思うに木下さんを演じ^いきつた事で満足そう

にしていただけだろ」

「た、確かに」

「普通なら、そこで罪悪感が生まれるんだよ。他人を騙した事になだけど、木下はそうは思わなかった。演劇部だから、自分の演技に満足した？ 仮にそうだとしても俺達は木下の演技を観に行った観客じゃない。1人の考えを持った人なんだ。それをだましてバカにしておいて、その後に責任は持たない。仮に木下の演技が素晴らしなものだとしても俺は自己満足で人の心を知ろうとも考えようともしない木下の演技では心は動かないし、そんな演技をする人間を信じる気はない」

明久は秀吉にだけでも謝って欲しいと言うが和真は今日まで謝りにもこない秀吉の様子から彼がCクラスから出て行った時の満足げな表情を思い浮かべたようで唾を吐き捨てるように言う。

「F^{バカ}クラスは基本的に人の善意、良心つてものが欠落してるんだよ。なら、相手をする上でこつちがとる行動も一緒だ。あいつらを人として扱わない。同じ事をやってるんだ。文句を言われる筋合いはない。それが吉井や姫路の友人だろうとな。俺はお前ら2人を友人だとは思っているが、他のバカどもとは何でもない。そんな人間に気を使う気はない」

「悪いな。俺も和真と同意見だ。Fに何人か去年のクラスメートもいたけど、去年も同じだ。自分本位で他人の事は考えるような事はない奴らだったし、そいつらとも俺は友人じゃないし、和真やCクラスの方を味方するよ。別に2人にFクラスと縁を切れとは言わないけど、俺達からFクラスに歩み寄る事はないと思って欲しい」

「で、でも、結城くんも北条くんも私や吉井くんには話をしてくれました。それなのに他のみなさんには話してくれないんですか？」

和真と新は明久と瑞希以外のFクラスとは友人になれないと言うと瑞希は自分や明久には自分達の考えを話してくれたのに他の人には話してくれないのかと言うと、

「少なくとも2人とも話せばわかってくれそうだったからな。他は無理だ。自分達がやった事に罪悪感を持っている奴は誰1人としていない。F^{バカ}クラスの代表を見ればわかるだろ？」

「そ、そんな事はないよ。雄二は悪気なんてないと思うけど、秀吉とかわかってくれる人はFクラスにもいるよ」

「まあ、バカ代表には期待なんかしてないけどな。他に関しては説得力がないから無理。話はここまで到着だ」

和真は苦笑いを浮かべて明久と瑞希には話が通じそうだと思ったと言い、明久は和真の言葉に少しだけ驚いたような表情をした後、和真に言い返すが和真は明久の言葉に説得力がないと言った時に目的地に到着したようで和真は店を指差し、

「あれ？　ここって、この間、来たよね？」

「は、はい。クレープ、とっても美味しかったです」

明久と瑞希は試召戦争が終わった後の休日にこの店を訪れた事があると言い、

「知ってる。俺はその日、店にいたしな。吉井が姫路とあの煩い女

にたかられている姿も見てる」

「そうなの？」

「た、たかつてなんていません！？」

「まあ。姫路はあの煩い女に影響されてるところもあるのかも知れないが付き合ってもいない人間に無理やり奢らせるのは常識的に考えるとあまり良い事じゃないからな。そう言うのはしっかりと順序を守れよ」

「そう言う事だ」

和真はその時の明久達の姿を見ていたと言うと瑞希は明久にたかつていたわけではないと言うが和真と新は瑞希の様子に苦笑いを浮かべる。

第74問

「しかし、いきなり、今日から大丈夫なのか？」

「うん。家に帰ってもゲームをするだけだし、それに公共料金の話になって思ったんだけど、電気を止められてゲームができなくなるのは困るからね」

「……そこでゲームが1番初めて出てくるのが凄いや」

和真と新が明久と瑞希を店長に合わせると和真と新の紹介と言う事も関係しているのか明久と瑞希はたいした面接も受けずに合格になり、明久は和真と新と一緒に男子更衣室でバイトの衣装に着替えている。

「そ、そうかな？」

「まあ、それでもどこかで線を引かないと面倒な事になるぞ。頼むぞ。しばらく、学校に来ないと思ったら栄養失調で動けなくなるとかは洒落にならないからな」

「うん。気をつけるよ……」

和真は明久の生活を心配していようと苦笑いを浮かべると明久もつけられるように苦笑いを浮かべた時、

「結城和真、北条新、ゆつくりと話していないで早くしなさい。姫路さんはすでに準備ができてますわ。家畜以下の分際で美春を待たせるなんて、生意気ですわ!!」

「あ、あの。清水さん、それは言い過ぎじゃないでしょうか？」

「いいえ。あの豚野郎どもには充分ですわ！！」

「ああ。待つてくれ。すぐに行く」

「美春？」

「店長の娘、気をつけろよ。いろいろと面倒だから」

ドアを1枚はさんだ廊下から美春の声が聞こえ、美春の隣で瑞希はどうしたら良いかわからないようであり、和真は瑞希の気苦労が目に浮かんだようで苦笑いを浮かべて返事を返すと明久は首を傾げ、新は苦笑いを浮かべながら美春が店長の娘だと話し、

「そうなんだ。機嫌を損ねないようにしないとね」

「……まあ、無理だろうけどな」

「そうだな」

明久は和真や新の顔をつぶすわけにもいかないかと思っっているのか真面目な表情をするが対照的に和真と新は困ったように笑うと、

「いつまで、待たせるんですか！！ 早くしなさい！！」

「……ドアを開けるな。まあ、着替え終わったところだから良いけどな」

「あれ？ 君はDクラスの清水さん？ えーと、確か、美波を狙っていたよね？」

美春は限界がきたようで勢いよくドアを開け、和真は美春の行動のため息を吐くと明久は美春の事を知っているのか名前を思い出す。

「豚野郎！！」

「え！？ ちょっと、何！？」

「……フォークとナイフを投げるな。それで破壊された備品の修理費も洒落にならないんだからな。純利益が上がらないと俺達の時給が上がらないだろ」

美春は明久の顔を見た瞬間におかしなスイッチが入ったようで明久に向けてフォークとナイフを投げつけようとするが和真は美春の腕をつかみ、

「……ここでおかしな事をする店長が暴走するぞ。それはお前にとっても歓迎する事じゃないだろ」

「……確かに、そうですわ。結城和真、仕方ありませんわ。今日はあなたの言葉に従いますわ。しかし、次はありませんわ。店の外で出会ったら、あなた事、美春の手で八つ裂きにしてあげますわ」

「……会っただけで殺されてたまるかよ」

美春に耳打ちをすると美春も和真の言葉に納得する部分もあるようで憎々しい視線を明久に向けながら頷き、

「あ、あのさ。北条君、僕はどうして清水さんに睨まれてるのかな？」

「まあ、気にするな。いつもの事だから」

明久は美春に命を狙われる理由に心当たりがないため、顔を引きつらせながら新に聞くが新は苦笑いを浮かべるだけである。

第75問

「それじゃあ、始めますわよ」

「待て。清水」

「何ですか？」

美春は明久と瑞希に仕事の説明をしようとするが和真が美春を止め、美春は不機嫌そうな表情で振り返ると、

「それは俺がやるよ。お前が、吉井と一緒に居て、店長が暴走すると困る」

「……確かにそうですね。あの変態が騒いだすと仕事になりませんわ」

和真は美春がやろうとしていた仕事を変わると言い、美春は和真の言葉に少し何か裏があるのかと考えるが和真の言い分にも納得するところが多いようで頷き、

「美春は仕事に戻りますわ。姫路さん、この豚野郎どもがおかしな事をしたら遠慮なく言ってください。美春の手で八つ裂きにしますから」

「えーと、八つ裂きはやりすぎだと思いますけど」

「良いのですわ。この豚野郎どもには当然の報いですわ」

「……まだ、何もしてないぞ」

仕事に戻ると言うത്瑞希に何かあったら自分を呼ぶように言うがその言葉は酷くおかしく瑞希は顔を引きつらせて言うが美春は瑞希の言葉を斬り捨て、和真はため息を吐く。

「まだ？ とは何かをするつもりですか？ これだから、豚野郎は」

「……清水、勘違いするな。俺も新も姫路に何かするつもりはない」

「と、言う事はこの豚野郎ですか！！ お姉さまにも色目を使っている上に」

「な、何をおかしな事を言ってるの！？ ぼ、僕は何もしてないよ！？」

美春は和真の言葉に目つきを鋭くすると和真は自分も新も瑞希には何もしないと言い、その言葉で美春への明久への殺意が一気に跳ね上がり、明久は美春の怒りが理解できないため声を裏返すと、

「……清水、その件なんだが」

「何ですか？」

和真は美春を手招きすると美春は和真を疑いながらも話を聞くように和真に近づき、

「……良いか。お前がお姉さまと言っているのが誰かはわからんが、吉井と姫路は本人達が恥ずかしがり屋だから言わないが両想いだ。だから、この2人を早めにくつつければ、そのお姉さまと言うのは

完全にフリーになるんじゃないのか？」

「……それは姫路さんにはあの不細工で頭の悪い家畜以下の豚野郎を押し付ける形になって申し訳ありませんが美春にとっては有益な情報ですわ」

「……どうしてだろう。僕にはあまり嬉しくない話がされている気がするよ」

「大丈夫だろ。それより、他の奴らから2人のバイト着姿を見せてくれてメールがきてたから寄ってくれ」

和真は店の中で無駄な争いを起こさないためか美春におかしな事を吹き込み、美春が大きく頷く姿に明久はおかしな不安を感じたようであり、顔を引きつらせるが新は気にするなと言うと携帯電話で写真を撮りたいようで明久と瑞希に並ぶように言う。

「じゃ、写真？ よ、吉井くんとですか？」

「ああ。2人並んでいるのと1人ずつの撮りたいんだけどダメか？」

「僕はかまわないけど」

「わ、私もかまいません……後で北条くんに写真を貰おう」

瑞希は声を裏返すと新は彼女が何を考えているか予想が付いているようで苦笑いを浮かべて3枚の写真を撮りたいと言うと明久は何も考えずに頷き、瑞希は顔を赤らめながら頷くと明久の隣に並び、新は携帯電話で写真を撮ると、

「吉井と姫路にも送るな」

「は、はい。ありがとうございます」

「うん。ありがとう」

新は2人にも写真を送ると言った時、

「わかりましたわ。その件に関しては美春は全面的に協力しますわ」

「取引成立だな」

和真と美春の間にはおかしな同盟が成立している。

第76問

「……」

「役立たずですわ」

「そう言うな。初めてなんだし、仕方ないだろ」

和真が明久と瑞希にバイトの説明をした後に2人は接客の実践に移ったのだが瑞希はぎこちないながらも何とか接客を行っているが明久は注文を取りに行くと舌をかなり失敗を続け、精神的なダメージが重なって行っているようでカウンターの近くで落ち込んでおり、

「よ、吉井くん、落ち着けばきっとできますよ。私でもできているんですから」

「う、うん」

「いや、もう少ししたら忙しくなってくるし、それなら、キッチンを手伝うか？ 洗い物とか、短期の予定なんだし、そっちの方が効率が良いだろ。どうせ、こっちもやって貰うんだしな。店長も良いですよね？」

『ああ。かまわないよ』

瑞希は明久に声をかけると明久は情けない姿を見せられないと思っただようで気合いを入れて立ち上がるが和真はカウンターのの中から苦笑いを浮かべると明久にキッチンの仕事をしないかと言い、美春の父親である店長に確認し、店長はまだ今日は調子が良いようだと和真

の意見に賛同すると、

「確かにな。吉井は家事ができるって言ってたし、そっちの方が良いかもな。こっちは任せておけよ」

「美春はどつちでもかまいませんわ。ただ、この店の事を考えれば役立たずに払うお金はありませんわ」

新は和真の意見に賛成なようので接客は任せておけと言うと美春は今の状況で明久に払うバイト料はないと言う。

「うん。そうするよ。そっちの方が向いていると思う」

「それなら、私もキッチンに」

「いや、姫路は接客で頼む。そろそろ込み合ってくるから、慣れていない人間が集まると店が回らなくなるかも知れないからな」

明久は洗い物くらいならどうにかなると思ったようで頷き、瑞希は明久と一緒にキッチンに移動しようとするが和真は明久の反応から瑞希をキッチンに踏み入れさせてはいけないと思ったようで彼女の行動を制限し、

「グッジョブ、結城君。助かったよ……この後に店にくるお客さんが」

「ああ。吉井の反応から、姫路はキッチンに入れてはいけない存在だと言う事は理解できた」

明久は和真の行動を大手を振って誉めるわけにはいかないため、小

さな声で礼を言うと和真は苦笑いを浮かべ、

「店長、ちよつと良いですか？」

『わかつてるよ。吉井くん、姫路さん、忙しくなる前にこれ、美春も北条くんも』

和真は何かあるのか店長に声をかけると店長は明久と瑞希以外に新と美春の名前を呼び、4人分のケーキをカウンターに置く。

「良いんですか？」

「お、美味しそうです」

『今度の新作の試食だよ。素直な感想を教えてくれるかい？』

明久と瑞希は目を輝かせると店長は2人の喜んでいる姿に少し頬を緩ませるが、

「……」

「清水、警戒するな……いろいろと問題はあるが料理の腕だけは確かだろ？」

「……そうですわね。それより、これが出たら、また、中林さんや工藤さんにたかられますわね？」

「……言つな」

美春は何かを警戒しているようであり、直ぐにはカウンターに近づ

く事はせず、和真はそんな美春の様子に苦笑いを浮かべると美春は新作が出る度に愛子や宏美にたかられている和真を小バカにするように笑った時、

『……ワタシノカワイイマイエンジェルニイロメヲツカウナブタヤロウ』

「え？ 店長さん？」

「どうかしたんですか？」

和真と美春の様子に店長のおかしなスイッチが入り、人外化が始まりだし、明久と瑞希は何が起きたかわからないように首を傾げ、

「……ちよつと、閉じ込めてくる」

「任せたぞ」

和真は2人に事情を説明する事なく、店長の首をつかむと店長を引きずって行く。

第77問

「姫路さん、今日はごくろうさまでした」

「い、いえ。無理なお願いを聞いて頂きありがとうございます」

店長の人外化が治まらず、明久と瑞希は即日払いとの約束でバイトをしていたため、美春が2人分のバイト料を持ってくると瑞希には手渡してバイト料を渡し、彼女を労うが、

「役立たず、受け取りなさい」

「……おかしな事をするな。金をなんだと思っている」

「何をするのですか!？」

美春は明久のバイト料を床に落とすと彼を見下してバイト料を受け取れと言うは和真は持っていたシルバートレイで美春の頭を叩くと明久のバイト料を拾い上げ、美春は和真につかみかかろうとすると、
「当たり前だろ。吉井はきちんと働いたんだ。これは正当な報酬だ。だいたい、店長が暴走して手が足りない時に吉井はしっかりと働いていただろ。吉井がいなかったら今日は回せたかわからないぞ」

「まったくだ。吉井も姫路も今日は助かった」

「そ、そんな事はないよ。僕なんてあまり役に立てなかったし」

和真は美春の頭を左手で押さえると明久を労い右手で明久にバイト

料を渡すと新也和真の言葉に頷く。

「そんな事はない。少なくともキッチンはかなり助かったしな。正直、店長の暴走を考えたら短期じゃなくて続けて欲しいくらいだ。これは事実、清水も認める」

「イヤですわ!!」

「……イヤだつて、おい」

和真は明久のキッチンでの働きぶりに大部、助かったと言うと和真達以外のスタッフも明久の働きぶりを評価しているようで頷くなか、美春だけは明久を評価する事などあり得ないと言い、和真は美春の言葉に大きなため息を吐くと、

「吉井は1人暮らしだからまだしも姫路は遅くなると不味いだろ」

「ん？ それもそうだな。吉井、姫路、今日は後片付けは良いから先に着替えてあがれ」

「え？ 良いの？」

スタッフ達から慣れない仕事をした明久と瑞希を今日は帰してやれという声が聞こえ和真と新は2人に着替えるように言うと明久は驚いたような表情をするが、

「……その代わり、ちゃんと姫路を家まで送ってこいよ」

「遅いんだから、男のお前がそれくらいするべきだ。良いか。2人つきりなんだ。しっかりやれよ」

和真と新は明久を捕まえて引き寄せ、明久に瑞希をしつかりと家まで送り届けるように言う。

「ぼ、僕が!？」

「当たり前だろ。だいたい、他の男どもに任せて姫路を奪われても良いなら別だけどな」

「ぼ、僕は別に」

明久は和真と新の言葉に顔を赤くして慌てるがその様子を見れば明久が瑞希に好意を抱いているのは明らかであり、和真は明久をからかうように笑うと、

「姫路もお疲れ。今日はゆっくり休めよ。後、1人で帰るのは危ないから、吉井に送って貰うんだぞ」

「は、はい。今日はありがとうございました。吉井くん、すいませんがよろしくお願いします」

「う、うん」

和真は明久が逃げないように瑞希に明久に送って貰えと言うと瑞希は顔を赤くしながら明久を見上げ、明久は恥ずかしいのか瑞希から視線を逸らして頷き、2人は着替えるために更衣室に歩いて行き、

「きっかけがあればすぐにでも上手く行きそうなんだけどな」

「まあ、タイミングってのもあるんだろ。それより、片づけるぞ。」

清水、遊んでないで働け」

「あなたに言われる筋合いはありませんわ!!」

新は明久と瑞希の背中を見ながらため息を吐くと和真は苦笑いを浮かべながら、捕まえたままの美春に言うつと美春は和真を怒鳴りつける。

第78問

「おはよう。姫路さん」

「おはようございます。吉井くん、昨日は家まで送っていただいてありがとうございます」

バイトの次の日に明久は教室に着いて、カバンを机がわりのミカン箱においた後、瑞希に朝の挨拶をすると瑞希は明久に家に送って貰ったお礼を言っと、

「明久、昨日は姫路と一緒にだったのか？」

「うん。昨日は結城君に頼んで短期のバイトを紹介して貰ったんだよ。それでしたら放課後はバイト。姫路さんも一緒」

「はい。それで、昨日は吉井くんに家まで送って貰ったのでお礼を」

雄二は明久と瑞希が一緒にいた事にこの2人、ひょっとして進展でもあったのかと言った感じで声をかけると明久と瑞希は昨日のバイトの事を話し、

「アキと瑞希が一緒のところではバイト？ …… あいつ、何なのよ。やっぱり、あの男はウチの敵ね」

「昨日は時間も押しておったと言っつのはバイトの時間じゃったと言っわけじゃな」

明久達の話に聞き耳を立てていた美波は和真を自分の敵だと再確認

したようで教室にはいない和真に殺気を飛ばし始め、秀吉はそんな美波には気づかないふりをしているのか明久に昨日の放課後に急いでいた理由はバイトのためかと聞く。

「うん。結城君が僕の生活を聞いたら、それじゃ、いつか死ぬぞと言って色々と相談に乗ってくれたんだ」

「ほう。そうなのか？ そのような男には見えなかったのじゃがのう」

明久は和真が自分の事を心配してくれた事を話すが秀吉はFクラスの教室にきた時の和真の態度に少なからず腹を立てているようで和真はそんな人間には見えなかったと言うと、

「ひ、秀吉、あのさ。その事なんだけど」

「木下くん、私と吉井くんのお話を聞いていただけませんか？ 美波ちゃんも」

明久と瑞希は和真達Cクラスの生徒に自分達の友人である秀吉と美波が誤解されたままにいる事をどうにかしたいようであり、元はと言えば自分達の行動からきた事だと言う事を説明したいようで秀吉と美波に声をかける。

「何じゃ？」

「何よ？ あいつの事？」

秀吉は2人の表情に何かあったとは思ったようで首を傾げながら聞き返すが美波は和真は自分の敵だと判断しているようで不機嫌そう

な表情をすると、

「あのね。結城君達がFクラスに対して怒っている事があるんだよ。原因は試召戦争の時に秀吉がCクラスに行った時の事」

「は？ 戦争なんだ？ 怒られる事はしてないだろ。だいたい、あいつらだって、根本と組んで俺達をはめやがったんだ。報復は必要だった」

明久は秀吉にCクラスの生徒がFクラスに持っている不満の説明をしようとするが雄二も和真の事が気に入らないためか、こっちは当然の事をしていると話しに割って入ってくるが、

「僕も最初はそう思ったよ。だけどさ。本当にそれで良いのかな？
って、試召戦争とは言っても、僕は結城君を含めたCクラスの生徒に恨みもなかったし、よく知らない人ばかりだったし、あの時は罪悪感もなかった。でもさ。姫路さん以外は努力もなかったからFクラスになったわけだろ？ そんな僕らがきちんと勉強をして、中には部活やバイトと勉強を両立している人達をバカにして良かったのかな？ って、結城君達から見れば、僕らは自分達を豚扱いされたわけだし、そんな人間に話しかけられるのは不快だって言うのは当然なんだと思う」

「……明久はワシが悪いと言うのか？」

「正直、わからないよ。でも、秀吉はAクラス戦の時にその事をお姉さんから聞いていたよね？ お姉さんにも反省するように言われてたのに何もなくて良いのか？ 1人で行けないなら、僕と姫路さんも一緒に行くよ。だからさ」

明久は和真達が言っている事もわかって言うが秀吉は謝る必要がないと思っっているようであり、明久は和真の言っていた秀吉は悪い事をしたとも思っていないと言った事を信じたくないようで秀吉に謝りに行こうと言う。

第79問

「……なぜじゃ。なぜ、明久はワシらではなく、結城と言ったCクラスの味方をするのじゃ」

「秀吉？」

秀吉は明久の言葉に小さな声で疑問の声をあげると明久は秀吉の名前を呼ぶと、

「なぜ、ワシが謝らぬといけないのじゃ！！ 確かにバカにした事は悪いと思っではある。雄二の言う通り、あれは作戦だったのじゃ！！」

「……だから、言っただろ。悪気なんてないってな」

「結城君？ どうして、ここに？」

秀吉は明久が付き合いの長い自分より、和真達Cクラスの味方をしているのも気に入らないようであり、意地になっているのか声を張り上げてCクラスには謝らないと言った時、廊下まで秀吉の声が聞こえたのかFクラスの教室のドアを開けて和真がFクラスの教室に現れると秀吉と美波はだけではなく明久と瑞希を抜かしたFクラスの生徒は和真を睨みつける。

「いや、昨日の今日じゃ、買い物も公共料金の支払いも終わってないと思ってな。こいつを届けに来た。今日は吉井は罪悪感を持つ事もできないバカどもを説得するから昼はこないって言っただけだからな」

「あ、ありがとう。結城君」

和真はFクラスの反応に不機嫌そうな表情をしながらも明久に小包を手渡すと明久は和真が自分にお弁当を作ってきてくれた事を理解したようで和真に礼を言うがその表情は淒く気まずそうであるが、

「別に無理して謝る必要はないし、そんな納得がいかない面で謝られたってこっちがム力つくだけだしな。だから、吉井と姫路には伝えたが俺も同じ態度を取らせて貰うだけだ」

「あ？　どう言う事だ？」

和真はFクラスに向かい自分の事は気にするなと言うと雄二はこの間、和真に良いようにやられた事もあるため、完全に彼にとっては和真は敵であり、和真に喰ってかかろうとすると、

「話しかけるな。豚。変な臭いに移るだろ」

「てめえ」

和真は雄二の事に話しかけると言い、雄二の怒りは和真の一言でさらに1段階上がる。

「何だ？　お前達が俺達を挑発した時に言った言葉だろ。同じ事を言って何が悪い」

「結城君」

和真は雄二だけでは無くFクラスにはこちらを非難する資格などないと言うと、明久と瑞希はクラスメートと和真の間に挟まれて気ま

ずそうであり、

「あとな。お前らがバカをやって壊した学園の設備の修理費はお前らに請求するようになるからな」

「あ？ お前になんの権利があるんだよ？」

和真はこれ以上はここにいると明久と瑞希に迷惑がかかる事も理解しているようで教室を出て行こうとするが思い出したかのように設備の修理費は問題を起こしたFクラスの生徒に請求すると言い、雄二はその言葉にかみつくと、

「決まってるだろ。お前らのクラスの設備は最低ランクなんだ。お前らが壊した物の修理費に回す予算なんかあるかよ。Fクラスは必要なものは各自で用意するのが規則だろ。そこから考えても当然だろ。それをさつき、西村教諭と学園長にも提案してきた。こっちはお前らが壊した設備を無償で直すのを手伝う羽目になったんだ。当然のことだろ。勝手にバカ騒ぎしたんだ。その責任を取るのが人として当然の事？ ん？ 豚だからできないか。言い返してもかまわないぞ。その代わり、無責任な言い訳や言葉を並べてみる。本気でぶちのめしてやる」

和真はFクラスに文句を言う資格などないと言い切ると完全にFクラスを見下した様子で言い切るが常識のないFクラスの生徒達は和真に向かい罵声を浴びせ始めるが、

「悪いな。豚に人間の言葉が通じるわけがなかったな」

和真は本気で自分達が悪い事をしていとも思っていないFクラスの生徒達の様子に呆れたようで大きくため息を吐いて教室を出て行

き、

「明久、なぜ、あのような人間の味方をするのじゃ！！」

「そうよ！！ あいつ、ウチらの事をバカにして許せないわ！！
瑞希もアキもあんな最低の人間に関わるのは止めなさいよ！！」

「み、皆さん、落ち着いてください。美波ちゃんも木下くんも、結城くんは最低な人じゃないです」

「そ、そうだよ。みんな落ち着いてよ」

和真が教室から出て行く姿に秀吉と美波は和真を完全に敵だとみなしたようであり、口早に和真を非難し始め、明久と瑞希はクラスメート達に落ち着くように言うが治まるわけもなく、

「……Cクラス代表はあの小山だったな。それなら、結城、俺をバカにした事を思い知らせてやる」

そんななか、雄二だけは和真に仕返しをする方法を思いついたようで小さく口元を緩ませている。

第79問（後書き）

どうも、作者と

和真「主人公です」

和真、悪役。（爆笑）

和真「人に言ったことを返されただけで、よくここまで怒れるよな。本当にバカしかないな」

まあ、Fクラスですしね。和真に対する批判や非難もくるかも知れませんが気にしない方向でこの作品はFクラスの常識のなさについて書いてますしね。

和真「別に痛くもないけどな。こっちは当然のことを言っているんだ」

まあ、そういう事です。Fクラス養護ではないからこそその物語。だからこそ、挟まれる明久と瑞希。

そして、何かを企む雄二。

まあ、ろくでもない事でしよう。

第80問

「結城君、あなた、Fクラスと何か揉めなかった!!」

昼休み、久しぶりに回復試験から解放されてまどろんでいた和真の平和をぶち壊すように友香の声が響き、

「……代表様。何かあったか？」

「何かあったかじゃないわよ!!」

和真は欠伸をしながら、友香に聞くと友香の怒りはすでに臨界点を超えているようであり、彼女の額にはくつきりとした青筋が浮かんでおり、和真の胸倉につかみかかりそうな勢いである。

「Fクラスと揉めなかったかと言われると吉井と姫路以外は豚扱いすると言ったくらいか？」

「当然の事だな。それがどうかしたのか？ 代表様？」

和真は友香の手を交わすと今朝、Fクラスの教室で起きた事をもの凄く簡単に話すといつものメンバーが騒ぎを嗅ぎつけてぞろぞろと和真の席に集まり始め、

「散れ」

「散れ。じゃないわよ!! それがどんな騒ぎになってるか。わかっているの?」

和真はメンバーを追い払うように言うが友香の怒りは収まる事はなく、和真を睨みつけると、

「バカどもがまた責任転嫁して俺やCクラスを非難し始めたくらいだろ。俺達を挑発して、Fクラスに試召戦争を仕掛けさせるように」

「……まったく、その通りよ」

「……カズ、今更だけど、あんた、予知能力とかない？」

和真は友香が怒っている理由に心当たりがあるようで欠伸をしながら、Fクラスが何をしているか言い当て、友香と清美は納得がいかなさそうに眉間にしわを寄せる。

「和、どうするんだ？ 乗ってやるのか？」

「乗る必要はないだろ。非はこっちにはない。F^{バカ}クラスのやった事を信じる人間が2学年にいると思うか？ D^{バカ}クラスはF^{バカ}クラスのやり口を理解してるし、A^{バカ}クラスも同じ、E^{バカ}クラスは体育会系だからな。今までの試召戦争での卑怯なやり取りをしてきたF^{バカ}クラスに不快感は表わしても同調はしない」

「……確かにね。でも、正論が効かないFクラスだよ。何をしてくるかわからないよ」

一心はFクラスの挑発に乗るのかと言うが和真はこちらには非がないと言い切り、Bクラスを旧校舎まで落としいた時に取った連携やFクラスの今までの行動から信じる生徒はいないと言うと棗は頷きながらもFクラスの行動は常識では測りきれないと言うと、

「まあな。でも、乗ると吉井や姫路の立場がなくなるからな。せつかく、俺達以外にもウチのクラスの奴らとも仲良くなってきたわけだろ？ 試召戦争をするとあいつらの居場所がなくならないか？それに姫路の体調を考えると設備はこれ以上は落とせないだろ？」

「……そうね。今でも最低の設備なのにこれ以上、設備が落ちると姫路さんは不味いわよね」

「……いや、どっちにしろ。クラスには居づらいだろ。それなら、挑発に乗ってFクラスをぶちのめした方が良くないか？ あの2人はFクラスの行動に反対しているだろうし、設備に関しては最終的に和平交渉で終わらせたとすれば設備は落とさなくて良いだろ？」

和真は明久と瑞希の事を考えるとムカついても試召戦争は仕掛けられないと言うと友香は頷くがトオルはFクラスを黙らせるためにも挑発に乗った方が良いのではないかと言う。

第81問

「……確かにトオルの言い分もあるな」

「なら、どうするつもり？ このままじゃ、吉井君と姫路さんはかわいそうよ。私達とクラスメートの間で板ばさみなわけだし」

和真はトオルの言う事も一理あると言うと清美は明久と瑞希が心配なように和真にどうかしろと言いたげに言い、

「何か考えるよ。代表様、しばらく時間をくれ。3日……いや、2日で良い」

「2日も？ その間に2人に耐えて貰えって言うの？」

「今、こっちから仕掛けるのは上策じゃないんだよ。Fクラスは俺達Cクラスを悪役にした挑発をしてこっちの怒りを誘うつもりだ。だけど、それに乗ってしまうと周りからの印象は最悪だ。ただどな^{バカ}Fクラスはこっちが反応しなければ勝手に自分達が正義だと言い始めて理不尽な事を仕掛けてくる。これはバカクラスの代表は計算に入れていないはずだ。そしたら俺達はクラスでそれを訴えて攻撃をすれば良い。勝った時にこっちの正当性を盾にできるからな。何より、吉井と姫路の事を考えれば俺達はしばらくは我慢しないといけない。すぐに仕掛けるとバカ代表に俺達は吉井や姫路を直ぐに裏切るとか吹き込みかねない」

和真は感情で走ってしまった事で明久と瑞希に迷惑をかけた事を自覚しているようで乱暴に頭をかくと2日時間をくれと言うが友香はそれはできないと言うが和真は雄二が考えてもいない事を計算に入

れているようであり、

「……今更だけど、カズを敵に回したくないわ」

「でも、和真、どうするんだ？ Fクラスと戦うとして勝機はあるのか？ FクラスがBクラス戦で見せた土屋の奇襲とか、それこそ、姫路の点数とか」

「坂本くん性格を考えると姫路さんの体調を盾に吉井くんに戦えつつ絶対言うよ」

清美は和真の考えを聞いてため息を吐くと新と棗はFクラスが仕掛けてくるであろう強力なカードをどう対処するかと言う。

「土屋の対処は簡単だ。保健体育のフィールドに入らなければ良い。Fクラスがいなくなつてフィールドは展開できるんだ。代表様の周りを無難に総合教科のフィールドを展開しておく、干渉を起こして消される可能性もあるからもう1人予備の教師を用意しておいて直ぐに対応できるようにしておく、まあ、その前に大島先生を押さえしておくから問題ない」

「……良く、ポンポンと策が出てくるな」

「こんなもんは考えれば誰だつて出てくる。姫路は無理に倒す必要はないと言いたいけど、あいつの性格を考えると倒してやらないと自分を責めるだろうからな。俺がやるよ。だから、誰か吉井を頼んで良いか？ 姫路は倒さないといけないけどな。あいつはフィードバックがあるんだ。なるべく、ダメージを与えずに終わらせてやりたい」

「……ああ。吉井は任せろ。その代わり、姫路は任せろぞ。元々、お前くらいしか倒せる奴はいないんだ」

和真は保健体育を使った時の最大攻撃力を誇る土屋康太の対処法を話すと一心は感心を通り越して呆れたようなため息を吐くが和真はFクラスに取り残された明久と瑞希の事を考えて少しだけ困ったように苦笑いを浮かべると新はこの中で言えば自分が明久の相手をするべきだと言い、

「……後は人の気持ちも聞かないでこんなくだらない事を仕掛けてきたバカに思い知らせてやるよ」

和真はFクラス代表の雄二の立てた作戦が気に入らないようで吐き捨てるように言つと、和真の話を聞いていたメンバーは同じ意見のように和真の言葉に同意するように大きく頷く。

第82問

「どうだい。体に違和感はないかい？」

「……学園長が俺にそんな事を聞くのに違和感を覚えます」

「……あんだ、本当に可愛げのないガキだね」

放課後になり、和真は学園長室で和真の召喚獣を教師仕様と同等にするための調節を行っているとかカルは和真に体調を聞くが和真は自分を心配するカルが気持ち悪いと言い、カルは和真の返事に眉間にしわを寄せると、

「そりゃあ、俺の都合も考えずに勝手にこんな事を決められれば文句くらい言いたくなります」

「それに関しては謝るよ。すまなかったね」

「……熱でもあるんですか？ それとも何か裏があるんですか？」

「……本当に口の減らないくそじやりだね」

和真は自分が文句を言うのは正当であると言うとかカルも和真に悪い事をしていると言う自覚はあるようで作業の手を止めて和真に頭を下げるが和真はカルはカルに態度に違和感しか覚えないうように疑うような視線をカルに向け、カルは和真の視線に大きくため息を吐き、

「あたしだって、常識くらいはわきまえているさね。それでも、あ

たしの方も忙しくて手一杯だったんだよ。そんな中に教師陣から観察処分者が働かないからどうにかして欲しい？ 正直、あたしが文句を言いたいよ、そんなものは自分でやりなつてね」

「まあ、確かに」

自分も忙しくて和真に気を使ってやる余裕はなかったと言うと和真も納得する部分もあるようで頷く。

「それにこれだって本当に信頼できる生徒かも見極めないといけないんだ。教師の仕事を手伝うって事は他の生徒の個人情報だって知る可能性がある。ただ、教師に外面だけいい生徒に任せるわけにはいかないんだよ。あんたは考えもすっかりとしてるしね」

「……評価をされたみたいだけど、嬉しくないんだけど、それに今の話だとホントは成績を無理に上げる必要もなかった気がするんですけど」

「まあね。成績に関して言えば、実際はそのままだって動いたよ……ん？ 文句は言わないのかい？」

「1000点をあげるために動く過程を見られていたって事ですよね。納得はいきませんがそのおかげで出来る事もあるんで押さえておきます。それに途中から何となくですが気づいていましたしね」

カフルは生徒の召喚獣を教師仕様にするのに和真の事を見極めさせて貰ったと言うと和真はため息を吐き、

「一先ずは学園長先生のオメガネにかかった事を喜んでおけば良いんですか？」

「口の減らないガキだね。あたしのメガネにかかったかと言うと一先ずは保留だね。ただ、あんたを信じるって言うのが教師陣には多くてね。その中にいた。あんたの姉と西村先生を信じただけさ。別にあたしからの信頼より、あんたはあの2人から信頼されている方が嬉しいだろ？」

「……まあ、そうかも知れませんか」

カヲルは和真を信じたのではなく、洋子と西村教諭を信じたから、2人の期待を裏切るなどと言うと和真は少しだけ照れくさそうに苦笑いを浮かべて頭をかき、

「あたしが言いたい事はそれだけだよ……これで完成だね。ご苦労だったね」

「あ、はい……って、終わりなら帰っても良いんですか？」

「ああ……ん？　そう言えば肩書なんだけどまだ考え付いてないから、後にして貰うよ」

「わかりました。失礼します」

カヲルは和真が照れる様子に小さく表情を和らげると肩書は後回しだと言い、和真に労いの言葉をかけると和真はカヲルに頭を下げた後、学園長室を後にする。

第83問

「あれ？ 結城くん、こんな時間に何をしてるの？」

「ん？ 代表様。部活は終わったのか？」

和真がカバンを取りに教室に戻ると友香が教室には残っており、和真は時計を確認するとすでに部活も終わりの時間になっており、友香に部活は終わったのかと聞くと、

「ええ。今日は茶道部の方だったからカバンを教室に置いて行っただよ」

「茶道部の方？ あれ？ 代表様はかけもちをしてるのか？」

友香は和真と同じように教室にカバンを取りに来たと苦笑いを浮かべると和真は友香の言葉に彼女が複数の部活に所属していると思っただよで聞き返す。

「そうよ。もう一つはバレー部」

「バレー部か？ 試合の時は教えてくれ」

「あれ？ 応援にきてくれるの？」

友香はバレー部と茶道部に所属していると言い、和真は友香に試合がある時は教えてくれと言うと友香は和真がバレーに興味があるとは思わなかったよで驚いたような表情をするが、

「いや、代表様の太もと揺れる2つのボールがみたい。後は茶道部の時は帯を引っ張りたい」

「……結城くん、ふざけないでくれるかしら？」

「いや、割と本気だ」

和真の目的は男の子特有のものであり、友香は眉間にしわを寄せて冗談はやめて欲しいと言うが和真は笑顔で言い切り、友香は呆れたようなため息を吐くと、

「代表様、俺は帰るけど、代表様はどうするんだ？ 場所しだいでは送るぞ」

「……」

「警戒しないでくれ。流石に合意じゃない相手は押し倒さないから」

和真は教室に居ても仕方ないと思ったようで友香に帰ろうと言うが友香は和真の発言から彼を警戒しているようで和真をジト目で睨むと和真は苦笑いを浮かべ、

「行くよ」

「ええ」

2人並んで教室を出て行く。

「しかし、実は近所だったんだな」

「そうね」

和真と友香は学園を出た後、2人で話をしながら歩いていると2人の家は近いようで顔を合せて苦笑いを浮かべた時、

「ないです」

「ん？」

「結城くん、どうかしたの？」

「ああ……あの子、何かあったのかな？」

和真の耳に小さな女の子の声が聞こえ、その声は落ち込んでいるようにうでいるような声であり、和真は気づいてしまった事もあるため、声の主を見つけると、

「何か落としたのかい？」

「は、はいです。ノインちゃんのキーホルダを落としてしまったです」

和真は近づいて声をかけると女の子は悲しそうに目を伏せる。

「ノインちゃんキーホルダ？」

「如月ハイランドのマスコットよ。もう少ししたらオープンする遊園地。確か、オープン前に販促の一環で応募者にプレゼントしたとか」

和真は女の子が落とした物に心当たりがなく首を傾げると友香は知っているようで和真に説明すると、

「そうか？ 悪いな。代表様、俺はこの子に付き合うから」

「結城くん、私も手伝うわよ。辺りも暗くなってきたし、早く見つけましょう」

「良いですか？ お兄さんと彼女さん、ありがとうございます」

和真は友香に自分はこの女の子の落とし物を探す手伝いをすると言うと友香は自分も手伝うと言い、2人の言葉が嬉しかったようで女の子は表情を輝かせて2人に頭を下げるが女の子は和真と友香の關係を勘違いしているようであり、

「ち、ちが！？」

「子供の言う事だから慌てるなよ。それじゃあ、どこで落としたか、知りたいからどうやってここに来たか教えてくれるかい？」

友香は慌てて女の子の言葉を否定しようとするが和真は気にするなと言うと女の子にここまで見た道順を聞く。

第84問

「ないな」

「はいです」

「葉月ちゃん、泣かないで」

和真と友香は女の子と一緒に彼女が歩いた道を探しているがキーホルダは見つからず、女の子『島田葉月』の瞳にはうつすらと涙が浮かび始めた時、

「あれ？ 結城くん、何をしてるの？ 小山さん以外にこんな小さな女の子にまで手を出してるの？」

「……愛子、おかしな事を言わないで」

優子と愛子が3人を見かけて声をかけてくる。

「工藤、おかしな事を言うな。流石に俺は特殊な趣味はない。ただ、この娘は美人になると思う」

「……結城くん、あれ？ 木下さん、それ、どうしたの？」

和真は愛子の言葉を否定すると友香は和真の様子にため息を吐いた時に優子の手キーホルダがある事に気づく、

「これ？ さつき、そこで拾ったのよ。あたしは知らなかったんだけど、何か、愛子が言うには限定物みたいだから、交番に届けよう

「思つて……何？」

「木下さん、タイミングが良いな」

優子は横断歩道の真ん中を指差しながら言つと和真はあまりのタイミングの良さに苦笑いを浮かべると和真達がキーホルダを探していた事を知らない優子は眉間にしわを寄せると、

「今、まさにそれを探していたんだよ」

「これを？」

「ハイです。お兄さんと彼女さんは葉月が落としたノインちゃんのキーホルダを捜すのを手伝つてくれました」

和真はキーホルダを探していたと言い、優子が首を傾げると葉月は和真と友香が自分が落としてしまったキーホルダを探してくれていたと言つた。

「そうなの？ はい。今度は落とさないように気を付けるのよ」

「ハイです」

優子は足もとから見上げている葉月を見て、しゃがみ込んで葉月と目線を合わせて葉月にキーホルダを渡すと葉月は大きく頷くと、

「ありがとうございましたです」

「気を付けて帰るんだぞ」

葉月は嬉しそうな表情で4人に頭を下げると家へ戻って行き、4人は葉月の背中を見送り、

「木下さん、助かったよ。正直、葉月ちゃんも泣きそうになってたし、見つからなかった時の事も考えてたんだ」

「良いの。良いの。気にしないでよ。お礼は決まってるわけだしね」

「……いや、俺、家に帰って姉さんの夕飯を作らないといけないし」

和真は優子に礼を言うとなぜか、愛子が和真にお礼は言葉でなく態度で示せと言い、和真は愛子にまたたかられている事を感じ取り、洋子の夕飯を作らないといけないと言って逃げ出そうとするが、

「結城くん、携帯なってるわよ」

「ん？ ホントだ……うん。飯はいら……わかったよ」

友香は和真の制服の中で携帯電話が鳴っている事に気づき、和真に声をかけると和真は慌てて携帯電話を出ると洋子からの電話のようであり、和真が話を終えて電話を切ると、

「洋子先生、夕飯、いらないみたいだね」

「……いや、だからと言って、この流れで俺が奢るのはおかしいだろ？」

「何を言ってるの？ 女の子に囲まれている幸せ者なんだから、それくらいはするべきだよ」

愛子は和真の様子から夕飯の準備がなくなつた事に気づき、笑顔で和真の腕に抱きつき、和真の逃げ道を塞ぎ、和真を引きずって行き、

「……えーと」

「……愛子」

「何やってるの？ 優子も小山さんも行くよ」

「ちょっと待て！？ どうしてこうなるんだ！？」

友香と優子は愛子の行動に苦笑いを浮かべるなか、和真の声が悲痛な声が響く。

第85問

「……豚野郎、ずいぶんと良い身分ですわね？」

「……俺はたかられてるんだぞ。この状態で良い身分なわけあるか」

和真は愛子に捕まえられて4人でバイト先の『ラ・ペデイス』に着くなり、美春に睨みつけられる。

「清水さん、お邪魔するよ」

「ええ、今、席に案内しますわ。豚野郎、さっさと歩きなさい。6番テーブルが空いてますわ」

「……何か、酷く納得がいかないんだ」

美春は和真の足を蹴りながら席まで歩くように言い、和真はため息を吐きながら、3人を席まで案内すると、

「ん？ 和真、代表、良いところにきた」

「北条くん、どうかしたの？」

「ああ。ちよつとな。Fクラスとの事があるだろ。それで吉井と姫路が落ち込んでさ。俺は気にしなくて良いと言ってるんだけど」

和真達を見つけた新が駆け寄ってきて、明久と瑞希が落ち込んでいるからどうにかして欲しいと言う。

「やっぱりか？ 気にはなってたから後でメールでも出しておこう
と思ってただけだな」

「あれ？ 吉井さんと姫路さん、ここでバイトしてるの？」

「へえ、秀吉はそんな事を言っていなかったけど」

和真は苦笑いを浮かべると愛子と優子は2人がバイトを始めた事に意外そうな表情をする。

「まあ、昨日からの短期のバイトだ。工藤、吉井にたかるなよ」

「わかってるよ。吉井くんの場合は生活に関係しそうだし」

「……俺だって生活に関係してくるよ。新、2人は？」

「休憩室にいる。ちょっと、失敗が多いから、清水と店長が気を使
ってくれた」

「そうか。ちょっと行ってくる」

和真は2人が短期のバイトだと言う事を説明すると新に明久と瑞希
の居場所を聞いて2人のいる休憩室に向かって行き、

「小山さん、どう言う事？」

「FクラスがCクラスを同盟を組んでたBクラスを平気な顔して裏
切る卑怯者軍団って言ってるのに関係あるの？」

「……ええ、そうね」

優子と愛子は和真の様子に今日、学園で騒ぎになっているＣクラスをバカにしている騒ぎと関係あるのかと聞くと友香はＦクラスの挑発が頭にきているが明久や瑞希の事もあるため、感情で怒れない事もあり、自分を落ち着かせるように大きく深呼吸をする。

「別に気にする事はありませんわ。ただの豚野郎どもの戯言ですから、小山さんが気にする事ではありませんわ」

「清水さん、ありがとう。でも、今回の騒ぎは私が結城くんの忠告を聞かずに何も考えないでＢクラスと同盟を組んだ事にあるわけだし」

美春は４人分のお冷をテーブルに置くと彼女もＦクラスの言動に腹を立てているようだが、友香はＦクラスとＣクラスの軋轢の原因が自分にある事を理解しているため、うつむいてしまう。

「責任は全部、あの豚野郎になすりつけければ良いのですわ。あの豚野郎が小山さんにきちんとした説明もしないから、こうなったのであってあなたはまったく悪くないですわ」

「……いや、流石にそれは横暴だろ。まあ、代表も和真に任せておけよ。あいつは基本的に面倒だと言っけどな。人が落ち込んでいる姿を見ると手を伸ばしたくなるお人好しだからな。そう言う時の和真はいつも以上に頼りになる」

「そうですね。それくらいしか、役に立たない豚野郎なんですから、命が擦り切れるまで働かせたら良いのです」

美春は友香を励ますつもりなのか和真に責任を全てなすりつけるよ

うに言い、新は美春の様子に苦笑いを浮かべる。

第86問

「……」

（は、入りづらいなあ）

和真は休憩室のドアを少し開けて中を覗き込むが明久と瑞希の間に会話もなく休憩室の中は重苦しい空気になっており、和真は困ったように苦笑いを浮かべた後、自分を落ち着かせるように大きく深呼吸をすると、

「吉井、姫路、何、落ち込んでるんだ？」

「ゆ、結城君!？」

「ど、どうしたんですか？ 今日はお休みだって!？」

和真は勢いよくドアを開けると和真の登場に2人は驚きの声をあげる。

「いや。ちょっと、色々あってAクラスの工藤に^{ドナドナ}拉致された」

「^{ドナドナ}拉致?」

「な、何があっただんですか？」

和真は苦笑いを浮かべて自分が『ラ・ペディス』にきた理由を簡単に話すと2人は無理して笑おうとしているのがわかるくらいのぎこちない笑顔を見せ、

「……悪い。もう少し、お前達の事を考えてやれば良かった」

「ま、待つて。どうして、結城君が謝るんだよ!？」

「そ、そうです。頭をあげてください」

和真は2人の様子にいたたまれなくなったように頭を下げると明久と瑞希は和真が謝る事はないと思っているようで和真に頭をあげるように言う。

「いや、俺が感情的になり過ぎたんだ。お前らの事を考えれば何も言わなければ良かったんだ。この間の吉井のラブレター騒ぎで俺も反省したはずだったんだけどな」

「……でも、結城君の言う通りだったよ。誰も僕と姫路さんの話を聞いてくれなかった。雄二は諦めてたけど、美波や秀吉はわかってくれると思ってたんだ」

「はい。それどころか、Cクラスの人達をバカにするような事まで言い始めて、結城くん達の事を何も知らないのに」

和真は自分の感情を抑えきれなかった事を反省しているようで苦笑いを浮かべるが明久と瑞希は和真が反省しているのを見て、和真とFクラスを比較してしまったようでさらに表情が暗くなって行き、

(……参った。話が続かない)

和真は2人の様子にどうして良いかわからないようであり、頭を乱暴にかき、

「もうダメだ。吉井、姫路、気にするな。少なくとも今回、悪いのはお前らじゃない。俺とFクラスのバカどもだ。お前らが気にするな」

「で、でも」

「でもない。少なくともお前らは俺とFクラスを和解させようとしたわけだろ。なら、お前らが自分を責めるな。それをされると俺は責められてる気がするんだ。だから、俺を助けると思って笑ってくれ」

和真はこの重苦しい空気に耐え切れなくなり、語尾を強くしてしま
うと

「えーと、姫路さん、吉井くん、私からもお願いできないかしら」

「小山さん？」

「どうしてここに？」

友香は美春に頼みこんできたようで気まずそうにドアから顔を出す。

「ゴメンなさい。元は私が悪いのよ。結城君や山下さん達は私がBクラスと同盟を組むって言ったのも反対してたの。だけど、私が何も考えずにFクラスをはめるような事をしたから」

「……ねえ。小山さん、結城君、結局、原因って、ウチの秀吉がCクラスに言った事？」

友香は明久と瑞希に頭を下げた時、優子と愛子も友香に付いてきたよう
で優子は今の状況を確認するように聞くが、そんな彼女の様子は周
りの人間が後ずさりしたくなるような怒りに満ちている。

第87問

「ひ、一先ず、落ち着こう。木下さん」

「そ、そうだ。1度、大きく深呼吸をするべきだ」

「……結城君、吉井君、何を言ってるのかしら、あたしは落ち着いているわ」

優子の様子に和真と明久は自然に友香と瑞希を守るように立つと声を裏返ししながら、優子に落ち着かせようとするが優子の表情は清々しくらいの笑顔にはなっているが対称的に背後には真っ黒な殺意をまとっている。

「あ、あの。木下さん、できれば私達との試召戦争の前に木下くんにしたような事は」

「姫路さん、何を言ってるの？ あの時、私は秀吉と話をしただけよ。そうよね？」

「は、はい！？ その通りです！？」

「……結城君、悪いんだけど、今日はあたし帰るわ。奢りのお誘いはまた今度でね」

「りよ、了解しました！？」

優子は秀吉にお仕置きをするために早く家に帰りたいようであり、和真に謝ると和真は優子の言葉に頷く事しかできず、

「それじゃあ、また明日、学園だね。優子もあまり、結城君に無茶を言わないようにね」

「う、うん。わかったよ」

「木下さん、また明日ね」

優子はこの場にいる全員に頭を下げるとこの場を後にし、

「……優子を怒らせるのは止めよう」

「……今の木下さんはシスコンモードの結城くんには匹敵するわ」

「……うん。僕もそう思う」

優子は顔を引きつらせるなか、友香と明久は優子と同じ殺意^{もの}を和真にも感じた事があるようで顔を見合せて頷き、

「……いや、あれはないだろ？ ……俺、あんなのなのか？」

和真は今の優子と同列扱いはしないで欲しいと言うが友香と明久は和真の肩に手を置き、和真はちよつとだけ傷ついたように肩を落とす。

「あ、あの。木下くんは大丈夫なんでしょうか？」

「……姫路、良いか。俺達はこの後に木下に何が起きるかは知らない。これを心に留めておくんだ。それじゃないときつと、心が壊れてしまうから」

「……木下くん、安らかに眠ってちょうだい。私達を恨まないでね」

瑞希は秀吉に起きるであろう虐殺シーンに秀吉の事を心配するが和真と友香はすでに現実から目をそらす事に力を注いでおり、

「だ、大丈夫だって、試召戦争の時も弟くんは生きてたし」

「……そう願おう。木下の自業自得の部分もあるけど殺人の片棒を担いだとなると後味が悪すぎる」

「そうね」

愛子は流石に優子も手加減はすると苦笑いを浮かべると和真と友香は殺人事件にならない事に希望を託す。

「それで、結城くんと小山さんは吉井くんと姫路さんを励ませたの？」

「いや、全部、吹っ飛んだ」

「た、確かに」

和真と明久は優子の怒りで暗い空気が完全に吹き飛んでしまった事に顔を合せて苦笑いを浮かべると、

「結城くん、小山さん、雄二はCクラスを挑発してCクラスから試召戦争を仕掛けさせるつもりなんだ。だから、挑発に乗らないで欲しい。僕と姫路さんで秀吉や美波、話が通じそうな人間に……」

「言ってるそばから挫折するなよ」

明久はFクラスの説得を続けようとするがラブレター程度で自分を追いかけ回すクラスメートが説得に応じてくれる姿が思い浮かばなかったように膝を付く。

第88問

「そ、そうだね。結城くん、一先ずは挑発にのらないでお願いだよ」

「お願いします」

明久と瑞希は和真と友香に頭を下げるが和真は2人の様子に考えている事があるようで眉間にしわを寄せると、

「……吉井、姫路、お前達には悪いと思うけど、きつと近いうち、いや、2、3日中にはCクラスはFクラスに試召戦争を仕掛ける事になると思う」

「ど、どうして!？」

「落ち着け。俺も代表様も好き好んで試召戦争は起こしたくない。起きちまうと2人は居場所がなくなるしな」

和真は言いにくそうに明久と瑞希に近いうちにCクラスとFクラスのいざこざは試召戦争に発展すると告げる。

「……待つてよ。試召戦争なんかしたら」

「吉井の言いたい事もわかる。だから、もう少し話を聞いてくれ」

「吉井くん、結城くんの話を聞きましょう。結城くんにはきつと考えがあるはずですよ」

明久は和真の口から出た言葉に瑞希の体調を考えてしまったようで

和真に裏切られたと思ったようで和真へ向ける視線には敵意の色が混じり始めるが和真は明久に頭を下げ、瑞希は明久を落着かせ、

「CクラスにはFクラスの挑発にならないように話を通してあるわ。最近では吉井ちゃんと姫路さんがウチのクラスにくる事も多いから、みんな、2人に迷惑をかけたくないから、納得はしてくれたの。ただ……」

「うちのクラスが挑発にのらないとFクラスは自分達が正しいと言い始めて、ウチに理不尽な暴力を仕掛けてくると思うんだ。流石に暴力に出られると抑えきれなくなるんだ」

和真と友香はFクラスの人間が起こす行動を予想しているようでこの先に起きるFクラスの暴挙を伝えると、

「……うん。言われると本気で起こりそうだから怖いよ」

「そうですね」

明久と瑞希はクラスメート達がおかしな覆面を被り、Cクラスの生徒を追いかけて回している姿が目に見え、顔を引きつらせる。

「そうなるといくらなんでも無理だ。その場合は試召戦争になると思う」

「……そうだね」

雄二が考えている事を話すと明久と瑞希は真剣な表情になってきており、

「まあ、暴力に出ちまうと正当性を訴えられないって事に気づかないのが坂本の抜けてるところなんだけどな。あいつ、自分が元神童だからって言って現実を見れないガキだろ」

「……結城君が現実的すぎる気もするんだけど」

「そ、そうですね」

和真はFクラスの代表である雄二を『ガキ』だと言い切ると友香と瑞希は苦笑いを浮かべる。

「それじゃあ、結城くん、試召戦争は避けられないって事だよね？」

「そうだな。まあ、実力行使できた奴らは普通に処罰対象になるから、それでも良いんだけどバカ代表の作戦に乗ってやらないと反省もしないだろうしな」

「……そうだね」

和真はFクラスに反省させないといけないと言うと明久は試召戦争後の瑞希の体調を心配しているようで目を伏せると、

「大丈夫よ。吉井くん、私達は勝ってもFクラスの設備は落とさないから安心して」

「ああ。後な。姫路、試召戦争になったら、手加減するな。戦い難くても全力で戦え」

「で、ですけど」

「心配するな。お前が戦い難いって事もわかってるけどな。下手に手加減をするとお前のFクラスの居場所がなくなるからな」

和真は瑞希に試召戦争は全力を出せと言い、瑞希は不安そうな表情をするが和真は彼女を安心させるように優しい笑みを浮かべる。

第89問

「まあ、俺達が勝つ事を前提で話しているけどな」

「確かにね。姫路さんに勝てるかはわからないのよね」

和真と友香は試召戦争になるとは言え、実際に瑞希に勝てるかわからないと苦笑いを浮かべると、

「ちょ、ちょっと待つてよ。それなら、何で試召戦争を起こすって言うんだよ。結城くん達にメリツトってないんでしょ。試召戦争をする必要なんてないだろ？」

「そうです。私と吉井くんなら大丈夫です。ですから、落ち着いてください」

「ん？ 2人ならどうにかなるって事か？ 羨ましい限りだ」

「ホントだよ」

明久と瑞希は2人の様子に慌てて考え直すように説得しようとする
と和真は明久と瑞希を交互に見た後にからかうように笑い、愛子も
和真と同じ意見なようであんぐんと頷き、

「な、何を突然言い出すんだよ!？」

「そ、そうですよ!？」

「……結城君、工藤さん、あまり、2人をからかわない」

明久と瑞希は顔を真つ赤にして否定する姿に友香はため息を吐く。

「代表様からのご命令だから、従いますか。後な。吉井、姫路」

「な、何？」

「メリットとかのデメリットの問題じゃいんだよ。お前ら2人が困ってるのに自分の我だけ押し付けてる奴、それを利用しようとしてる奴がいる事が許せないんだ。少なくとも俺が知る限り、坂本と木下弟、島田は去年からのお前の仲間なんだろ。それなのに誰1人としてお前の言葉を聞かないんだからな」

和真の怒りはすでに収まらないところまできているようであり、声の調子は落ち着いているが背中の後ろには真つ黒な何かが漂っているように見え、

「……これはこれで危ないかな？」

「大丈夫だと思いたいわね」

和真の様子に友香と愛子は苦笑いを浮かべる。

「まあ、そう言う事だから、吉井も姫路もあまり気にするな。正直、なるようにしかならないからな」

「そんな感じで良いのかな？」

「良いんだよ。仮に失敗してもたかだか3カ月だ」

和真は試召戦争に負けても設備が落ちるのは3カ月だけだと言いつり、

「……そう思ってるのは結城君だけよ。私は仮に負けた時にクラスメートから何を言われるかと思うと胃が痛くなるわよ」

「そう言うところ、結城君って強いよね」

「就職希望だからな」

友香は代表として立場があるから苦笑いを浮かべるが和真は進級した時から就職希望だから設備は関係ないと言い続けているため、迷いしないようであり、

「な、何か、結城君を見てると考えてるのがおかしくなってくるかな？」

「そ、そうですね」

明久と瑞希は苦笑いを浮かべ、その表情は和真達が休憩室にきた時とは確実に変わっている。

「それは生活費を使い込んで、極貧生活をしている吉井には言われたくないな」

「確かにそうかも」

明久と瑞希の様子に小さく口元を緩ませると明久をからかい、明久は和真の言葉に笑顔で返した時、

「姫路さん、豚野郎、そろそろ、戻ってください。結城和真、邪魔をするなら手伝いなさい！！」

「和真、ちょっと手が足りないから出てくれ」

美春の怒声が休憩室まで響き、新が苦笑いを浮かべながら休憩室に顔を出し、

「わかったよ。代表様、工藤。俺はバイトに入るから、会計の時は俺にツケといてくれ」

「おっけー。小山さん、行こう」

和真は洋子も遅くなると言っていた事もあり、バイトを了承する。

第90問

「……1日も我慢できないのかよ」

「……呆れてものも言えないわね」

和真はFクラスがCクラスを挑発し始めた翌日に登校をすると教室は昨日の下校時間に友人の女子と話をしていたCクラスの男子生徒数名がおかしな覆面をかぶった生徒に襲撃を受けたと言う話を聞いて大きくため息を吐く。

「カズ、どうするの？ 仕掛ける？」

「待て。落ち着け。昨日も言っただろ。昨日の今日じゃ、俺達の印象が悪い。なにより、吉井や姫路の立場がない」

清美は和真にFクラスへの試召戦争を仕掛けるかと聞くが和真は首を横に振り、

「しばらくは待機だ。悪いんだけど、あまり、学内は1人で動くな。いくらなんでもこれ以上は」

「和、さっき、おかしな覆面をかぶった奴らが」

和真はいくらFクラスでも短慮な人間ばかりではないと言おうとするが次から次と教室にはCクラスの生徒がFクラスに暴力を受けたと言う話が伝えられ、

「……ここまでバカなのか？」

「……なんて言ったら良いのかしら」

和真と友香は眉間にしわを寄せる。

「結城くんの言い分もわかるんだけど、これ以上はCクラスの怒りを収まらないよ」

「確かに。いくらなんでもやりすぎだろ」

新と棗はクラスメートから聞こえる不満の声にどうしたら良いのかわからないようであり、

「……とりあえず、今の状況をバカクラスの代表に止められるように言ってくる。その後は相手の出方次第」

「結城くん、私も行くわ」

「代表様も？ 危ないから」

「良いから、行くわよ。結城君がキレたら元も子もないんだからね」

和真はFクラスの教室に行つてくると席を立つと友香は和真の隣に並び、

「山下さん、しばらくお願い」

「了解。その代わり、2人ともキレるつてのは無しにしてね」

「ああ。気を付けるよ」

清美は頭に血が昇りやすい2人がFクラスに向かう事に不安な所があるようで落ち着けと言って2人を見送る。

「さてと、行きますか？」

「そうね」

和真と友香は中央階段を挟んだ旧校舎にあるFクラスの教室に向かって歩き始め、

「流石の結城君の予想も外れたわね」

「予想なんて当たるか外れるかなんてわかんないって、A^{バカ}対Fが出来過ぎだったんだよ」

和真はFクラスの行動が予想以上に斜め上を爆走しているため、頭が理解する事を拒絶しているようで表情は険しく、友香は和真を落ち着かせようと苦笑いを浮かべて声をかけると和真は友香が気を使ってくれている事に表情を少し緩めるが、

『裏切り者には死の制裁を！！』

『殺せ！！』

その姿を何か勘違いしたようでおかしな覆面をかぶったマント姿の3名の生徒が和真と友香に向かって巨大な鎌を振りまわして襲ってくる。

「ちょ、ちよつと、何よ！？」

「何？ って、F^{バカ}クラスだろうな」

友香はとっさの事で顔を引きつらせ、逃げる事もできずいるが対照的に和真は落ち着いており、ため息を吐くと、

「暴力反対と」

「え！？ ちょっと、結城君！？」

慌てる事なく、最初の鎌の攻撃を避けると3人の足を引っ掛け、3人は前のめりに廊下に大部し、

「……F^{バカ}クラス3名確保。校内暴力は何日間の停学処分かな？」

覆面をはぎ取ると3名の生徒はやはりFクラスの生徒であり、笑顔で停学は免れないと言うが、

『バカじゃないのか？ 俺達の行動は乙女を守る正義の行動だ』

『結城和真、貴様に制限される覚えはない！？』

Fクラスの生徒は自分達の行動は正義だと言いきった時に頭に拳が振り下ろされ、

「……そんなわけないだろ。結城、小山、迷惑をかけたな」

「に、西村先生」

「別に良いですよ。その代わり、こっちは被害者なんで現行犯です」

しね。その3人の処罰はきつちりとお願ひします」

「ああ。当然だ。お前ら生徒指導室で詳しい話を聞かせて貰うぞ」

眉間にしわを寄せた西村教諭は和真と友香に頭を下げると和真は3名の生徒をきつちりと処罰して欲しいと頭を下げ、西村教諭は3名の生徒を引きずって歩いて行く。

第91問

「行くか？」

「う、うん……」

「ん？ 代表様、どうかしたか？」

和真はFクラスの教室に行こうと友香に声をかけると友香は和真の様子に何かあるようであり、和真は首を傾げる。

「結城君は、どうして、あんなわけのわからない人達相手に直ぐに対応できるの？」

「いや、あれ以上に関わってるからな。店長……清水の親父さんの相手をすると考えたらあの程度の殺意は何ともない」

友香は先ほどの和真の様子を疑問に思ったようであり、不思議そうな表情をすると和真は苦笑いを浮かべながら、上には上がいると言いつ切り、

「……清水さんのお父さんがおかしい日には店に行かないようにしないかね」

「そうしろ。それが命を守るために必要な作業だ」

友香は清美達からも美春の父親の異常性は聞いているため、身の安全を守るために心に誓い、和真は大きく頷き、

「まあ、話も落ち着いたし、行くか？　ここで遊んでも仕方ない
しな」

「そうね」

2人は再度、Fクラスの教室に向かって足を進める。

「雄二、どう言う事だよ！！　いくらなんでも暴力はやりすぎだろ
！！」

「そうです」

Fクラスでは明久と瑞希がクラスメート達の行動はやりすぎだとC
クラスを挑発すると言いだした張本人でもある雄二に詰め寄ると、

「うるせえな。わかってるよ。俺だってこんな直ぐに行くとは思っ
てなかったんだよ。それを」

雄二はクラスメート達が始めた理不尽な制裁は考えていなかったよ
うで乱暴に頭をかくが、

『正義は我らにある。結城和真の首を我らに奉げるのだ！！』

『あの男は先日、Eクラス代表の中林宏美と喫茶店でデートをして
いた。それなのにCクラス代表の小山友香にも手を出している。乙
女の味方と言う崇高な理想を掲げている我らには絶対に始末しなけ
ればいけない男だ！！』

Fクラスの生徒達は和真を殺す事だけを考えているようで和真の写
真をかかげて嫉妬のこもった声で叫びながら和真の写真にカッター

を突きたてている。

「何が不味いのよ？ あんな、人の話も聞かない最低な男に制裁を加えるのは当然でしょ」

「悪いけど、あんたら豚に制裁を受ける義務はないよ」

美波は和真を余程毛嫌いしているようで憎しみのこもった声で和真を倒すと言った時、和真と友香がFクラスの教室のドアを開ける。

「ゆ、結城君に小山さん」

「どうしたんですか？」

「2人ともおはよう。ちょっとな。バカ代表に話があったんだよ。一応は俺と代表様は正式なクラスの使者だからな。話くらいは聞けよ。ん。豚相手に話さないといけないから語尾に『ぶひぶひ』とでも付けてやろうか？」

明久と瑞希は和真と友香の登場に驚きの声をあげるが和真は気にする事なく、2人に朝の挨拶をすると雄二を挑発するように呼び出し、

「……なんだよ。豚になんか話しかけたくなかったんじゃないのか？」

「ああ。別に話しかける気もなかったがな。お前らの行動があまりに程度が低くてな。自分達の行動を考え直す事なく、暴力に出るなんて、言った通り、違うな。家畜以下が正しいか？」

「何ですって!!」

雄二はこれから和真が言う事は理解しているようであり、Fクラスの行動は不味かったがそれでも自分の思い通りに進んでいると思っているようで周りが気付かないように小さく口元を緩ませるが和真はため息交じりでFクラスをバカにすると美波が和真の胸倉をつかむ。

第92問

「結城君、落ち着いて！？ 美波も！？」

「そうです。美波ちゃん、暴力はダメです！？」

「吉井、姫路、心配するな。俺は落ち着いている」

和真と美波の一触即発の空気に明久と瑞希は慌てて声をかけるが和真は苦笑いを浮かべて美波の手をつかみ、

「俺は話し合いに来たと言ってるのにそれも聞けないから家畜以下って言われるんだ。それも気づかないのか？」

落ち着いた口調で美波の腕を引き剥がし、

「家畜代表、こっちからの話は昨日と今日、ウチのクラスに理不尽な暴力を仕掛けたバカ達を引き渡せ。それだけだ。それで平和的に解決しようじゃないか」

「あ？ そんなものに応える義理はねえよ」

「それもそうだな。クラスメートもまとめる事も試召戦争も勝つ事もできない無能な代表だしな」

和真は暴力に走った生徒を見つけて引き渡すように言うが雄二は和真の言葉を鼻で笑い、和真は想定内なようで雄二をバカにする。

「そりゃそうだろ。簡単に同盟を組んだクラスを裏切るようなクラ

スを信じる事なんてできねえよ」

「……坂本くん、言っておくわ。簡単に裏切った覚えもないわよ。Bクラスは同盟を続けるほどの価値のないクラスだった。それだけでしょ」

雄二はあくまでも原因はCクラスにあると自分達を正当化したいようだ、その言葉を聞いて友香が口を開く、

「は？ よく言うな。流石は卑怯者をまとめる代表様だ」

「まあ、同盟を取りやめた時にキチンと話もしたし、部外者のあなた方に避難される筋合いはないわよ。だいたい、あなたはこっちに不利にしなければならない条件を渡された時にクラスをまとめるため、守るために代表としてその同盟を続けてられるの？ クラスメートを簡単に売るクラスよ。同盟クラスなんてもっと簡単に売られるですよ」

「代表様、言っても無駄だぞ。こいつもあの小者と同じ事をするだろうからな。相手のクラスの備品を壊す。やってる事は変わらないし、小者はそれをクラスの実行犯に押し付けてこいつはDクラスに押し付けた。それだけだろ。自分達の非を認める事もできないんだ。それも小者はそれでも代表としてお前らのくだらない提案であんな惨めな格好をしたのにこの家畜代表はAクラスとの条件も守っていない。そんな卑怯な人間が代表なんだ」

和真と友香は卑怯と罵られる理由はこちらには何もないと言い切り、和真は雄二をさらに挑発する。

「……」

「何だ？ 何か反論でもあるのか？ クラス代表として責任も果たしていない。卑怯者以下の代表様。家畜クラス、思い出せよ。今、最初の設備以下になっっているのは誰のせいだ？ それも理解できないのか？ さすがは家畜以下の知能しかない奴らの集まりだ」

雄二は和真の敵意に視線が鋭くなるが和真は気にする事なく、Fクラスを挑発すると自分の感情で走る人間の集まりであるFクラスの生徒の敵意は和真と雄二に集中し始め、

「てめえ、何が目的だ？」

「何が目的？ 最初から言ってるだろ。ウチのクラスに理不尽な暴力をふるった生徒を引き渡せ」

「制裁でもするつもりか？」

雄二はこの挑発の裏にまだ和真の考えがある事を感じ取り、和真の作戦の底を見ようとしているようである。

第93問

「バカか？ 何で同じ事をしないといけないんだ？ 俺達はお前ら
家畜以下と違ってルールを守るって事を知っているんだ。処分は学
園に任せるに決まってるだろ」

「……そう言う事か？」

和真は当然、学園に処罰を任せると言う雄二は和真が何を考えて
いるか理解したようで苦虫を噛み潰したような表情をするが、

「その答えはノーだ」

「そうだな。だいたい、無能な代表様にあの家畜以下をまとめる事
はできないんだ。それにクラスを売る事になるからな。俺達を卑怯
者扱いしてまとめたクラスに亀裂を入れるわけにはいかないからな」

雄二は和真の提案に乗る事はできないと首を横に振ると和真はため
息を吐き、雄二の心境を読み当て、

「そうだな。それができないなら、俺達が提案するのはお前らを少
しでも反省させるために」

和真は小さく口元を緩めると、

「模擬試召戦争を申し込む」

「も、模擬だと？ 本番ならまだしも模擬なんて受けるわけがない
だろ」

本番の試召戦争ではなく模擬試召戦争を宣言し、雄二は自分達に有利なものではないため和真からの提案を跳ねのけようとするが、

「受けてやるわよ！！ 結城和真、あんたに西村先生の鬼の補習を受けさせてあげるわ！！ あんたをぶちのめして、ウチの前でウチが正しいって土下座させてあげるわ！！」

美波は和真からの挑発にかなり頭にきているため、和真を完全に敵と見なして吠えるとFクラスの生徒も同様に和真の挑発が効いていたようで模擬試召戦争を受けると騒ぎ始める。

「ま、待て。模擬試召戦争はダメだ！！ 勝っても俺達に何も無いんだぞ」

『うるせえ。坂本！！ 無能な代表の話なんか聞くわけがないだろ！！ 俺達はある男をグロテスクに殺せばそれで良いんだ！！ 設備なんか知るか！！』

雄二は完全に開戦の空気になっているFクラスの生徒を抑え込もうとするが和真の打ち込んだ楔はしつかりと最初から存在していたかわからないFクラスの絆を打ち砕くには充分すぎるものであり、誰も雄二の説得に耳を傾ける者はいない。

「結城君、これが目的だったの？」

「ああ。これだと設備を落とす必要もないからな。それに勝手にCクラスに暴力をふるった家畜以下と俺達被害者の私闘になるわけだから、吉井と姫路が参加する義理はない」

友香は和真相手に向けられる罵倒や殺意に居心地が悪そうに和真の制服を引っ張ると和真はFクラスの生徒の罵倒も殺意もどうでも良さそうであり、つまらなさそうに欠伸をした時、

「お、おはようなのじゃ」

「ひ、秀吉、どうしたの!？」

ボロボロになった秀吉が登校してきたようで弱々しく朝の挨拶をし、秀吉の様子に明久は慌てて彼に駆け寄ると、

「……ああ。木下さん、人殺しにならなくて良かったな」

「……それでも充分、やりすぎよ」

「そ、そうですね」

昨日の『ラ・ペデイス』のやり取りを見ていたメンバーは秀吉に何があったかを理解したようであり、

「結城和真、お主、姉上に何を吹き込んだのじゃ!! そのせいでワシはいわれのない暴力を受けたのじゃ!!」

「……お前、木下さんが説教した意味も人のせいにするのかよ。最低だな」

秀吉は和真を見るなり、優子からの暴力を和真のせいだと叫び、和真は話の通じない秀吉の様子に大きく肩を落とす。

「何じゃと!!」

「うるせえな。言葉も通じない家畜……秀吉だったし、サルで良いか？ サル相手に話す事なんてないね。家畜以下代表。開戦はHR後だ。代表様、帰るぞ」

「ええ」

秀吉は和真にバカにされているため、声を張り上げるが和真は気にする事なく、模擬試召戦争の開戦時間を告げると友香と一緒にFクラスの教室を出て行く。

第94問

「……カズ、あんた、ずいぶんと挑発してきたみたいね」

「挑発？ 何を言ってるんだ？ 俺は事実しか言っていないぞ」

「核心を突かれた人間は反省するか責任転嫁するって相場は決まってるだろ」

「……Fクラスは全員が後者なわけね」

模擬試召戦争が開戦されるとCクラスは和真、新、清美を中心に戦闘を開始するがFクラスの生徒の8割は和真に向かって突撃してきており、作戦も何もないため簡単にCクラスに返討ちにあって行く。

「さてと、そろそろ。坂本が何かを仕掛けてくるかな？」

「仕掛けてくるって、坂本くんは完全にFクラスからの信頼を失ってるんでしょ。それなら、仕掛けてなんかこないでしょ」

「まあ、普通はそうなんだけどな。Fクラスはバカで責任転嫁が得意な家畜以下の奴らばかりだからな。ここまでやられると次は代表の坂本のせいにして作戦の1つでも出せと言い始めてる頃だろ」

「……どうしようもないわね」

和真はFクラスの戦力低下になりふりなどかまっていられなくなった人間が先ほど罵倒していた雄二に作戦を聞くと予想した時、

「見つけたわよ。結城和真!!」

「和真にまた女の影が!?!」

「……違う。だいたい、俺にだって選ぶ権利がある。あんな感情任せで動く猪女は願い下げだ」

美波が和真を見つけて吠え、その様子に清美は和真をからかうように笑うが和真は大きく肩を落とすが、

「いや、カズの周りって、代表、宏美、清水さんって、感情で動くタイプが多いでしょ?」

「……否定できないのが痛いな」

清美はニヤニヤと笑いながら和真の周りにいる女の子は美波に似たタイプが多いと言うと和真は眉間にしわを寄せる。

「ウ、ウチをバカにするな!! ウチだってあんたみたいな。性悪、お断りよ!!」

「カズ、今更だけど、あんた、島田さんに何をしたの?」

「別に何もしてない。こっちが因縁を吹っかけられたから正論で返しただけ」

「……こっちも後者なのね」

美波は和真と清美の話に和真を威嚇するように叫ぶが和真は相変わらず、美波の相手をする気はないようであり、

「許さないわ。結城和真、絶対にウチに土下座で謝らせてあげるわ！！」
Fクラス島田美波がCクラス結城和真に数学勝負を挑むわ！
試獣召喚！！」

「はいはい。受けますよ。試獣召喚」

美波は和真を指名して数学のフィールドを展開すると美波の前の床には機械的な魔法陣が浮かび上がり、美波を2頭身にしたような召喚獣が呼び出され、彼女の召喚獣は和真に向けて武器であるサーベルを構え、和真は美波の相手をするために1歩前に出て召喚獣を呼び出すと美波の時と同様に床に魔法陣が浮かび上がり、白いプレートアーマーに大剣を装備した和真の召喚獣が呼び出される。

「島田さんの数学、Bクラスくらいあるね」

「そうだな。でも」

新と清美は美波の数学の点数が200点近い事に感心したように言う、

「数学は得意なのよ。さあ、結城和真、あんたは西村先生の補習でも受けてなさいよ！！」

「バカな事を言うなよ」

美波はよっぽど自分の数学の点数に自信があるようで和真の召喚獣に向かって駆け出してくるとサーベルを振り下ろすが和真の召喚獣は大剣でサーベルを弾き飛ばし、

「……でも、和真は理数は得意なんだよな」

「あいつのシスコン力は凄まじいよな」

和真の点数は300点には届かないもののそれでも200点代後半まで上がっているため、新と清美はため息を吐く。

第95問

「あんだ、何なのよ!? ウチはBクラスにも数学は負けてないのよ!？」

「……いや、普通、上位クラスが相手なんだから、自分より点数が高い前提で仕掛けてこいよ」

美波は数学にはAクラス以外には負けなと思っていたようで和真の召喚獣の上に表示されている数学の点数に声をあげるが和真は彼女の反応に眉間にしわを寄せると、

「……島田さんって本当に猪みたいね？」

「いや、Fクラスの9割がそうだろう」

新と清美は美波の反応に大きく肩を落とし、

「猪女、自分の非を詫びるなら補習室に送らないでやるけど、どうする?」

「誰が猪女よ!! だいたい、何でウチが謝らないといけないのよ!! ウチがあんたに謝る事なんて何1つとしてないわ!!」

「……いや、俺、胸倉捕まれて罵倒されてるんだけど、他にも脅迫されてるし」

和真は明久と瑞希の話もあるため、それでも美波には話が通じるか確認しようと降伏勧告をするが美波は自分は何も悪くないと和真の

提案を跳ねのけ、和真は美波の様子に大きくため息を吐くと、

「まあ、猪に話が通じるわけないか。品種改良も終わってないからな」

「ウチをバカにするな！！」

美波は和真の態度が気に入らないため、彼女の召喚獣は怒りに任せて和真の召喚獣に襲いかかるが、

「ふーん。教師仕様って、去年の召喚獣実習とかより、召喚獣と深く繋がっている気がするな」

和真は落ち着いた様子で美波の召喚獣のサーベルを弾き飛ばす。

「な、何で、あんたは召喚獣の操作まで上手いのよ！？」

「……これもお前らの被害を受けた結果だ」

美波は和真の召喚獣が特別仕様の事を知らないため、驚きの声をあげるが和真はその言葉に怒りがこみ上げてきたようで背後に真っ黒な殺意^{もの}をまとい始め、

「……改めて聞くと、和真がFクラスを恨むのは当然なんだよな」

「……調べてみると観察処分者の仕事の6割って生徒が壊した備品の移動みたいよ。それもウチの学年が壊した備品。和真がFクラスを嫌うのって正当な理由だよな」

「その原因は誰一人として自分は悪くないって言うわけだしな」

新と清美を中心にしたCクラスの面々は和真の様子に巻き込まれたくないようで和真から離れるように陣取り、

「ちょ、ちよつと、あんた達、何で逃げるのよ!？」

「だって、私達はこの件に関しては悪くないしね。元々、島田さんに関しては和真の話を聞く限りは吉井くんのラブレター事件の事をカズに謝れば終わったわけだし、それを自分を省みずに和真が悪いって言ってるんだから、助ける義理も正当性もないよ」

美波は和真の様子に背筋に冷たい物が伝ったようで和真以外にはCクラスに恨みもないと言う事もあるのか、Cクラスにまで助けを求めるが当然、誰も彼女を助けるわけもなく、

「ま、待ちなさい。まずは落ち着きなさい。ウチは人間な話し合いを提案するわ」

「……その段階はとづくに過ぎているだろ。それくらいも理解できないのか？」

美波はなりふりはかまっていられなくなったようで先ほどまでは憎悪の対象としか見ていなかった和真に話し合いを提案するが和真は当然、跳ねのけると同時に和真の召喚獣の大剣は美波の召喚獣の頭上から振り下ろされ、彼女の召喚獣の点数は一気に『0』になり、

「戦死者は補習ううう!!!!!!」

「補習は嫌あああ!!!!???? ゆ、結城和真、覚えておきなさいよ!!!」

美波は西村教諭に抱えられて退場して行くが和真への恨みは色濃くなっているのが誰の目からも明らかであり、

「……カズ、あんたはそう言う星の下に生まれたのよ」

「……いや、そう言うのは止めてくれ」

清美は和真を労うように彼の肩を叩くが和真は美波を補習室送りにした事で少し冷静になったようで大きくため息を吐く。

第96問

『坂本、お前のせいなんだから、どうにかしろよ』

『あの。生意気な結城和真を血祭りにあげる手を考えろよ』

「……………」

Fクラスの教室では和真の言った通り、雄二に責任を押し付けて彼を攻め立てており、雄二は自分の指示を無視して勝手にCクラスへの暴力を開始し、和真の挑発に乗ったクラスメート達の行動に眉間にしわを寄せている。

「雄二、諦めなよ。今回は確実に先に手を出したFクラスが悪いわけだし」

「……………黙ってるよ。あいつの思い通りになってるこの状況が俺は気に入らねえんだよ。そんな事を言っていないでお前も戦ってこいよ」

「イヤだよ。僕も姫路さんも結城君達Cクラスに恨みも何もないし」

「そうですね。それにそれをしてしまうと結城くんが私達を気づかっつて模擬試召戦争を提案してくれたのを裏切ってしまいますから」

明久は今回の模擬試召戦争はFクラスに全面的に悪いと思っており、雄二に諦めるように言うが雄二は和真の事が気に入らないため、和真に頭を下げる事など論外だと吐き捨てると明久と瑞希を見て、Cクラスと戦って来るように指示を出す。明久と瑞希は雄二の指示には従えないと首を振り、

「何で、わかんねえんだよ。あいつはお前達の事なんか気にかけてねえよ。自分達の有利に事が進むようにしただけだ」

「そうなのじゃ。あの男は卑怯者なのじゃ！！」

雄二は戦う気がない明久と瑞希の様子に舌打ちをして和真が強力な戦力である瑞希を戦線に出さないための作戦だと決めつけ、秀吉は優子が自分への暴力をふるった事を和真のせいと決めつけている事もあるため、和真を卑怯者だと叫ぶ。

「秀吉……どうして、わかってくれないの？」

「わかってないのは明久、お主じゃ！！」

「木下くん」

明久は秀吉の様子に悲しそうな表情をするが秀吉はすでに明久の言葉を聞く気はないようで明久に当たると教室を出て行ってしまい、

「……結城の弱点でもわかれば良いんだけどな。何か無いか？ 情報を集めに行ったムッツリー二はまだ戻ってこないか？」

「……………今、戻った」

雄二は秀吉と明久の様子を気にする事なく、和真を倒す算段を付けるためには情報が足りないようで乱暴に頭をかいた時、Cクラスの情報を集めに動き回っていた康太が教室に戻ってくる。

「ムッツリー二、あの男の弱点は何かわかったか？」

「……………男になど興味はない。ただ、結城和真と高橋先生が従姉弟で一緒に住んでいると言う殺したいほど嫉ましい情報を手に入れた」

雄二は康太に駆け寄り、和真の情報を聞くが康太は和真の情報が洋子と和真が同棲している事を調べ上げ、和真に対する殺意をあげると、

「高橋先生と一緒に住んでいる？　なるほど、これは使えるか？」

雄二は康太の様子を見て、Fクラス特有の能力に目を付けたようでありと笑い、

「良いか。お前ら、よく聞け。結城和真は代表の小山友香やEクラス代表の中林宏美以外にもAクラス担任の高橋先生に手を出しているそうだ」

『『『何！？』『』』

『結城和真、許さん』

『あいつの臍物を我らが高貴な魂を持つ異端審問会に奉げるのだ』

和真を女たらしだとクラスメートに話すとクラスメート達はおかしな覆面をかぶり手には大鎌を持って教室を駆け出しに行き、

「結城和真、俺をバカにした事を後悔しろよ」

「……………雄二、お前は結城君の事を何もわかってないよ」

雄二はFクラスの生徒に血祭りにあげられる和真の姿を思い浮かべたようにニヤリと口元を緩ませるが明久は雄二の考えた策が和真相手では愚策でしかない事を理解しており、雄二を哀れむような視線を送る。

第97問

「……感情任せで策も無しか？」

「……カズ、あんたは本当に敵を作るのが上手いわね。聞いた話じや、木下くんって、落ち着いた感じの子って話なのに」

和真は作戦もなく、和真に向かってきた秀吉を補習室送りにすると西村教諭に担がれながらも和真に敵意を向けている秀吉の様子にため息を吐くと清美は完全にFクラスを敵に回した和真を見て苦笑いを浮かべた時、

「……和真、何か、おかしな連中が出てきたぞ」

「そうみたいだな」

おかしな覆面をかぶり手には巨大な鎌を持ったFクラスの生徒20名が廊下の先からこちらに向かって駆け出てきており、その様子にCクラスの生徒達は気落とされたようで後ろに後退して行くなか、和真と新の2人は下がる事なく呆れたようにため息を吐いており、

「結城君、北条君、余裕そうだけど大丈夫なの？」

「まあ、あの程度の殺意、店長に比べれば余裕だな」

「まっただ」

Cクラスの増援に来たはずの棗は和真と新の様子に自分がきた意味があるのかと聞くと2人は美春の父親の方が恐ろしいと言い切る。

「それじゃあ、2人に任せた」

「いや、だからと言って、この人数差は無理だろ」

「大丈夫。骨は拾ってあげるから」

「……いや、それは大丈夫じゃないからな」

棗はあまり今のFクラスの生徒に関わり合いたくないようで和真と新に任せようとするが流石に2人では20人の相手はできないと和真がため息を吐いた時、

『居たぞ。結城和真だ!!』

『高橋先生にまで手を出す色欲魔人を我らの手で八つ裂きに!!』

Fクラスの生徒達は絶対に触れてはいけないものに手を出し、

「総員、撤退!! 結城君から離れます!!」

「撤退よ!! ここにいて巻き添えを喰らうわけにはいかないわ!!」

棗と清美は和真の背後からおかしな殺意^{もの}があふれ始めた様子にCクラスに撤収命令を出し始め、Cクラスは蜘蛛の子を散らしたかのよう^{よう}に撤退を開始し始め、

『クラスメートにも見捨てられるとはな。これで終わりだ。結城和真!!』

装備されており、

「
……オールドライフ
大暴走」

和真は腕輪を発動させると和真の召喚獣の点数は点数を上げ始め、
単体教科の点数であった点数が彼の現在の総合得点である2678
点まで上昇して行き、

「これが結城君の腕輪の能力ですか？
ちから

「……単体教科で総合得点で戦えるのは反則だろ？」

「だけど、酷くカズらしい気がするのは何でだろうね」

和真の腕輪の能力を見たCクラスの生徒達は顔を引きつらせながらも和真らしい腕輪の能力だと頷き、

「ちょっと待て！？ ぼ、暴力はどうかと思うんだ！！」

「せ、先生、見てください。この男は暴力をふるっています。停学
に、いや、退学に！！」

和真は腕輪の力でFクラスの召喚獣とともにFクラスの生徒まで蹴
散らして行く姿にFクラスの生徒は自分の身の危険を感じたようで
自分達が和真を本気で殺そうとしていた事など忘れてそばにいる教
師陣にみじめにも助けを求めるが、

「……今回は巨大な鎌を振りまわしていた事もありますし、結城君
の正当防衛と判断します」

『そうですね』

『『『お前ら、それでも教師か!?!?!』』』』

『すいません。私達も人間ですので』

教師陣も人間のため、自分達の手伝いを良くしてくれる和真と問題ばかり起こすFクラスを天秤にかけたようで全員が和真の味方をし、

「お前で最後だな？」

『ま、待て。我々は人間だ。話し合いを!?!?』

「……ここまで話し合いを提案していたのに聞きいれなかったのはお前達家畜以下だろ」

和真は1人でFクラスを全滅させ、気絶をしたFクラスの生徒は西村教諭に担がれて行く。

「……次は家畜以下代表だな」

「と、とりあえず、追いかけるか？」

「そうだね。その前に……霧島さん呼んでこない？ 坂本さんの罰のために」

「そうですね」

和真は点数を減らす事なく物理のフィールドを展開したまま、Fクラスに向かって行き、残されたCクラスの生徒達は雄二への制裁を

彼の幼なじみの『霧島翔子』に任せると決めたようにで数名が翔子を呼びにAクラスの教室に向かって行く。

第97問（後書き）

どうも、作者と、

和真「主人公です」

和真の腕輪はお披露目です。

和真「反則っぽい。能力だな」

まあ、そうですね。でも、和真らしい。

和真「……否定できないな」

怒りに任せた大暴走の和真。

Fクラスを殲滅して次は雄二を血祭りにあげにFクラスに向かいます。

雄二の運命はいかに？（爆笑）

第98問

「……家畜以下代表。居るか？」

「ゆ、結城和真！？ な、なんで、お前がここに？ あいつらを抜けてきたって言うのか！？」

「……いや、正式に言えば皆殺しにしてきたが正しいか？」

「そうですね」

和真はFクラスの教室のドアを蹴破ると雄二は嫉妬にまみれたFクラスの生徒の間を和真が抜けてこれると思っ
ていなかったようにで驚きの声をあげると和真の後を付けてきた新と棗は苦笑いを浮かべ、

「……やっぱりね。雄二、お前は触れてはいけないものに手を出したんだよ」

「えーと、坂本くん、死なないでくださいね。結城くんも人殺しにならないように頑張ってください」

明久は巻き添えを喰らうわけにはいかないと思ったように瑞希を背に守るように後ろに後退すると瑞希は立場的には片方だけ応援するのはおかしいと思ったのか明久の背中に隠れたまま2人を応援するがその応援の言葉はおかしく、

「ちょっと待て！？ 姫路、その応援の仕方はおかしいだろ！？」

「……結城和真が家畜以下代表の霧島雄二に物理勝負を挑む。試獣
モン」

召喚」

「誰が霧島雄二だ！？ だいたい、模擬でも試召戦争だろ！？ 手を出すんじゃないよ！？」

雄二は瑞希の応援に声を上げた時、和真の右ストレートが雄二の顔を襲うが雄二はその攻撃を何とか交わして教師陣に和真の反則負けを宣言しろと言いたげに吠えるが、

『西村先生から結城君の件は目をつぶる様に指示が出てると学園長の許可も出てます』

「どんな理由だ！？」

教師陣は雄二から目を逸らすばかりかすでに雄二処刑の件は学園の許可が下りていると言い切り、雄二はあり得ない状況に声をあげる。

「さつさと、召喚獣を呼べよ。家畜以下代表の霧島雄二」

「う、うるせえな。今、呼んでやるよ……なんだ、その点数は！？」

和真は雄二の本体と召喚獣をぶちのめすつもりのため、雄二に声を召喚獣を呼べと言うと雄二は逃げ場所がないため、舌打ちをして召喚獣を呼び出そうとした時に和真の召喚獣の頭の上に表示されている単体教科ではあり得ない点数を見て驚きの声をあげると、

「霧島君、わたしが知る限り、今は結城君が物理の単体教科はトップだよ。それで腕輪の能力も付加済みで総合得点で単体教科で戦えるんですよ」

「反則じゃねえかよ!?　　って言うか、こんな点数なのが何でクラスにいるんだよ!?」

「……それはお前らの責任だろ」

棗は何も知らずに負けるのは流石に可愛いそうだと判断したのか雄二に声をかけ、雄二は反則だと叫ぶが新は和真の点数がここまで上がった原因はFクラスにあるため、大きくため息を吐く。

「さつさとしろ。家畜以下の相手をしてるほど、ヒマじゃないんだよ」

「あぶねえな。お前、暴力で俺に勝てると思ってるのか?　知ってるか?　俺は中学時代はそれなりに名前が売れてたんだぜ」

和真はいつまでも召喚獣を呼び出さない雄二への挑発なのか雄二にボディブローを放つと雄二はそれを腕でガードし、試召戦争よりケンカの方が得意だと言いたげに笑みを浮かべるが、

「……坂本、良い事を教えてやる。たぶん、その状態の和真は西村先生と対等に戦うぞ」

和真はボディブローが防がれた事など気にする事なく、雄二の鼻っ柱をストレートで打ち抜き、和真の逆鱗に触れていると言う最悪の状況に気づいていない雄二を哀れむ。

第99問

「ちょっと待て！？ こいつは何なんだよ！？」

「何って、シスコンですね」

「それ以外に言葉がないよね」

雄二は中学時代は『悪鬼羅刹』と呼ばれてこの界限を騒がせていたため、多少はなまっているにしても反応すらできないくらいの攻撃を仕掛けてきた和真に声をあげると棗と明久は和真を『シスコン』と言い、新と瑞希は大きく頷く。

「意味が分かんねえよ！？」

「坂本、良いか。世の中なんて意味がわからないものばかりだ。人外化する父娘とかな」

「……うん。清水さんと店長も意味がわからないよね。後は秀吉のお姉さんも」

雄二は4人の反応に理解できないと叫ぶが新は首を振り、明久は最近、見た常識で測ってはいけない人間の顔を思い出して顔を引きつらせると、

「家畜以下代表、早く、召喚獣を呼べ、今なら補習室送りと右腕以外全部の関節を外すだけで許してやる」

「ちょっと待て！？ 許した対応じゃねえよ！？」

「……そうか。なら、全部、折る」

和真は改めて雄二に召喚獣を呼べと言うが、雄二は召喚獣操作では勝ちようがないため声を上げるだけで召喚獣を呼び出さない様子に怒りのボルテージはさらにあがって行く。

「雄二、早く。グロテスクに倒されろよ」

「坂本、俺達もお前らの変な意地に付き合ってるほどヒマじゃないんだ」

「待て！？ 模擬試召戦争これを始めたのはあいつらであって、俺じゃねえよ！！」

すでに教室には雄二の味方はいない状況であり、雄二はクラスメイト達の暴走により、自分の作戦から外れた事もあるためか自分がCクラスを悪者にした噂を流したと言う事実を否定し始めた時、

「……坂本君、それは流石に情けくない？」

「……雄二、男らしくない」

友香がAクラス代表であり、雄二の幼なじみの『霧島翔子』を連れてFクラスの教室に入ってくる。

「しよ、翔子、お前、何しにきた！？」

「……夫が粗相をしたのを謝るのは妻の役目。結城、雄二が迷惑をかけてごめんなさい。雄二を許して欲しい」

雄二は翔子が現れた事に驚きの声を上げるが翔子は和真に深々と頭を下げ、

「……わかった。両目を潰すだけで許してやる」

「だから、それは許した。行動じゃ!？」

「……これで良い？」

和真は翔子に妥協点を話すがその妥協点はやはりおかしく声を上げた時、翔子の指は流れるように雄二の両目に吸い込まれて行き、雄二は畳の上でのたうちまわっている。

「……結城君、こんな決着で良いのかしら？」

「さあな。とりあえず、霧島さん」

「……何？」

友香は模擬試召戦争の決着の仕方が意味がわからないようで眉間にしわを寄せるが和真の怒りは一先ず、落ち着いたようであり、翔子と呼ぶと、

「これからも旦那が粗相をしたら、調教……しつけを頼んで良いか？」

「……さっきも言った。夫の粗相を正すのは妻の役目」

「流石、霧島さん、頼りにさせて貰う」

翔子に雄二のしつつけを頼み、翔子の返事に笑顔を見せ、

「吉井に姫路、他は補習室だけど授業ってどうなるんだ？」

「さ、さあ」

新は模擬試召戦争が授業の一環ではないため、補習室から帰ってこないクラスで明久と瑞希はどうするのかと聞くが、

「野暮な事は聞いたらダメですよ。後は若い2人に任せます」

「だな。吉井、姫路と2人で自習でもしてろよ」

「一応は学校だからね。あの2人みたいに保健体育の実技は止めてよ」

棗は新の背中を押すと和真と友香は翔子に押し倒されかけている雄二に視線を向けた後に2人をからかうように笑い、

「ちよ、ちよっと、結城君もみんなも何を言うんだよ」

「そ、そうです!？」

明久と瑞希は顔を真っ赤にするが和真達は2人から逃げるように自分達の教室に戻って行く。

第100問

「1度、休憩を入れるか？」

「ホント……疲れたよ。まだ、半分くらい？」

「そうだな。それくらいか？」

CクラスとFクラスの模擬試召戦争を終えてから、2週間が過ぎた頃、文月学園は学園祭である清涼祭の準備期間に入り、教師仕様の召喚獣になった和真と観察処分者の明久は教師達から頼まれた材料をト運んでいると西村教諭は2人の疲労具合を確認して休憩をするように言い、2人は額ににじむ汗を拭った時、

「和くん、吉井くん、お疲れ様です」

「高橋先生、ですから、学園内では結城と呼んでください」

「す、すいません。どうしてもなれなくて」

洋子が3人に差し入れを持って来てくれたようで購買で売っているスポーツドリンクを3本持って駆け寄ってくる。

「まあ、結城も落ち着け。今は他に誰もいないし、良いだろ」

「ですけど」

「そうです。それより、差し入れを持ってきましたので、どうぞ。吉井くんも」

西村教諭は和真をいさめるが和真は苦笑いを浮かべ、洋子は西村教諭の助けに和真から逃げるように明久にスポーツドリンクを渡し、

「あ、ありがとうございます」

「まったく、高橋先生、ごちそうさまです」

明久は喉が渴いているようで洋子から渡されたスポーツドリンクに口をつけると和真は苦笑いを浮かべたまま、スポーツドリンクを受け取り、

「しかし、吉井が真面目に手伝いをするとはな」

「な、何？　せっかく、真面目に観察処分者の仕事をしてるのに」

西村教諭は明久が真面目に観察処分者の仕事をしている事に何かを疑っているような視線を向けると明久は文句がありそうな表情をする。

「まあ、結城達と知り合って少しは成長したと言うことか……あいつらは、遊んでいるのに、高橋先生、ここを頼めますか？　俺はあのバカどもを教室に戻してきます」

「はい」

西村教諭は和真達と知り合って、明久が少しは真面目に教師達の話聞くようになった明久を見て少しだけ嬉しそうに笑った後、グラウンドに集まり、野球を始め出したFクラスの生徒達を見て大きくため息を吐くと西村教諭は洋子に和真と明久を任せてグラウンドに

向かって行くと、

「……野球か。周りがお祭りムードのなか、あんな事をやってるから、女にも縁がないんじゃないか？」

「そうなの？」

「そりゃあ、普通に考えたら、準備をほったらかして遊んでいる奴らと真面目に手伝ってくれる男の方が評価が上がるだろ。あいつらは自分勝手すぎるから、女が近づいてこないって事に気づかないかな？」

和真はFクラスの男子生徒がもてない理由がわかると頷き、明久は首を傾げ、

「それじゃあ、高橋先生、続きをやりましょうか？」

「そうですね。吉井くんも良いですか？」

「は、はい……ねえ。結城君」

休憩を終えて作業の続きに移ろうとすると明久が和真を呼び、

「何だ？」

「結城君はフィードバックがなくて良いなと思ってさ。僕は材料を足に落としたら、痛いし、結城君の召喚獣の方が性能が良くてうらやましいと思ってさ。僕のもどうにかならないかなって」

「吉井くんの召喚獣ですか？ すぐにはどうにもなりません、1

年間、きちんと観察処分者の仕事をして、成績の向上が見られれば変更もあるかも知れませんよ。それに1年間、真面目に観察処分者の仕事をしてくれれば先生達からの印象も変わってきますから」

明久は和真との召喚獣の性能の違いが羨ましいとつぶやくと洋子は明久の成長次第では観察処分者からの格上げも考えられると言う。

第101問

「そ、そうなんですか？」

「はい。元々は学習意欲に欠けた生徒の更生プログラムの一環なわけですし、吉井くんしだいでは観察処分者は返還する事は可能です」

明久は洋子の言葉を確認すると洋子は頷き、

「そうなのか？ 吉井が観察処分者じゃなくなると手伝いは俺だけか？ 1人で召喚獣を呼び出して先生と2人つきりって状況が悪くなくてもなんか悪さしたみたいに感じるんだよな」

「だよね。1人だとなんか、本当に罰を受けてるって感じがするし」

「まあ、吉井は本当に罰なんだけどな」

「まあ、そうだけどさ」

和真と明久は教師陣の手伝いは面倒な事もあるがそれ以外にも手伝い難い事があると苦笑いを浮かべる。

「そうですか？ そう言う事なら、和くんと同じ立場の生徒をもう少し増やせないか、学園長先生に提案してみましよう」

「……高橋先生、既に俺を結城と呼ぶ気もないですね」

「西村先生も良いと言ってましたし、私と和くんが従姉弟と言う事は先生達も知っているわけですし、問題ありません」

洋子は和真と明久の本音の意見が参考になったように学園長への提案を考えてみると言うが西村教諭から許可を貰った事を自分の都合の良いように受け止めており、和真はため息を吐くと、

「実際は教師の手伝いなんかしたくないのが本音だしな。俺と同じ立場を増やすよりは観察処分者を……ダメだ。Fクラスの姫路以外が観察処分者になると先生達の仕事が『絶対』に増える」

「……うん、否定する要素が見つからないね」

和真は観察処分者を増やす事の方が簡単だと言いかけるが惨劇しか目に浮かばなかったようであり、眉間にしわを寄せると明久は大きく頷き、

「まあ、とりあえずは吉井が観察処分者を返還できるかはこの後の成績しだいかな？ ……難しいか」

「ちょ、ちょっと、そこで落とすわけ！？」

和真はくすりと笑うと明久をからかい、明久も雄二達に比べるとバカにするだけではなく、きちんと自分の事を考えてくれる和真には好感が持てるようになっていくように声をはげめるがからかわれてはいるが顔は笑っている。

「和くん、吉井くん、そろそろ、作業に戻ってください。授業中はこちらの都合で手伝って貰っているんですけど、あまり時間をかけると清涼祭の準備に影響が出てしまいますから」

「そうですね。CクラスはまだしもFクラスはまとまらないだろう

からな。まともなのが姫路くらいじゃ大変だからな」

「そうだね。流石に姫路さんと美波は野球には参加してなかったみたいだけど、2人じゃ話し合いにもならないだろうからね」

洋子は作業に戻ろうと言ったわりには作業が始まらないため、2人に声をかけるとFクラスの清涼祭の準備に不安しか感じないよう作業に戻り始めた時、

「……吉井、今更だけど、西村先生って人間か？」

「……僕は人間じゃないと思うんだ」

西村教諭が野球をしていたFクラスの生徒を担いで校舎に入って行く姿が目に入り、2人は顔を引きつらせるが、

「2人とも召喚フィールドを張りますよ。準備してください」

洋子は気にする事なく総合教科の召喚フィールドを展開する。

第102問

「結城君、お疲れさま」

「……この帯は引つ張つても良いのか？」

「和真、その気持ちはわかるが止めておけ」

和真は作業を終えて教室に戻るとCクラスは出し物は喫茶店にするつもりのようにだが衣装の事を話し合っているのか、茶道部である友香は着物に着替えている。

「カズ、作業は終わったの？」

「ああ。終わったんだが……」

「何かあったのか？」

「……素手で召喚獣と同じくらいの量の材料を一気に運ぶ、西村先生は人間じゃないと思うんだ」

清美は和真にまだ作業の途中かと聞くと和真は作業をしていた時に納得がいけない事があったようで眉間にしわを寄せて西村教諭が本当に人間か悩んでいるようであり、

「……結城君は何を言ってるのよ」

「待て。それだけじゃないんだ。^{バカ}Fクラスがグラウンドで野球をしていたんだがバカども全てを担いで校舎に消えて行ったんだ」

「……もう西村先生は『鉄人』って言う生物で良いだろ」

友香はため息を吐くが和真は眉間にしわを寄せて衝撃的だった光景を思い出していると一心は西村教諭を人間ではないと言い切り、周りにいた男子生徒は全員納得したようで大きく頷くが、

「そんな事を言っているとみんなもFクラスと同じように西村先生に捕まるのですよ」

「まったくね」

女子生徒達は言い過ぎだため息を吐く。

「それより、カズ、Fクラスは野球をしてたって言ってたけど、準備は余裕なの？」

「いや、吉井から話を聞く限りでは何1つとして決まっていらない」

「本当にバカばかりね」

清美はFクラスが遊んでいたと聞き、Fクラスが清涼祭の準備がかなり進んでいると思ったようだが和真はそんなわけないと首を横に振り、友香は呆れたように肩を落とすと、

「……いつもの事だけど西村先生も大変だな」

「と言うか、西村先生じゃ無ければ、下手したらひきこもるか学園に来なくなるぞ」

「……そう考えると本当に害にしかない人達よね。学校をなんだと思ってるのかしら」

改めて西村教諭の凄さとFクラスのバカさ加減を再認識したようであり、微妙な空気が広がる。

「まあ、仕方ないだろ。それより、和、吉井は姫路を清涼祭の休憩時間に誘ったと思うか？」

「いや、まだだろ。バイトの件で距離は縮んだとは思っただけだな」

「吉井より、姫路が誘う確率の方が高そうだな」

トオルは教室全体に広がっている微妙な空気を振り払うように和真に明久と瑞希の進展具合を確認すると和真と新は明久ではなく、瑞希の方が行動に出そうだと話し出すと、

「吉井さんと姫路さんの事もだけど、カズは自分の事は考えないのかな？　ねえ、代表」

「代表は結城君からお誘いはないのですか？　もしくは自分から誘ったとかはないのですか？」

「な、山下さんも尼崎さんも何を言ってるのよ！？」

清美と棗は友香に清涼祭で和真を誘うつもりなのかと詰め寄り、友香は驚きの声をあげるが、

「もう、そんな事を言っているとカズを他の女子にかっさらわれるよ」

「そうです。あれで結城君は競争率高いですから」

「そ、それはそうかも知れないけど」

清美と棗は友香を引き寄せると友香に和真を清涼祭に誘うように吹き込み始める。

第103問

「そんな代表に朗報です」

「朗報？ …… 召喚大会？」

棗はカバンから清涼祭で行われる2人1組で参加するトーナメント形式の召喚大会のポスターを取り出す。

「そう。ここ、ここを見て」

「優勝賞品は白金の腕輪？」

「じゃなくて、優勝者と準優勝者の副賞」

棗はポスターの賞品が書かれたと個所を指差すと友香は優勝賞品の『白金の腕輪』の名前を見て首を傾げるが棗は見たいのそこではないと友香の顔の前にポスターを近づけると、

「如月ハイランドのプレオープンペアチケット!？」

「そうです。これを獲得するために結城君を誘えば良いんです。そして、獲得できればデートに誘えます」

「と言う事で代表、カズを誘ってみようか？」

「で、でも、私、恭二を振ってすぐなわけだし」

友香はもう直ぐオープンするテーマパークの優待チケットを見て驚

きの声をあげると清美と棗は友香を引き寄せて和真を召喚大会に誘うようにそそのかす。

「そんな事を言ってる場合じゃないでしょ。さっきも言ったけど、カズは倍率が高いのよ」

「豚野郎、出て来なさい!!」

清美は踏ん切りが付けられない友香の背中を押そうとした時、教室のドアを美春が勢いよく開け、

「清水、お前は男をすべて豚野郎と言うから、誰か、わからん。せめて、大勢いる時は名前で呼べ」

「……いや、和、お前は清水に豚野郎と言われる事になれすぎだろ」

和真は美春が乱入してきた事にため息を吐くが一心は苦笑いを浮かべ、

「美春が豚野郎と言ったら、直ぐに返事をするのが豚野郎の役目のはずですわ!! 生意気ですわ!!」

「和真、どうやら、お前に用みたいだぞ」

「みたいだな」

美春は和真の見つけると我が物顔のように教室に入ってくるため、その様子に和真と新は苦笑いを浮かべる。

「それで、何かようか?」

「豚野郎、美春がお姉さまとデートするために協力しなさい。拒否権は認めませんわ!!」

和真は美春の様子にあまりろくでもない事だと思っており、関わり合いたくはないようだがここで跳ね返すとさらに面倒になる事もわかっていするため、彼女が自分の元を訪れた理由を聞くと美春は召喚大会のポスターを和真の目の前に出して吠えるが、

「却下、面倒くさい」

「なぜですか!?!」

和真は興味がないため、直ぐに拒否をし、美春は自分の言う事を聞かない和真の態度に驚きの声をあげると、

「いやだね。それに参加して仮に賞品が取れたとしてもそれは清水に搾取されるわけだろ。俺に旨味も何もないだろ。だいたい、それなら、そのお姉さまを誘えよ」

「お姉さまは姫路さんと参加登録を終わらせていたのですわ」

「姫路と? ……なあ。清水、今更だけど、お前のお姉さまって」

「島田美波お姉さまですわ!! 豚野郎、お姉さまに色目を使ったら、直ぐにはらわたを引き裂きますわ!!」

和真は美春にデートに誘いたい人間を相手に選べと言うが何かが引っかかり、美春にお姉さまの事を尋ねると美春の想い人は美波であり、和真がおかしな事をした場合は和真に命はないものだと思えと

吠える。

「……世界が滅びるその日になってもあのバカだけは襲わねえよ。あいつを襲うなら、清水を押し倒す」

「和真は店長も倒せるからな」

「その前にもっと言葉を選べよ。後ろからの視線が痛いから」

和真は美波だけはあり得ないと言い切り、新は和真の様子に苦笑いを浮かべるがトオルは背後から突き刺さる友香の視線に背中に冷たい物を感じているようだ、

「美春は豚野郎になど興味はありませんわ。だいたい、お姉さまをバカにする事は許しません」

「いや、あいつは充分にバカにされるに値するだけのバカだ」

「和、この状況でお前は良く清水を挑発できるな」

それ以上に前方に立っていた美春の殺意が上昇して行き、平太は顔を引きつらせる。

「悪いな。これをDクラスに帰してくる」

「ああ、行つて来い」

和真はこれ以上は関わっていられないと思ったようで美春の首根っこをつかむと美春を教室の外に引きずって行き、クラスメート達全員が顔を引きつらせているなか、新だけが和真と美春を見送る。

第104問

「姫路が転校？」

「ちょ、ちよつと、結城君、声が大きいよ!？」

和真が美春をDクラスに送り届けると和真を見つけた明久が誰にも聞かれない話があったようで和真を屋上まで引っ張って行き、瑞希の両親が彼女を転校させる事を考えていると言う話をする。

「悪い。でも、考えられない事でもないか」

「ど、どうして？」

和真は明久に謝った後に瑞希の両親が転校を勧める理由もわかると頭をかくと明久は声をあげるが、

「落ち着け。姫路は身体が弱いだろ。方針とはいえ、あんなボロボロの校舎にいて身体を壊すことになったらと思うと仕方ないだろ」

「それはそうなんだけど」

「それにそれ以外にも大きな問題が2つある」

「ど、どう言う事？」

和真は瑞希の両親が考えている事に予想が点いているようであり、子供の事を心配する両親がいる事に羨ましい気持ちもあるのか少しだけ寂しそうに笑うが明久は瑞希の転校の事で頭がいっぱいのよう

であり、和真の表情の変化には気づく事はない。

「1つはFクラスがバカすぎる事、もう1つは教室の設備、ミカン箱が机がわりって現代社会じゃあり得ないだろ？」

「そうだね。問題が多すぎるよ」

和真は明久の様子に直ぐに表情を戻すと明久は瑞希の転校を防ぐ手立てがないのか考えたいようだが頭の弱い彼には良い考えが浮かぶわけもなく大きく肩を落とすと、

「まあ、悪い方向にだけ考えるな。転校先を女子高にして貰えば姫路に悪い虫が付く確率は減るわけだし、どうせ、学内ではお前のクラスのバカどものせいであつけないんだ。あまり変わらないだろ。何より、他の女子高とつながりができると考えるとメリットもある」

「女子高との繋がり？ ……ダ、ダメだよ。確かにそれも良いのかも知れないけど」

和真は明久と瑞希の事を考えると瑞希の転校も悪い案ではないと言うと明久は和真の言葉に一瞬、考え込むがそれでも瑞希と一緒に居たいようであり、

「吉井、姫路と同じ高校生活を送りたいなら送りたいと素直に言え」

「な、何を言ってるんだよ!？」

和真は明久の反応にニヤニヤと笑うと明久は顔を真っ赤にして慌てて否定しようとする。

「別に慌てて否定する必要はないだろ。だけど……」

「結城君、協力してくれないかな？」

和真は慌てる明久の様子に苦笑いを浮かべつつも何かあるのか困ったように頭をかき、明久は和真の様子に和真が協力してくれないと思ったように不安そうな表情をすると、

「できる事はもちろん協力するけどな。問題はFクラスの設備だろ？ 学生にできる事なんてたかが知れてるぞ」

「それなんだけど売上で設備を向上させても良いって言われたんだけど、良い案が見つからなくて」

「それにFクラスのメンバーを考えるとそれに協力できる人間って何人いるんだ？」

和真は協力は惜しむ気はないが自分だけではどうにもできない事もあるため、他にも協力を仰ぎたいようだがFクラスで瑞希の転校阻止に動いてくれる生徒がいるとは思えないように眉間にしわを寄せる。

第105問

「えーと、僕と美波と秀吉の3人かな？ 雄二は清涼祭に興味無さそうだし」

「……もぞ凄く、不安なメンバーだな。まあ、他のバカどもに比べると吉井や姫路と距離が近いみたいだし、使えるかは置いておいて無難なメンバーか？」

明久は秀吉と美波は協力的だが雄二はわからないと首を横に振ると和真はFクラスが自分勝手な人間ばかりのため、ため息を吐くと、

「とりあえず、家畜以下代表は使えそうなのか？」

「使えるって考えると使えると思うよ。頭は回るし」

「そうだな。他人を見下してるからつめが甘いけど、頭は回るな」

和真は雄二が使える事だけは認めているようで頷き、

「それじゃあ、雄二を巻き込んだ方が良いんだよね？」

「信用しきらなければな。とりあえずは味方に引き込むようにしろ」

和真は明久に雄二は味方に引き込んでおくように言い、

「この話はウチのメンバーにも話は伝えておくぞ。協力できる事は協力してくれるだろうな。後は少し不安だけど、清水にも話をするぞ」

「う、うん。お願い」

和真は明久に他にも協力者はいないか確認すると告げると明久は大きく頷き、和真は教室に向かって歩き始める。

「さてと、やれる事ってなんだ？ ……見なかった事にするか？
それとも嫁に連絡するかどっちが良い？」

「ゆ、結城、てめえ、俺になんの恨みがあるんだよ！！」

和真は教室に戻る途中で翔子から逃げているのか周囲を警戒している雄二を見つけて徐に携帯電話を取り出すと雄二は翔子に自分の居場所を知らせられる事は避けたいため、和真に考え直すように声を張り上げると、

「恨みならいくらでもあるぞ。何なら、この後、お前らがさっき、無断で野球部部室から道具類を持ち出した時に破壊した部室のドアとかロッカーの移動とかその他の修理に駆り出される予定になっているんだけど、手伝うか？ お前らが壊したものだろ？」

「は。そんなもの知ら！？ ま、待て。携帯をしまえ！！」

和真はFクラスになら恨みならいくらでもあると話し、雄二は和真の言葉を鼻で笑うと和真は携帯電話のアドレスから翔子のな間を探し始め、雄二は和真に携帯電話をしまうように叫ぶが和真は気にする事なく明久に電話をかけ、

「……逃げるな。別におかしな事をしなければ嫁に引き渡さないでやる。吉井か？ 家畜以下代表を見つけたんだけど、居るか？ ……」

… ああ。それなら、仕方ないからCクラスにいるからな」

「ちょ、ちよつと待て！？ 結城、お前、どこに行くつもりだ！？」

「うるせえな。さつさとこいよ。嫁に引き渡すぞ」

和真は雄二の首をつかむと雄二を引きずってCクラスの教室に引きずって歩きだす。

「見つけましたわ。豚野郎！！」

「…… 良いところにきた。二度手間は面倒だからな」

「ぶ、豚野郎！？ どこに行く気ですか！？」

和真が教室に向かって歩いてしていると美春が現れるが和真は美春の首をもつかみ、右手には雄二の首を、左手には美春の首をつかみ歩きはじめ、

「ど、どうしよう？ 今の結城君には近寄りたくないよ」

「明久、見てないで助けるよ！？」

明久は和真の呼び出しに急いできたようで和真の様子に顔を引きたせ、明久の姿を見た雄二は明久に助けを求める。

第106問

「……姫路さんの転校？」

「そうなんだよ。それでどうにかできないかな？」

和真と明久は雄二と美春を連れてCクラスの教室に戻ると瑞希の転校の話をCクラスのメンバーに話し、協力を仰げないかと聞く。

「……なんだ？」

「いや、どうして、俺をお前が連れてきたのかと思ってな。お前は俺達Fクラスが嫌いだよ」

「ああ。吉井と姫路以外には嫌悪感しかない。だけど、姫路は友人だしな。あいつの意思が固まってるなら協力したい。それがお前みたいなお家畜以下の人間に頭を下げる事になってもな」

雄二は和真が自分を教室に招き入れた理由は理解したようだが自分と和真に協力はあり得ないと思っっているようで和真を睨みつけると和真は雄二の視線を気にする事なく、必要だからと言い切り、

「ほう。頭を下げるね。なら、下げろよ。土下座でも何でもしろよ。そしたら、協力してやるよ」

「ああ。それくらいで良いならな」

「ちょ、ちよっと、カズ！？」

「豚野郎、何をしているのですか!？」

雄二は和真の言葉にできもしない事を言うなと言いたげに和真に土下座をするように命令すると和真は迷う事無く、床に頭を擦りつける姿に清美と美春は声をあげるが、

「別にさっきも言ったけどな。姫路や吉井が頑張ろうとしてる事に比べたら頭を下げるくらいなんでもない。それに自分で言った事に責任を持ってない人間になるくらいなら、プライドなんかいるか」

「……ちっ」

和真は自分のプライドよりも瑞希の考えを応援したいようであり、雄二は自分の出した条件をあつさりと飲んだ和真の様子に忌々しうに舌打ちをする。

「坂本は完全に和に負けてるな」

「まあ、結城君だからね。仕方ないわよ」

一心は雄二の様子に彼の底の浅さが見えたようのため息を吐くと友香は和真と洋子の関係も知っているため、和真の行動は当然だと少しだけ寂しそうに笑うと、

「それで、どうするの？ 私達も姫路さんの転校は阻止してあげたいけど……Fクラスの代表がこれじゃあね」

「そうだね……僕も雄二がここまで見苦しいとかは思ってたよ」

友香は話を元に戻し、明久は雄二が和真に取った行動に情けなくたってきたようで肩を落とし、

「う、うるせえな。ちゃんとやってやるよ。明久、行くぞ」

「行くぞ。ってどこにだよ」

「決まってるだろ。学園長に直談判だ。ここは教育機関なんだ。その状況で生徒が死んだら洒落にならないんだからな」

「う、うん。ちょっと行ってくるよ」

雄二はこれ以上、文句を言っても立場が悪くなる事は理解しているため、旧校舎の改修を直談判すると言って明久と一緒に教室を出て行き、

「まあ、元神童だし、Fクラスとしては動いて貰わないといけないけど、よく動く気になったな？」

「そりゃ、動くだろ。坂本は姫路にいなくなれると困るからな。姫路がいなくなると3カ月後にAクラスに試召戦争を仕掛ける事も俺達をぶちのめす事もできなくなるからな」

「……それは何と言ったら良いかわからないと言っか」

新は雄二が協力する気になった理由がわからずに首を傾げると和真は雄二には雄二の瑞希の転校を防ぐ理由があると言い切り、和真の一言に教室内は微妙な空気が漂う。

第107問

「とりあえず、協力って言っても何をするんだ？ 正直、クラスが違うと何もできないだろ？」

「売上でクラスの設備を向上させる事は西村先生が許可してくれたって言うからな。客として行くのは」

一心は瑞希の転校阻止に自分達で協力できる事を話し合おうとする
と直ぐに売上の向上には協力できそうだと言う話にはなるが、

「……中華喫茶とは吉井に聞いたけどFクラスの設備で飲食店は怖いよな？」

「そ、そうよね」

Fクラスの設備で飲食店をやっても良いのかと言う根本的な原因に
メンバーは大きく頷く。

「カズ、どうにかならないか？ 西村先生や洋子先生に話してさ。
空き教室を使えるようにして貰うとか」

「そうだな。最近は吉井も真面目に観察処分者の仕事をするようになったから先生達への印象も変わってきてるし、味方してくれる先生達もいるかも知れないな。後は姫路の体調の件は姉さんに職員会議でも話題に上がったってのは聞いた事があるし」

「そうね。学校の設備の影響で生徒が病気になると大変だし、少し卑怯かも知れないけど有効な手段かも知れないわね」

「坂本と同じ作戦になってるのが正直、微妙だけどな」

和真はFクラスの設備では飲食店として最初の段階で負けていると考え、教師陣に情で訴えるのは有りだと考えたようであり、友香も和真の考えに頷くが和真自身は少しだけ卑怯だと考えているように苦笑いを浮かべるが、

「手段なんて選んでいる場合じゃありませんわ」

「清水、お前がそこまで協力する気になるのは意外だな」

「何ですか？ 文句があるのですか？」

美春は手段を選ぶ必要などないと叫ぶと美春の反応に新は少し驚いたような表情をする。

「新、気にするな。清水は姫路がいなくなると困るんだよ。清水の愛しい愛しいお姉さまの猪女は吉井に好意を抱いているからな。姫路がいなくなつてそこにフラグが立つと面倒だからな」

「その通りですわ！！」

「……カズも清水さんももう少し言い方を選ばない？」

和真は美春の考えている事などお見通しのようであり、和真と美春の言葉に清美は大きく肩を落とすと、

「結城君、それなら」

「ああ。先生方には話を誤魔化しながら話してみる。空き教室を貸して貰えれば儲けものだしな」

和真は教師陣に根回しをしてみると頷き、

「お願い。後は……結城君、木下さんと工藤さんに手伝って貰えれば良いんだけど、頼めないかな？」

「ん？ 代表様、何か考え付いたのか？」

友香は何か考え付いたようだが今、集まっているメンバーでは自分の思いついた事は実行できないと思っっているように優子と愛子の2人に協力して貰えないかと和真の制服を引っ張る。

「ええ、問題の1つにFクラスのクラスメートじゃ、姫路さんの成績の向上につながらないかも知れないって心配してる部分もあるから、姫路さんにAクラスの友達がいる事をご両親に見せるもの有効だとは思っただけど」

「確かに私達だと姫路さんの成績には釣り合わないしね。木下さんはわからないけど工藤さんなら協力してくれるんじゃないかな？」

友香は問題の1つのクラスメートの学力を学年として考え、他にも競い合える友人がいると瑞希の両親に見せれば良いと考えたようであり、その考えは使えるとメンバーは話し始めるが、

「結城君、何か不味いですか？」

「いや、悪い手ではないとは思っただ。……でも、姫路の性格じゃ、ボ口が出るだろ？ 今の状況で姫路の口から転校すると聞かされた

のは猪女だけなわけだし、俺達がその手に出ても姫路からボロが出そうだし」

「それなら、私達が姫路さんから転校したくない事を聞けば問題ないわけですね」

和真は瑞希本人からの助けを受けないとそこは表立って協力できないと首を振ると棗は和真に聞き返し、

「そうだな。そうすると俺達も表立って協力しやすくなる」

「了解です。新聞部のエースの名にかけてそこは私が受け持つのです」

「ちょ、ちよつと、棗！？ カズ、私は棗が暴走したら困るから」

「和真、俺も行ってくる。あの2人じゃ心配だし」

「ああ。任せたぞ」

棗は瑞希から直接、協力要請を貰うと言って教室を出て行き、新と清美は棗の後を追いかけて行く。

第108問

「さてと、一先ずは俺達ができる事は……直ぐには考え付かないな？」

「そうね。後は3人が戻ってきてから、また、考えましょうか」

教室に残ったメンバーは瑞希に協力できる事を探そうとするが直ぐには思いつかないようであり、

「一先ずは、俺達は俺達で清涼祭の準備でもするか？」

「そうだな」

和真達は自分達の準備に移ろうとするが、

「待ちなさい。豚野郎」

「清水、俺の用件は終わったから、帰っても良いぞ」

美春は和真を召喚大会の相棒にしようと思っっているため、和真の肩をつかみ、和真は美春を追い払うように手を振る。

「まだ、美春の用件は終わっていませんわー!!」

「召喚大会の事なら、断つただろ。それに俺は当日はそんな事をやってるヒマはないぞ」

「ヒマはない？ 何を言っているんですか。美春のためにそれくら

いの時間を作りなさい!!」

和真は話しにならないと言うが美春は相変わらず、和真の話を聞く気もなく高圧的に和真に言う事を聞くように怒鳴りつけていると、

「カズ、当日、何かあるのか？」

「まさか、女か？」

「そんな色気のあるものじゃないよ。去年もだっただけだな。バカがはしゃいで設備を壊してその修理に駆り出される。今年はバカが集まってるから、より一層、忙しくなるだろうな」

和真の清涼祭の予定に平太と一心が食いつくが和真の予定は2人が期待しているような展開ではなく、

「つまんないな」

「そう言うな。それはそれで良い情報だったみたいだしな」

一心はつまらなさそうにため息を吐くとトオルは和真に見えないように小さくガッツポーズをしている友香を見て苦笑いを浮かべ、

「人の心配するより、自分達の心配をしろよ」

「友香……代表を呼んでくれないか？」

和真はこれと言って予定のない事をバカにされていると思ったようで、他のメンバーにも予定を聞こうとするがそんな中、教室のドアの方から恭二の声が聞こえ、友香に用事があるようで教室を見回し

ている。

「根本？ 代表様、呼んでるみたいだぞ」

「……根本くん、また、来たの？ いい加減にしてくれない」

和真は恭二を指差しながら友香に相手をするように言うが友香は恭二の顔を見て肩を落とすと、

「友香、頼む。もう1度、チャンスをくれ」

「何度も断ってるでしょ。いや」

恭二は友香を見つけるなり、教室に遠慮する事無く入ってきて友香に何かを頼むが友香の答えは決まっているようで恭二を拒否しており、

「チャンス？」

「何かあったのか？」

「ああ。何か、根本が代表様とよりを戻したいらしくて、一緒に召喚大会に出てくれって言ってるみたいなんだよ」

和真と美春は恭二の言葉に首を傾げるとトオルは2人に簡単に友香と恭二の状況を説明し、

「女々しいですわ」

「まったくだな」

和真と美春は恭二の行動に呆れたようにため息を吐いた時、

「しつこいわよ。何度も言ってるけど、私は恭二とは召喚大会に参加しないわ」

「なぜだ？ 誰かと一緒に出場するのか？」

友香はしつこい恭二に腹を立てているようで恭二を怒鳴りつけるが恭二は友香が自分以外の人間と召喚大会に出ると思ったようであり、

「そ、そうよ。私は結城君と召喚大会に出場するのよ！！」

「へ？」

友香は恭二を追っ払うために和真の名前を上げ、和真はまったく気にしていなかったところからの不意打ちに間の抜けたような声をあげる。

第109問

「ちょ、ちよつと!?!」

「……」

和真は一瞬、呆気にとられるが直ぐに友香と一緒に召喚大会に出場する予定などないと言おうとするがトオル、一心、平太の3人に口を塞がれ、

「わかつたら、2度と来ないでくれる」

「結城、てめえ、覚えていろよ!!」

友香は恭二を突き放すように言う。恭二はその敵意を和真にぶつけたいように和真を睨みつけると捨て台詞を吐いて教室を出て行き、

「豚野郎、美春に刃向かいましたわね。八つ裂きにしますわ」

「ちょ、ちよつと待て!! 清水、落ち着け。代表様、どう言う事だ。俺は召喚大会になんか出ないって言ってるだろ」

自分の命令を聞かずに友香と召喚大会に出場する事になってしまった和真に向けて、美春は殺意を溢れ出し、和真はこの原因を作った友香に聞くが、

「仕方ないでしょ。ああでも言わないと恭二が納得しないんだから」

「……なら、他の人間にしろよ。ただでさえ、こっちは面倒な事に

なってるのに」

「……その割には和は余裕そうだよな」

友香は仕方なかったと自分のせいではないと言い、和真は美春からの攻撃を交わしながら大きくため息を吐く。

「……結城君、何してるの？」

「これはどう言う状況だ？」

「ん？ 帰ってきたか？ 清水、遊びの時間は終わりだ。それで、どう言う事になったんだ？」

和真が美春の攻撃を交わしてしばらくしていると学園長室に行っていた明久と雄二が顔を出し、和真は2人の話がどうなったか知りたいうので美春の首根っこをつかみ、

「放しなさい！？ 豚野郎！！」

「……こうもあっさりと」

美春は和真に捕まりながらも殺意をまき散らしているがすでに周りには美春では和真に敵わないと言う事は周知されており、顔をしかめるが、

「それで、そっちは上手く行ったのか？」

「ああ。それが面倒な事になってな」

和真は気にする事無く、明久と雄二に学園長との話はどうなったかと聞くと雄二は面倒そうに頭をかく。

「面倒な事？」

「うん。ちよつとね」

友香は首を傾げると明久は苦笑いを浮かべ、

「簡単に言つと俺と明久で召喚大会に出場して、優勝をしないといけなくなつた」

「後は協力者を見つけて準優勝者も出さないといけなくなつたんだ」

「……簡単に言われ過ぎてまったくわかんないだが」

「そうね」

明久と雄二の説明では誰も状況を理解する事ができず、和真と友香は眉間にしわを寄せるが、

「ちよつと良いじゃないか。協力者がここにいるわけだし」

「……待て。どうしてそうなる？」

「ちゃんと召喚大会に出ないと根本がまた代表様に言い寄ってくるだろ。それくらいしてやれよ」

トオルは和真に友香と召喚大会に出場するようにと肩を叩くが和真は眉間にしわを寄せ、一心は恭二から友香を守るのには必要だと言

い切り、

「そうだね。結城君は召喚獣の操作も上手いし、総合得点ならAクラス並みだし、僕達に協力してくれそうな人だと小山さんが1番得点も高いから雄二の狡い頭を使えば決勝には上がって来れるし、お願い。結城君」

「結城、協力するんだよね？」

「……ああ。その前に簡単じゃなくて、しっかりと説明してくれ」

明久は和真と友香なら問題ないと大きく頷き、雄二は困り顔の和真の様子にニヤニヤと笑う。

第110問

「ウェディング体験ね」

「ああ。今更、賞品を取り消すわけにもいかないらしくてな」

「しかし、ジंकス作りとは言え、そのチケットを使ったカップルを無理やり結婚までは乱暴だろ」

雄二がFクラスの設備向上の代わりに出された条件は明久と雄二に召喚大会の優勝及び準優勝ペアに送られる如月ハイランドのペアチケットには問題があるようであり、男性陣は苦笑いを浮かべるが、

「……結城君と学園長先生に返さないといけないとは言っても、お願いすればどうにかできないかしら」

「お、お姉さまと結婚まで？　そ、それは美春の手に入れなければ行けませんわ」

友香と美春は何かおかしな事を考えているようでぶつぶつと何かを呟いている。

「しかし、そうなると正直、きついだろ。まともに優勝狙える成績って、このメンバーじゃ、和だけだろ」

「確かにな。工藤さんとか木下さんに協力して貰わないか？　それなら、優勝も狙えるだろ」

「ダメだ！！」

トオルと一心は和真の成績ならどうにかなりそうだけど他の3人は心もとないと言い始めるが雄二は何かあるのかAクラスの人間には召喚大会での協力は仰げないと叫び、

「何でだ？」

「よく考えても見る。Aクラスの人間があんな禍々しいものを獲ったら、絶対に翔子の手に渡る。そうなる俺は終わりだ!!」

「……いや、回収しないといけないって事をきちんと話せよ」

雄二は翔子にチケットを渡す事に恐怖しか感じていないようです。冷静な判断はできなくなっており、和真は呆れたようなため息を吐くが、

「結城君、雄二は自分の身を守るためになら、どんな汚い作戦でも使って優勝と準優勝できるようにするから、この状態の方が良いんだよ」

「……それはそれでどうかと思うんだけどな」

明久は召喚大会の決勝まで勝ち上がるには今の雄二が良いと言うと和真は頭をかき、

「まあ、和がそこをフォローすれば良いんじゃないのか？」

「実際、坂本の作戦立案能力は高いわけだしな。穴は和真が埋めればちょうど良いだろ」

「うん。僕もそう思うよ。雄二だけだと不安だけど、結城君がそこを補ってくれるから、僕は心強いよ」

「……いや、だから、あんまり、過大評価をされても困るんだけど」
雄二がチケットが翔子の手に移ると言う最悪の状況を考えて頭を抱えている隣で男性陣は和真ならどうにかできると丸投げし、和真は大きく肩を落とす。

「そ、それじゃあ、結城君のパートナーは私で良いわね。現状で言えば、この中では成績が1番良いわけだし」

「そうなるか？」

「待ちなさい。納得がいきませんわ。最初から美春がその豚野郎を召喚大会に誘っていたのですわ。美春と一緒に出場しなさい。豚野郎」

友香と美春はすでにチケットを自分で使う事しか頭にないようであり、和真と一緒に召喚大会に出場しようとするが、

「……2人とも、チケットは返すって話を聞いているか？」

「それはそれよ!!」

「……確実に聞いてないな」

「そ、そうだね」

男性陣は2人の様子に大きく肩を落とす。

第111問

和真は放課後になり、バイト先の『ラ・ペデイス』で休憩時間に召喚大会に参加する事になった話をする、

「そ、それは大変でしたね」

「ああ。俺は悪くないのにその後からこんな状況だ」

最終的に和真の召喚大会のパートナー友香と美春の真剣勝負で勝負を決めたようであり、美春は和真の火力に期待していたためか機嫌が悪く和真を威嚇しており、瑞希は美春の視線に苦笑いを浮かべ、

「それより、姫路、新達から聞いたんだけど、転校の話なんだけど、ちょっと良いか？」

「は、はい。あ、あの。結城くん、できれば吉井くんには秘密にしておいて欲しいんですけど」

新、棗、清美の3人は上手く瑞希から転校の話を聞き出せたようであり、和真は瑞希に話を振ると瑞希は明久には秘密にして欲しいと目を伏せ、

「なあ。俺はちゃんと吉井や他の奴らに話した方が良いと思うぞ」

「で、でも、吉井くんやみんなに迷惑が」

和真は瑞希の返事が予想通りであったためか苦笑いを浮かべて明久達にも話すべきだと言ったが瑞希は友人達に迷惑になると思っている

ようであり、

「姫路、おかしな事を言うて怒るぞ。お前が好きになった奴はそれくらいを迷惑だと言う奴か？俺は吉井と知り合って日が浅いけど吉井はそんな奴じゃないだろ。それはお前の方が詳しいんじゃないのか？」

「そうですね」

和真は少しだけ声の音量を上げて明久は迷惑だと思わないと話すと瑞希も和真の言葉に笑顔を見せる。

「あいつの場合は他から聞くと勝手に暴走しそうだからな。帰りにでも話してやれ……なんだ？」

「いえ、結城くん、ずいぶんと吉井くんと仲良くなったなあって、少し、羨ましいです」

和真は瑞希の表情が元に戻った事に安心したようで、休憩時間がずれている明久に帰りに話す事を進めた時、瑞希がじっと自分の顔を見ている事に首を傾げると瑞希は和真と明久の距離が羨ましいと言うが、

「あのな。羨ましいって言ったって、姫路が望んでるのはこの距離じゃないだろ。おかしな事を言うなよ」

「で、でも、結城くんは吉井くんと話をするようになったのは最近なのにずるいです」

「ずるって……それを言ったら、お前だって、清水やウチの代表

様、山下、棗と直ぐに仲良くなっただろ？ 同姓同士なんてそんなもんだろ。俺達男どもは姫路が何か悩んでるとか気がつかなかったけど、あいつらはお前が何かを悩んでると気づいたから、話を聞きに言っただけだろ？」

「そうなんでしょうか？」

「そうそう」

和真は瑞希の反応にどのように対応して良いのかわからないようであり、口から適当に言葉を選んで瑞希を黙らせると、

「……」

「今度は何だ？」

「いえ、何か、お兄さんがいたらこんな感じなのかと思いました」

「……姫路、俺とお前は同じ年だからな」

瑞希は何かあるのか和真の顔を見た後、何を血迷ったか和真をお兄ちゃんみたいだと言い、和真は大きく肩を落とし、

「で、でも、頼りになりますし、今も吉井くんと事をきちんとアドバイスしてくれましたし」

「アドバイスくらいはする。それに……仮に俺が姫路の兄貴だったら、Fクラスにいるよりは転校を薦める。俺やウチのクラスの奴らは姫路を友人だと思ってるから、協力するんだ。それはお前がやってきた結果だ」

瑞希は和真をお兄ちゃんだと思った理由を話し始めるが和真は眉間にしわを寄せる。

第112問

「吉井、姫路、上がって良いぞ」

「え？ でも、まだ片づけが終わってないよ」

営業時間を終えると和真は瑞希に明久に話をさせたいようで2人を追い払うように言うが明久は片付けが終わっていないためか首を傾げるが、

「さっさと上がりなさい。豚野郎！！ 豚野郎が帰りに何かあつて八つ裂きに遭おうがかまいませんが姫路さんに何かあつたら困るのですわ！！ きちんと家まで送り届けなさい。それと言っておきますわ。帰り道に姫路さんにおかしなマネをしたら美春の手で八つ裂きにしますわ！！」

「……清水、お前はもう少し言い方がないのか？」

美春は明久を追い出すように罵倒し、和真は美春の態度に呆れたようにため息を吐くと、

「そうだな。最近は学祭が近いせいか、彼女を作ろうと街を徘徊しているバカがいるみたいだな。清水は店長と一緒に帰れば良いけど、女性スタッフは危険だしな」

「……そんな事もしているのか？ 本当に迷惑な奴らだな」

「……美春としてはあの変態と一緒に帰る方が危険なような気がするのですが」

新は和真の意図を理解している事もあり、Fクラスのおかしな動向もあるためか瑞希を守るためにも早く帰るように言々と和真と美春は自分達が知る変態達の行動に眉間にしわを寄せる。

「良いですよ？ チーフ？」

『そうだね。女性スタッフも早めに返すから、吉井くんも姫路さんも先にあがってくれ』

和真は本日も店長が暴走して一室に閉じ込めてあるため、チーフに確認するとチーフは大きく頷き、

「うん。姫路さん、それなら、みんなに甘えようか？」

「は、はい」

明久と瑞希は頷くとスタッフ達に頭を下げた後に更衣室に向かって歩き出し、

「姫路はちゃんと吉井に伝えれると思うか？」

「それより、俺としては吉井が姫路から転校の話を直接、聞いた時に俺達が最初から知っていた事がばれないかの方が気になるよ」

「……まったくですわ。バレたら美春達がやってきた事の意味がなくなりますわ」

新は瑞希が明久に転校の事を伝えられるかが心配のようで苦笑いを浮かべると和真と美春は明久の対応の方が気になっているようだ

り、大きくため息を吐いた時、

「あ、あの。結城くん、北条くん、美春ちゃん、私はちゃんと言いますから、心配しないでください。吉井くんも最初から知ってるのに知らないふりをしてくれてるんですよね」

「ひ、姫路、知っているって何の事だ？」

瑞希は更衣室から着替える前に戻ってきて3人に頭を深々と下げ、和真は一先ずは誤魔化そうとするが、

「結城くんが言っていました。これは私がやってきた事の結果だって、それなら、みんなが私の転校の話を知っている上で知らないふりをするしながら私の背中を押してくれてるのも、吉井くんや結城くん、皆さんの行動の結果です」

「和真、1本、取られたな」

瑞希は笑顔で和真や明久の行動から、気が付いたと笑い、そんな瑞希の様子に新は苦笑いを浮かべながら和真の肩を叩く。

「……そうだな。まあ、そう思うなら、俺達の出した結果が間違っていないって事を証明するためにお互いに頑張りましょうか？」

「はい。あの。私は転校したくないんです。結城くん、北条くん、美春ちゃん、力を貸してください」

和真は悪い気はしていないようであり、苦笑いを浮かべると瑞希は改めて3人の協力して欲しいと頭を下げようとするが、

「姫路さん、頭を下げる必要などありませんわ」

「まあ。そう言う事だ」

「当然」

美春は頭を下げて貰う事ではないと言い切り、和真と新は頷き、瑞希を更衣室の方へ向けると、

「「行つて来い。姫路」」

「はい」

和真と新は瑞希の背中を押し、瑞希は明久に協力を仰ぐために更衣室に戻って行く。

第113問

「しかし、あれだな」

「雄二、どうかした？」

「いや、まあ、本当に協力するんだと思ってな」

旧校舎での喫茶店は衛生上問題があると職員会議で問題に上がり、2年Fクラスだけではなく全学年の旧校舎で飲食店を考えていたクラスは一時的に新校舎の空き教室が与えられ、明久と雄二は担任である西村教諭から和真達Cクラスからの説得があつた事を聞かされ、雄二はまだ和真達の動きが信じられないのか頭をかくと、

「何を言ってるんだよ。結城君達は雄二と違うから言つた事は守ってくれるよ」

「そうです」

明久と瑞希はCクラスのメンバーは言つた事は守ると頷くが、

「それが信じられないのよ。あの性悪男の事だから、きっと何か企んでいるはずよ」

「まったくなのじゃ」

秀吉と美波は和真に良い印象がないためか和真が協力する事に何か裏がありそうだと思つていようである。

「秀吉も美波も落ち着いてよ。結城君は……」

「いや、別に何も企んでないし、強いて言うならその猪女は俺や吉井の平和のために清水との間を取り持とうと思っっているくらいだ」

「止めてよ!？」

明久は秀吉と美波に和真の事を理解して欲しいと言おうとした時、タイミングが良いのか悪いのかわからない和真がFクラスの仮教室に顔を出して美波を挑発すると美波は和真の言葉に直ぐに声を上げ、

「結城、何のようだ？」

「ウチも喫茶店をやるから、そっちの仕入れはどうしてるかと思っ
てな。店長に頼んだり、俺の昔のバイトのつても使って仕入れを
値切ろうと思うんだよ。他にもテーブルとか食器系を格安でレンタ
ルしてくれるから、それでそっちの調理系の人間とも打ち合わせを
しようと思っ
てな」

「ああ。それなら……須川は結城と相性が悪そうだからな。ムツ
リーニと明久、結城との打ち合わせはお前が担当してくれ。他の奴
に任せると揉めそう
だ。俺もそっちに入る事もあるが基本的にこっ
ちをまとめないといけないからな」

「うん。ムツリーニ、ここだと話し合いにならないかも知れない
から、他に行こう。雄二、僕達は図書室に行ってるから」

「……………わかった」

和真につかみかかりそうな美波を無視し、和真は雄二と打ち合わせ

をしたいと言うと雄二は和真が入ってきた事で美波以外でも和真を睨みつけているため、雄二は明久と康太に和真と打ち合わせ担当に指名すると明久は大きく頷くとFクラスから和真に向ける視線に居心地の悪さを感じたようで2人を連れて仮教室を出て行き、

「ちょっと待ちなさいよ！！　ウチの話は終わってないわよ！！」

「み、美波ちゃん、落ち着いて下さい！？」

美波は和真を怒鳴りつけながら3人を追いかけて行こうとするが瑞希は慌てて美波を抱きついて彼女を引き止め、

「島田、遊んでいるヒマがあったら働け。お前は清涼祭の実行委員だろ」

「放しなさいよ。坂本、やっぱり、あの男はウチの敵よ！！　このままでしたら、ウチの身が危険なのよ！？」

「そう思っなら、もっと冷静になれ。お前が行くと確実に逆効果だ」

雄二は美波の首を引っ張ると美波は和真に美春をけしかけてくると思っているようで和真の息の根を止めに行こうとするが雄二は美波が和真に突つかかると絶対に美波の首を自分で絞める事になるため、美波を引き止める。

第114問

「さてと、問題はどうかやって姫路にチャイナドレスを着せるかだな」

「……………準備は任せる」

「カズ、あんた、他に言う事はないの？」

和真、明久、康太が図書室に移動するとCクラスはトオルと清美が合流し、和真の冗談に清美は大きくため息を吐くが、

「吉井が姫路のチャイナドレス姿がみたいって言えばすぐだろ」

「それもそうだな」

「……………殺したいほど嫉ましい」

トオルは瑞希にチャイナドレスを着せるのは簡単だと言い切り、和真と康太の視線は明久に集中する。

「ちょ、ちよっと、ムツツリー二!? どうして、僕に殺気向け
るんだよ!？」

「そうだぞ。最近は一藤と仲良くやってる土屋が吉井を責める資格
はないと思うぞ」

「死ね!!! ムツツリー二!!!」

明久は康太の視線に慌てるが和真が康太と愛子が仲が良い事を告げ

ると明久は勢いよく康太に向かって拳を振り下ろすが、

「暴れるな。時間がなくなるだろ」

「放して。結城君、僕はあの裏切り者の異端者をグロテスクに殺さないといけないんだ!!」

和真は暴れる明久を取り押さえ、明久は康太に対する嫉妬をまき散らし始め、

「吉井くんもやっぱりFクラスだね」

「そうみたいだな」

明久の様子にトオルと清美は苦笑いを浮かべると、

「それで、土屋くんは工藤さんをどこまで行ってるんですか？」

「……………そんな事実はない」

いつの間にか図書室には棗が現れて康太にマイクを向けている。

「……………尼崎、お前、どこから湧いて出た？」

「スクープの匂いがした気がしたのですよ。結城君、気にしたら行けないですよ」

和真は棗の登場に眉間にしわを寄せると棗は苦笑いを浮かべ、

「カズ、吉井くん、土屋くんも遊んでないで始めるわよ。だいたい、

Fクラスは時間がないんでしょ。Cクラスはレンタルするものも発注する材料もある程度、決まってるんだから」

「そうだな。土屋、中華喫茶のメニューは決まってるのか？」

「……………これだ」

清美はFクラスの喫茶店の進み具合が心配なようであり、再開するようにつつと和真は康太にFクラスが出すメニューを確認し始め、

「これで良いわね……………何、吉井くん？」

「いや、結城君はFクラスに良い印象がないはずなのにムツツリーとケンカする事なく、ちゃんと仕事をしてるから……………逆に不安になるんだけど」

和真と康太がおかしな争いを始める事なく、自分達の仕事を全うしている様子に明久は苦笑いを浮かべると、

「和はバイト歴が長いからな。必要ならそれくらいは割り切るぞ。今の和の優先事項は姫路に協力する事だからな。Fクラスと揉めるのは後回し」

「ある意味才能なのです」

トオルと棗は今は揉めている場合ではないと言い切り、

「だからこそ。問題はFクラス、坂本くんは和真の態度に清涼祭までは協力するって言ったけど、Fクラスはどんな感じ？」

「うん。結城君達の他の教室を書いて貰えたのは結城君やみんなの協力があったからだけど、それをクラスのみんなに話すとまた揉めそうだって雄二が言うから伏せてはいるんだけど」

「……………俺は知っている。だから、俺も雄二と同じで清涼祭の間は協力する。姫路が転校すると売り上げにも響くからな」

清美は明久にFクラスの様子を聞くと明久はやはり、Fクラスと和真は敵対関係にあると首を振るが康太には彼なりの考えがあるようで清涼祭は全面的に協力関係で良いと告げる。

第115問

「まあ、こんなものか？」

「……………そうだな」

「……………僕、いる意味が有ったのかな？」

和真と康太は真面目に打ち合わせを始めたようであり、明久は途中から話しに付いていけなくなったため、肩を落とすと、

「まあ、意味はあったんじゃない。実際、吉井くんがいないとカズはFクラスとまともに話すかが怪しいし」

「だいたい、俺達もいる意味があったかわからないしな」

トオルと清美は明久だけじゃないと苦笑いを浮かべ、

「それじゃあ、何かあったら、メールくれ。土屋、アドレス交換するぞ」

「……………俺は携帯を持っていない」

「え？ 土屋くん、携帯、持ってないと不便じゃない？」

和真は康太との連絡を取るために康太と連絡先を交換しておきたいと言うが康太は携帯電話を持っていないようで首を横に振ると清美は首を傾げ、

「……………おかしな時に鳴ると困る」

「……………土屋、お前は何をやってるんだ」

康太は持たない意味を短く答えるが和真は眉間にしわを寄せる。

「おかしな時つて、電源切っておけば良いでしょ」

「いや、その前に俺はおかしな時が何か気になるんだけど」

「土屋、携帯を持ってないと女子とのアドレス交換はどうするんだ？」

康太が携帯電話を持っていない理由が信じられないようで和真、トオル、清美がため息を吐くと、

「……………明久、帰りに少し付き合ってくれ」

「おい。下心が透けすぎだぞ」

「……………そんな事実はない」

康太は何か1つ心に残ったようであり、今日の帰りに携帯ショップに寄ろうとすると和真からツツコミが入り、直ぐに凄い勢いで首を横に振るが、

「確かに携帯持っていないと面倒だよな。その場でメモ取るのもなんだし。でも、アドレス交換は必要だし」

「そう言えば、吉井くんのアドレスで私達はどんなグループ分けに

なってるのかな？」

「そうだな。それより、姫路とはどうなってるんだ？ 清涼祭、誘ったのか？」

明久はCクラスの生徒と知り合った事で増えた女子生徒のアドレスが増えた事に苦笑いを浮かべると清美は明久に携帯電話を見せると手を伸ばし、トオルは明久に瑞希と進展があつたのかと聞く。

「な、何を言ってるんだよ！？ 山下さんも黒崎君も！？ ム、ム ツツリーニ！？ カ、カッターをどうするつもりだよ！？」

「……………裏切り者には死の制裁を」

「土屋、止める。だいたい、お前だって工藤を誘ってやれば良いだろ。あいつ、結構、運動部で人気あるから素直にならないと後で困るぞ」

明久は2人の言葉に慌てはじめると康太は懷から、カッターを取り出すとゆつくりと刃を出し始めるが和真は大きいため息を吐き、他人の事より、自分の心配をするように言つと、

「……………そんな事実はない」

「吉井くんも殺意を出さない……………ほう。姫路さんのメールは受信ボックスからフォルダに移動ですか？」

「割とマメだな」

「ちょ、ちょっと、いつの間に僕の携帯を抜き取ったの？」

康太が大きく首を振る姿に今度は明久が殺意を漏らし始めるがその間にできたスキに清美は明久の制服から携帯電話を抜き取り、明久が瑞希とのメールを大切に取っている事にニヤニヤと笑い、明久は慌てて清美から携帯電話を取り戻そうとするが、

「カズ、パス♪」

「ん。はいよ。『清涼祭、一緒に回らない？』 送信と」

「ゆ、結城君、な、何をしてるのさ!？」

清美は和真に明久の携帯電話をパスするとトオルと一緒に明久を押さえ、そのスキに和真は瑞希にメールを送信し、

「吉井、おっけーだって」

「返信、早いな」

瑞希からは直ぐに返事が返ってくる。

第116問

「良かったね。吉井くん」

「……………殺したいほど嫉ましい」

明久と瑞希の清涼祭のデートが成立した事で清美はニヤニヤと笑い、対照的に康太は嫉妬を通り越した殺意を込めた視線で明久を睨みつけるが、

「それなら、次は土屋だな。どうする、自分で誘うか？」

「……………そんな必要はない」

和真は自分の携帯電話を制服から取り出し、愛子の電話番号を表示すると康太は目の前で明久がはめられている事もあるため、大きく首を振ると、

「ゆ、結城君、何をしてるんだよ！？ 僕なんかと清涼祭を回った姫路さんに迷惑がかかるだろ！！ す、直ぐに姫路さんに今のメールは間違いだって連絡をしないと」

「……………今更だけど、吉井くん、本当にそんな事を言ってるの？」

明久は和真の手から携帯電話を取り戻すと直ぐに瑞希にメールを出すそうとするが清美は明久から携帯電話を取り上げる。

「だ、だって、そうでしょ」

「なあ。吉井、お前は姫路と清涼祭で『デート』をしたくないのか？」

「そ、それはしたいけど……」

明久は瑞希とデートはしたいと言うが何か引つかかるものがあるのかうつむいてしまい、

「あのなあ。吉井、ダメだったら、おっけーって返信はくれないだろ。お前も姫路も召喚大会もあるし、忙しいんだ。それなのに直ぐに返事をくれたんだ。姫路の気持ちも察してやれよ」

「察してやれって言っても、結城君の言っている意味が僕にはわからないよ。姫路さんと僕じゃ……いふあい、いふあい。ゆうふいくん、何をすりぬによ!？」

和真は明久の煮え切らない態度にため息を吐くが明久は本当に瑞希の気持ちに気づいていないようであり、和真は弱音を吐く明久の頬をつねると明久は和真を非難するような視線を向けるが、

「吉井、お前がどうしてもそこまで自分に自信を持てないかは俺は知らないけどな。自分に自信が持てないってのは自分じゃなく、周りの仲間に対して失礼だ」

「だな。俺や和、山下、他の奴ら、当然、姫路もお前が本当にム力つく奴ならここまで世話も焼かないし、こんな事も言わない」

「少なくとも、私達は吉井くんが好きだよ。友達としてね。君は自分を見下す傾向があるみたいだけでもう少し自信を持っても良いと思うな。吉井くんには吉井くんの良いところがあるんだからね」

明久の態度は間違っていると言いつけると、

「僕の良いところ？ …… 365度、どこから見ても美少年のところ？」

「……取りあえず、頭が悪いのは目をつぶって貰うしかないな」

「そうだね。『微』少年の吉井くん」

明久はしばらく自分の良いところを考えるが3人の視線は取って返したように冷たくなる。

「ど、どうしたの！？」

「吉井、良い事を教えてやる。一般的には360度、どこから見ても言うんだ」

「それだと実質、5度だからな」

明久は3人の態度の変化に驚きの声をあげると和真とトオルは明久の間違いを正し、

「良いか。このメールを出して芽がなかったら、姫路はおっけいしてくれないだろ。おっけいで返信がきたんだ。少しは自信を持てよ。頭が悪くたってお前にはお前の良いところがあるんだ」

「そうだよ。吉井くんは頭が悪いけど、結構、素直だし。料理も上手いし、男の子としてはポイント高いよ」

「……ねえ。僕は今、誉められてるの？ 貶されてるの？」

「半々だろ」

和真と清美は明久の良さで勝負しろと言うが明久はバカにされているような気がしたのか眉間にしわを寄せ、トオルは明久の様子に苦笑いを浮かべる。

第117問

「姫路、何かあったのか？」

「な、何もありません！？」

瑞希は和真が出した明久のメールを見て、嬉しそうに表情を緩ませるとそんな瑞希の様子に雄二が気づいたようで声をかけると瑞希は慌てて何もなかったと言った時、

「あつ！？ さ、坂本くん、返してください！？」

「へえ、明久がね……『お願いします』返信と」

瑞希は慌てたせいか携帯電話を落とし、雄二は携帯電話を拾うとメールの内容を確認して明久に返信し、

「さ、坂本くん、何をしていますか！？」

「騒ぐな。騒ぐと他の奴らにばれるぞ」

瑞希は雄二の行動に声をあげるが雄二はニヤニヤと笑う。

「坂本、瑞希、遊んでないで手伝ってよ。まとまらないんだから」

「そうだな。姫路、少しでも接客の指導を頼む。姫路がバイトを始めてたのは儲けものだ。うちの奴らは接客の基本ができるとは思えないからな。姫路の言う事なら多少は聞くからな」

「そうでしょうか？」

美波はまとまらないクラスメート達にため息を吐くと雄二は瑞希に接客指導を任せると言い、瑞希が首を傾げた時、

「お姉さまー！」

「み、美春！？ な、何しにきたのよ！？」

仮教室のドアを勢いよく開けて美春が美波に飛び付く。

「……清水、落ち着け」

「北条くん？ どうしたんですか？」

「接客指導のマニュアル、ラ・ペディスの接客方法を基にして俺と清水で作ったのを持ってきたんだよ。一応はこれを基にして指導した方がしやすいと思ったんだ。姫路はこう言うのを人に教えるのは苦手だと思ったの他に接客指導できそうな人間もいないだろうしな」

美春の後ろから新が仮教室に入ってくると瑞希は首を傾げるが新はパソコンでプリントアウトした接客マニュアルを瑞希に手渡し、

「あ、ありがとうございます。北条くん、清水さん」

「助かる……なんだ？」

「いや、坂本が礼を言うのは意外だと思ってな」

瑞希は深々と頭を下げると瑞希は雄二から接客指導を任されたためか真剣な表情でマニュアルに目を移し、雄二は必要なものを新が持つて来てくれたためか素直に礼を言い、そんな雄二の態度に驚いたような表情をすると、

「実際、助かるんだよ。料理はムツツリー二や須川が作ったものを試食させて貰ってかなり美味かったんだが接客はウチの奴らに向いてるかはわからない」

「まあ……女子生徒をナンパした奴がいるって事だけでも接客をほつたらかして暴動騒ぎを起こしそうだからな」

「……その光景が目に見え過ぎてため息しかでねえよ」

雄二はクラスメート達の接客が不安なようで大きく肩を落とす、

「それでも、吉井と姫路がいる分、マシだろ」

「ああ。経験者がいるのはありがたい……なんだ？」

「ん？ ちょっとな。坂本と和真は本質的に似てるのかな？ と思つてな」

「あ？ なんだよ。それ？」

雄二が真剣にクラスの喫茶店で悩んでいる姿に新は雄二を誉めるが雄二は顔をしかめる。

「まあ、気にするな。戯言だ。姫路、何かわからない事があつたら、言ってくれ。後は1人で抱えるなよ」

「は、はい」

新は雄二の様子に苦笑いを浮かべて、瑞希に声をかけると、

「清水……」

「ちょっと、あんた、ウチを見捨てようとしてるわね！？ 助けなさいよ！！」

「悪いな。俺には清水を引き離す能力はない」

美春に声をかけて自分の教室に戻ろうとするが自分では美春を制御しきれないと判断したようで美波を見捨てて仮教室を出て行く。

第118問

「順調だな」

「そうだね……」

清涼祭を2日後に控えた中、雄二はCクラスの協力もあり、順調すぎる清涼祭の準備に苦笑いを浮かべるが明久は和真が瑞希に出したメールの事で頭が一杯なようでどこか上の空であり、

「明久、お前、話を聞いているのか？」

「う、うん。聞いてるよ」

「まったく、そんな風にしてるなら、お前が姫路に出したメールをクラスの奴らに言っただけで済むぞ」

「な、何を言ってるんだよ！？　そ、それになんで、雄二がそれを知ってるんだよ！？」

雄二は明久の弱みを突くと明久は見るからに動揺を隠せておらず、

「何で？　決まってるだろ。返信したのが俺だからだ」

「へ？　……どう言う事だ！！」

「お前のメールで姫路が浮かれて作業にならなかったから、俺が代わりに出しただけだ」

明久は知らされた事実には雄二につかみかかるが雄二は平然と言いつつ。

「だ、だからと言って!？」

「その後、姫路が何も言っていないんだ。問題ないだろ。それより、さっさと働けよ。順調だと言っても時間がねえんだよ」

明久は知らされた事実には顔を真っ青にするが雄二は明久の手を振り払うと作業に戻れと言い、自分も作業に移ろうとした時、

「……戻ったのじゃ」

「木下？　どうかしたの？　演劇部の練習があるんじゃないの？」

演劇部の出し物の練習をしていたはずの秀吉が肩を落として飯教室に戻り、美波は秀吉の様子に何かあったと思ったように声をかけると、

「演劇部の公演で使うはずだった機材が……壊れてしまったのじゃ」

「そうなの？　修理は当日までに間に合うのよね？」

「それが、壊したのが……Fクラスなのじゃ。修理費が出ぬのじゃ。演劇部でどうにか修理費を出そうとしたのじゃが、業者も直ぐに来れるかはわからぬのじゃ」

「それって最悪じゃない」

秀吉は機材の修理が間に合いそうもないため、かなり落ち込んでい

るようで大きく肩を落とし、機材を壊した生徒なのはFクラスの生徒3人が秀吉に頭を下げている。

「最悪なのじゃ」

「ひ、秀吉、落ち込まないでよ……そ、そうだ。結城君なら何とかできないかな？ この間、室外機も直してたし、一緒に先生達の仕事を手伝ってるけど、結城君はなんかいろいろと資格を持っているみたいだから、どうにかしてくれるよ」

「そ、そうです。美春ちゃんから聞いたんですけど、お店の方で店長さんが壊した電気系統も結城くんが直してると聞いてますし」

秀吉の落ち込む様子に明久と瑞希は慌てて和真なら機材の修理ができるのではないかと言うが、

「イヤなのじゃー!!」

「ひ、秀吉？」

「ワシはあの男だけには絶対に頭を下げたくないのじゃー!!」

秀吉は和真に対する憎しみしかないようで和真にだけは修理を頼みたくないと呼び、

「で、でも、機材が直らなければせっかく練習してきたものを講演できなくなるんでしょ」

「そつだぞ。秀吉、落ち着けよ」

「あの男はワシが頼みに言っても鼻で笑っただけなのじゃ」

秀吉の様子に雄二ですら慌て始め、秀吉を落ち着かせようとするが秀吉はまるで子供が駄々をこねるように和真を拒絶する。

第119問

「って事なんだけど、結城君、どうにかできないかな？」

「演劇部で使う機材の修理ねえ……」

明久、雄二、瑞希の3人は何とか秀吉を説得すると秀吉と和真が断った時に攻撃をするつもり的美波を連れてCクラスを訪ねて今の演劇部の状況を説明するが和真は眉間にしわを寄せており、

「あ、あの。結城くん、ダメでしょうか？」

「そうだな。正直、無理」

瑞希は和真の様子に遠慮がちに聞くと和真はため息を吐きながら、難しいと首を横に振り、

「やはりそうなのじゃ。この男はこう言う男なのじゃ……！」

「ちょ、ちよつと待て。秀吉！？ 明久、結城、悪いな」

「う、うん。雄二、秀吉は任せるよ」

秀吉は和真の答えに和真を睨みつけるとCクラスの教室を出て行き、雄二は慌てて秀吉の後を追いかけて行く。

「結城くん、どうしてですか？」

「瑞希、この男はこう言う男なの。木下の事が気に入らないからっ

て協力もしないような最低な男なのよ」

瑞希は和真が断った事に何か理由があると思ったようで和真に聞くが美波は和真を怒鳴りつけるが、

「黙れ。猪女。関係ない奴が入ってくるなよ。邪魔だ」

「誰が猪女よ!!」

和真は美波と話をする気はないようで美波を追い払うように手を振ると美波は和真に敵意を向けて叫び、

「み、美波も落ち着いてよ。それで、結城君、どうして、演劇部の機材は直せないの？」

「まあ、本人が頭を下げないのもあるけどな。単純に時間が足りない。何でもできると言われても困るんだよ。ただでさえ、演劇部の機材以外にもお前らF^{バカ}クラスが壊した物の修理を頼まれてるんだ。クラスの方は代表様が仕切るから、修理に時間を割いて良いとは言われたんだけど、今日と明日はバイトのシフトも入れてるし、今日と明日でできる事で重要な所から修理しないといけないだろ……ちなみにこれが修理予定のものな」

「……結城君、本当にごめん」

明久は美波を落ち着かせると和真にもう1度、無理な理由を聞き、和真はノートの見開き一杯に書かれた修理予定と重要度、機材が壊れた理由が書かれており、その理由の9割はFクラスが原因であり、明久は顔を引きつらせながら和真に頭を下げる。

「結城くん、あ、あの。これはこれで大丈夫なんですか？」

「正直、微妙。これ以上は無理、バカどもに迷惑をかけられたクラスでFクラスが関わっているのは自業自得だしな。被害者の方から修理に動くのは当然の事だろ」

瑞希は和真の状況に顔を引きつらせると流石に美波も和真の今の状況が信じられないようで顔を引きつらせており、和真はFクラスが被害者にいるものは後回しだと言い切ると席を立ち、

「今まで頑張ってきた演劇部の人達には悪いけどな。悪いな。これ以上は遊んでられないんだ」

「う、うん。時間を取らせちゃって、ごめん」

和真は自分で持ってきたのか工具箱を手にとると教室を出て行き、明久は今の和真の状況ではこれ以上の頼み事もできないため、和真の背中を見送ると、

「どうしよう。せっかく、秀吉が頑張ってきたのに、このままじゃ、でも、結城君は明らかにオーバーワークだし」

「そうですね」

明久と瑞希は和真が疲れきっているのも目に見えてわかっていようかどうかというくらい良いかわからないようで顔を見合わせた時、

「結城はいるか？」

「西村先生、カズなら壊れた機材の修理に駆り出されてますけど、

また、修理するものが増えたんですか？」

「ああ。また、ウチのクラスのバカどもが他のクラスの展示物を壊してな。それで結城なら直せないかと思ったんだが」

「西村先生、それなら、このノートに破損した状況とか書いて下さい」

西村教諭が和真にさらに仕事を持って来ており、

「……これは本当に無理かも知れないわね」

「う、うん」

演劇部の機材修理は絶望的になって行く。

第120問

「雄二、秀吉は？」

「ああ。正直、説得は無理だな。話を聞く気がない」

明久、瑞希、美波の3人が教室に戻ると秀吉は和真の態度に腹を立てているのが目に見えてわかり、雄二はしばらく話をしていたようだが途中で諦めるしかなかったようである。

「……今更だが、結城と秀吉の関係がここまでねじれるとは思ってなかったな」

「うん。秀吉はあまり人を嫌うようなタイプじゃないしね」

雄二は普段の秀吉からは考えられない和真への対応に大きくため息を吐くと明久も同じ意見なようであるが、

「仕方ないでしょ。あの男がム力つくんだから」

「美波ちゃんも落ち着いて下さい。それより、このままだと演劇部の公演が失敗してしまいます。せっかく、木下くんや演劇部のみなさんが頑張って練習していたのに」

美波は秀吉と同じように和真に良い印象がないため、和真の性格が悪いのが問題だと言い、瑞希は美波に落ち着くように声をかけると秀吉を助けてあげたいように何か力になりたいようにで表情を曇らせている。

「結城の事だから秀吉の事が嫌いだからって言っても演劇部の事を考えればやってくれなくてもいいだろ。どう言う理由で断ったんだ」

「うん。問題は時間だから、今の結城君の予定を見せて貰ったんだけど……」

「貴様ら、どうして、真面目に準備をできないんだ！！ 遊ぶだけならまだしも他のクラスの展示物を壊すな！！」

「……こう言う事だよ」

雄二は和真が断った理由を明久に確認すると廊下からは西村教諭がFクラスの生徒達を追いかけ回している声が響いており、明久はまた和真の修理するものが増えていく事に顔を引きつらせると、

「……どうしようもねえな」

「うん。時間が経つ度に結城君の仕事が増えてて、これ以上は手が回らないって」

雄二は西村教諭とクラスメート達の声に全てが納得できたようであり、明久は大きいため息を吐く。

「って事は結城は時間があれば演劇部の機材を修理できるって事か？」

「いや、修理できるかもまだ確認してないから見ないとわからないと思うけど」

「なら、一先ずは確認にして貰うか？ 後は結城の事で俺達が手伝

える事はないかだな」

「雄二、それってどう言う事？」

雄二は和真に必要なのは時間だと思ったようであり、眉間にしわを寄せると明久は雄二が何を考えているかわからないようで首をかしげ、

「結城は時間がないんだろ。なら、結城が抱えている仕事で俺達の手伝える事があるなら、それをしてやれば良いわけだろ」

「……ねえ。坂本、何で、あんたは結城が時間があれば木下を助けてくれると思うのよ？ あいつはそんな奴だと思えないわよ」

美波の目には雄二が和真の味方をしようとしているように見えているようであり、雄二に和真は時間ができても秀吉を助けてくれる事はないと言い切るが、

「それなら、僕、結城君の手伝いをしてくるよ。荷物を運ぶ手伝いとかなら、僕だってできるから」

「吉井くん、私も行きます」

明久と瑞希は雄二の言葉で和真の手伝いをすると決めたようで仮教室を出て行き、

「ちょっと、アキ、瑞希！？」

「島田、待て。お前はこっちの仕事だ。これ以上、人員を割けるほど余裕はないんだよ。お前はウチのクラスの実行委員だろ」

美波は2人を追いかけてようとするが雄二は美波の首をつかむ。

第121問

「……しかし、お前らも物好きだよな」

「だって、秀吉は頑張ってたし、友達ならやっぱり助けたいよ」

「はい。それに結城くんは時間がないと言っていました。結城くんだって時間があれば協力してくれるつもりだったはずです」

明久と瑞希は秀吉の頼みを聞いて欲しかったため、和真の手伝いを始め出すと和真は2人の行動に大きく肩を落とすが明久と瑞希は真剣な表情をして和真は手伝ってくれと言い、

「あのなあ。言っておくけど、お前ら2人が協力してくれたから、修理に行けるって問題でもないんだ」

「……うん。本当にゴメン」

和真はため息を吐くと修理依頼が書かれているノートを明久の前に出すとノートは少しの間で2冊目に突入しており、明久は和真から視線を逸らして謝ると、

「ん？ 何だ。吉井と姫路も手伝いにきたのか？」

「結城くん、めどが立ったから、割ける人数、総出で手伝いにきたのですよ」

「一先ずは壊れたものとか運ぶのは人数がいる……さあ、吉井、行つて来い」

「ぼ、僕!？」

新、一心、棗が数名のCクラスの生徒を引きつれて和真の手伝いをしに来たと言い、一心は明久を見つけるなり、明久に指示を出す。

「一心、何を言ってるんだ」

「そうだよ。僕だけじゃ」

「とりあえず、手伝ってくれる先生を捕まえないとダメだろ」

「って、思いつきり、召喚獣を使わせる気だね!？」

和真は明久に協力させるつもりなら教師に手伝って貰えと言い、明久は声をあげると、

「当然だ。立ってるものは一族郎党使い回せと言っただろ」

「……カズ、拡大しすぎだから」

「結城君、文系ダメなのにどうして一族郎党とか言う言葉は知ってるのよ」

和真は表情を変える事なく言い切り、和真の言葉に西村教諭を呼びに行っていたようで遅れてきた友香と清美は大きくため息を吐き、

「結城、すまん。遅れた。俺は壊れた機材の移動を行う。結城は移動できない電気関係の機材の破損状況の確認、修理を頼めるか？」

「おっけーです。後、西村先生、すいません。今日と明日、すいませんけど放課後、残れるまでで良いんで時間外の許可をください」

「ゆ、結城君、それって、鉄人、僕にも許可を僕も結城君の手伝いを!?」

「……西村先生と呼べ」

西村教諭は和真に指示を出すと和真は頷いた後に放課後に修理のために残る許可が欲しいと頼み、和真の言葉に明久は自分も和真の手伝いをしたいと手をあげるが明久の頭には西村教諭の拳骨が落ち、

「……今は別に拳骨を落とさなくても良かったんじゃないかな?」

「そうね」

友香と清美は明久が悶えて床をのたうちまわる姿に苦笑いを浮かべると、

「吉井は放課後になったら、バイトに行け。今日はキッチンで臨時のバイトが入るから指示を頼む」

「結城君、臨時のバイトですか?」

「まあ、調理としては即戦力だと思うけど……問題は失血死しないかな」

「ああ。ウチの女子スタッフの制服に直ぐに昏倒しそうだ」

和真は明久に手伝いは必要ないと言い、新と自分の代わりに入る人

間の事の生き死にが心配なのか顔を見合せて肩を落とす。

第122問

「あ、あの。結城くん、北条くん、臨時のバイトって土屋くんですか？」

「ああ。お前達より前にな。本人は欲しいデジカメがあるから、臨時のバイトか掛け合って欲しいと言ってたけどな……まったく、バカばかりだ」

瑞希は和真と新の言葉に臨時のバイトが康太だと理解したようで2人に確認すると和真は康太が明久と瑞希と同じように秀吉のために動いたと思っているようでくすりと笑い、

「まあ、土屋の場合は木下の講演で着る衣装の写真が撮れなくなると売上に響くからだろうけどな」

「それもそうだな」

一心は苦笑いを浮かべて康太には康太で演劇部の公演が中止になったら困る理由があると言い、新はその言葉に頷くと、

「まあ、そう言う事だから、吉井、姫路、店の方は任せるからな」

「うん。こっちは任せてよ」

「はい。キッチンでも頑張ります」

和真は改めて、明久と瑞希に康太の事を頼むと2人は大きく頷くが瑞希の言葉に彼女の料理の酷さを聞いた事のあるメンバーは凍りつ

き、

「……いや、姫路はフロアで頼む。姫路が近くにいたら土屋が失血死する確率が高くなるから」

「そ、そうだね。ムツツリー二が死んじゃうと結城君がいないと人手が足りなくなるし」

「姫路、慣れない人間が2人もキッチンにいますとおかしくなる可能性もあるから、姫路はフロアで」

和真、明久、新の3人は瑞希に思いとどまるように説得に入り、

「実際、姫路さんの料理つてどこまで酷いのかしら？」

「……代表、知らない方が身のためですよ。聞くとしばらく、姫路さんの近くでご飯を食べたくなるから」

「わ、わかたつたわ。これ以上は詮索しないわ」

友香は3人が慌てて、瑞希を説得している姿に首を傾げると棗は瑞希の料理の事を調べ上げているのか顔を青くすると鬼気迫る表情で首をを横に振り、友香は棗の様子に身の危険を感じたようで大きく頷く。

「……残念です」

「で、でも、結城君、いつの間にムツツリー二と仲良くなったの？前までは嫌ってただろ？」

瑞希は3人の説得に納得できてはいないようだが頷くと明久は瑞希が話を蒸し返そうとする前に和真に康太との事を聞くと、

「ん？ まあ、打ち合わせをする間にな……」

「カズは基本的に洋子先生がからまないと普通だからね。相手が話をする態度でくるなら大丈夫でしょ」

「素足とストッキングの話で5時間ほど盛り上がったな」

清美は今回は康太が協力の意思を見せている事もあると言うが和真と康太が仲良くなった理由はおかしく、

「あの討論は熱かったな。特に終了間際のストッキングの色について語っている時は」

「……結城くん、野口くん、あなた達は準備期間中に何をしているのかしら？」

一心と数名の男子生徒達はその場にいたようで大きく頷くとあまりのばかげた話に友香は眉間にしわを寄せるが、

「代表様、勘違いをしないでくれ。俺は素足派だ」

「そんな事を言ってるんじゃないわよ!!」

「そうだよ。結城君!! どうして、そんな重要な時に僕を呼んでくれないんだよ!! ムツツリー二も結城君も見損なったよ!!」

和真は笑顔で言い切ると友香は和真を怒鳴りつけ、明久は自分がそ

の場になかった事に和真を非難するように叫ぶ。

第123問

「結城くん、どうですか？ 修理できそうですか？」

「……できなくもないが、どうやったら、こんな風に壊せるんだ？
中の配線がズタズタって故意じゃないと普通はできないぞ」

和真は演劇部の機材の状況を確認していると一緒に来ていた瑞希は心配そうにのぞき込み、和真は破損状況に大きいため息を吐き、

「まあ、ここは後回しだな」

「ど、どうしてですか！？」

「時間がかかるから、演劇部はこの機材がなくても練習はできるだろ。物を修理しないと清涼祭に間に合わないところもあるんだ」

和真は演劇部の機材を後回しにすると立ち上がると瑞希は直ぐに和真が修理をしてくれると思っていたようで驚きの声をあげるが和真は演劇部の機材は優先度が低いと言い、

「で、でも」

「お前らが、あの猿を心配するのもわかるけどな。俺にとってはあいつの事は優先事項じゃない。時間が限られてるならなおさらだ。だいたい、バカどもの行動を理解して最初から練習をシャットアウトすれば良いんだよ。どうせ、邪魔しかしないんだからな。準備の段階で関わらせるな。ある程度、清涼祭で部活で出し物をする部活は理解してるぞ。ブラバンや軽音はFクラスを完全シャットアウトしてるしな。演劇部がうかつだったんだ。自己防衛もできなかった

奴らは後回し」

瑞希は納得がいかないようであり、和真の腕を掴むが和真は和真の考えがあるため、バツサリと演劇部を斬り捨てて次の修理箇所に向かい歩き出す。

「それでも」

「姫路、何度も言わせるな。俺はF^{バカ}クラスを基本的に信用していない。だいたい、演劇部の機材を壊した奴らは猿に謝っただろうが、形だけだろ」

「そ、そんな事は」

「なら、どうして、同じ奴の名前がこんなに並ぶんだ？」

「……」

瑞希は演劇部の機材を優先して欲しかったため、慌てて和真の後を追いかけるが和真はFクラスは何も反省などしていないと言うと修理依頼が来ているノートを瑞希に見せ、そこには演劇部の機材を破壊したメンバーの名前が他の機材も壊している事が一目でわかり、瑞希が悲しそうな顔をした瞬間、

『あの男は我らのオアシス。姫路瑞希を泣かせたぞ』

『許さん』

おかしな覆面をかぶったFクラス生徒2名が和真が瑞希を泣かせたと難癖を付けて襲いかかってくるが、

「うるさい」

『ふっ！？』

和真は持っていた工具箱で襲いかかってきた1人を殴打し、和真の反撃を喰らったFクラスの生徒は吹き飛び、

「次はお前だな」

『ま、待て。武器は卑怯だ』

「カッターを手にしてる奴に言われたくないな」

残った1人は和真に向かって話し合いを要求するが和真は当然、却下をして彼の頭の上に工具箱を振り下ろし、もう1人を沈めると、

「姫路の件があるから、当日、人手が足りなくなるから、今日は許してやる」

「あ、あの。結城くん、それは許してる行動じゃないんじゃないでしょうか？」

和真は2人の覆面をはぎ取ると2人の額に油性マジックでいろいろと書き込み、その情けない姿をデジカメで写すと瑞希は和真の行動に苦笑いを浮かべ、

「まあ、気にするな。それより時間がないから行くぞ。遊んでると演劇部の機材を直す時間がなくなるからな。別に猿の事は別にして頑張ってる演劇部の先輩達の事は考えないといけないだろ」

「は、はい」

和真は秀吉が嫌いだからと手を抜く気はないと言つと瑞希は少し安心したのか和真の後を追いかけて行く。

第124問

「結城くん、新作メニュー、奢って♪……あれ？ 今日って、結城くん、いないの？」

「……愛子、それは図々しいわよ」

放課後になり、『ラ・ペデイス』で新と瑞希がフロアに出ていると愛子がまた和真にたかりにきたようで勢いよくドアを開けるが和真は文月学園に残って修理作業を行っており、和真からの返事はなく愛子が首を傾げた時、彼女の後ろから優子のため息を聞こえる。

「いらつしゃい。工藤、木下」

「北条くん、姫路さん、結城くんは今日はキッチン？」

新は入口で話し込むわけにもいかなかったため、2人を席に案内すると愛子は新作メニューを眺めながら和真の居場所を聞くが、

「結城くんはまだ学園にいます」

「そうなの？」

「ああ。F^{バカ}クラスが壊した設備の修理に駆り出されてる」

愛子の疑問に新と瑞希は苦笑いを浮かべながら和真がまだ学園にいる事を話す。

「修理に駆り出されてるって、Fクラスはまた何かをしたの？」

「またと言つか通常運転っぽくて何も言えないな」

「そ、そうですね」

優子は眉間にしわを寄せるが新はどこかに諦めが入っているように、ため息を吐くと瑞希は申し訳なさそうに目を伏せており、

「姫路さんも苦勞するわね。正直、姫路さんには悪いけど、あたしとしてはFクラスにいるよりは転校を進めたいわよ。ねえ、考え直す気はないの？」

「転校はしたくないです。吉井くんや結城くん、みんなが私のわがままのために協力してくれてますし……」

「恋する女の子は頑張ってるから、結城くんや北条くんが巻き込まれてるんだね」

優子はFクラスに良い印象がないためか瑞希に考え直すように言うが瑞希は優子の言葉に小さく肩を落とすがはつきりと転校したくないと言い、愛子は瑞希をからかうように笑うと、

「ああ。まったく、俺に旨味も何もないのにな」

「旨味があるのは吉井くんだけと、北条くんや他のCクラスの男の子達は姫路さんに良いところ見せてもフラグは立たないしね」

「ああ。そこはほら、主人公特性があるかどうかだから」

新と愛子はキッチンで働いている明久と瑞希の顔を交互に見てニヤ

ニヤと笑う。

「な、何を言ってるんですか！？ 北条くんも工藤さんも」

「まあ。話を聞く限り、吉井くんはおかしなところでフラグを乱発してるみたいよね……最近じゃ、坂本くんや秀吉だけじゃなく、結城くんや土屋くんとも噂されてるし

でも、あたし的には結城くんは北条くんなのよね」

「……木下、悪い。おかしな想像は止めてくれ。なぜか悪寒しかないから」

瑞希は新と愛子の言葉に顔を真つ赤にするがその横で優子はおかしな妄想に取りつかれており、新は身の危険を感じたのか優子に声をかけ、

「な、何もあたしはおかしな事は考えてないわよ！？」

「……なら、良いんだけど」

優子は慌てて何もないと答え、新はそんな優子の様子をジト目で見て、

「だけどさ。結城くんはこんな放課後まで学園の機材の修理に駆り出されてるんだよね。やっぱり、無駄にマルチな才能を持つてるよね。今日は何を修理してるの？ ……北条くん、結城くんのツケでこれとこれ」

「いや、いない人間にツケるなよ。今日は演劇部の機材を修理したら帰るって言ってたけど、日が変わらなければ良いなため息を吐

いてたぞ。後、社員割引の値段にしっかりと普通に頼んでくれ」

「まあ、流石にそこまで常識外れの事はしないよ」

愛子は和真のツケで済ませようとしていたようだが流石に新は許すわけもなく、愛子も冗談だと笑う。

第125問

「ん？ 秀吉、何をしてるんだ？」

「雄二、お主こそ、こんなところで何をしておるのじゃ？」

秀吉は演劇部の機材が壊れた事で演劇部の公演ができるかわからなくなってしまった事もあるのか演劇部員は練習する気にもならなかったようで今日は早々に部活を切り上げたため、1度、家に帰ったのだが何かをする気にもならなかったようで文月学園に戻ってきてしまった時、手に風呂敷を持った雄二と出くわす。

「俺はちよつと届け物があつてな。秀吉はどうしたんだ？」

「……家に帰っても何もする気にはならなかったのじゃ。それに家にいたら、姉上に追い出されたのじゃ、何もしていない奴が全てをやった気になるなとかわけのわからぬ事を言われたのじゃ」

雄二は風呂敷を秀吉に見せると秀吉は家でウジウジとしていたのを優子に鬱陶しいと追い出されたようであり大きく肩を落とし、

「あれだよな。家だと男前の姉貴だよな」

「……言わんで欲しいのじゃ。知れわたるとワシが姉上に殺されてしまうのじゃ」

雄二は秀吉の様子に苦笑いを浮かべると秀吉は優子の怒りの表情を思い浮かべたようで顔面蒼白になっており、

「まあ、そうならないように気をつけろよ。それじゃあ、俺は行くぞ」

「雄二、お主は届け物と言うておったが、何を届けに来たのじゃ？」

「ん？ 付いてくるか？」

雄二は秀吉が優子に殺されないようにと言った後、文月学園に入っ
て行こうとすると秀吉は雄二の風呂敷の中身を聞くと雄二は秀吉の
顔を見て一緒に来るかと聞く。

「一緒に行くと言うてもどこに行くのじゃ？ だいたい、既に生徒
は帰っておる時間なのじゃ」

「まあ、気にするな」

「ま、待つのだじゃ。雄二」

秀吉は雄二の質問の意味がわからないようで首を傾げると雄二は苦
笑いを浮かべると歩き始め、秀吉は慌てて雄二の後を追いかけて行
き、

「鉄人、ご苦労だな」

「……坂本、木下、いったい、何しにきたんだ？」

「あ？ 俺もクラスの代表として、今回は流石に悪いと思ったから、
差し入れて夕飯を持ってきてやったんだよ」

雄二は壊れた機材を運んでいる西村教諭を見つけると西村教諭は雄

二がおかしな事をしに来たと思ったようで雄二に鋭い視線を向けるが雄二は苦笑いを浮かべると手に持った風呂敷を西村教諭に見せて差し入れたと言うと、

「……何を企んでいる？」

「あのなあ。少しは信じろよ。今回は結城にかなり迷惑をかけてるって事もわかってるしな。それに姫路やムツリーニ、明久のバカまで何かしてるのに俺だけ何もなかったら、明久にバカにされるだろ。それは俺のプライドが許さねえんだよ」

「……」

西村教諭は何か雄二を疑いの視線を向けて聞き返すと雄二は彼の特性なのか明久をバカにするように笑うなか、秀吉は雄二が和真に差し入れを持ってきたと言う事に不機嫌そうな表情に変わって行き、

「そうか。それなら、お茶は出すから結城を呼んできてくれるか？」

「ああ。まだ、あそこにいるのか？」

「ああ。時間がかかるみたいだな」

「わかった。秀吉も行くぞ」

「いやなのじゃ！！　なぜ、ワシが、ワシは帰るのじゃ」

「良いから行くぞ」

西村教諭は秀吉の変化に気づく事なく、和真を呼んでくるように言

うと雄二は和真の名前が出た事で不機嫌そうな表情をしている秀吉に声をかけると秀吉は和真に会う気はないため帰ろうとするが雄二は秀吉を引っ張って歩き出す。

第126問

「……ったく、何で、配線も同色のリード線を使ってるんだよ。面倒だな。これがアースだろ。なら、こっちが長さが明らかに足りないところもあるって事は……ひょっとして、リード線が必要で盗んで行ったのか？ この電線は22番線だろ。こっちは26番か……面倒だな。全部、リード線、変更しとくか？ いや、それなら、複合ケーブルを使って」

「……結城、お前、ずいぶんとマニアックだな」

和真はズタズタに切り裂かれた機材の中の配線をつなげながら、既に面倒になってきたようでぶつぶつと言いながら乱暴に頭をかくと雄二は和真の背後から眉間にしわを寄せて和真に声をかける。

「あ？ ……坂本、何しにきたんだ？」

「……一応は聞いておくけど、秀吉は無視なんだな？」

「言葉も通じない猿に話す事なんてないね」

和真は雄二の言葉に振り返るが秀吉には声をかけるつもりもないように直ぐに機材の修理に戻ろうと視線を機材に戻すと秀吉の顔はさらに険しくなっていく、

「それで、何の用だ？ 俺はこれ以外にもお前ら**バカ**クラスが壊した物を修理しないといけないんだ……悪い」

和真は本当に忙しいようで雄二の相手をしているヒマなどないと彼

を追いつくように手を振るがその時、盛大に彼の腹の虫が悲鳴を上げ、和真は小さな声で雄二に謝ると、

「なかなか、良い音がしたじえねえか」

「……言っな。何時に帰れるかもわかんないんだ。考えると余計に腹が減る」

雄二は和真の腹の虫に楽しそうに笑い、和真は少し恥ずかしそうにしながらも本当に忙しいようである。

「そんなお前に朗報だ。俺がお前と鉄人に夕飯を作ってきてやったんだ。ありがたく思え」

「そうか。寝言は寝て言え。見ての通り、お前と遊んでいるヒマはないんだ」

「……おい。このNo.3ってなんだ」

「見てわかるだろ。修理依頼がノート3冊目になるほど、きてんだよ。少しはどうにかしろよ。お前、代表だろ」

雄二は夕飯を差し入れにきた事で和真より、優位に立ったと言いたげだが和真は雄二が料理をできるとは微塵も思っていないようで彼の言葉を鼻で笑うと近くの机にある修理依頼の書いてあるノートを指差すとすでにノートは3冊目に突入しているため、雄二は顔を引きつらせ、和真は雄二にFクラスの行動を制限するように言うが、

「……無理だな」

「だろうな。未だに物を壊した奴らは『自分は悪くないってお互いに罪をなすりつけあってるんだ』。他人の迷惑を考えないバカも、事実を事実と認めずに頭も下げる事もできないバカに何を言っても無駄だろ。正直、刑事事件を起こす前に退学になって貰いたいな。どうせ、数名を除いて社会不適合の人間の集まりなんだ。せめて、他人の邪魔しないくらいにならないもんか」

「何が社会不適合者の集まりじゃ、お主のような性悪に言われる事ではないのじゃ!! お主はFクラスの事など何も知らぬであろう。それなのにFクラスをバカに!？」

「……キーキー、うるせえんだよ。サル。俺がお前ら家畜以下に文句を言われる筋合いがどこにある? 俺は1学生であつて、こんなものをこんな時間まで残つて修理をする理由だつて本来ないんだよ。自分が誤つて壊したのなら、まだしも、壊した奴らは放課後になつたら、自分の責任じゃないって逃げかえってるんだぞ。俺がこれを修理する理由がどこにある? 答えろ」

雄二は眉間にしわを寄せて一言だけ発すると和真はFクラスの生徒に迷惑をかけられるのが心底、イヤなようで吐き捨てるように言う。と秀吉はFクラスをバカにするなど叫ぶがその一言は当然、和真の怒りを買つ一言であり、和真は秀吉の胸倉をつかみ、鋭い視線で秀吉を睨みつける。

第127問

「そ、それは」

「サルに好かれる気もないし、好きになる気もないけどな。俺が性悪だっけ言う前にお前ら家畜以下がどれだけの人間なんだよ。勉強もしないでFクラスになって、自分達は反省せずに文句だけ言って試召戦争。努力や成績が人間の価値を決めるとは思っただけだな。何もやってない奴に文句を言われる事は俺はやってないぞ。お前だって同じだ。サル。お前は演劇が好きだから大切だから、それだけやってれば良い気になってるんだろ。演劇部には部活も勉強も両立している先輩方もいるのにお前は『演劇だけ』やって良い気になってるんだ。それもその演劇をおかしなものに使って、関係ない人間にケンカを売ってな。それなのにケンカを売った相手が悪い？ふざけてるのか？ お前に演劇を教えてくれてる先輩やその道で生きている本物の人達に顔見せできるのかよ。偉そうに言うわりにはお前が演劇をバカにしてんだよ」

秀吉は和真の様子に重圧を受けたようで言葉に詰まると和真は秀吉に追い打ちをかけ、和真の言葉に秀吉の顔は血の気が引いて行き、

「ま、待て。結城、その件に関しては俺が立案したんだ。悪いのは」
「坂本、お前も吉井や姫路、土屋もそうだけど、なんで、このサルに甘いんだ？」

雄二は秀吉の根元にあるものを何の迷いもなく斬り捨てると雄二はすでに一方的になっている2人の様子に割って入るが和真は気にすることなく、自分が知っているFクラスのメンバーが秀吉に甘い事

に首を傾げ、

「『男だ。男だ』と言うわりには男らしく自分の非を認める事もない。その上、他人に罪をなすりつける。これだけ見ても明らかに女々しいだろ。それで自分は男だ。笑い話にもならないな」

「……お前、本当にきついな」

「甘い事だけ言うから、バカがつけ上がるんだろ。それに敵意に敵意で返して何が悪い」

和真の追い打ちは止まる事もなく、雄二は顔を引きつらせるが和真は秀吉やFクラスから向けられる敵意を返したただけだと言い切る。

「サル、お前はあれを作戦だったって言うんだろ。試召戦争だから、相手をバカにしてもケンカを売っても作戦だからってな。だけど、受ける人間は違うんだよ。他人を^{ひと}理解しない人間がうわべだけの役を演じたって、何も心には響かないな。演劇部期待のサルがその程度なんだ。つたく、真面目に練習している先輩方に悪いと思ったから、こんな手間のかかる修理をしてるのに、安っぽいものを見せられるんなら、これは別に修理もしなくて良いな」

「……安っぽくなどないのじゃ」

「あ？ 何か言ったか？」

和真は秀吉を演劇部の代表格のように言うと言劇部の機材を修理する価値はないと吐き捨てるがその言葉に秀吉は大切にしていたものをバカにされたためか、怒気を込めた声でつぶやき、和真は秀吉の言葉が聞き取れなかったようで聞き返すと、

「安っぽくななどないのじゃ！！　ワシがバカにされるのは納得が言
ったのじゃ！！　じゃが、先輩達をバカにするのは許せんのだ！」

「ひ、秀吉、落ち着け」

「なら、どうするんだ？」

「清涼祭でワシが先輩達がどれだけ真剣にやっているのを見せて
やるのじゃ！！　何も知らぬお主に本物の演技を見せてやるのじゃ
！！」

秀吉は清涼祭で和真の考えを改めさせると叫ぶと時間が惜しいのか
和真の返事を聞く事なく出て行ってしまい、

「……お前、他人にケンカを売る才能があるんじゃないのか？」

「知るかよ。正論を言われて激昂する奴らに文句を言われる筋合い
はないだけだ。まあ、観に行く時間もあるかはまったくわからんし、
本物を観客に見せるって吠えてるんだから、舞台くらいは整えるか」

「いや、秀吉があそこまで行ったんだから見に行けよ」

秀吉の様子に置いて行かれた和真と雄二は苦笑いを浮かべる。

第128問

「カズ、生きてる？」

「……山下さん、箸で突くの止めない？」

清涼祭1日目の朝、和真は机に突っ伏してぴくりとも動く事はなく清美は何を思っただのか箸で和真を突き始めるとその様子に友香は大きく肩を落とす。

「結局、昨日は何時まで働いてたんだ？」

「……北条くん、それを聞くのは酷ですよ」

「……尼崎、それは泊まりって事か？」

新は和真が動かない様子に苦笑いを浮かべると棗はそれ以上は聞いてはいけないと新の肩に手を置いて首を振り、Cクラスの教室は微妙な空気が漂うなか、

「おはよう。結城くん、無事？」

「おはようございます」

遠慮がちに明久と瑞希が教室のドアを開ける。

「2人とも仲良く登場かよ。ラブイベントなら、他でやれよ」

「そうよ。この教室でのラブイベント枠は代表とカズが使って決

まってるんだから」

一心は2人を追い払うように手を振ると清美は友香をからかうように悪のりを始め出し、

「な、何を言ってるのよ!？」

「そうだぞ。そっちは清涼祭のデートを取りつけてるのにこっちはそれも終わってないんだ。スタート地点が違うんだ。ラブイベントはここに置いておけ」

友香は和真が目覚まさないか心配なのか慌てるがすでにCクラス内では友香の気持はバレバレなようで誰も何を言う事はなく、

「……クラス全員が気づいてるのにどうして当の本人は気付かないんだろうね」

「まあ、和の場合はあまり興味無さそうだからな。それで、吉井に姫路は何のようだ？」

清美は眉間にしわを寄せるとトオルは苦笑いを浮かべて明久と瑞希が教室を訪れた理由を聞くが、

「……なんかイラっとするな」

「そうですね」

明久と瑞希は改めて今日のデートの事を考えたようで顔を真っ赤にしており、平太と棗はため息を吐く。

「そ、それより、結城君は大丈夫なの？ 結局、朝まで修理をしてたって鉄人から聞いて」

「そ、それで心配になって様子を見にきたんですけど……」

「見ての通り、現在は休養中だ。本日中に復活するかはわからない」

明久と瑞希は西村教諭から和真の状態を聞いたようで心配そうに机に突っ伏している和真に視線を向けると一心は和真が復活するかはわからないと首を振り、

「そうなの。そ、そうだ。僕、ムツリーニから、結城君の状況を見て渡して欲しいって言ってたものがあつたんだ」

「……吉井くん、それは何なの？」

「僕も詳しくは聞いていないんだけど、この間の議事録って」

明久は康太から預かったものがあると言い、封筒を取り出すと友香は和真と康太だとあまり良い事ではなさそうな気がしたようで眉間にしわを寄せるが明久の口から出た言葉に和真の身体がぴくりと動く。

「反応したけど、中身は何なのかな？」

「この間の議事録って……あれか？」

「あれだろうな」

和真の身体が反応を示した事に清美は首を傾げるが一心は封筒の中

身に予想が付いたようであり、新は苦笑いを浮かべると、

「黒崎くん、あの封筒の中身ってなんなの？」

「……代表には関係ない事だ」

友香はにつこりと笑いながら一心に封筒の中身の事を聞くがその目は笑っておらず、一心は友香に威圧されたのか少しずつ後ろに下がりは始めるなか和真は机から起き上がる事なく明久の持っている封筒に手を伸ばす。

第129問

「吉井くん、それ、貸して」

「え？ でも」

和真の手が封筒に伸びてきた様子に清美は明久から封筒を取り上げると和真の手がギリギリ届かないところに封筒を置き、

「どうやら、身体がこの封筒に反応しているだけで起きてはなさそうだな」

「……カズもどこかで人間離れしてるのよね」

和真の動作が意識がない状態で動いている事にトオルと清美はため息を吐くと、

「あ、あの。無意識な結城くんを何が動かしているんでしょうか？」

「姫路さん、あまり私達が見ない方が良さそうなものの気がするのですよ」

瑞希は苦笑いを浮かべながら封筒の中身について聞き、棗は何となく中身に予想が点いているようで瑞希を止めるが、

「こ、これは!？」

「やっぱり、この間のだな」

新と明久は封筒の中身を確認する。その中には先日、和真と康太を中心にした素足とストッキングの討論の内容をまとめたものであり、明久は自分の知らない時に起きた熱い討論の光景を浮かべて涙し、新は苦笑いを浮かべる。

「吉井くん、その封筒を貸してくれる？」

「え？ これは結城君のだし、それに僕もこれはしっかりと読み……
ひ、姫路さん、どうして、僕の肩をつかむの！？」

友香は笑顔で明久に封筒を渡すように手を伸ばすがその目は笑っておらず、明久は後ろに下がろうとするが明久の後ろには友香と同じように笑顔だが目が笑っていない瑞希が明久の肩をがっちりつかみ、明久は逃げ場がない事を感じながらもどこかで封筒の中身を死守しようとしており、

「……代表、姫路、封筒の中身の内容は置いておいて、和真の物を勝手処分したらダメだろ」

「大丈夫よ。結城君にはばれないようにするわ」

「そうです。吉井くんも見る必要はありません」

新は3人の様子に大きくため息を吐くが友香はすでに封筒の中身を処分する事を決め、瑞希も友香の言葉に大きく頷き、

「さあ、吉井くん、それをこっちに渡してくれませんか？」

「ひ、姫路さんも小山さんも落ち着くんのだ。これはこの世から消して良いものではないんだよ……！」

「……吠える事でもないだろ。明らかにプリントアウトだし。原本は土屋が持つてるだろ」

瑞希は明久に詰め寄り、明久は絶対に死守すると叫ぶが新は明久が命を賭けるまでのものではないと少し呆れたように言うと、

「北条君、君は何もわかっていない！！ この中にはムツツリーニや結城君、この討論に参加した男達の情熱がつまっているんだ。コピーだろうとそれを処分して良いわけがない！！」

「吉井、よく言った！！ それを持って逃げるんだ！！ ここは俺達が死守する！！」

明久は再度、吠え、明久の魂の叫び討論に参加した一心を中心にした男子生徒が同調を見せ、

「黒崎君、みんな？ ごめん。ここは任せるよ！！」

「行け。吉井！！」

明久は封筒の中身を抱えて駆け出し、男子生徒達は明久を守るように友香と瑞希の間に割って入る。

「……なんだ？ この茶番？」

「わかんないね」

その様子にとオルと清美は大きく肩を落とした時、

「カズくん、いますか？ みなさん、何があつたんですか？」

「洋子先生、おはようございます。カズなら、現在、休憩中ですよ」

手に小包を持った洋子が教室をのぞき込み、教室内の騒ぎに首を傾げながらも和真を呼び、清美は机に突っ伏していた和真を指差そうとするが、

「おはようございます。高橋先生、どうかしましたか？」

「これ、朝食です。朝、学園に来たら直ぐに渡そうと思っていましたが、忙しくて今になってしまいました。申し訳ありません」

和真は洋子の声に反応したようで直ぐに洋子の前に移動しており、和真のシスコンぶりに教室は微妙な空気になり、追いかけてこも止まってしまう。

第130問

「で、結城君は回復したわけ？」

「みたいだな」

「シスコンここに極まりってヤツね」

和真が洋子から受け取った朝食を食べている姿に友香は眉間にしわを寄せるとトオルと清美は苦笑いを浮かべ、

「結城君、身体は大丈夫なの？」

「ん？ ああ、8時か？ 2時間も寝たし大丈夫だろ」

「去年は30分、寝れたかどうかだしな」

明久は和真に体調の事を確認し、和真は時間を見て苦笑いを浮かべる姿に去年も清涼祭の朝を思い出したのか平太がため息を吐くと去年も和真と同じクラスだったメンバーはため息を吐き、

「……結城君、よく生きてるわね」

「今年はみんなが協力してくれたしな。正直、助かったよ」

「……それでも2時間しか睡眠時間が取れないのね」

和真は苦笑いを浮かべながら協力してくれたクラスメートと明久と瑞希に頭を下げるが友香は和真が抱えた仕事量に大きく肩を落とし、

「そうだな。それなりに技術スキルもあがってるはずんだけどな」

「一まとめにされてる分、破壊力が上がってるんですよ」

「迷惑な話だね」

和真は1年間で修理技術は向上しているはずなんだと首を傾げるが和真が成長している以上にFクラスの間違った行動力の方が上昇していたようである。

「……本当にごめん。結城君」

「はい。申し訳ありません」

「吉井、姫路、お前らが頭を下げるな。今回はお前らは何も壊していないし、修理も手伝ってくれたんだからな。むしろ、あのバカどもにお前らが謝らせろ」

明久と瑞希はFクラスの行動に責任を感じているようで小さくなりながら和真に謝るが和真は2人を責める事はなく、

「それに吉井にはこれを運んで貰ったと言う恩もあるしな」

「結城君、その件なんだけど読み終わってからで良いから僕にも貸して欲しいんだ」

「ん？ 土屋に言えばくれるんじゃないか？」

「……多分、ムツリ商会の商品になるから無理だと思う」

「了解」

和真は康太からの封筒の中身を確認すると明久は和真の近くに寄ると女性陣に聞こえないように注意しながら交渉を始め出すが、

「……吉井くん、結城くん、何をしているんですか？」

「ひ、姫路さん？」

「……今の状況ではれないわけがないだろ」

当然、周りには明久が何をしているかばれており、背後に真っ黒な気配をまとった瑞希に肩をつかまれ、2人の姿に新はため息を吐く。

「まあ、姫路も落ち着け。だいたい……吉井の情報を手に入れるチャンスだぞ」

「そ、それは！？」

「……姫路さんがまたカズに騙されてる気がする」

「……討論内容だとあまり関係ないだろ」

和真は瑞希の耳元で明久の情報を手に入れるチャンスだと吹き込むと瑞希は動きを止めるがその姿は和真が純粋な瑞希を騙しているようにしか見えず、

「それより、吉井、姫路、そろそろHRの時間だけど戻らなくて良いのか？」

「え？ もうそんな時間？」

「ほ、本当です。吉井くん、戻りましょう。坂本くんにも早めに帰って来るように言われてましたし」

新は苦笑いを浮かべながら時計を指差すと明久と瑞希が慌てて教室を出て行こうとするが、

「そ、そうだ。結城君、演劇部の機材の修理、間に合わせてくれてありがとう」

「木下くん、凄くやる気になっていました。後でみんなで見に行きませんか？」

「ああ……これ以上、修理がなければ考えておく」

振り返ると2人は和真に演劇部の機材の修理のお礼を言ってから教室を出て行く。

第131問

「……どう言う事だ？ 1時間経っても何も問題が起きないなんてありえないだろ」

「平和だから良いんじゃないか？ 和は心配し過ぎなんじゃないのか？」

清涼祭開始の時間から小1時間ほど経つが大方の予想に反して騒ぎや設備破壊はなく、和真は信じられないように眉間にしわを寄せる姿にトオルは苦笑いを浮かべるが、

「いや、絶対にあり得ない。どこかで見落としている何かがあるはずだ」

「……お前は名探偵か何かか」

「考えても見ろ。あのバカどもだぞ。絶対に何か企んでるに違いない。どうするんだ。よそ様の娘さんを傷物にでもしたら、ウチで責任を取れって言うのか？」

「……どちらかと言えばオカンだな」

和真は真剣な表情でFクラスが企んでいる事を探し当てようと考え込んでおり、平太が呆れたようにため息を吐く。

「代表、今がチャンスよ。『Fクラスがおかしな事をしてないか？』って言うってカズをデートに誘うんだよ」

「や、山下さん、な、何を言ってるのよ。だいたい、代表である私がここを開けるわけにはいかないでしょ。ただでさえ、召喚大会があつていない時間だつてあるのに」

「そんな事を言ってる場合じゃないですよ。ここ最近の修理の件でどうやら結城君と吉井君は頼りになる先輩と言う事で1年生からの人気が急上昇中ですよ。持ち前の鈍さで1年生からのアタックを交わしているのが見えないのですか？」

「そ、それは見えてるけど」

清美と棗は友香を煽りに入っているが友香は勇気が出ないようであり、視線を和真に移すが行動に出る事はできず、

「……決めた。様子を見に行く。あのバカどもが何もしないわけがない」

「待て！？ それは危険だ。お前を見たら絶対にFクラスのバカ達は殺気立つぞ」

和真は何を考えたのかFクラスに顔を出してくると言い始め、トオルは慌てて和真を止めようとするが和真は教室を出て行ってしまい、

「……おい。北条、どうするんだよ。何か呼び戻す方法はないか？」

「そのうち、帰ってくるだろ。和真は自分でおかしな事をするほどバカじゃないしな」

一心はため息を吐いて新に和真を呼び戻す方法を聞くが新は気にする様子もなく、

「代表、カズを連れ戻してきて、こっちはどうにかするからさ」

「そうです。行ってくるのです」

「ちょ、ちよつと、山下さん、尼崎さん！？ もう……」

それに対して清美と棗は友香の背中を押して彼女を教室から追い出し、友香は驚きの声をあげるが教室のドアは閉められ、友香は大きく肩を落とした後、和真が向かったであろうFクラスの中華喫茶に向かつて歩き出す。

「……行つたね」

「行つたです……さてと、後をつけますか？」

「当然」

清美と棗は和真と友香のラブイベントを期待しているようでカメラを持って2人の後を追いかけてようとするが、

「遊んでないで働け。和と代表様が抜けたんだ。山下、補佐役のお前が遊んで良いわけがないだろ」

トオルに首をつかまれ、追いかける事はできず、

「……ちつ、こうなつたら、姫路さんが吉井くんに連絡して尾行をして貰うしか」

「……止める。あの2人にそんな事ができるわけもないしな」

「そうだね」

清美は明久と瑞希に2人の尾行を任せようとするがトオルは眉間にしわを寄せる。

第132問

「おいおい。どうして、Fクラスみたいなバカが、こんな設備で喫茶店ができるんだよ」

「どんなきたねえ手を使ったんだよ」

（何の騒ぎだ？）

和真がFクラスが中華喫茶している仮教室の近くまで移動すると廊下にはFクラスの恵まれた状況に声を上げている生徒の音が響いており、和真は首を傾げると、

「結城君、待つて。1人で行かないでよ」

「代表様？　どうかしたのか？」

「結城君が1人でFクラスに行くとケンカにしかないでしょ。だから、お目付け役よ。私も一緒に行くわ」

「代表様が？　何を言ってるんだよ」

友香が追いつき、和真の隣に並ぶが和真は友香と一緒に来る理由がわからないと言いたげであり、

「何？　私だと結城君を止めるのに役不足だって言うの？」

「違う。俺と代表様じゃ、被害が拡大するだけだろ」

「……それがわかってるなら、1人でFクラスに向かって駆け出さないでくれる」

和真は苦笑いを浮かべて自分と友香では騒ぎになるだけだと言い切り、友香はそれを理解していながらもFクラスに向かう和真の事が理解できないように眉間にしわを寄せるが、

「まあ、気にするな。それより、少し急ごう。なんか騒ぎ声が聞こえる」

「そうね。でも……なんか、いつもと違う騒ぎ方よね？」

「そうだな。設備も変えたから食中毒問題や衛生上の問題じゃないとは思っけどな」

和真はFクラスの様子が気になるようであり、廊下から聞こえる声に少し早足でFクラスの中華喫茶に向かう。

「なあ。どんなきたねえマネをしたんだよ？」

「バカなFクラスがどんな汚い手を使っただ？」

和真と友香がFクラスの中華喫茶のドアを開けると2人組が騒いでおり、その行動にお客達は関わり合いたくないのか足早に中華喫茶を後にしており、

「ゆ、結城君？」

「代表様、俺はあの2人組をぶち殺しても良いよな？　こんな騒ぎは姉さんに迷惑がかかるだろうから」

「ちょ、ちょっと押さえて、問題を起こしてるのはFクラスじゃなさそうだし」

「代表様、知ってるか？ この学園で騒ぎを起こすバカはFクラスだろうが、どこのクラスだろうが、俺がぶち殺す」

「ちょ、ちよっと、結城君、ストップ!？」

和真は目の前の騒ぎに怒り心頭のようにであり、彼の身体は小刻みに震えて始め、友香は和真の様子に顔を引きつらせて和真に落ち着くように言うが和真は勢いよく騒ぎの中心の2人組に駆け出して行き、

「……やっぱり、私じゃ、止められないじゃない」

友香は一直線に騒ぎの中心の2人組に近づくと2人組の頭を両手でつかみ締め上げ始める和真の様子にため息を吐く。

「て、てめえ、何しやがるんだ!？」

「は、放しやがれ!？ て、てめえもFクラスのバカだよ。放せて言ってるのが聞こえないのかよ!？」

「……この学園で騒ぎを起こす奴はFだ^{バカ}ろうと誰だろうと潰す。姉さんに迷惑がかかるような真似をするバカは誰だろうが潰す」

2人組は突如として現れた和真に声をあげるが和真の背後には真っ黒な殺意が溢れており、

『ゆ、結城和真!？』

『ど、どうして、あの男が!?!』

和真の登場にFクラスは殺気立ち始めるがそれ以上に和真に頭を締め上げられている2人組の悲鳴が中華喫茶には響き渡る。

第133問

「結城、お前、何してるんだ？」

「ちょ、ちよつと、結城くん、何があつたの!？」

2人組の悲鳴が中華喫茶に響き渡るなか、召喚大会を終えたのか明久と雄二が慌てて中華喫茶に戻ってくると、

「ん？ 営業妨害をしている迷惑な問題児がいたからな。今から、生活指導の西村先生に引き渡してくるところだ」

「……その割にはやり過ぎではないかのう？」

和真は最高に爽やかな笑顔で2人組の頭を絞め上げたまま返事をする様子に明久と雄二の後ろから秀吉は大きなため息を吐き、

「……改めて、無駄な攻撃力だよな」

「さ、坂本くんも感心していないで結城君を止めてよ。今日はFクラス相手じゃないんだから問題になるわよ」

「いや、基本的にこの学校の教師は結城の味方だろ。秀吉から聞く限り、俺達にも非はないしな。当然の罰だろ」

雄二は和真の様子に感心したようにつぶやくが友香にとってはそれどころではなく慌て始めるが雄二は気にする様子もなく、それどころかむしろ2人組は罰せられて当然だと言い切る。

「て、てめえは何なんだよ。こんな事をして良いと思ってるのか！
？ 俺達は3年だぞ。先輩だぞ！！」

「そうだ。放しやがれ！！」

「だから、どうした？ この学園で騒ぎを起こすバカはF^{バカ}だろうが
先輩だろうが関係ない。それどころか、先輩なら後輩に迷惑をかけ
るな」

2人組は和真の手から脱出を試みるが軋みをあげる頭蓋骨から響く
痛みに顔を歪ませて先輩の命令だと叫び声をあげるが和真は直ぐに
その言葉を却下すると、

「……毎回の事だけど、結城君の言葉って正論よね。行動はまだし
も」

「ああ。まあ、それを聞ける人間なら、こんなくだらない事はしな
いだろうけどな。秀吉、今のうちに誰か先生を連れてくるか。結城
がせっかく営業妨害をしてる迷惑な奴らを捕まえてくれてるわけだ
しな。俺や明久より、秀吉が先生を呼びに行った方が良さそうだな」

「う、うむ。そうじゃのう」

友香は和真の口から出る言葉は正論のためか大きく肩を落とし、雄
二は騒ぎを起こした2人組を教師に引き渡そうと判断したようであ
り、秀吉は雄二の言葉に大きく頷き、中華喫茶を出て行こうとする
が、

「木下、演劇部なら迫真の演技でこの2人をより悪役に仕立て上げ
てこい」

「待つんじゃない。そんな事をする必要などないのじゃ」

「知ってるか？ 悪さをしたバカにはそれなりの罰を与えないといけないんだ。それが社会のルールだ。せつかくだ。3回しかない学園祭の1つを停学と言う素晴らしい思い出にしてやろう」

和真は秀吉をひき止めて2人組を悪役に仕立て上げるように指示を出し、

「それはやり過ぎな気もするのじゃが」

「……君達、待ちなさい」

秀吉は和真の言葉に眉間にしわを寄せた時、和真達に1人の男性が声をかける。

「誰だ？」

「……坂本くん、教頭先生でしょ」

雄二は声をかけた男性に見覚えがないのか首を傾げると友香は雄二の様子に大きいため息を吐いて男性が文月学園の『竹原教頭』だと言つと、

「教頭先生、この2人の処分をお願いします」

「……いや、この状況じゃ、結城くんが加害者っぱいんだけど」

「何を言ってる。俺と代表様がここに入ってきた後は客は入口から

覗き込んでいるだけで中に入ってきてないんだ。この時の経緯もすべて教頭先生は見てたんだ。むしろ、騒ぎが起きた時に止めて欲しかったくらいだ。そうすればこんな騒ぎにもならなかっただろ」

和真は教師としての動きが鈍かったのは竹原教頭だと言い切り、和真のその一言は正論であり、中華喫茶内の生徒や外部のお客は頷きだす。

第134問

「まあ、直ぐに対処をできなかった事は謝りましょう。しかし、結城君、君は君でやりすぎだと思います」

「やり過ぎか？」

「いや、そうでもないだろ」

竹原教頭は周りからあがる声に忌々しそうにしながらも和真にも問題があると言うが和真は2人組へのアイアンクローを緩める事なく首を傾げると雄二はまったく問題ないと言い切る。

「……まずはその2人への攻撃を止めたらどうですか？」

「教頭先生、罰と言うのは反省する態度を見せて始めて許されるべきです。この2人は謝る気すらないんですから、反省するまで締め上げるべきです」

「まったくだ。誰か、この間、島田が明久へのお仕置きように用意していた拷問器具を持ってきてくれ」

竹原教頭は和真に2人組への攻撃を止めるように言うが和真は反省が足りないから無理だと竹原教頭相手でも気にする事なく言い切り、雄二はクラスメート達に指示を出し、

「待った。今、聞き捨てならない言葉が聞こえたんだけどって、それは何!？」

「坂本、あの猪女を止める。少なくともやりすぎだ」

「……結城君、あなたが言って良い事じゃないんじゃないかしら」

明久は運ばれてくる石畳に顔を引きつらせると和真はため息を吐くが和真は2人組の頭を絞め上げたままのため、友香は眉間にしわを寄せる。

「……君達は私の話を聞いているんですか？」

「そうよ。とりあえずはその拷問器具を片付けなさい。後は結城君もその2人を放す」

「仕方ないな。ほら、放してやるから、Fクラスに謝罪しろ」

竹原教頭は眉間にしわを寄せると友香は竹原教頭の様子にこのままでは和真達も処罰されると考えたように慌てて和真を止めると和真は2人組から手を放して、Fクラスに謝るように言うが、

「ふ、ふざっけんな！！ 何で、ここまでやられた俺達が謝んねえといけねえんだよ！！」

「そうだ。それもバカクラスに俺達がよ！！」

2人組は謝る気がないと叫び、

「なあ、明久、あの2人、俺達が言うのもなんだけどバカだな」

「うん。結城くんの事を理解してないね」

明久と雄二は2人組の様子にため息を吐くと、

「……ここまでやられたって言っても原因はお前らだろ」

「ゆ、結城君、抑えて！？　だから、どうして、問題を起こそうとするのよ」

「代表様、勘違いするな。悪いのはこの顔面汚物の2人組だ」

和真の視線は鋭くなり、その様子に友香は慌てて和真の腕をつかむ。

「教頭先生、結城は俺達が被害を受けたからこの2人を止めてくれただ。被害に遭った俺達にこの2人組が謝罪するのは社会の常識として必要な事だと思っんだ。違いますか？　俺達には正直言っで、この2人組に営業妨害を受ける落ち度はない。謝罪もないなら、さつき、結城が言った通り、西村先生に引き渡してそれなりの処置をして貰わないと納得がいきません」

「……そうですね。今回は君達に明らかな非があります」

雄二は教師陣が基本的に和真の味方である事を知っているためか竹原教頭の様子に何か感じているようで竹原教頭に2人組に謝らせるように言い、

「……悪かったな」

竹原教頭は雄二の提案を飲むのが気に入らないようでありながらも2人組に謝るように指示を出すと2人組は忌々しそうに頭を下げると中華喫茶を出て行き、

「……それでは私も失礼します。君達もこれ以上の問題を起こさないようにお願いします」

「わかりました」

竹原教頭も2人組の後を追いかけるように中華喫茶を出て行くと、

「……あの2人組は注意だな」

「そうだな。何か裏がありそうだ」

雄二は視線を鋭くすると和真も雄二と同じ違和感を覚えているように雄二の言葉に頷いた時、

「結城君、召喚大会の時間」

「ああ」

友香は召喚大会の事を思い出して和真の腕を引っ張って中華喫茶を出て行く。

第135問

「結城くん、友香ちゃん、おめでとうございます」

「姫路さん、ありがとう」

「ん。さんきゅ。姫路はこの後か？」

和真と友香が召喚大会1戦目を無事に勝利で終わらせ、参加選手の準備室に戻ると試合を控えているのか瑞希が駆け寄ってくると和真と友香は少し照れくさいのか苦笑いを浮かべて返事をする、

「は、はい」

「そうか。頑張れよ。しかし……参加登録前に言ってくれたら、一緒に出る事もできたんだけどな」

「な、何よ。相変わらず、ムカつく男ね」

和真は瑞希と一緒にいる美波の顔を見てため息を吐き、美波は和真の事が気に入らないため、和真を睨みつけるが、

「1対2だろ。大丈夫か？ 人数差があるのに参加するなんて姫路、お前、Mか？」

「えーと、結城くん、私は美波ちゃんと参加してます。1人じゃありません」

「……結城くん、流石にそれはやりすぎよ」

和真は表情を変える事なく美波を無視し、瑞希は苦笑いを浮かべ、友香は呆れたようなため息を吐く。

「いや、基本的に俺は現在、Fクラスは吉井、姫路、土屋以外は家畜以下だから、言葉が通じると思えないし、清涼祭中は坂本とは手を組んだだけだ。後は家畜以下だ」

「……土屋くんとは完全に和解したのね」

「土屋との話は興味深いからな。姉さんの写真を取り扱わないと言う約束で手を組んだ」

和真にとっては相変わらず、Fクラスは敵であるがいつの間にか康太とは妙な人間関係が成立しており、

「……結城くん、言うておくけど、おかしい事はしないでよ」

「しない。俺は基本的には平和主義だぞ。ただ、人間社会の常識として家畜や家が畜以下に人権は認めていないだけだ」

友香は欲望に忠実な所が見え隠れする和真を睨みつけて釘を刺すと和真はおかしい事はしないと両手をあげるがその言葉は美波を挑発しているようにしか見えず、

「あんた、絶対にウチにケンカを売ってるわよね？」

「……空耳か？」

美波は拳を握り締めながら、和真を威嚇するが和真は美波の相手な

どする気もない。

「結城くん、言いたい事もわかるけど止めなさい。面倒な事になるでしょ」

「良いんだよ。俺は最初から人の話を聞けない、聞かない家畜以下にはこの態度を取るって宣言してるんだ。だいたい、吉井に良いところを見せたいって雑念抱えて、設備修理を手伝った猪女は吉井が山下や尼崎と話をしてるだけでイラついて他の人間がせっかく直したものを吉井にぶつけたり、他の物を壊したりしてるんだ。文句を言う権利は俺にある」

友香は美波が和真に殴りかかりそうなため、和真を止めようとするが和真には和真の美波にケンカを売る理由があつたようであり、

「み、美波ちゃん？」

「な、何よ。アキが悪いのよ。デレデレして」

「ほらな。猪だろ」

「……そうね」

瑞希は和真の手伝いをしたため、どれだけ修理に人員や時間を割かれたかを知っており、美波の行動に驚きの声をあげるが当の本人は自分は悪くないと言い切り、和真は眉間にしわを寄せると友香は呆れたようで大きく肩を落とすし、

「やっぱり、吉井の平和のために清水を解放するか」

「反対する理由もないわね」

「ちょ、ちょっと、何でそうなるのよ!？」

和真と友香は本当に明久と美波を引き離そうと方法を考え始めると美波は声を張り上げるが、

「姫路、俺達、クラスの方がいるから、応援できないけど頑張れよ」

「は、はい」

和真と友香は美波を無視して教室に戻って行く。

第136問

「と言う事でカズ、着て見ない？」

「……待て。意味がわからない」

和真と友香は喫茶店に戻り、接客をしていたのだがしばらくするとなぜか清美が女子用の接客衣装の女子の着物を手に和真に笑みを浮かべるが和真は意味不明の言葉に眉間にしわを寄せると、

「仕方ないでしょ。無自覚、天然たらしへ向ける他学年女子及び他校生のラブ攻撃を交わすにはこれくらいの変なイベントを起こして好感度を下げる必要があるのよ。我らが代表様のために！！」

「……だから、意味がわからない」

清美は修理のせいで上昇している和真の人気を下げるためだと言うがそれでも和真には意味などわかっていないわけもなく、

「山下、止めておけ。ウチの学校はどこかおかしいから女装なんかしたら好感度はうなぎ昇りだ」

「……否定できないのが痛いな」

「土屋くん、それなら、カメラを準備するの止めるのですよ」

トオルは苦笑いを浮かべるとCクラスの女子の接客用の衣装の写真を撮りにきたいた康太はトオルの言葉に同意するがしっかりと和真の女装姿を撮るつもりのように素とともにカメラを構えている。

「……おい。土屋、尼崎、お前らは何がしたいんだ？」

「……………人違い」

「土屋くん、そのカメラ、見せて」

和真は2人の様子に眉間にしわを寄せるが康太は大きく首を横に振り、棗にいたっては和真の言葉を無視して康太のカメラに興味を示しており、

「……………収集付かないわね」

「山下、お前が言って良い事じゃないと思うぞ」

清美は騒ぎ始めたメンバーに大きくため息を吐くが原因はため息を吐いている清美であり、タオルは眉間にしわを寄せると、

「結城くん、山下さん、遊んでないで働いて、忙しいのよ」

「あ。代表、聞いてよ。カズが着替えてくれないのよ」

「いや、俺が女物の衣装を着る意味がないだろ。代表様もなんか言ってくれ」

遊んでいる人間が多いため、友香は忙しいようで仕事に戻って欲しいと声をかけるが清美は友香を味方に巻き込もうとする。

「結城くんが女装？……………それは良いかも」

「だ、代表様？」

友香は和真が女装するかも知れないと言う事に顔を赤らめるとトオ
ルは何があつたかわからないようで眉間のしわはより一層深くなる
なか、

「……………小山は最近は大口のお客様」

「代表様、本当に何をしてるんだよ」

「へえ、やつぱり、土屋くん、キレイな写真えを撮るです。新聞部ウチに
入らないですか？」

棗は康太を新聞部に勧誘し始めるが、

「……………俺は俺の撮りたいものを撮る。新聞そんなものに興味などない」

「そうですね。残念です。それなら、アドバイスが欲しいです」

「……………こ、これは！？俺のより良いアングル！？」

なぜか康太は棗の写真を見る流れになっており、時折、康太は感心
しているのか驚きの声が漏れ、

「……………あっちも意味がわからないな。ほら、遊んでないで仕事に戻
っぞ」

「結城くん、奢って」

「和くん、みなさん、頑張ってますね」

和真がため息を吐いた時、洋子を連れた愛子が店のなかに入ってくると、

「洋子先生、カズがこの衣装を着てくれないます。洋子先生からも何か言ってください」

「おい。山下!？」

「和くんがこの衣装をですか？ 和くんならどんな衣装でも似合うと思いますよ。姉さんもせっかくだから、見てみたいです」

「よし。山下、準備をしろ」

清美は洋子を味方に引き込もうとし、洋子は学園祭のノリもあるのかくすりと笑うと和真は清美を引っ張って生徒の更衣室に移動してしまい、

「……シスコンの鏡だね」

「いや、違うだろ」

愛子は和真の様子に苦笑いを浮かべる隣りでトオルは大きくため息を吐く。

第137問

「あ、優しいお兄さんの彼女さんです。こんにちはです」

和真が着替えをしていると喫茶店のドアを小さな少女が開け、何かを探しているのか店の中を見回した後、友香を見つけて駆け寄ってくる。

「あれ？ この子」

「えーと、葉月ちゃんだったわよね。久しぶりね」

「はいです。お久しぶりです」

友香と愛子は近寄って来る葉月を見て、にっこりと笑うと葉月も笑顔で返すが、

「代表様、この子、誰だ？」

「えーと、この子は島田葉月ちゃん、この間、葉月ちゃんの落とし物を一緒に探して知り合ったのよ」

友香と愛子以外は葉月の事を知らないため、トオルは首を傾げると友香は葉月と出会った時の事を話し、

「はいです。優しいお兄さんと彼女さんに手伝って貰ったです」

「で、葉月ちゃんの落とし物は優子が拾っていてね」

「あの時はありがとございました」

葉月は愛子に改めて頭を下げる。

「へー……なあ、代表様、優しいお兄さんって誰だ？」

「ゆ、結城くんよ。偶然、一緒に帰ったんだけど、その時に葉月ちゃんのはん違いしちゃったのよ」

トオルは愛子と葉月の姿を眺めながらも葉月が言っている『優しいお兄さん』の事を聞くと友香は顔を真っ赤にしながら必要以上に慌て、

「……………結城、どうやら、あの男も異端者だったようだ」

「土屋くん、落ち着くのです」

友香の姿に棗とともにデジカメ談義をしていた康太の殺意が1段階上がり、棗は康太を止め、

「べ、別に何も無いわよ。たまたま、帰りに一緒になっただけなのよ」

「そうですか。和くんと小山さんがですか」

友香は康太からの殺意とは別にクラスメート達からは生温かい優しい眼差しが向けられるため、友香の和真への想いなどクラスメート達にはすでにバレバレなのだが友香は慌てて否定するなか、洋子は眉間にしわを寄せて何かを考えているのか彼女のメガネはきらりと光り、

「洋子先生、和に彼女は早いとか思ってます?」

「優しいお兄さんと彼女さん、お似合いでした。お付き合いしたらダメなんですか?」

トオルは和真がシスコンなだけではなく、洋子にもブラコンの気があると思っっているようで反対かと聞くと葉月は心配そうに洋子の顔を覗き込む。

「いえ、そう言うわけではないのだけど、まだ、学生なわけですし、学生として分別の付けたお付き合いをお願いします。何かあったら、姉として和くんの保護者としておじさんとおばさんに顔向けできなくなっでは困りますし」

「そ、それは勿論です」

洋子は万が一の事を心配しているようであり、友香に気をつけるように言々と友香は大きく頷くが、

「完全に結城君^{ほんにん}の知らないところで話が進んでいるのです」

「そうだね」

和真は現在は女装に向けて着替え中であり、友香と付き合っていると言う事実もないが和真が否定できない状況であつてもクラスメイト達は誰も事実を洋子に伝える事はなく愛子と棗は苦笑いを浮かべると、

「お姉さん、良かったです。葉月も嬉しいです」

「あ、ありがとう。葉月ちゃん」

葉月は自分の事のように喜んでおり、友香は照れ臭そうに笑う。

しかし、しつこいようだが和真と友香が付き合っていると言つ事實は存在しない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3785s/>

バカとテストと勤労少年

2012年1月13日20時53分発行